大阪市
平野区

加美遺跡発掘調査報告Ⅴ

公益財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

大阪市平野区

加美遺跡発掘調査報告Ⅴ

大阪市中小規模工場団地造成に伴う発掘調査報告書

前　　編

付　篇

大阪市立加美小学校分校（現加美東小学校）建設に伴う
加美遺跡発掘調査概要

2015.1

公益財団法人　大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

Ｙ１号墳丘墓全景（東から）

大阪市平野区

加美遺跡発掘調査報告Ⅴ

大阪市中小規模工場団地造成に伴う発掘調査報告書

前　　編

付　篇

大阪市立加美小学校分校（現加美東小学校）建設に伴う
加美遺跡発掘調査概要

2015.1

公益財団法人　大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序　　文

本書は、1984年度の大阪市平野区加美遺跡の発掘調査の報告書である。この調査では、上層で庄内式～布留式期の多数の墳丘墓と集落遺構、下層で弥生時代中期後葉の例を見ない大規模な墳丘墓を発見し、おおいに社会や学界の注目を集めた。以来30年、まず弥生時代の大型墳丘墓の報告書を上梓することができた。

30年も経てば研究の状況も様変わりしているが、その資料的価値は減じることはないと思う。大きくみれば、中国の戦国時代から漢代の墓制が、楽浪郡をはじめとする朝鮮半島に影響を与え、さらに日本列島に及ぶ、その流れのなかで加美遺跡の大型墳丘墓は理解できると考える。ひじょうに貴重で、先進的な事例であろう。現在、墳丘墓は、調査のきっかけとなった工業団地の地下にそのまま眠っている。

当時、予測をはるかに超える大規模な遺跡を前に、担当者たちは苦心した。本書により、肩の荷の一半はおろすことができると思うが、続けて、残った上層の報告書刊行へ向かいたい。

最後に、発掘調査に際し多大なご協力をいただいた、大阪市の関係部局各位、地元の方々、ご助力いただいた研究機関、また報告書の作成でお世話になった方々に、深く感謝申し上げたい。

2015年１月

公益財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所長　　南　秀雄

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が1984年度に実施した、大阪市平野区加美東６丁目における加美遺跡発掘調査（KM84－１次、KMは加美遺跡を示す）の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市経済局（現経済戦略局）・大阪市土地開発公社および大阪市教育委員会事務局が負担した。

一、発掘調査は、元財団法人大阪市文化財協会調査課長代理 永島暉臣慎（当時）、長原分室長 木原克司（当時）の指揮のもと、現公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所総括研究員 田中清美・趙哲済、現経済戦略局観光部研究主幹 森毅が主として担当した。調査の期間・面積は第Ⅱ章に記す。

一、本書の執筆および編集は、東淀川調査事務所長 絹川一徳の指揮のもと、田中が行った。英文作成は京都大学大学院生の坂川幸祐氏にお願いした。本書の用字用語や体裁などの調整は絹川のほか、調査課長 高橋工・趙らの報告書校正委員が行った。

一、第Ⅳ章第３節は大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当 櫻井久之氏に執筆を依頼し、第Ⅳ章第４・５節は元大阪市立大学医学部 吉備登氏・多賀谷昭氏に同定も合わせて執筆を依頼した。また、大阪市立大学大学院医学研究科安部みき子氏に文献他でご教示を得た。

一、木質遺物の劣化を防ぐための処置について、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）および財団法人大阪文化財センター（現公益財団法人大阪府文化財センター）調査課長 中西靖人氏（当時）ならびに技師 山口誠治氏（当時）から指導と助言を得た。ガラス勾玉および小玉の取り上げについて、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）の協力を得た。

一、ガラス勾玉・小玉および円環型銅釧の保存処理は東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長 沢田正昭氏および独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所客員研究員 肥塚隆保氏に依頼した。

一、第Ⅱ章第３節で記載したガラスの成分分析は当研究所保存科学室の伊藤幸司が大阪歴史博物館設置の蛍光X線分析装置で行った。

一、木棺材の樹種同定および年輪年代測定は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所客員研究員 光谷拓実氏に依頼したほか、弥生土器および木製品全般について大阪府立狭山池博物館館長 工楽善通氏からご教示を得た。

一、故帝塚山短期大学教授 田代克己氏・大阪大学名誉教授 都出比呂志氏には発掘調査全般にわたってご指導と督励を頂いた。

一、発掘調査の期間中は西日本地域を中心に各地から考古学研究者や考古学専攻の大学院生および学生が発掘調査の見学に来訪され、多くの有益なご意見を頂戴した。鬼籍に入られた方や所属が変わった方もおられるものの、本来ならばここに記して感謝の意を表すべきであるが、紙面の関係上お許しいただきたい。

一、Ｙ１号墳丘墓の５号主体部の木槨ならびに14号・19号・23号主体部の組合式木棺および東西周溝出土の木製品について、財団法人元興寺文化財研究所（現公益財団法人元興寺文化財研究所）に保存処理を委託した。

一、地層断面および遺構写真は調査担当者が撮影した。加美小学校分校以外の遺物写真は、元独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛島茂氏（当時）に、加美小学校分校の遺構・遺物写真は徳永圀治氏に委託した。

一、基準点測量ならびに写真測量はアジア航測株式会社に委託した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料のうち、平成17年度に大阪市指定文化財に指定されたＹ１号墳丘墓の出土遺物以外はすべて当研究所が保管している。

凡　　例

1．本書で用いた層序学・堆積学的用語の中で、遺跡に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。また、本書で示した加美遺跡標準層序との対比は[小倉徹也・趙哲済2001]に拠った。

2．本書における遺構名の表記は、柵列(SA)、竪穴建物・掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壙(SK)、その他の遺構(SX)の分類記号の後に番号を付している。

3．遺物番号は種別に関係なく通し番号を付している。ただし、付篇の遺物番号については200番から付した。

4．本書で用いた座標値は世界測地系に基づき、図中の方位は図１・２が真北を基準にし、それ以外は座標北を基準とした。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。

5．本書で用いた地層の土色は標準土色帖[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。

6．本書で用いた各遺物の記述方法・分類・年代観などについては、以下の文献に従っている。弥生土器：[寺沢薫・森岡秀人1989]を参考に独自に編年し、弥生時代中期後葉を畿内第Ⅳ様式古段階・同中段階・同新段階とした。庄内式・布留式土器：[田中清美2011]、須恵器：[田辺昭三1981]、木製品：[奈良国立文化財研究所1993]。本文中では煩雑を避けるため、これらの引用文献をその都度提示することを割愛した。

7．引用・参考文献は巻末に示した。

本　文　目　次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　加美遺跡の歴史・地理的環境と既往の調査 …… 1
　第１節　加美遺跡の位置と歴史・地理的環境 …… 1
　第２節　加美遺跡の既往の調査 …… 5

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 …… 7
　　１）調査に至る経緯 …… 7
　　２）調査の経過 …… 7

第Ⅲ章　調査の結果 …… 15
　第１節　層序 …… 15
　　１）層序 …… 15
　　２）第６層出土の遺物 …… 18
　第２節　Ｙ１号墳丘墓の墳丘と周溝・周堤 …… 19
　　１）墳丘および出土遺物 …… 19
　　２）周堤ほか …… 24
　　３）周溝および出土遺物 …… 24
　　ⅰ）弥生土器　ⅱ）木製品　ⅲ）石製品
　第３節　Ｙ１号墳丘墓の埋葬施設および出土遺物 …… 63
　第４節　Ｙ１号墳丘墓東周溝内底面の杭・矢板列 …… 89
　第５節　Ｙ２号墳丘墓の墳丘と周溝および出土遺物 …… 96
　第６節　Ｙ２号墳丘墓の埋葬施設および出土遺物 …… 100

第Ⅳ章　Ｙ１・２号墳丘墓の考察 …… 111
　第１節　Ｙ１号墳丘墓出土の弥生土器の器形構成と編年的位置づけ …… 111
　　ⅰ）はじめに　ⅱ）河内地域の弥生時代中期後葉の土器編年
　　ⅲ）Ｙ１号墳丘墓出土の弥生土器の器形分類と所属時期
　第２節　Ｙ１号墳丘墓の墳丘と埋葬施設 …… 118
　　ⅰ）はじめに　ⅱ）墳丘および周堤
　　ⅲ）Ｙ１号墳丘墓の組合式木棺と木槨　ⅳ）Ｙ１号墳丘墓にみられる漢文化と墳丘墓の意義

第３節　Ｙ１号墳丘墓出土の銅釧 ……124
１)銅釧の出土状況と形態 ……124
２)加美銅釧の意義 ……125
第４節　大阪市加美遺跡Ｙ１・２号墳丘墓出土の弥生人骨……129
１)Ｙ１号墳丘墓出土の人骨 ……129
ⅰ)１号主体部の人骨　ⅱ)２号主体部の人骨　ⅲ)３号主体部の人骨
ⅳ)４号主体部の人骨　ⅴ)５号主体部の人骨　ⅵ)７号主体部の人骨
ⅶ)９号主体部の人骨　ⅷ)10号主体部の人骨　ⅸ)14号主体部の人骨
ⅹ)19号主体部の人骨　ⅺ)20号主体部の人骨　ⅻ)23号主体部の人骨
２)Ｙ２号墳丘墓出土の人骨 ……136
ⅰ)１号主体部の人骨　ⅱ)２号主体部の人骨　ⅲ)５号主体部の人骨
第５節　Ｙ１・２号墳丘墓出土人骨の地域的および時代的な特性……139
１)資料と方法 ……139
２)結果 ……140
３)考察 ……141

第Ⅴ章　総括……153

付　篇　大阪市立加美小学校分校(現加美東小学校)建設に伴う加美遺跡発掘調査概要……155
１)はじめに ……155
２)層序 ……156
３)遺構と遺物 ……156
ⅰ)弥生時代末～古墳時代前期の遺構と遺物
ⅱ)古墳時代中期の遺構と遺物
４)各層出土の遺物 ……177
ⅰ)第２層(茶灰色シルト層)出土遺物　ⅱ)第３層(茶褐色粘土質シルト層)出土遺物
ⅲ)第4a層(黒色細粒砂層)出土遺物　ⅳ)第4b層(黒色粘土質シルト層)出土遺物
ⅴ)第4b層(灰褐色～暗青灰色粘土質シルト層)出土遺物
ⅵ)小結
５)まとめ ……190

引用・参考文献……199

索引

英文目次

報告書抄録

原色図版目次

1　調査区全景
　上：調査区全景(東から)
　下：調査区全景(南から)
2　Ｙ１号墳丘墓(１)
　上：Ｙ１号墳丘墓全景(東から)
　下：Ｙ１号墳丘墓全景(南西から)
3　Ｙ１号墳丘墓(２)
　上：南北中央セクション東壁地層断面
　　(南周溝：西から)
　下：南北中央セクション西壁地層断面のヤナギ
　　(北周溝：東から)
4　Ｙ１号墳丘墓(３)
　上：SA801の杭・矢板列断面(南から)
　下：東西中央セクション南壁地層断面
　　(東周溝：北東から)
5　Ｙ１号墳丘墓(４)
　上：西周溝北部全景(北から)
　下：西周溝全景(北から)
6　Ｙ１号墳丘墓(５)
　上：東周溝南部遺物出土状況(南東から)
　中：東周溝北部土器・木器群出土状況(東から)
　下：東周溝南部木器群出土状況(西から)
7　Ｙ１号墳丘墓(６)
　上：墳丘東北部主体部配置状況(５・６・17・
　　19・20号：南から)
　下：墳丘東北部主体部配置状況(１・２・５・６・
　　17・19・20号：北から)
8　Ｙ１号墳丘墓(７)
　上：１号主体部木棺内のガラス勾玉・ガラス小
　　玉出土状況(北西から)
　下：９号(右)・18号(左)主体部全景(南から)
9　Ｙ１号墳丘墓(８)
　上：５号主体部木槨検出状況(東から)
　下：５号主体部木槨全景(北から)
10　Ｙ１号墳丘墓(９)
　上：５号主体部木槨内北部赤色顔料(朱)
　　付着状況(西から)
　下：10号主体部全景(東から)
11　Ｙ１号墳丘墓(10)
　上：14号(中央)・15号(左上)主体部木棺
　　検出状況(西から)
　下：20号主体部西壁地層断面(東から)
12　Ｙ１号墳丘墓(11)
　上：21号主体部供献土器出土状況(西から)
　下：23号主体部供献土器出土状況(西から)
13　Ｙ１号墳丘墓(12)
　左：２号主体部人骨全景
　　(右腕に円環型銅釧着装)
　中：14号主体部人骨全景
　　(右腕に円環型銅釧着装)
　右：19号主体部人骨全景
14　Ｙ１号墳丘墓(13)
　上：１号主体部出土のガラス勾玉・ガラス小玉
　下：２号主体部出土のガラス平玉(左)・円環型
　　銅釧(中)、14号主体部出土の円環型銅釧(右)
15　Ｙ１号墳丘墓(14)
　上：東・西周溝出土の弥生土器
　下：東・西周溝出土の木製品
16　Ｙ２号墳丘墓(１)
　上：墳丘頂部および１号主体部検出状況
　　(西から)
　下：１号(右)・２号(左)主体部全景(西から)
17　Ｙ２号墳丘墓(２)
　上：６号主体部木棺西部全景(東から)
　下：南北トレンチ西壁地層断面(北東から)

図　版　目　次

1　Ｙ１号墳丘墓（１）
　上：Ｙ１号墳丘墓全景(北から)
　下：Ｙ１号墳丘墓全景(東から)
2　Ｙ１号墳丘墓（２）
　上：Ｙ１号墳丘墓全景(東から)
　下：Ｙ１号墳丘墓全景(南西から)
3　Ｙ１号墳丘墓（３）
　上：Ｙ１号墳丘墓全景(北西から)
　中：墳丘西北部(北西から)
　下：墳丘東北部から北周溝 中央は伐採されたヤナギ(東から)
4　Ｙ１号墳丘墓（４）
　上：南北中央セクション西壁地層断面（北周溝その１：東から）
　中：南北中央セクション西壁地層断面（北周溝その２：東から）
　下：南北中央セクション西壁地層断面（北周溝その３：東から）
5　Ｙ１号墳丘墓（５）
　上：南北中央セクション西壁地層断面（北周溝その４：東から）
　中：南北中央セクション西壁地層断面（北周溝その５：東から）
　下：南北中央セクション西壁地層断面（北周溝北端部周堤：東から）
6　Ｙ１号墳丘墓（６）
　上：東西中央セクション南壁地層断面（西周溝：北から）
　中：東西中央セクション南壁地層断面（西周溝：北東から）
　下：東西中央セクション南壁地層断面（墳丘西部：北から）
7　Ｙ１号墳丘墓（７）
　上：東西中央セクション南壁地層断面（西周溝細部その１：北から）
　下：東西中央セクション南壁地層断面（西周溝細部その２：北から）
8　Ｙ１号墳丘墓（８）
　上：西周溝全景(北から)
　下：西周溝全景(南から)
9　Ｙ１号墳丘墓（９）
　上：東西中央セクション南壁地層断面（東周溝：北から）
　下：東西中央セクション南壁地層断面（東周溝細部：北から）
10　Ｙ１号墳丘墓(10)
　上：東周溝南部木器群出土状況(西から)
　下：東周溝北部木器群出土状況(東から)
11　Ｙ１号墳丘墓(11)
　上：西周溝墳丘基底中央部土器出土状況（西から）
　下：北周溝西北部土器群出土状況(北東から)
12　Ｙ１号墳丘墓(12)
　左上：東周溝南部台付水差し出土状況(北から)
　左中：東周溝北部器台出土状況(東から)
　左下：西周溝基底中央部広口壺出土状況（北東から）
　右上：東周溝南部四脚容器出土状況(南から)
　右中：東周溝北部木製高杯出土状況(北から)
　右下：東周溝北部平鋤出土状況(南から)
13　Ｙ１号墳丘墓(13)
　上：墳丘東北部主体部配置状況（１・２・５・６・17・19・20号：南から）
　下：墳丘東北部主体部配置状況（１・２・５・６・17・19・20号：北から）
14　Ｙ１号墳丘墓(14)
　上：１号(左)・２号(右)主体部全景(西から)
　下：１号主体部木棺内のガラス勾玉・ガラス小玉出土状況(北西から)
15　Ｙ１号墳丘墓(15)
　上：２号主体部人骨全景(西から)
　中：２号主体部人骨上半部細部(西から)
　下：２号主体部人骨円環型銅釧着装状況（南から）
16　Ｙ１号墳丘墓(16)
　上：３号(左)・４号(右)主体部木棺検出状況（南から）
　下：３号(左)・４号(右)主体部人骨全景(南から)
17　Ｙ１号墳丘墓(17)
　上：５号主体部木槨検出状況(東から)
　中：５号主体部木槨小口部南端細部(南から)
　下：５号主体部木槨小口部北端細部(北から)

18　Ｙ１号墳丘墓(18)
上：５号主体部木槨内人骨全景(南から)
下：７号主体部人骨全景(南から)
19　Ｙ１号墳丘墓(19)
上：６号主体部木棺全景(南から)
中：６号(中央)・17号(右)主体部木棺全景(南西から)
下：８号主体部木棺全景(北から)
20　Ｙ１号墳丘墓(20)
左上：９号(右)・18号(左)主体部木棺および供献土器の調査状況(南から)
右上：９号(右)・18号(左)主体部人骨全景(南から)
下：９号(中央)・11号(下)・18号(左)主体部人骨および木棺全景(南から)
21　Ｙ１号墳丘墓(21)
上：11号主体部検出状況全景(南から)
左下：18号主体部木棺検出状況全景(北から)
右下：18号主体部木棺内全景(北から)
22　Ｙ１号墳丘墓(22)
上：10号主体部検出状況(東から)
左下：10号主体部木棺検出状況(北から)
右下：10号主体部人骨全景(北から)
23　Ｙ１号墳丘墓(23)
上：13号主体部検出状況全景(東から)
下：13号主体部人骨細部(東から)
24　Ｙ１号墳丘墓(24)
左上：14号(右)・15号(左上)主体部木棺検出状況(西から)
右上：14号主体部人骨全景(西から)
下：14号主体部人骨円環型銅釧着装状況(北から)
25　Ｙ１号墳丘墓(25)
上：19号主体部木棺検出状況全景(南から)
下：19号主体部人骨全景(西から)
26　Ｙ１号墳丘墓(26)
上：12号主体部人骨全景(北から)
下：21号主体部木棺検出状況(北から)
27　Ｙ１号墳丘墓(27)
上：20号主体部西壁地層断面(東から)
下：20号主体部人骨全景(東から)
28　Ｙ１号墳丘墓(28)
上：23号主体部木棺および供献土器の検出状況(北から)
下：23号主体部木棺検出状況全景(北から)
29　Ｙ２号墳丘墓(１)
上：１号(左)・２号(右)主体部木棺検出状況(東から)
下：２号主体部木棺開棺状況(西から)
30　Ｙ２号墳丘墓(２)
上：南北トレンチ西壁地層断面(北東から)
中：６号主体部木棺西部全景(西から)
下：６号主体部木棺西部全景(東から)
31　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(１)
32　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(２)
33　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(３)
34　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(４)
35　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(５)
36　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(６)
37　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(７)
38　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(８)
39　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(９)
40　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(10)
41　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(11)
42　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(12)
43　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(13)
44　Ｙ１号墳丘墓周溝出土遺物(14)
45　Ｙ１号墳丘墓周溝および墳丘盛土内出土遺物
46　Ｙ１号墳丘墓主体部出土の着装品および供献土器
47　Ｙ２号墳丘墓出土遺物
48　加美小学校分校調査地(１)
上：南区第５層遺構面全景(東から)
下：南区SB504・505を含む第５層遺構面全景(北から)
49　加美小学校分校調査地(２)
上：北区SE506・SB502を含む第５層遺構面全景(東から)
下：中央区～北区第５層遺構面全景(南東から)
50　加美小学校分校調査地出土遺物

挿　図　目　次

図１　加美遺跡の位置……1
図２　弥生時代終末～古墳時代初頭の遺跡の分布……2
図３　加美遺跡および周辺におけるおもな調査……3
図４　調査地区割図……10
図５　層序模式図……15
図６　第６層出土遺物実測図……18
図７　Ｙ１号墳丘墓等高線図(墳丘・周溝・周堤)……20
図８　Ｙ１号墳丘墓平面図……21
図９　Ｙ１号墳丘墓南北中央セクション西壁地層断面図……22
図10　Ｙ１号墳丘墓墳丘盛土内出土遺物実測図……23
図11　Ｙ１号墳丘墓遺物出土状況……26
図12　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図(１)……27
図13　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図(２)……28
図14　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図(３)……30
図15　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図(４)……33
図16　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図(１)……35
図17　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図(２)……37
図18　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図(３)……39
図19　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図(４)……41
図20　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図(５)……43
図21　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図(６)……45
図22　Ｙ１号墳丘墓北周溝出土遺物実測図(１)……47
図23　Ｙ１号墳丘墓北周溝出土遺物実測図(２)……48
図24　Ｙ１号墳丘墓北周溝出土遺物実測図(３)……49
図25　Ｙ１号墳丘墓南周溝出土遺物実測図……51
図26　Ｙ１号墳丘墓木製品および石製品出土状況……53
図27　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土木製品実測図……55
図28　Ｙ１号墳丘墓周溝出土木製品実測図(１)……56
図29　Ｙ１号墳丘墓周溝出土木製品実測図(２)……57
図30　Ｙ１号墳丘墓周溝出土木製品実測図(３)……59
図31　Ｙ１号墳丘墓周溝出土石製品実測図……60
図32　Ｙ１号墳丘墓主体部配置図……64
図33　Ｙ１号墳丘墓１号主体部平面・見透し断面図および着装品実測図……65
図34　Ｙ１号墳丘墓２号主体部墓壙内供献土器出土状況(南から)および実測図……66
図35　Ｙ１号墳丘墓２号主体部平面・見透し断面図および着装品実測図……67
図36　Ｙ１号墳丘墓３・４号主体部平面・見透し断面図および供献土器実測図……68
図37　Ｙ１号墳丘墓５号主体部平面・見透し断面図および供献土器実測図……70
図38　木槨の構造……71
図39　Ｙ１号墳丘墓６・17号主体部平面・見透し断面図……72
図40　Ｙ１号墳丘墓７号主体部平面・見透し断面図……73
図41　Ｙ１号墳丘墓８号主体部平面・見透し断面図……74
図42　Ｙ１号墳丘墓９・11・18号主体部平面・見透し断面図および供献土器出土状況……76
図43　Ｙ１号墳丘墓９号主体部供献土器実測図……77
図44　Ｙ１号墳丘墓10号主体部平面・見透し断面図……78
図45　Ｙ１号墳丘墓12号主体部平面・見透し断面図……79
図46　Ｙ１号墳丘墓13号主体部平面・見透し断面図……80
図47　Ｙ１号墳丘墓14・15号主体部平面・見透し断面図および着装品実測図……81
図48　Ｙ１号墳丘墓16号主体部平面・見透し断面図……82
図49　Ｙ１号墳丘墓19・20号主体部平面・見透し断面図……84
図50　Ｙ１号墳丘墓21号主体部平面・見透し断面図および供献土器実測図……85
図51　Ｙ１号墳丘墓23号主体部供献土器出土状況および実測図……86
図52　Ｙ１号墳丘墓22・23号主体部平面・見透し断面図……87
図53　SA801平面・断面図……89
図54　SA801出土木製品実測図(１)……90
図55　SA801出土木製品実測図(２)……91
図56　SA801出土木製品実測図(３)……92
図57　SA801出土木製品実測図(４)……93
図58　SA802平面・断面図……94
図59　Ｙ２号墳丘墓主体部配置図……96
図60　Ｙ２号墳丘墓南壁地層断面図……97
図61　Ｙ２号墳丘墓北周溝出土遺物実測図……99
図62　Ｙ２号墳丘墓土器棺実測図……100
図63　Ｙ２号墳丘墓１・２号主体部および土器棺平面・見透し断面図……101
図64　Ｙ２号墳丘墓３・４号主体部断面図……103
図65　Ｙ２号墳丘墓５号主体部平面・見透し断面図……104
図66　Ｙ２号墳丘墓６号主体部平面・断面図……105
図67　弥生時代中期後半土器編年(１)(２)……112－113
図68　墳丘盛土の総量を求める際の概念図……118

図69　弥生時代中期中葉～後葉の組合式木棺
（Ⅰ・Ⅱ型式）の模式図…… 119
図70　Ｙ１号墳丘墓出土円環型銅釧実測図…… 124
図71　Ｙ１号墳丘墓２号主体部人骨の歯式…… 130
図72　Ｙ１号墳丘墓３号主体部人骨の歯式…… 130
図73　Ｙ１号墳丘墓４号主体部人骨の歯式…… 131
図74　Ｙ１号墳丘墓５号主体部人骨の歯式…… 131
図75　Ｙ１号墳丘墓７号主体部人骨の歯式…… 132
図76　Ｙ１号墳丘墓９号主体部人骨の歯式…… 133
図77　Ｙ１号墳丘墓10号主体部人骨の歯式…… 133
図78　Ｙ１号墳丘墓14号主体部人骨の歯式…… 134
図79　Ｙ１号墳丘墓19号主体部人骨の歯式…… 135
図80　Ｙ１号墳丘墓20号主体部人骨の歯式…… 135
図81　Ｙ１号墳丘墓23号主体部人骨の歯式…… 136
図82　Ｙ２号墳丘墓１号主体部人骨の歯式…… 136
図83　Ｙ２号墳丘墓２号主体部人骨の歯式…… 137
図84　Ｙ２号墳丘墓５号主体部人骨の歯式…… 137
図85　第１・第２主成分による各集団間の比較
（男女平均）…… 143
図86　第１・第２主成分による各集団間の比較（男女）
…… 143
図87　第１主成分とSIZEによる各集団間の比較
（男女平均）…… 143
図88　加美遺跡Ｙ１号墳丘墓の歯の計測値（１）…… 144
図89　加美遺跡Ｙ１号墳丘墓の歯の計測値（２）…… 145
図90　加美遺跡Ｙ１号墳丘墓の歯の計測値（３）…… 146
図91　加美遺跡Ｙ２号墳丘墓の歯の計測値…… 147
図92　乳歯と永久歯の萌出状態 …… 149
図93　椎体前縁の縁嘴の発達程度 …… 149
図94　恥骨結合面の年齢的変化 …… 150
図95　骨格各部の化骨時期 …… 151
図96　頭骨縫合の癒着年齢 …… 152
図97　大臼歯の歯牙機能年数と暦年齢 …… 152
図98　加美小学校分校調査地区割図 …… 155
図99　地層と遺構の関係図 …… 156
図100　加美小学校分校調査地遺構配置図 …… 157
図101　SB502平面・断面図 …… 159
図102　SB501・502・504・505、SX503出土遺物実測図
…… 160
図103　SE506出土遺物実測図 …… 161
図104　SE508出土遺物実測図 …… 162
図105　SK509出土遺物実測図 …… 162
図106　SK510・511出土遺物実測図 …… 163
図107　SK512・513出土遺物実測図 …… 164
図108　SD514出土遺物実測図 …… 166
図109　SD516・517出土銅鏃実測図 …… 167
図110　SD518出土遺物実測図 …… 169
図111　SD519出土遺物実測図 …… 171
図112　SD515・520・522～526出土遺物実測図… 172
図113　SD520出土鉄剣形銅剣実測図 …… 173
図114　SD521出土遺物実測図 …… 175
図115　北区土器溜り出土遺物実測図 …… 176
図116　SK301出土遺物実測図 …… 177
図117　第２層（茶灰色シルト層）出土遺物実測図 … 177
図118　第３層（茶褐色粘土質シルト層）出土遺物実測図
…… 179
図119　第4a層（黒色細粒砂層）出土遺物実測図（１）・181
図120　第4a層（黒色細粒砂層）出土遺物実測図（２）・183
図121　第4b層（黒色粘土質シルト層）出土遺物実測図
（１）…… 185
図122　第4b層（黒色粘土質シルト層）出土遺物実測図
（２）…… 187
図123　第4b層（灰褐色～暗青灰色粘土質シルト層）出土
遺物実測図 …… 189

表　目　次

表１　加美遺跡の主要調査の概要……5
表２　発掘調査の期間など……13
表３　加美遺跡基本層序……16
表４　Ｙ１・Ｙ２号墳丘墓木棺計測表……106
表５　Ｙ１・Ｙ２号墳丘墓遺物観察表（１）～（３）……107－109
表６　Ｙ１号墳丘墓の弥生土器の出土位置と器形別個体数の一覧表……114
表７　出土木製品の年輪年代と東アジア史関連事項……117
表８　加美遺跡の人骨の計測値……138
表９　歯冠の近遠心径と頬舌径による比較資料集団　140
表10　加美遺跡の男女別の歯冠部計測値……141
表11　花岡山古墳群の男女別の歯冠部計測値……141
表12　形態距離の主成分係数ベクトル（男女別の各集団）……148
表13　形態距離の主成分係数ベクトル（男女平均の各集団）……148
表14　加美小学校分校調査地遺構一覧表……191
表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（１）～（６）……192－197

写　真　目　次

写真１　Ｙ２号墳丘墓主体部の調査状況……8
写真２　Ｙ１号墳丘墓南北中央トレンチの調査状況（南東から）……8
写真３　Ｙ１号墳丘墓盛土内鉄鑿出土状況（南から）……8
写真４　Ｙ１号墳丘墓盛土内石庖丁出土状況（南から）……8
写真５　Ｙ１号墳丘墓主体部・西周溝の調査状況（南西から）……9
写真６　Ｙ１号墳丘墓墳丘中央部の主体部の調査状況（南東から）……9
写真７　墓壙・木棺を不織布で梱包……11
写真８　発泡ウレタンを吹き付ける……11
写真９　枠を組んで再度発泡ウレタンを吹き付ける……11
写真10　切り出して分室に搬送……11
写真11　Ｙ１号墳丘墓東・北周溝の埋戻し（南西から）12
写真12　重機による埋戻し状況（北東から）……12

第Ⅰ章　加美遺跡の歴史・地理的環境と既往の調査

第１節　加美遺跡の位置と歴史・地理的環境

加美遺跡は河内平野の中央南部にあり、行政区分では大阪市平野区の北部、東大阪市と八尾市との市境付近に当り、旧大和川水系が形成した河内低地の自然堤防上に位置している(図１・３)。本遺跡は縄文時代晩期から江戸時代にかけての複合遺跡として知られており、その範囲は東西約1.0km、南北約1.1kmに及び、遺跡の北部ならびに東部は東大阪市から八尾市域に拡がる久宝寺遺跡に接している(図２・３)。また、遺跡の西南部はかつて礎石や古瓦が出土して注目された長楽寺跡と一部重複しているほか、この近くの加美鞍作２丁目には、享保年間に礎石や平安時代の軒瓦が出土し、渡来系氏族である鞍作氏の氏寺とみられている鞍作廃寺がある(図３)。

加美遺跡ではKM00－６次調査において、滋賀里Ⅲ式土器の破片が出土したことから、縄文時代晩期には遅くとも人々の営みが始まったことが予想される。弥生時代前期になると加美遺跡では明確な人々の生活の形跡は見られないものの、河内低地に分布する瓜生堂・若江北・山賀・美園・久宝寺などの諸遺跡では集落が形成されるとともに、水田が開かれている。弥生時代中期になるころには、河内低地に定着した水稲農耕は拡大し、生産力も著しい向上を遂げて生活の安定と人口の増加をもたらすとともに、一方で集落間に経済的な格差を生んだ。加美遺跡の南部に位置する亀井遺跡は弥生時代中期後葉までに河内地域において屈指の環濠を備えた拠点集落へと発展し、ここでは銅鐸などの青銅器の生産はもとより、遠方の地域とも交易を行ったことが摂津・大和・和泉地域の土器、北摂産の粘板

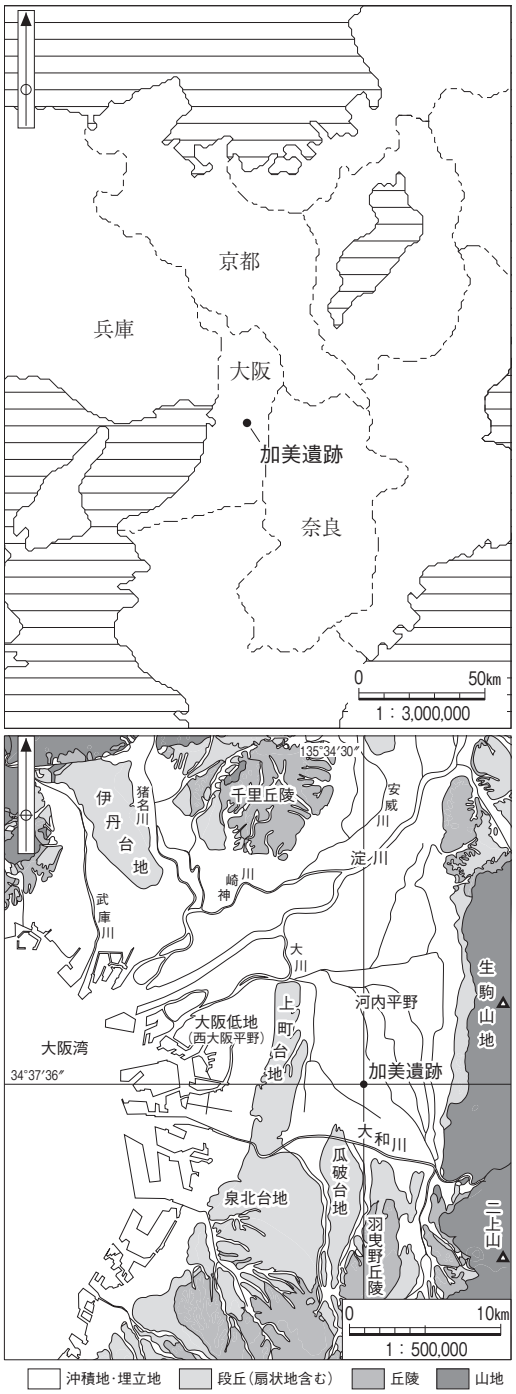
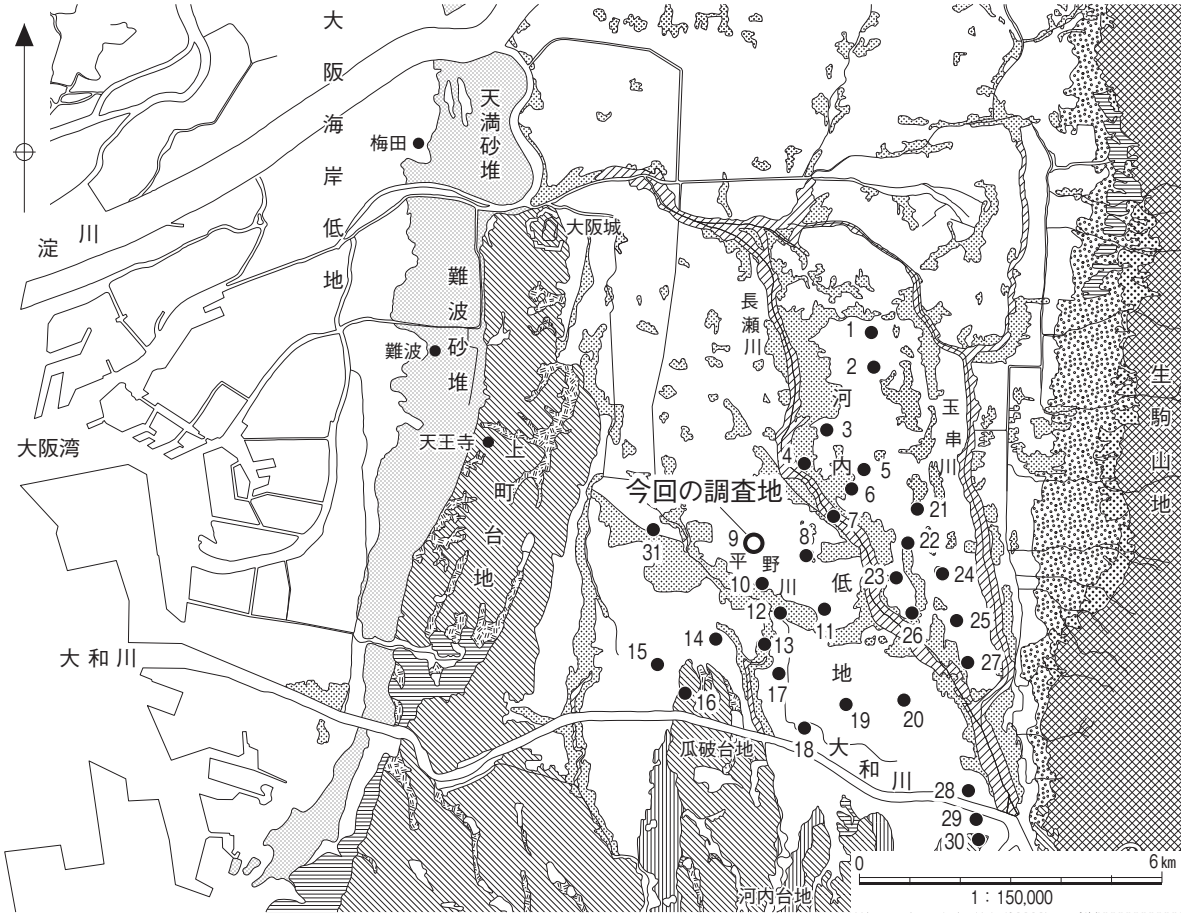


図１　加美遺跡の位置

岩および紀伊産の結晶片岩製の磨製石庖丁、二上山の周辺から産出するサヌカイト製の打製石器などから理解しうる。

一方、加美遺跡の東北の東大阪市域に拡がる久宝寺遺跡では、1985年度の発掘調査で弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式古段階)の南北長14.90m、東西長9.90m、高さ0.99mの方形周溝墓が検出されている。ここでは土器棺１基と組合式木棺が３基確認されており、このうちの２基の木棺内から打製石鏃が出土している[東大阪市文化財協会1986]。このほかにも調査地の北方約300m地点にあるKM95－14次調査地でも弥生時代中期中葉の２基の方形周溝墓が検出されており、このうちの２号方形周溝墓は墳丘の規模が東西6.95m、南北9.90m、高さ1.93mであった。墳丘の中心近くに２体が埋葬されたあと、北側に約２m墳丘を拡張して、２体が追葬されていたほか、子供が木棺に埋葬されていた１号主体部上には「標石」とみられる握りこぶし大の石が置かれていた。１号方形周溝墓も墳丘を拡張していたほか、周溝内から赤色顔料が塗布された鳥形木製品が出土しており、当時の埋葬方法や葬送儀礼



1：西岩田	2：瓜生堂	3：小若江	4：弥刀	5：友井東	6：美園	7：佐堂	8：久宝寺	9：加美	10：亀井北	11：跡部
12：亀井	13：城山	14：喜連東	15：瓜破北	16：瓜破	17：長原	18：八尾南	19：木の本	20：田井中	21：萱振	22：東郷
23：成法寺	24：小阪合	25：中田	26：矢作	27：東弓削	28：本郷	29：船橋	30：国府	31：平野馬場		

山地の斜面　洪積段丘高位・中位　洪積段丘下位　沖積段丘　台地段丘上の凹地・浅い谷　氾濫平野・谷底平野　盛土地・河川・溜め池
段丘化した扇状地　扇状地・扇状地性低地　自然堤防　砂堆・砂州　旧天井川および天井川沿いの微高地

図２　弥生時代終末～古墳時代初頭の遺跡の分布(土地条件図[建設省国土地理院1965]をもとに加筆して作成)

をみる上で重要な資料になっている[大庭重信・寺井誠1997]。

以上のように加美遺跡の東北の久宝寺遺跡[東大阪市文化財協会1986]に加え、南方の城山遺跡[大阪府文化財調査研究センター1996]では弥生時代中期中葉から中期後葉にかけての方形周溝墓群が形成されており、これらは弥生時代中期後葉にピークを迎える亀井遺跡の環濠を伴う拠点集落の墓域が近距離に複数存在していることを示唆している。また、これらとは別に近くに位置するＹ１・２号墳丘墓の被葬者も後述するように亀井遺跡の集落との関係が深いものとみてまちがいないであろう。

紀元１世紀前後の弥生時代後期になると河内湖に流入する旧大和川水系の度重なる洪水によって、加美遺跡周辺の景観は大きく変わり、それまであった集落の多くが廃絶あるいは規模を縮小している。本調査でも後述するように弥生時代後期前葉の土器を伴う水田の作土層が検出されており、この時期には加美遺跡の範囲も生産域であったものと思われる。その後、加美遺跡を含め河内低地での人の活

図３　加美遺跡および周辺におけるおもな調査

動が活発になるのは弥生時代終末から古墳時代初頭を迎えてからである。加美遺跡では庄内式～布留式期に属する集落域や墓域のほか、これらに隣接して水田や畑などの生産域が検出されている。さらに加美遺跡の西方にある平野馬場遺跡も近年実施された発掘調査の結果、加美遺跡と同様に庄内式～布留式期の集落であり、遠くは山口県や山陰西部、石川県および愛知県をはじめ、四国の瀬戸内側の地域、岡山県南部、兵庫県西部、奈良県、滋賀県の特徴が見られる土器が確認されて、他地域の集団とも活発な交流や交易を行っていたことが明らかになっている[大阪文化財研究所2011b]。同様なことは加美遺跡の東側に接する久宝寺遺跡の調査でも明らかになっており、加美遺跡を含む一帯は河内低地最大の弥生時代終末から古墳時代初頭の居住域であって、近隣には墓域ならびに生産域が拡がっていたことが明らかにされている[大阪府文化財センター2007]。

一方、当地域では近畿自動車道の建設やJR西日本の竜華操車場の再開発事業に伴う発掘調査で出土した準構造船や船着き場の可能性のある杭を打設した遺構、準構造船の出入りが可能な流路などが検出されている[大阪文化財センター1987a～c]。これは、瀬戸内海から河内湖に入った準構造船がここに一旦接岸したのち、いわゆる川舟などに荷を積み直して大和川を上って大和に入ったことを示唆している。

古墳時代中期になると久宝寺遺跡・亀井遺跡ほかで、流路に堤防を築いて流れを固定したり、方向を変えたりする治水工事が盛んに行われている。治水工事は「敷葉工法」や堤防の斜面に横木を渡し杭で固定する「杙形工法」、土嚢を積む「土嚢工法」などの朝鮮半島系の土木技術によっている。５世紀代の河内低地には渡来人の炊飯具である百済および加耶系の韓式系土器を伴う大小の集落が進出しており、これらの集落は倭王権による河内低地の開発に関与したものと考えられる[田中清美1989]。当時の加美遺跡は度重なる旧大和川水系の洪水を受けて先の時代にあった自然堤防上の集落は廃絶し湿地化しており、居住域ではなかったようである。

古墳時代後期頃の加美遺跡は生産域とみられているが、引き続き飛鳥時代も遺跡の大半が生産域であったことがこれまでの調査で明らかになっている。なお、加美遺跡の東部では北流する奈良時代の後半から平安時代初頭にかけての大溝が確認されているほか[大阪文化財研究所2014]、これの続きとみられる大溝がKM00－３・５次調査地でも検出されており、人形・斎串・舟形・絵馬などの木製祭祀具や墨書・墨画土器・銅銭や銙帯など水に纏わる祭祀に伴う遺物が出土している[黒田慶一2001]。また、遺跡北部では奈良時代後半から平安時代初頭にかけての掘立柱建物群が検出されているが、これらは生産域の管理者や耕作者であった集団の集落であろう[大阪文化財研究所2014]。

鎌倉時代以降についても先の時代と同様に基本的には生産域であったが、西部および西南部では鎌倉～室町時代の集落が存在したことを示す遺構・遺物が確認されている。江戸時代も加美遺跡の一帯は田園が拡がっており、ここでは稲作以外に綿花の栽培が盛んに行われていたようである。戦前は船舶のスクリュー工場や電池工場などを含む大小の工場が点在する大阪市域の郊外に当っていた。

第２節　加美遺跡の既往の調査

加美遺跡の発見は、1942(昭和17)年に現在の府道大阪港八尾線と大和路線が交差する地点の地下道建設の際に、弥生時代後期の広口壺ならびに古墳時代前期の小型丸底壺が出土したことによる。その後長らく遺跡の調査は行われなかったが、1976年に加美東５丁目で加美小学校の分校(現在の加美東小学校)の建設に伴った発掘調査が大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会・長原遺跡調査会によって行われ、庄内式期の竪穴建物や多くの溝、井戸などの集落遺構が検出されたほか、銅鏃３点や鉄剣形銅剣が１点出土して注目された[田中1986a]（表１）。1980年代に入ると加美遺跡のある平野区の東南部も大阪市の都市化による開発とそれに伴う発掘調査の件数が激増し、1981年に加美東７丁目で行われたKM81－１次調査では縄文時代晩期の土器片が出土したほか、弥生時代後期～庄内式期の遺構・遺物が検出され、加美遺跡は加美東５丁目周辺のみでなく、遺跡東南部の八尾市域にある久宝寺遺跡の方向にも拡がることが明らかになった。1983～1984年には加美東６丁目において大阪市による都市型中小規模工業団地の造成に伴う発掘調査(KM83－６次・84－１次)が実施された。本調査では河内地域で最大の弥生時代中期後葉のＹ１号墳丘墓が確認されたほか、上層で庄内式から布留式期にかけての竪穴建物・掘立柱建物・井戸・土壙・小溝群・大溝などからなる集落跡をはじめ、前方後方形周溝墓を含む46基の方形周溝墓群が検出された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984ｂ・1985]。このような調査成果から、加美遺跡は全国的に著名になり、1996年には大阪市顕彰史跡に指定されるとともに、調査地の近くに史跡案内板が設置されるなど、遺跡の保護と活用が図られている。

1985年以降になると加美東２・３・６丁目地区で市営住宅の建替えが、加美東４丁目～６丁目地区を中心に民間による集合住宅の建設に伴う発掘調査が急増した。KM94－１次・95－14次・97－１次・98－８次調査などで、これらの調査成果については既刊の報告書[大阪市文化財協会2003a・b・2009]に詳述されているため、ここでは略すが、縄文時代晩期、弥生時代中期～後期、弥生時代終末

表１　加美遺跡の主要調査の概要

調査次数	調査区	調査地	調査概要	文献
加美東小学校		加美東５丁目	庄内～布留式期竪穴建物・井戸・溝	田中清美1986a
KM81－１		加美東７丁目	縄文時代晩期土器、弥生時代後期～庄内式期溝・土壙・落込	大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983
KM82－４		加美東４丁目	弥生時代後期井戸・溝、庄内式期掘立柱建物・溝・土器棺、古墳時代前期墳墓?、古墳時代中期柱穴、	大阪市文化財協会2009
KM83－７	1トレンチ（中）	加美東７丁目	古墳時代前期土器列、弥生時代後期～庄内式期の井戸?、土壙	大阪市文化財協会2009
KM83－７	2トレンチ（東）	加美東７丁目	弥生時代末～古墳時代中期の流路	大阪市文化財協会2009
KM84－１		加美東６丁目	弥生時代中期墳丘墓、弥生時代後期～庄内式期井戸・溝、庄内～布留式期方形周溝墓46基・竪穴建物・井戸・小溝群	本報告
KM95－14		加美東６丁目	弥生時代中期中葉方形周溝墓 、 弥生後期水田、布留式期水田・畠状遺構、奈良時代流路	大庭重信・寺井誠1997
KM97－１		加美東６丁目	弥生時代後期土器集積、庄内式期方形周溝墓・木棺墓、布留式期掘立柱建物・炭集中部	大阪市文化財協会1999
KM98－８		加美東６丁目	弥生時代後期井戸・溝・土壙、布留式期方形周溝墓	大阪市文化財協会2001
KM00－５		加美東６丁目	弥生時代後期溝、布留式期水田・土壙・溝・柱穴・土器棺、奈良～平安時代流路	大阪市文化財協会2003b
KM00－６		加美東６丁目	弥生時代中期後葉溝、布留式期水田	大阪市文化財協会2003b

～古墳時代前期、古墳時代中期～平安時代、鎌倉～江戸時代に属する多岐にわたる遺物および遺構が検出されており、加美遺跡が河内湖周辺に点在する複合遺跡の中でも屈指の規模や内容を誇ることが明らかになっている。なお、2001年度に加美遺跡の西部に当る加美東４～７丁目で行われた大阪外環状鉄道建設工事に伴う調査では鎌倉・室町時代の集落に関わる遺構、古墳時代前期の集落や生産遺構および集落の縁辺部の自然環境の実態が明らかにされている[大阪市文化財協会2003a]。

一方、近年は加美遺跡南部の加美南１丁目地区で民間による集合住宅ほかの建設に伴う発掘調査が行われたほか、加美東３丁目地区では引き続き市営住宅の建設に伴うKM09－１次・KM12－１次調査が行われ、KM09－１次調査では弥生時代中期後半～後期前半の溝・畦畔などの遺構および古墳時代前期の集落や生産域に伴う遺構、飛鳥～平安時代の集落や生産域に関わる遺構を検出した[大阪文化財研究所2011a]。KM12－１次調査でも弥生時代中期～後期および古墳時代前期の畦畔、奈良時代（８世紀中頃～後半）の総柱建物を含む掘立柱建物群など、先の調査成果を補強すべき資料を得ている[大阪文化財研究所2014]。

以上のように加美遺跡の発掘調査は市内では比較的早くから行われ、河内低地でのヒトと自然との関わりや営みのようすを明らかにすべき資料を蓄積してきたが、発掘調査の件数は2000年度をピークにこれ以降は年を追って減少する傾向にある。

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

１)調査に至る経緯

大阪市平野区加美東６丁目に所在する旧ミカドプロペラ工場跡地の再開発事業に伴い、埋蔵文化財の遺存状況を確認するために、大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会は1977年10月１日～10月21日まで敷地内の４箇所で範囲確認調査を行った[大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978]。その結果、№１トレンチで古墳時代初頭の井戸、№２トレンチで古墳時代初頭の溝、№３トレンチで弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物および土壙などの遺構を現地表面下1.6～1.8mで検出するとともに、庄内式～布留式期に属する土器類を包含する地層を確認した。調査個所の東南部に位置する№４トレンチでは、ほかのトレンチと違って遺構も遺物も確認されず、水成層が互層になって堆積する状況が見られた。このような範囲確認調査の結果に基づき、約10,000㎡の工場敷地を対象とした発掘調査が実施されることになった(図４、原色図版１)。

２)調査の経過

Ｙ１号墳丘墓の発見は、1984(昭和59)年10月２日に調査区東方の庄内式～布留式期の遺構の調査中に第５層以下の遺構の有無を確認するため、攪乱壙内を掘り下げた際に人骨および木棺を発見したことに端を発している(表２)。このころ調査個所の中央南部を除く地区で庄内式～布留式期の方形周溝墓が分布すること、中央南部の一帯には庄内式～布留式期の集落遺構が濃密に分布することが確認され、これの調査に集中していた。攪乱壙の断面に偶然現れた人骨と木棺は、それまで予想していなかった弥生時代の下層遺構であったため、その後の発掘調査の方針について再検討することになった。大阪市教育委員会・大阪市経済局による協議の結果、調査個所の中央部を境に調査区を東西に二分して、庄内式～布留式期の遺構群および新たに発見した弥生時代の下層遺構も含めて引き続き発掘調査を実施することになった。東区では庄内式期の方形周溝墓群および庄内式～布留式期の大溝の調査中であったため、まず、木棺の数や時期の把握を目的とした確認調査を10月８日から着手した。確認調査を始めて間もない10月13日に、最初の人骨が遺存する木棺を発見した場所から約35m南に離れた調査個所の南壁の近くから、３基の組合式木棺が検出されたほか、厚さ1.5mに及ぶ盛土を確認し、別の墳丘墓(**Ｙ２号墳丘墓**)が存在することが明らかになった。墳丘墓の時期は木棺の調査中に近くにあった庄内式期の井戸の井戸側内から畿内第Ⅳ様式に属する広口壺を転用した土器棺が検出されたことから、弥生時代中期後葉まで遡ることが判明した。この時点で、東区には弥生時代中期後葉の２基の大型墳丘墓(**Ｙ１・２号墳丘墓**)が南北に並んで埋没していることが確実視された。

Ｙ２号墳丘墓の木棺内の人骨の遺存状況が悪いため、これを一旦取り上げて現場事務所横の仮設テントに移設し、引き続き３基の木棺内の人骨のクリーニング・写真撮影・実測を行った。10月31日、

東区で最初に発見した組合式木棺のあるＹ１号墳丘墓の墳丘ならびに東周溝の調査に着手した。まず、東周溝の幅を確認するため、主軸が正南北方向の墳丘に東西(約10m)・南北(約20m)方向の中央セクションを残し、これに沿ってトレンチを設定したのち、墳丘の主軸に直行する形で東西方向に２本のトレンチを入れた。その結果、東周溝内には厚さ2.5mにも及ぶシルト、粘土、砂・礫が堆積していることが判明したほか、これらの地層には土器や石器、木製品などの遺物を含まないことが確認された。そこで、浅黄色砂・礫層および暗灰黄色極細粒砂質シルト層については重機により掘削することにして、これ以下に堆積している遺物を含む地層についてはすべて人力で掘り下げることにした。

11月３日から東周溝の南部より周溝内を掘り下げたところ、弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)の土器・大型の砥石・薄板(幅５～10㎝、厚さ３～５㎜)を含む木製品が多量に出土した。これらの遺物については、出土状況を観察するとともに写真撮影および実測図を作成して、人為的に投棄されたものであるか、あるいは遊離し再堆積したものかを調べるように努めた。その結果、墳丘の東南コーナーに近い場所に、弥生土器や木製品が集中することが見て取れた。また、東周溝内には薄板や組合式木棺を加工した際のチップをはじめ、鋤・鍬類、容器類、用途不明加工木などの木質遺物が多量に存在することが明らかになり、その劣化を防ぐための処置について、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）および財団法人大阪文化財センター（現

写真１　Ｙ２号墳丘墓主体部の調査状況

写真２　Ｙ１号墳丘墓南北中央トレンチの調査状況（南東から）

写真３　Ｙ１号墳丘墓盛土内鉄鑿出土状況(南から)

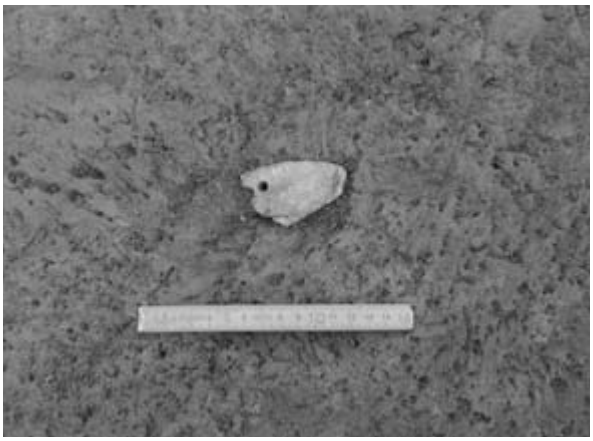


写真４　Ｙ１号墳丘墓盛土内石庖丁出土状況(南から)

公益財団法人大阪府文化財センター）に協力を要請して、発掘調査中はもとより、資料整理の期間中にも指導ならびに保存処理薬剤の提供を受けた。

11月５・６日に**東周溝**の中央部以北の調査に移行するとともに**東周溝**の東西中央セクションの南側にトレンチを入れて灰色砂混りシルト質粘土層を除去し、**東周溝**内の各層の堆積状況ならびに墳丘盛土の構築過程および墳丘墓の埋没過程について検討し、写真・実測図などに記録した。その結果、**Ｙ１号墳丘墓**の盛土の厚さは旧表土層から最大２ｍで、旧表土層から**東周溝**の底までの深さは約0.8mあることが判明した。また、弥生時代中期後葉の旧表土層下には生活面としては不向きなラミナの発達した２枚の黒色粘土層が緑灰色粘土層を挟んで堆積していることを確認し、墳丘墓が築造された旧表土層下には顕著な生活面は見られないこと、墳丘墓の高さは**東周溝**の最深部から約2.8mあることが明らかとなった。

11月８日から重機を用いて墳丘墓の東北部を掘り下げて、墳丘ならびに周溝を検出するとともに、引き続き**東周溝**の内底面から出土した土器、木製品の写真撮影および実測図を作成し、記録の終わったものから順に取り上げた。

以上のように**Ｙ１号墳丘墓**では墳丘および**東周溝**、**南北周溝**の調査は進んだが、西区で同時進行していた庄内式～布留式期の方形周溝墓群、集落遺構の調査を進展させるため、11月９日以降は**Ｙ１号墳丘墓**の調査を一旦中断して西区は上層遺構群、東区は上層遺構群と**Ｙ２号墳丘墓**の調査に専念することになった(写真１)。11月18日に東区を北に流れる庄内式～布留式期の**大溝**および**Ｙ２号墳丘墓**の墳丘上で検出した土器棺の調査を実施していたところ、土器棺の北側で新たに主軸を東西に取る２基の組合式木棺を確認し、それらの調査に専念することにした。ところが、11月23日早朝、東西両区において調査中の方形周溝墓から土器が盗難にあっていることが明らかになり、平野警察署に盗難届を提出するとともに数日マスコミの取材対応に追われ、この間の調査にも少なからず影響がでた。

11月26日から17日間中断していた**Ｙ１号墳丘墓**の調査を再開することになり、**東周溝**北部の掘り下げと遺物の記録および取り上げを実施した。12月に入ると**Ｙ２号墳丘墓**の南部で墳丘頂部の輪郭を検出しながら、南壁際に墳丘の構築状況および埋葬施設を確認するためのトレンチを入れた。**Ｙ１号墳丘墓**では**北周溝**ならびに墳丘頂部の中央部以北の調査に着手した。12月７日から**Ｙ１号墳丘墓**の埋葬

写真５　Ｙ１号墳丘墓主体部・西周溝の調査状況（南西から）

写真６　Ｙ１号墳丘墓墳丘中央部の主体部の調査状況（南東から）

施設の数や被葬者の頭位の方向を確認し、これらの調査方法および調査にかかる日数を積算するため、墳丘の主軸に平行して１箇所、直行する６箇所のトレンチを設定した(写真２)。その結果、成人・子供を含めて11基の組合式木棺による主体部を確認したほか、盛土内から弥生土器片・磨製石庖丁片・石鏃・鉄鑿などが出土した(写真３・４)。12月13日に調査地内において、大阪市経済局・大阪市土地開発公社・大阪市教育委員会・大阪市文化財協会による調査方針検討会議が開かれて、その後の調査期間や調査方法を決定した。翌日から先に設定したトレンチ内での**５号主体部**の調査に着手したが、南北両小口板が二重構造になっていることが判明したため、トレンチを拡張して墓壙ならびに木棺全体の把握に努めた。この結果、12月19日までのトレンチ調査によって確認された**Ｙ１号墳丘墓**の主体部の数は16基となり、これらは主軸の方位から北群(東西方向)、中央群(南北方向)、南群(東西方向)の３群に分かれていることが判明したほか、中央群には墓の中心埋葬である大型の**５号主体部**が位置することを確認した。

12月15日に**Ｙ１号墳丘墓**の墳丘頂部で供献土器(水差し)が盗難に遭ったため、平野警察署に盗難届

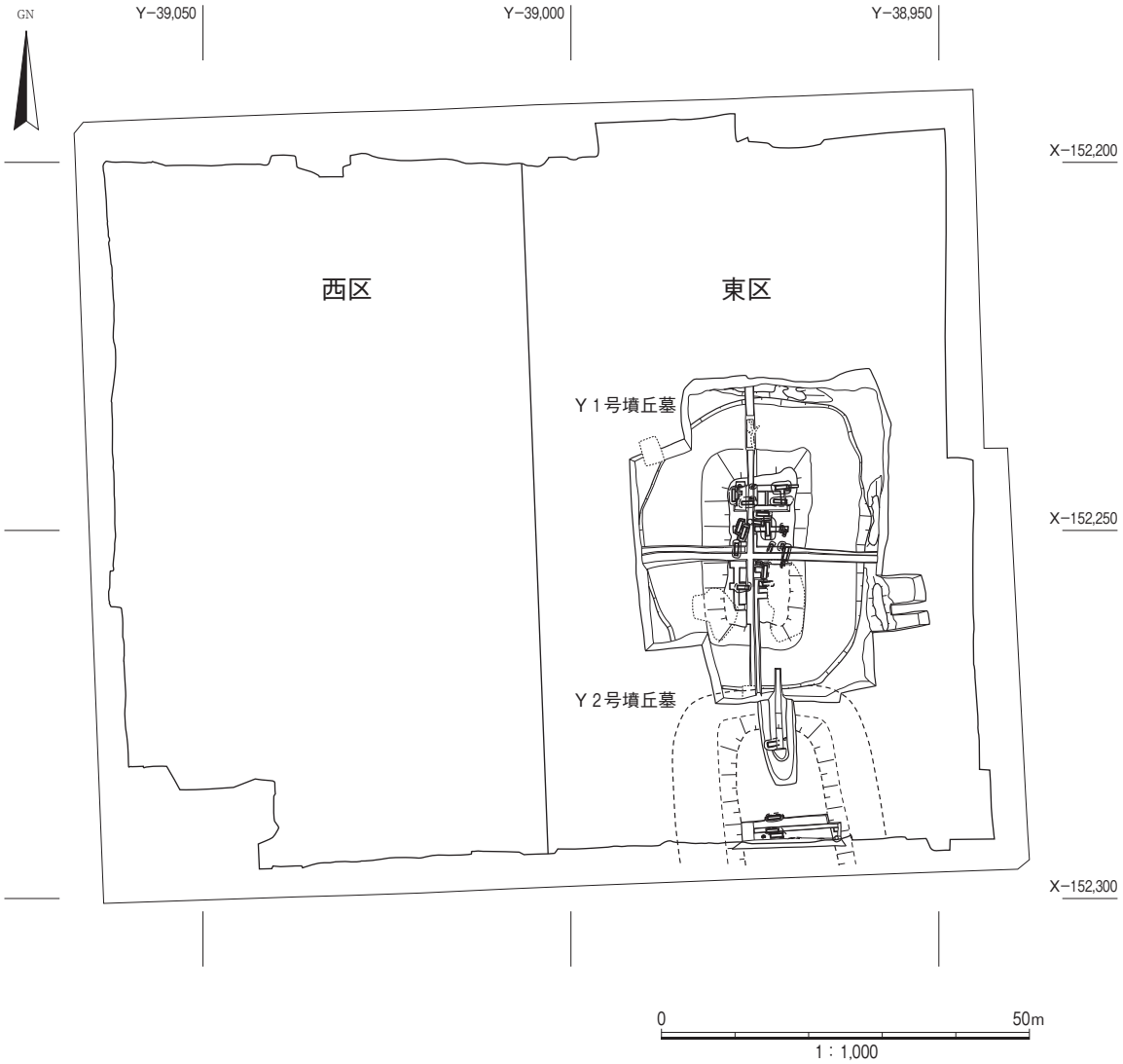


図４　調査地区割図

写真７　墓壙・木棺を不織布で梱包

写真８　発泡ウレタンを吹き付ける

写真９　枠を組んで再度発泡ウレタンを吹き付ける

写真10　切り出して分室に搬送

を提出し、調査地周辺を含む重点的なパトロールを実施した。これ以後は調査終了時まで調査地内での遺物の盗難は発生しなかった。12月20日から**Ｙ１号墳丘墓**の**西周溝**の調査に着手し、北から順に遺物の分布状況を写真および実測図にて記録した(写真５)。12月27日までに**５号主体部**の木棺の輪郭を検出するとともに、両小口板ならびに両側板が二重になっていること、これらは一枚の底板の上に木槨状に組まれていることを確認した。

1985年１月６日には、午後２時から４時30分まで、東区の**Ｙ１号墳丘墓**および西区の庄内式～布留式期の方形周溝墓群・集落遺構を対象にした現地説明会を実施した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1985]。地元の加美地区および平野区の内外から600人を超す参加者があり、**Ｙ１号墳丘墓**について当日および翌日の新聞紙面ならびにテレビ報道で大きく取り上げられた。

１月７日から**５号主体部**に加えて、**１・２号主体部**、９日から**７号主体部**、１月11日から**３・４号主体部**の調査に着手した(写真６)。主体部の調査とともに**東・南・西・北周溝**の下層遺構の確認トレンチの掘り下げおよび墳丘の主軸に沿って設定した南北・東西中央セクションの断面調査も並行して進めた。１月14日からは、これまで途切れながら調査をしていた**10号主体部**についても墓壙を含め全容を明らかにして、棺内に残る人骨のクリーニングおよび写真撮影などを行った。１月20日以降は**６・８号主体部**の調査に着手したほか、１月30・31日の両日には**Ｙ１号墳丘墓**の全景写真の撮影および委託業者による写真測量を実施した。なお、**Ｙ２号墳丘墓**は１月末まで**Ｙ１号墳丘墓**の調査に並行して、

主体部の調査および調査区南端壁際の墳丘に入れた東西トレンチの調査を行った。

２月に入ると当初にＹ１号墳丘墓では写真測量の補足作業を行った以外は、１～20・22号主体部の発掘調査に専念し、２月４日から棺内の調査を終えていたＹ２号墳丘墓の１～５号主体部の木棺を長原分室に搬出した。２月13日にはＹ１号墳丘墓１号主体部の左耳の近くからガラス製の勾玉および小玉がそれぞれ１点出土したが、勾玉が一部破損したため、奈良国立文化財研究所の協力を得て樹脂で固めて取り上げた。２月15～22日にかけて墳丘南北トレンチ南部の墳丘基底部で検出した落込みおよび東周溝内底面の杭・矢板列を調査した結果、前者は墳丘の築造に関わる掘り込み整形の可能性があること、後者は第8c層あるいは第９層の上面から打設されていることが判明した。また、２月末日までに、Ｙ１号墳丘墓の中心埋葬とみた５号主体部周辺の埋葬順序は、５号主体部が構築されたあと、19号主体部→14号主体部→６号主体部→17号主体部の順に、19・20号主体部も５号主体部と切合い関係にあることを確認した。

３月に入って21・23号主体部が新たに検出されたほか、１・３～13・15～18・20～22号主体部の棺内の調査を実施した。この間、大阪市立大学医学部第二解剖学教室の吉備登・多賀谷昭両氏により被葬者の骨から年齢や性別の鑑定が行われた。Ｙ１・Ｙ２号墳丘墓の被葬者の骨の分析結果については本書(第Ⅳ章第４・５節)に収録しているので参照されたい。３月９～10日に20号主体部の墓壙を含めた断面の転写をしたほか、12・13両日には棺内の調査を終えた５号主体部および開棺していない14・19・23号主体部の精密な調査を行うため、墓壙ごと切り取り、発泡ウレタンで梱包して長原分室に搬送した(写真７～10)。なお、３月６日以降に南北・東西中央セクションにおいて墓壙の掘り込み面および墳丘整地層の有無についての確認調査を進めた結果、墳丘盛土の表層部から下約20cmまでは最終埋葬後の整地層であること、埋葬施設は整地層の直下から掘り込まれていることが判明した。また、９号主体部の南小口板の近くに横たえてあった甕は土器棺ではないことを確認した。

写真11　Ｙ１号墳丘墓東・北周溝の埋戻し(南西から)

写真12　重機による埋戻し状況(北東から)

一方、３月８日からＹ１号墳丘墓の南北中央セクションを南に延長したＹ２号墳丘墓の墳丘に埋葬施設の確認を目的としたトレンチを入れた。その結果、墳丘の北端から約３ｍの所で主軸が東西方向の２基の組合式木棺を確認した。したがって、Ｙ２号墳丘墓の埋葬施設の数は最終的に土器棺１基、組合式木棺６基の計７基とな

り、墳丘の規模も後述するようにＹ１号墳丘墓とさほど変わらないことが明らかになった。なお、Ｙ１号墳丘墓の５号主体部の木槨ならびに14・19・23号主体部の組合式木棺については、財団法人元興寺文化財研究所(現公益財団法人元興寺文化財研究所)に保存処理を委託して、墓壙を含め展示および収蔵可能な状態にしえた。

３月22日から調査を終えたＹ１号墳丘墓の西周溝および墳丘西北部から埋戻しに着手して、３月29日には東西調査区ともすべての発掘調査を完了した(写真11･12)。なお、４月１日以降は長原分室で２・14・19号主体部の組合式木棺内の調査を行い、２・14号主体部では人骨が残っていたほか、前者ではガラス平玉と円環型銅釧が、後者でも円環型銅釧がともに右腕に着装された状態で検出された。２・14・19号主体部の木棺内調査が完了したのは６月の梅雨を迎えるころであり、この後現地で発泡ウレタンで梱包して取り上げた組合式木棺については難波宮分室に搬送し、土器・木製品などについては長原分室で引き続き整理作業を行った。次に報告書の作成について略述しておく。

KM83－６次、84－１次調査では約１万㎡にわたる範囲の発掘調査を実施した結果、①庄内式～布留式期の方形周溝墓群および集落遺構、②弥生時代中期後葉の２基の大型墳丘墓を検出することができた。ともに遺構や遺物の保存状況は良好であったが、ガラス製品・金属製品など加美遺跡のみならず府下でも希少な遺物を得ることができた。また、庄内式～布留式期の方形周溝墓群は周溝内から多量の土器が出土したほか、墳丘や周溝外に木棺を直葬したものが多くあり、これらの資料整理には膨大な労力と時間を必要とした。さらに弥生時代中期後葉の２基の墳丘墓についても埋葬施設が残っていたことのみならず、Ｙ１号墳丘墓では周溝内から多量の土器や木製品が出土したため、資料の基礎的な整理に加えて組合式木棺や各種木製品の保存処理を進める必要があった。

調査が完了した1985年度から報告書の刊行を念頭に置いた出土遺物の洗浄・注記・接合などを順次着手するとともに、遺構の平面図・断面図および地層断面図の整理作業を行ったほか、現場で撮影した遺構や断面の写真を整理した。

木製品の保存処理を国庫補助事業として実施することになり、Ｙ１号墳丘墓および布留式期の大溝から出土した木製品の選別と実測図の作成を急ぎ行った。また、遺物の復元整理の進展をみながら適時実測図を作成するとともに、1986年度の下半期には土器・木製品・金属製品ほか、報告書掲載予定の遺物写真の撮影を行った。その後、長原・瓜破地区の区画整理事業および市営住宅の建替えに伴う発掘調査に従事するため、報告書の作成を一時中断することになった。

本報告書の作成に当っては、2014年４月１日からこれまでに行っていた整理作業を引き継ぎ、遺構

表２　発掘調査の期間など

調査次数	調査地番	面積	調査期間	担当者
KM84－１ (Ｙ１･Ｙ２号墳丘墓、庄内式～布留式期の方形周溝墓･集落遺構)	平野区加美東６丁目	約10,000㎡	昭和59年10月２日～昭和60年３月29日	積山洋 田中清美 趙哲済 永島暉臣慎 松尾信裕 森毅

の平面図や断面図および出土遺物の実測図などで、レイアウトや製図が終わっていたものから適時デジタル化を進めて報告書の挿図とした。また、Ｙ１・２号墳丘墓の遺物写真は紙焼きによるＢ５版用の編集が終わっていたが、Ａ４版用に変更しデジタル化するとともに、原色図版にするための遺物・遺構写真を選別して新たにスキャンニングし、モノクロ写真を含めてデジタル図版を作成した。

本報告も本来なら加美遺跡KM84－１次調査報告書として、弥生時代中期後葉および庄内式～布留式期の遺構・遺物についてまとめるべきところであるが、写真や実測図はもとより多岐にわたる遺物の量も膨大であることから、ここではＹ１・２号墳丘墓の報告ならびに付篇として加美遺跡で最初の本格的な発掘調査となった大阪市立加美小学校分校(現加美東小学校)の建設に伴う発掘調査の概要を収録した。

一方、発掘調査時に大阪市立大学医学部第二解剖学教室の吉備登氏および多賀谷昭氏に依頼していたＹ１・２号墳丘墓の人骨の性別・年齢の同定と結果報告については、早くに報告書の原稿を頂いていたが、本報告書に掲載するに当って校正の打診をしたところ、特に変更箇所はないとのことであったので執筆当時のまま掲載した。両氏に玉稿をいただいてから本書の刊行までにあまりにも長い期間が過ぎたことについてここで深くおわび申し上げたい。以上の諸作業を行って平成27年１月に報告書を刊行した。

なお、庄内式～布留式期の遺構・遺物については続編の報告書にまとめる予定である。

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　層序

１)層序

調査地は現在大阪市中小規模工場団地になっており、地表の標高はTP＋7.3m前後でほぼ平坦面である。調査地は船舶のスクリューを製造するミカドプロペラの工場用地内であったため、工場の基礎のコンクリートパイルおよび鉄筋が組み込まれたコンクリート製の構造物が残っていたほか、基礎撤去時に不用なコンクリート塊やレンガなどを投棄した攪乱壙が各所に残っていた。そのため発掘調査では、層厚約1.5mの現代盛土・耕土(第０層)および近世の作土層(第１層)については重機掘削の対象とした。ここでは第１層以下の各層について記述する(図５・９、表３、原色図版３・４・17、図版４～７・９・30)。また、本報告では下層の弥生時代中期後葉の**Ｙ１・２号墳丘墓**の調査報告を主体とするため、上層に当る庄内式～布留式期の遺構に対応する層序の詳細については後続の報告書で記載することにして略述した。

第１層：暗褐色シルト質粘土・灰褐色粘土質シルトからなる層厚40～60㎝の作土層ほかで、上面には上層の作土層からの踏込みが見られる。本層上面の標高はTP+6.0m前後である。KM２層に相当する。

第２層：褐色～灰褐色粘土質シルトからなる水成層で、上面の標高はTP＋5.6m前後である。本層の上部２～３㎝は黒灰色粘土～シルト質粘土で暗色化している。層厚は10～20㎝あり、下層の第４層準の方形周溝墓の周溝内では層厚を増す。船橋遺跡の船橋ＯⅡ式に属する土器を含むことから、５

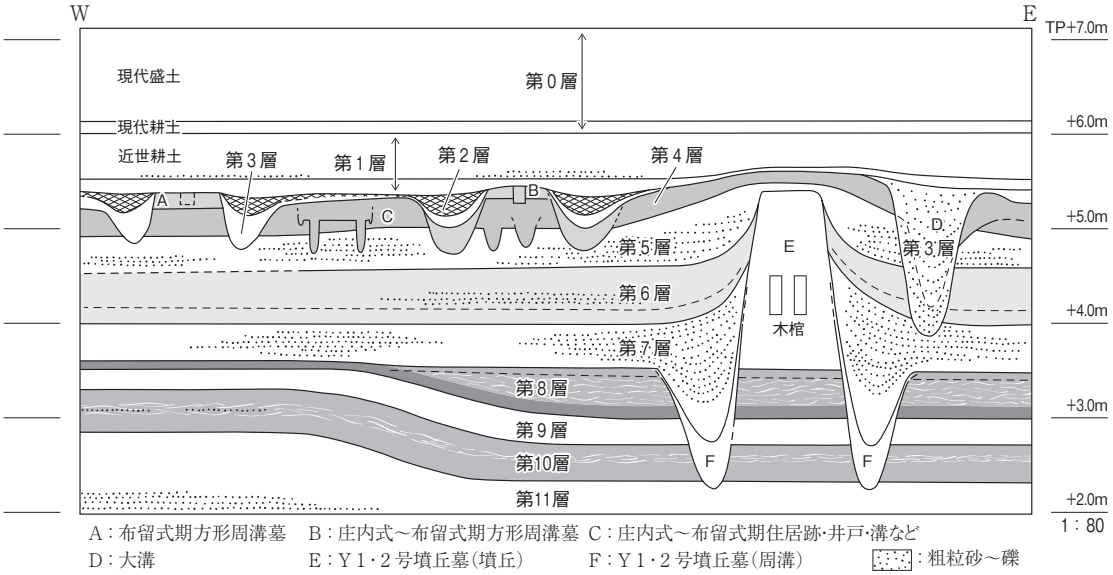


図５　層序模式図

世紀の中葉までに堆積した地層と考えられる。KM5A層に相当する。

第３層：黒褐色～暗灰褐色粘土質シルトおよびシルト質粘土からなる層厚15～40㎝の水成層で、部分的に細粒～極細粒砂を含むほか、調査地の東部に位置する大溝の周辺では層相が細礫質細粒砂やシルト質細粒砂に移行しており、層厚を増す。本層上面の標高はTP+5.5m前後あり、第４層の方形周溝墓の周溝部では層厚を増すほか、上位層からの踏込みによるラミナの乱れが確認された。庄内式～布留式期の土器類を含む。KM5B層に相当する。

第４層：黒褐色粘土質シルト～シルト質極細粒砂および細粒砂質シルトからなる土壌化した暗色帯で、層厚は20～50㎝である。本層上面の標高はTP＋5.3m前後あり、集落遺構が集中する調査区南部は墓域である北部に対して微高地状に高くなる。庄内式～布留式期の多量の土器類を含むほか、上面や層内から各種の遺構が検出された。KM6A層に相当する。

第５層：本層は第5a層・第5b層・第5c層・第5d層に区分される水成層で、第5a層上面の標高はTP+5.1m前後である。

第5a層は灰オリーブ色シルト質極細粒砂からなり、層厚は10～20㎝である。第5b層は灰オリーブ色砂･礫混り粘土質シルトからなり、層厚は10～30㎝である。第5c層は暗オリーブ色粗粒砂からなり、**Y１号墳丘墓**の周溝内では北から南に傾くラミナが観察された。本層の層厚は10～25㎝である。第5d層は暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂～シルトからなり、層厚は５～10㎝である。**Y１・２号墳丘墓**の周辺に分布する第６層の水田跡を覆う地層である。KM6B層に相当する。

第６層：本層は暗オリーブ灰色粘土からなる上位層と、暗オリーブ灰色シルト質粘土からなる下位

表３　加美遺跡基本層序

層序			岩層	層厚(cm)	自然現象ほか	おもな遺構･遺物	今回の調査	NGとの対比	時代
沖積層(雛･波崇層)	最上部層	KM０層	現代盛土	60～100	暗色帯		現代盛土層	第０層	近･現代
		KM１層	現代耕土	10～20				第１－1.5層	
		KM２層	褐灰･黄褐色 細礫混り砂質シルト･シルト質砂	25～40		肥前系染付,青磁,焼締陶器	第１層	第２層	江戸
		KM３層	黄褐･黄灰色 細礫混り砂質シルト･粘土質シルト･シルト質砂	20～50		↓耕作溝　瓦器,瓦質土器,平安京II		NG３－４層	室町 平安
		KM4A層	黄灰色 砂礫　シルトを挟在	140～300		←流路,掘立柱建物　平城宮III～V,人面墨画土器,木製品,牛馬骨		NG５－7A層	飛鳥･奈良
		KM4B層	灰褐･暗緑灰色 粘土質シルト･砂質シルト･シルト質砂	10～20					古墳後期 古墳中期
	上部層	KM5A層	暗灰色 砂質シルト～粘土質シルト	av.20			第２層	NG7Bi－ii層	
		KM5B層	灰色･黄灰色 粗～細粒砂／下底部:暗灰色 極細粒砂～シルト	30～70		←水田面,畠状遺構　布留式	第３層	NG7Biii層	古墳前期
		KM6A層 i'	暗灰色 細粒砂質シルト～粘土質シルト	10～20	←乾痕	←周溝墓群,掘立柱建物　布留式,直弧文板	第４層		
		i	暗灰･黒灰色 粘土･シルト･細粒砂質シルト	≦20					
		ii	灰褐･灰色 粘土質シルト～砂質シルト･中粒砂	≦30		←掘立柱建物　庄内式			弥生後期後半
		iii	暗褐灰･黒褐色 粘土質シルト･シルト質砂	15～30		←流路　△方形周溝墓　畿内第V様式(新)			
		KM6B層	上部:灰･褐灰色 シルト･粘土／下部:灰色 細粒～粗粒砂･砂礫	20～100		←水田面,ヒトの足跡　△流路	第５層		
		KM7A層 i'	灰褐･灰･黒色 シルト～粘土	5～25	←乾痕	←流路,ピット　畿内第V様式(古)	第６層		弥生後期前半
		i	暗灰色 シルト	≦5		ヒト･偶蹄類の足跡　石鏃			
		ii	灰･灰褐色 粘土～シルト･砂	≦10					
		iii	黒灰･黒褐色 粘土～シルト･砂質粘土	10～20					
		KM7B層	灰～淡灰色中～粗粒砂と褐灰色粘土質シルトの互層／下底部:灰色シルト	30～90		△偶蹄類の足跡	第７層	NG8A層	
		KM8A層 i'	黒褐･明緑灰色 シルト質粘土･粗粒砂質シルト	10～25		←墳丘墓,方形周溝墓,鳥･偶蹄類足跡　畿内第III～IV様式	第8a層	NG8B層	弥生中期
		i	褐灰･暗緑灰色 粘土質シルト～砂混じりシルト	ab.5		石鏃			
		ii	暗褐灰･暗緑灰色 シルト･シルト質粘土	≦25					
		iii	黒･黒灰色 粘土質シルト･シルト質砂	≦25					
		KM8B層	暗灰･暗緑灰色 粘土質シルト･砂質シルト／上部:砂･砂礫層を伴う。	10～60		畿内第I～II様式	第8b層	NG8C層	弥生前期
		KM9A層	黒褐･黒色 砂を含むシルト質粘土･砂質シルト	10～20	△		第8c層	NG9A層	
		KM9B層	暗褐灰･暗緑灰色 粘土･シルト･砂･礫／下底部:暗緑灰色 粘土･シルト	15～75	地震によるずれ		第９層	NG9B層	縄文晩期
		KM9C層 i	黒褐･黒色 シルト質粘土･粘土質シルト	≦10			第10層	NG9Ci層	縄文後期
		KM9C層 ii	灰･黒灰色 粘土質シルト	≦10	←巣穴			NG9Cii層	
		KM9C層 iii	暗灰･黒灰色 粘土質シルト	≦10				NG9Ciii層	
		KM10層	緑灰･暗褐灰色 シルト･砂／一部で下部:砂礫	≦165	←巣穴	←流路　縄文土器	第11層	NG10･11層	
		KM11層	灰色 砂･礫	180～240				NG12A･B層	縄文中期
		KM12層	灰色 シルト～粘土					NG12C(Ma13)	縄文前期

中部層

凡例　←上面検出遺構　↓下面検出遺構　△層内検出遺構

［大阪文化財研究所2011a］より引用･加筆

層に二分される水成層で、上面の標高はTP+4.5m前後である。KM7A層に相当する。本層は**Ｙ１・２号墳丘墓**の周辺では暗灰色粘土質シルトからなる作土層に移行しており、下位層には作土層からの著しい踏込みが見られた。**Ｙ１号墳丘墓**の**南周溝**部の本層中から弥生時代後期前葉（第Ｖ様式古相）の完形品を含む土器（図６）が出土した。また、**Ｙ１号墳丘墓**の墳丘の西側近くに堆積した第６層の下位に相当する植物遺体を多く含む暗オリーブ灰色極細粒砂質シルト層から遊離した状態の人骨が出土した。人骨の周辺では埋葬施設は確認されなかったことから、埋葬されたものではない可能性が高い。

一方、第６層の最下位には調査時にカラフル粘土と呼んだラミナの単位で色調の異なる層厚約15㎝の水成層が堆積していた。それは上から暗緑灰色粘土・緑灰色粘土・暗オリーブ灰色粘土・暗オリーブ灰色～暗緑灰色粘土･灰オリーブ粘土･暗緑灰色粘土の順に堆積しており、調査区の広範囲にわたって確認された。カラフル粘土が堆積した頃の**Ｙ１号墳丘墓**は､墳丘の1/3以下が埋没した状態であった。下層の第７層は中粒砂や粗粒砂を主体とする氾濫性の堆積物であることから、カラフル粘土層は静かな環境下で堆積したものと思われた。KM7B層に相当する。

第７層：本層は上から黒灰色～暗褐色シルト質粘土～シルトを介在する暗緑灰色砂質粘土・浅黄色中粒砂・浅黄色粗粒砂・明青灰色中粒砂～砂質細礫・暗オリーブ灰色シルト混り細礫質細粒砂・黄褐色細礫質中粒砂・暗緑灰色細粒砂質粘土の順に堆積した層厚約１ｍの水成層である。KM7B層に相当する。

第８層：本層は第8a層・第8b層・第8c層に区分される暗色帯である。KM8A層に相当する。

第8a層は粗粒砂を極わずかに含む層厚10㎝の暗緑灰色シルト質粘土～粘土質シルトと中粒～細粒砂を多量に含む暗緑灰色粘土質シルトに二分される。このうちの前者の上面が弥生時代中期後葉の生活面で、**Ｙ１・２号墳丘墓**の墳丘構築面である。本層上面の標高はTP＋3.5m前後あり、調査地内には大きな起伏はないようである。なお、**Ｙ１号墳丘墓**の周溝内から墳丘にかけて堆積した機能時堆積層である第8a層は暗灰色・暗オリーブ灰色・暗緑灰色粘土質シルトなどからなる水成層である。第8b層は上位層の黒灰色シルト質粘土および下位層の暗灰色～暗オリーブ灰色シルト質粘土からなる湿地性堆積層で、部分的に水成層に移行しているものの暗色化している。上面の標高はTP+3.5m前後である。KM8B層に相当する。第8c層も上位層の暗灰色粘土質シルトおよび下位層の黒紫色シルト質粘土に二分される湿地性堆積層である。本層の層厚は15～30㎝で、上面の標高はTP+3.2～3.3mである。KM9A層に相当する。

第９層：本層は上からやや緑味をおびる暗灰色シルト質粘土・暗緑灰色シルト質粘土・暗灰色シルト質粘土・緑灰色シルト質粘土からなる湿地性堆積層である。本層の層厚は30～40㎝前後あり、上面の標高はTP+3.1m前後である。KM9B層に相当する。

第10層：黒色～黒灰色シルト質粘土からなる湿地性堆積層で、層厚は30㎝前後である。KM9C層に相当する。

第11層：淡青灰色シルトからなる硬くしまった地層で､層厚は30㎝以上である。KM10層に相当する。

２）第６層出土の遺物

Ｙ１号墳丘墓の南北中央セクションでは、既述したように第６層の作土層から以下のような弥生土器１～４が出土した（図６）。

１は口径6.6㎝、器高15.4㎝の無花果状の体部から短い筒状の口頸部が立つ小型の直口壺である。器面の調整は外面が下方から上方にかけての３段のヘラミガキの後、口縁部をヨコナデ調整している。器体の内面は頸部から体部の上半をユビオサエで、体部の上半以下は縦方向のナデ、口頸部は下半を横方向のナデ、上半をヨコナデ調整している。

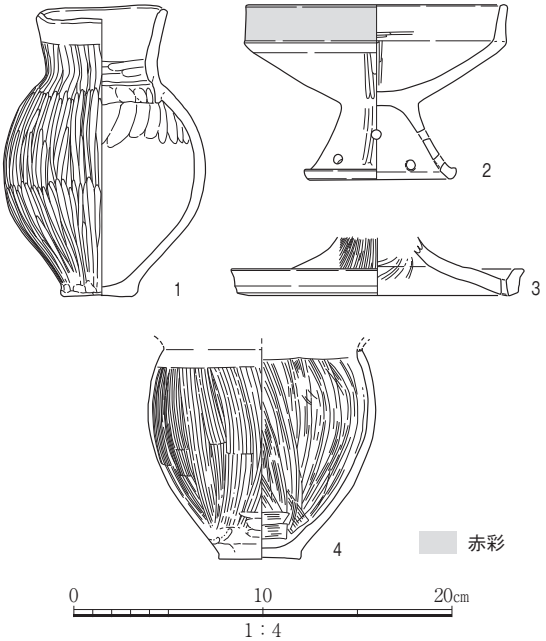


図６　第６層出土遺物実測図

２は杯部の口径が13.5㎝、器高9.2㎝の高杯である。口縁部は杯体部から直立しており、脚部は「ハ」の字状に短く開く。脚部には正三角形状に円形スカシ孔を穿つ。器体の調整は口縁部の内外面が横方向のヘラミガキで、杯体部は内外面とも縦方向のヘラミガキである。脚部も外面が縦方向のヘラミガキで、内面はユビナデである。口縁部の外面を赤彩している。胎土中に微細な石英・シャモット粒を含むが、精製された胎土である。

３は底径13.7㎝の高杯脚部片で、裾端部を外上方に拡張しており、内側に小孔を穿つ。器体外面の調整は縦方向のヘラミガキである。

４は口縁部を欠損した器高11.2㎝以上の甕である。体部の調整は外面が粗い縦方向のハケの後、下端近くを不定方向のヘラミガキで整えており、内面は縦方向の板ナデである。外面は煤が付着しており、内面には焦げが見られる。頸部は内外面ともにヨコナデ調整である。以上の土器は作土層からまとまって出土したこと、赤彩土器や小型の直口壺などを含むことから、なんらかの祭祀で使われたものと思われる。これらの土器は、弥生時代後期前葉（紀元１世紀頃）に属するものであろう。

第２節　Ｙ１号墳丘墓の墳丘と周溝・周堤

１)墳丘および出土遺物

墳丘の規模は頂部で南北21m、東西10m、墳丘の基底部では南北25m、東西15mを測り、平面の形状は長方形を呈している。墳丘の高さは各周溝の底面から２～2.5mあるが、**東周溝**のほぼ中央部の最深部からの高さは約2.8mである。墳丘は、TP＋3.6～3.7mの弥生時代中期後葉の旧表土層である第８層(第8a層：暗緑灰色シルト質粘土～粘土質シルト、第8a'層：暗灰色・暗オリーブ灰色・暗緑灰色粘土質シルト、第8b層：黒灰色シルト質粘土および暗灰色～暗オリーブ灰色シルト質粘土、第8c層：暗灰色粘土質シルト～黒紫色シルト質粘土)の上面(墳丘の範囲)から周溝を約１m前後掘り下げた際の掘削土を積み上げて構築している(図７・９、図版１～３)。

以下に墳丘の構築順序ならびに埋葬施設の墓壙の掘込み面について記述する。なお、盛土の相対的な量比の記述には、多い＞、やや多いかほぼ等しい≧の記号を用いる。

まず、第１段階として、墳丘の南北端の第８層の上面に南北約3.5m、高さ約1.4mの第8a層の偽礫が主体の盛土(第8a層＞第8b層＋第8b・8c層の偽礫主体の盛土＋第９層の偽礫主体の盛土)を行った後、この間に南北幅約２～2.5m、高さ約0.6～1.2mの第９層の暗緑灰色細粒砂＞第8c層の黒灰色粘土質シルトの偽礫、第９層の暗緑灰色細粒砂、第8b～９層の偽礫である暗青灰色～オリーブ黒色粘土質シルトおよび砂、第8b層の暗緑灰色粘土質シルト・第8c層の黒灰色粘土質シルト・第９層の青灰色細粒砂の偽礫からなる盛土を行い(第２段階)、次いで盛土の凹凸を均すようにオリーブ灰色および灰色シルト～粘土の偽礫(第8b層＞第8c層＞第９層)、暗灰色砂質シルト～粘土の偽礫(第8c層＞第8b層)、暗灰色シルト質粘土～粘土質シルト(第8c層粘土偽礫≧第９層粘土偽礫)などを盛土(第３段階)している。この段階での盛土の高さは第8a層の上面から約1.5mある。各埋葬施設の墓壙の掘込み面は、第３段階の盛土の上面であること、墓壙内の埋土中の第８～９層の偽礫は、墳丘の盛土内の偽礫に比べてより細かいことを確認した(原色図版11、図版27)。

一方、第３段階の墳丘上での埋葬後の状況であるが、墓壙内に組合式木棺を組み立てた後、被葬者を納棺し、蓋をしてから墓壙内および棺上を埋め戻しており、その範囲は土饅頭状の高まりをなすことが想定された。この後、一部の土饅頭には薄板による墓標が立てられていた可能性があるほか、**2・5・9・21・23号主体部**では墓壙上に高杯・水差し・台付無頸壺・甕などを供献している。そして墳丘墓における最終の埋葬が終わった後、墳丘の各主体部上の土饅頭を平坦に均したようである。これが墳丘の最上層にあたる層厚10～20㎝の暗灰色粘土質シルト～暗褐色砂質粘土～粘土からなる第４段階の盛土である(図９)。

南端および北端に下幅3.8～5.5m、厚さ1.3～1.5mの第８・９層の偽礫からなる盛土を積んだ後、この間を埋めるように下幅2.5m前後、厚さ1.2～1.5mの第８・９層の偽礫からなる盛土ならびに幅約7.5m、厚さ1.5m前後の第８層および第９層の偽礫からなる盛土を水平方向に積んでいる(図９)。

墳丘の築造過程は、図９に示したように盛土の単位および採土状況などから１期(第１段階)→２期

図７　Ｙ１号墳丘墓等高線図(墳丘・周溝・周堤：一部復元)

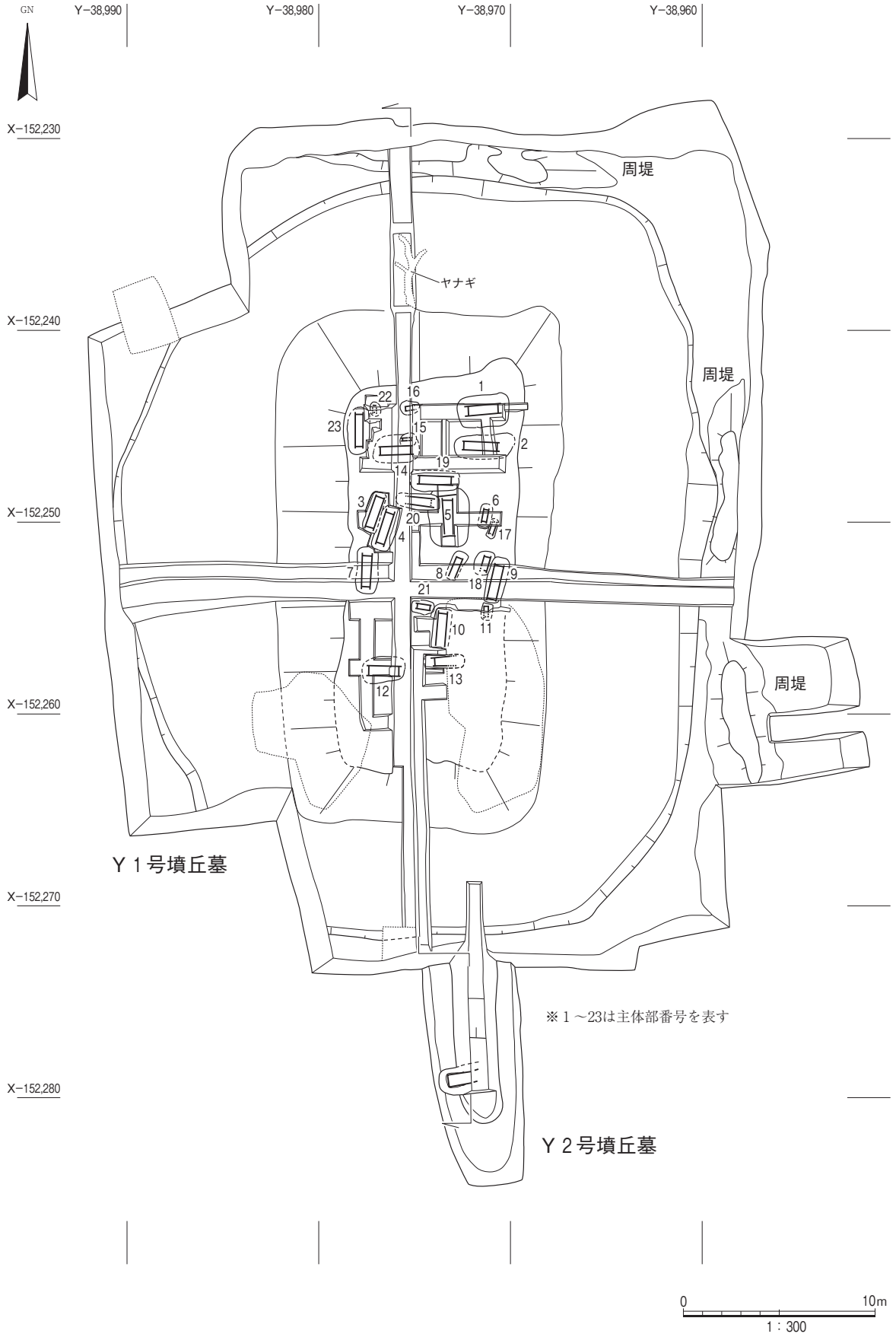
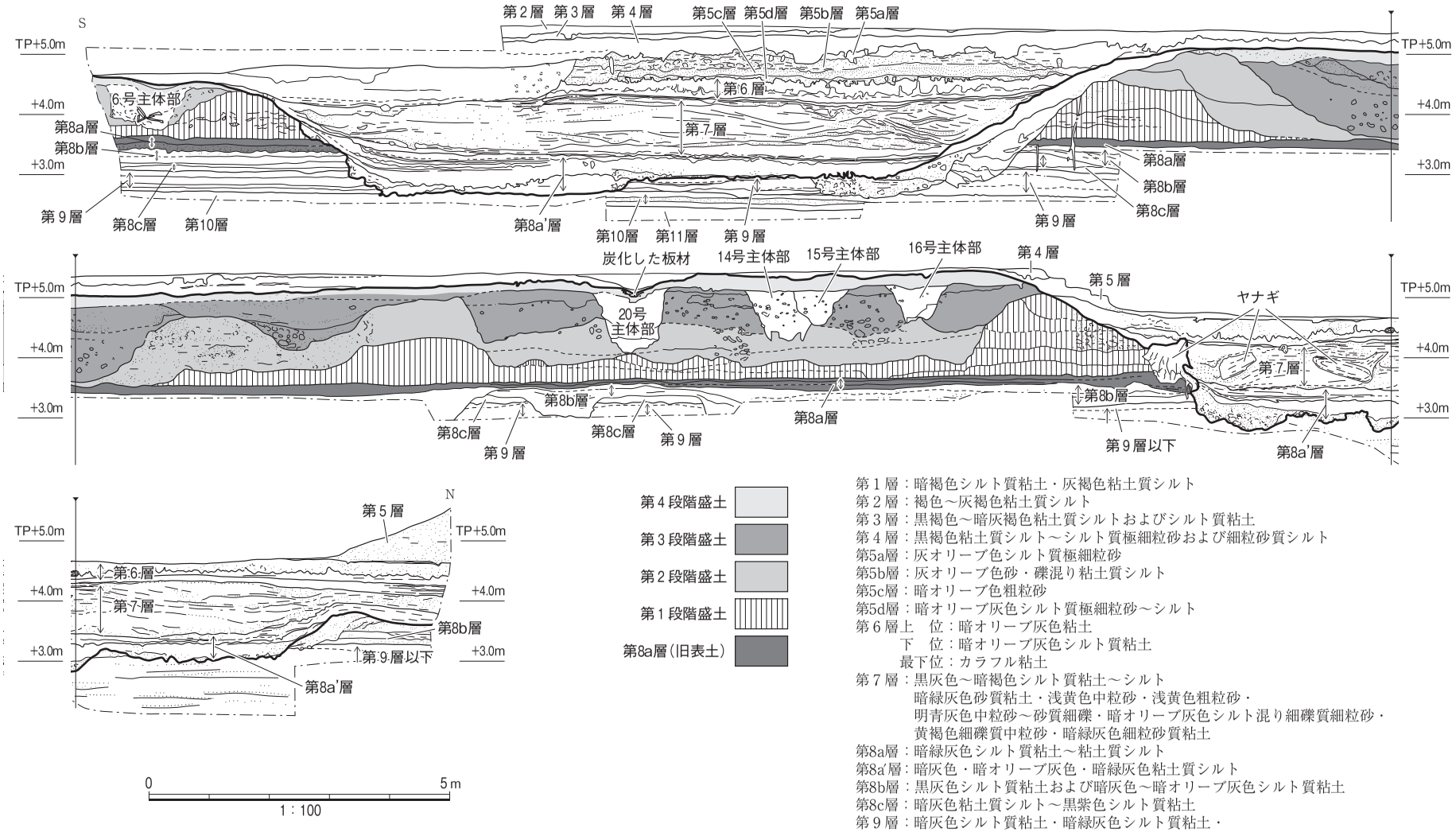


図８　Y１号墳丘墓平面図



第１層：暗褐色シルト質粘土・灰褐色粘土質シルト
第２層：褐色～灰褐色粘土質シルト
第３層：黒褐色～暗灰褐色粘土質シルトおよびシルト質粘土
第４層：黒褐色粘土質シルト～シルト質極細粒砂および細粒砂質シルト
第5a層：灰オリーブ色シルト質極細粒砂
第5b層：灰オリーブ色砂・礫混り粘土質シルト
第5c層：暗オリーブ色粗粒砂
第5d層：暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂～シルト
第６層上　位：暗オリーブ灰色粘土
　　下　位：暗オリーブ灰色シルト質粘土
　　最下位：カラフル粘土
第７層：黒灰色～暗褐色シルト質粘土～シルト
　　暗緑灰色砂質粘土・浅黄色中粒砂・浅黄色粗粒砂・
　　明青灰色中粒砂～砂質細礫・暗オリーブ灰色シルト混り細礫質細粒砂・
　　黄褐色細礫質中粒砂・暗緑灰色細粒砂質粘土
第8a層：暗緑灰色シルト質粘土～粘土質シルト
第8a'層：暗灰色・暗オリーブ灰色・暗緑灰色粘土質シルト
第8b層：黒灰色シルト質粘土および暗灰色～暗オリーブ灰色シルト質粘土
第8c層：暗灰色粘土質シルト～黒紫色シルト質粘土
第９層：暗灰色シルト質粘土・暗緑灰色シルト質粘土・
　　暗灰色シルト質粘土・緑灰色シルト質粘土
第10層：黒色～黒灰色シルト質粘土
第11層：淡青灰色シルト

図９　Ｙ１号墳丘墓南北中央セクション西壁地層断面図

(第２段階)→３期(第３段階)と復元しえた。各期の盛土は、周溝を掘り下げた際の土砂とみられるが、周溝の掘削土のみでは土量が不足することから、一部の盛土については周溝外から採土された可能性がある。また、中心主体である**５号主体部**の埋葬を含む墳丘墓の各埋葬の墓壙は３期の盛土の上面から掘り込まれていることが確認されたが、これは３期の盛土が行われた段階で墳丘墓が完成したことを示している。つまり、各埋葬は後述するように、まず墳丘墓の築造の契機になった**５号主体部**の埋葬が行われた後、引き続き成人および子供の埋葬が順次行われたことを南北中央セクションほかの断面観察で認識しえた(註１)。

一方、墳丘の最上部には厚さ20㎝前後の暗灰色粘土質シルト～暗褐色砂質粘土～粘土からなるやや土壌化した盛土が見られたが、これは後述する**23号主体部**の墓壙上に置かれた高杯が盛土で埋められたような状態で出土したことからも窺えるように墳丘墓での最終埋葬が終わった後、墳丘頂部の土饅頭を均した際に形成されたものと思われた(註２)。

Ｙ１号墳丘墓の埋葬面である３期の盛土面には埋葬が行われる度に主体部の上に土饅頭状の高まりが形成され、最後の埋葬が終わった時点での墳丘頂部の平坦面には23個の土饅頭が並んでいた可能性がある。そして最後の埋葬が終わった後、各土饅頭を平坦に均したことを**３・５・９・21・23号主体部**の墓壙上で埋め戻されていた供献土器から推察しえた。

Ｙ１号墳丘墓では**20号主体部**上で幅約15㎝、長さ40㎝、厚さが１㎝前後の焼けて炭化した板材が倒れた状態で検出されたほか、**東周溝**内から同様な板材が複数枚採集された。これらの板材は形状や出土状態からみて、本来は墓標として主体部の上に立てられていた可能性が高く、**東周溝**内から出土したものについては墳丘頂部の土饅頭を均した際に投棄されたものと考えられる。なお、盛土内から凸基有茎式打製石鏃・磨製石庖丁の残欠・鉄鑿・弥生土器片などが出土したが、これらは墳丘構築時に第８層に含まれていたものが混入したものと考える(図10、図版45)。

５は長さ10.3㎝以上、頭部の幅1.1㎝、器体中程の厚さ0.6㎝の断面が長方形の鉄製鑿である。器体の中程以下を欠損しており、頭部に敲打痕がある。

６は長さ4.4㎝、幅1.9㎝、厚さ0.6㎝の尖端および基部を欠損したサヌカイト製の凸基有茎式打製石鏃である。表裏面とも縁辺部からていねいな細部調整をしている。

７は長さ4.3㎝、幅6.2㎝、厚さ0.7㎝の千枚岩製の磨製石庖丁で、器体の中央部で割れている。紐孔は２孔あり、両面から穿孔している。刃部

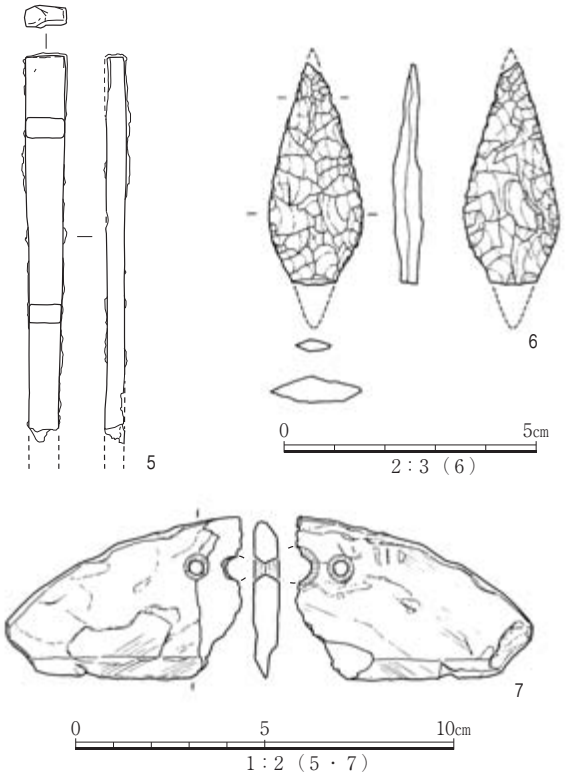


図10　Ｙ１号墳丘墓墳丘盛土内出土遺物実測図

は両刃で、使用痕が見られる。背の一部には手ずれ痕があるほか、表面は風化が進んでいる。以上の遺物の時期は、打製石鏃および磨製石庖丁は形態や大きさからみて、弥生時代中期後葉に属するものと思われる。鉄鑿は類例が少ないものの弥生時代中期後葉に属するものが亀井遺跡ほかから出土していることから、本資料についても同時期と考えて問題なさそうである[大阪文化財センター1980、東大阪市文化財協会1982]。

２)周堤ほか

一方、墳丘の南端部から**南周溝**内にかけて掘込み整形とみられる第10層の偽礫を含む第９層主体の盛土を確認したほか、**北周溝**の北側および**東周溝**の東側掘形外には幅1.2m、高さ0.5～1.4mの第8a・９層の偽礫からなる低い**周堤**があった(図４・７・８)。東側の**周堤**は黒色シルトの偽礫を含む暗灰色砂質シルトで築造されており、北側の**周堤**の大半は調査範囲外のため、周溝内底面より一段高く続く法面から北側に延びるわずかな平坦面以外は明らかにしえなかった。なお、墳丘の北斜面の基底部の近くには樹齢が約47年のヤナギの切り株があり(原色図版３、図版３)、幹が周溝内の大半を埋める第７層の暗褐色シルト質粘土～シルト、灰色細粒砂などが堆積する直前に鉄斧で伐採されていた(図９)。**Y1号墳丘墓**のヤナギは自生したもののようであり、墳丘墓が築造されたあとで生えていたことは疑いなく、これが切り倒された時期は**北周溝**内の地層の堆積状況からみて墳丘墓の埋葬が終わる頃であった可能性が高い。つまり、墳丘墓は築造されてからヤナギが伐採される47年後にはその機能を終えていた可能性がある。これは後述する墳丘墓の主体部の墓壙をはじめ、周溝内から出土した弥生土器の所属型式から推定した年代観(BC60年頃)とも大きな齟齬はないことから、墳丘墓の機能時の年代を推定する際の根拠の１つになろう。

３)周溝および出土遺物

ここでは南北中央セクションの西壁地層断面図を基に各周溝の埋土の堆積状況ならびに遺物の出土状況について**東周溝**から順に報告する(図11～31・原色図版15、図版31～45)。

東周溝の幅は墳丘の基底部から周溝の東掘形までの幅が５m前後で、深さは旧表土面から0.6～0.8mあった。周溝内には下から水成層である第8a′層の暗灰色～暗オリーブ灰色シルト質粘土・シルト質細粒砂が層厚30～40㎝で堆積しており、この上に第７層の暗褐色シルト質粘土～シルト・暗緑灰色砂質粘土・浅黄色中粒～粗粒砂・暗オリーブ灰色シルト混り細礫質細粒砂・黄褐色細礫質中粒砂・暗緑灰色細粒砂質粘土などの水成層が堆積していた(図９)。このうち第8a′層は緩やかな堆積環境下にあったようで、落葉広葉樹の葉や小枝、植物遺体の薄層を挟んでおり、本層に埋没するような状態で弥生土器や木製品、石製品などが数箇所からまとまって投棄されたような状況で出土した(図11・26、原色図版６、図版10～12)。

東周溝では墳丘の東北隅に近い場所から弥生土器24・27～29が、墳丘の中央部の東基底部に沿った位置を中心に弥生土器８・９・11・13・14・16～22・26、これらからやや東に離れた場所から弥生土器10・12・15が出土しており、木製品は東北コーナーに近い場所から88・90が、これの東側で89が、

東側周提の近くから99が出土したほか、サカキの枝をはじめ、コウヤマキのチップ・薄板・墓標の可能性のあるコウヤマキの板などが出土しており、土器と木製品が双方とも混在して投棄されたような状態であった。ただし、墳丘の東南隅に近い場所では若干の弥生土器の破片が見られた以外はコウヤマキのチップや薄板、常緑樹とみられる小枝が出土したのみであった(図27～30、図版41～45)。

ｉ)弥生土器

東周溝では図11に示すように墳丘の東北隅の近くで甕Ａ類23～25・27、甕Ｄ類29、これから墳丘墓の墳丘基底に沿うように甕Ａ類28、広口壺Ａ類22、器台11、高杯脚部９・広口壺Ｂ類13、高杯Ａ類杯部８・大型鉢14が２ｍないし3.5m間隔で出土した。また、墳丘が段築状にテラス面となるTP＋3.5mのコンターラインの近くから細頸壺17・18が出土したほか、**東周溝**のほぼ中央に当る場所から細頸壺16・高杯Ｂ類杯部19・広口壺Ｂ類20・大型甕Ｄ類21・甕Ａ類26がまとまって出土した。さらに、**東周溝**の東南部で確認された**周堤**の近くから水差し10・大型細頸壺15が出土した。ここでは墳丘の東北隅の近くから出土した弥生土器から順に出土地点ごとに報告する(図12～15、図版31～33・38)。

まず、本報告で記述する弥生土器の器形分類について簡単に述べておく。**Ｙ１号墳丘墓**では広口壺・細頸壺・器台・台付無頸壺・水差し・高杯・鉢・台付鉢・甕などが出土した。このうち、広口壺・高杯・甕についてそれぞれ複数の型式に分類した。

広口壺は口縁部の形態から、口縁部を垂下した広口壺Ａ類、短く筒状の頸部から口縁部が水平に開き、口縁端部を上下にわずかに肥厚した広口壺Ｂ類、短く水平に開いた口縁部に粘土紐を足して口縁端部を上下に拡張した広口壺Ｃ類に分類した。高杯は口縁部を垂下した高杯Ａ類、杯体部から口縁部が立つ高杯Ｂ類、杯体部が椀状を呈する高杯Ｃ類に分類した。甕は口縁部を水平あるいは水平近く折り曲げた甕Ａ類、外反した口縁部の端部を上下に肥厚する甕Ｂ類、口縁部が「く」の字状に外反した甕Ｃ類、口縁部を垂下した甕Ｄ類、外反した口縁部に粘土紐を足して端部を上下に拡張した甕Ｅ類に分類した。

23～25は体部の中程以下を欠損した甕Ａ類で、口縁部が水平に開く23・25と、一旦開いた口縁部の端部をつまみ上げた24がある。器面調整は外面が右あるいは左上がりのヘラミガキで、内面は23が横方向のヘラミガキ、24はユビオサエ、25は左上がりのハケである。23・25は胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内(註３)の土器で、にぶい橙色を呈する24は、胎土中に長石・チャート粒を含むことから沖積低地部産の土器の可能性がある。27は口径16.9㎝、器高25.4㎝の最大径が体部の中程にある甕Ａ類である。口縁部は直立する頸部から水平に折り曲げており、端部は丸い。体部の調整は外面が右上がりの粗いハケのあと、縦方向の３段のヘラミガキを施しており、内面は上半が左上がりの粗いハケで、下半は縦方向のユビナデである。底部のほぼ中央を穿孔している。灰黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英・シャモット粒を含む河内の土器である。29は口径40.4㎝、器高43.0㎝以上の大型の甕Ｄ類で、体部の下半以下を打ち欠いている。口縁部は一旦短く開いたあと、下端に断面三角形の粘土紐を足して垂下しており、外端面に点状の刺突文が巡る。口頸部の内外面に強いヨコナデを加えている。体部の調整は、外面が下方から上方のヘラミガキで、内面は左上がりの粗いハケである。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。

28は口径16.4㎝、器高28.0㎝、口縁部を水平近く折り曲げた甕Ａ類である。口縁端部をわずかに肥

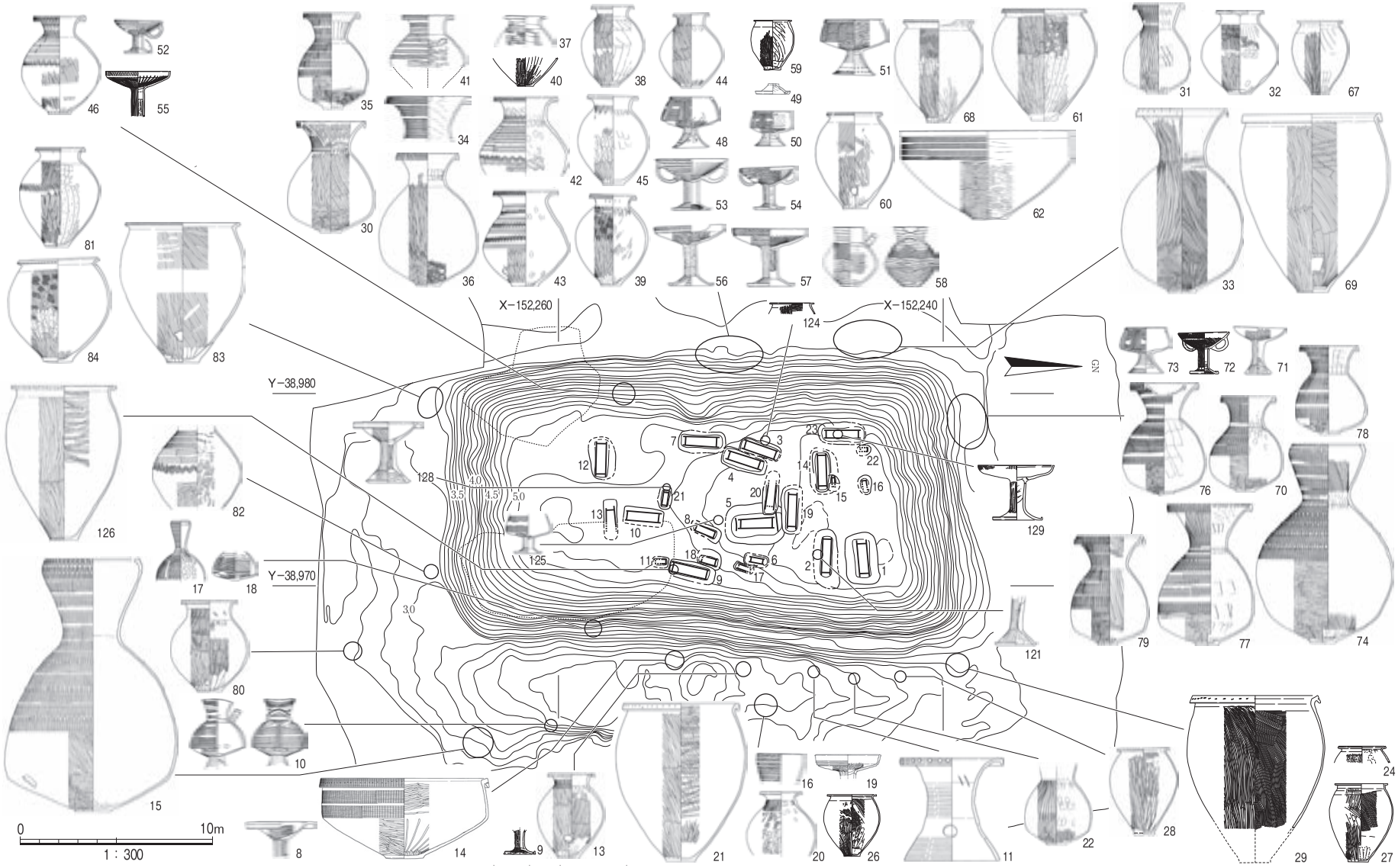


図11　Ｙ１号墳丘墓遺物出土状況

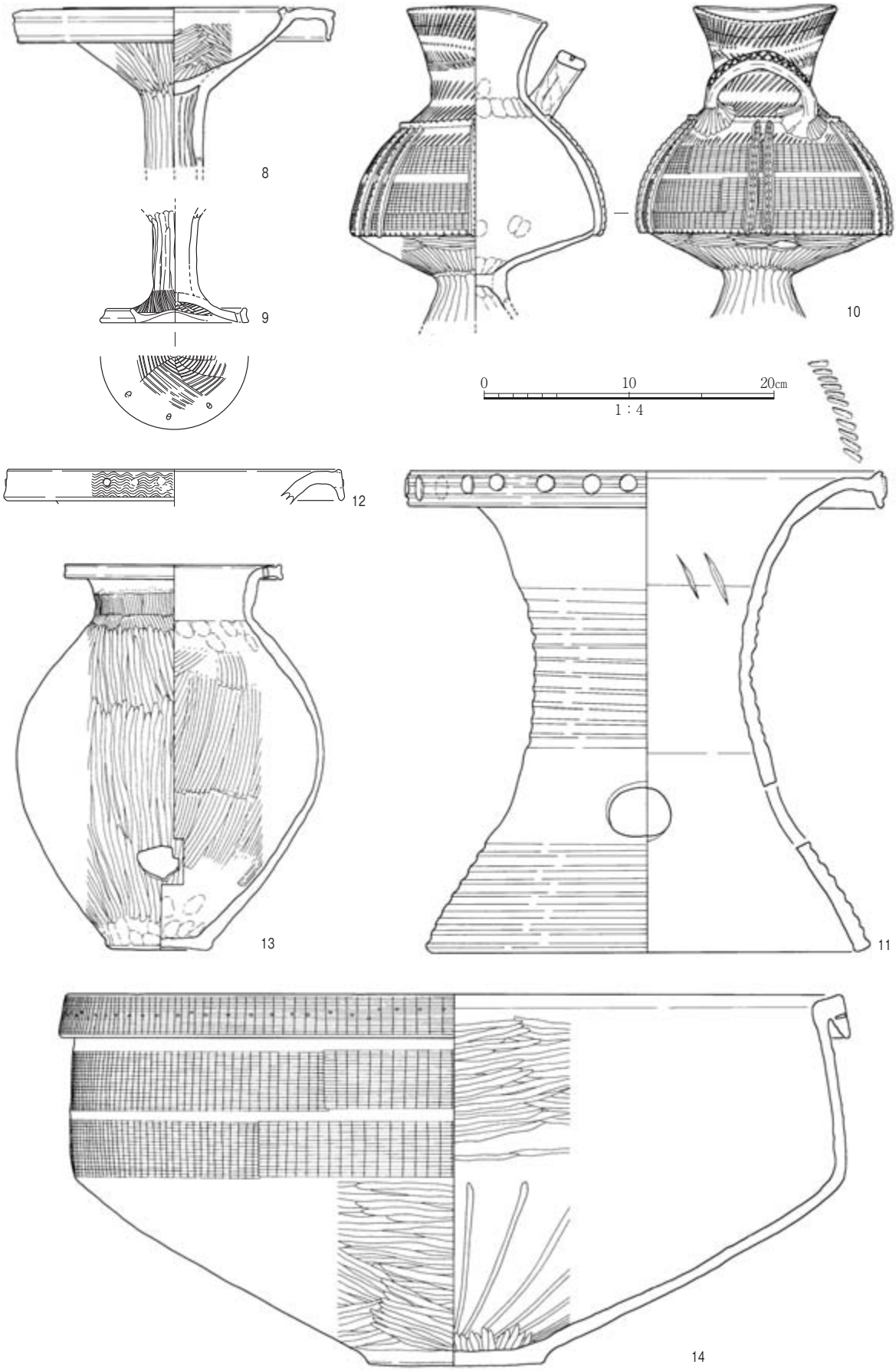


図12　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図（１）

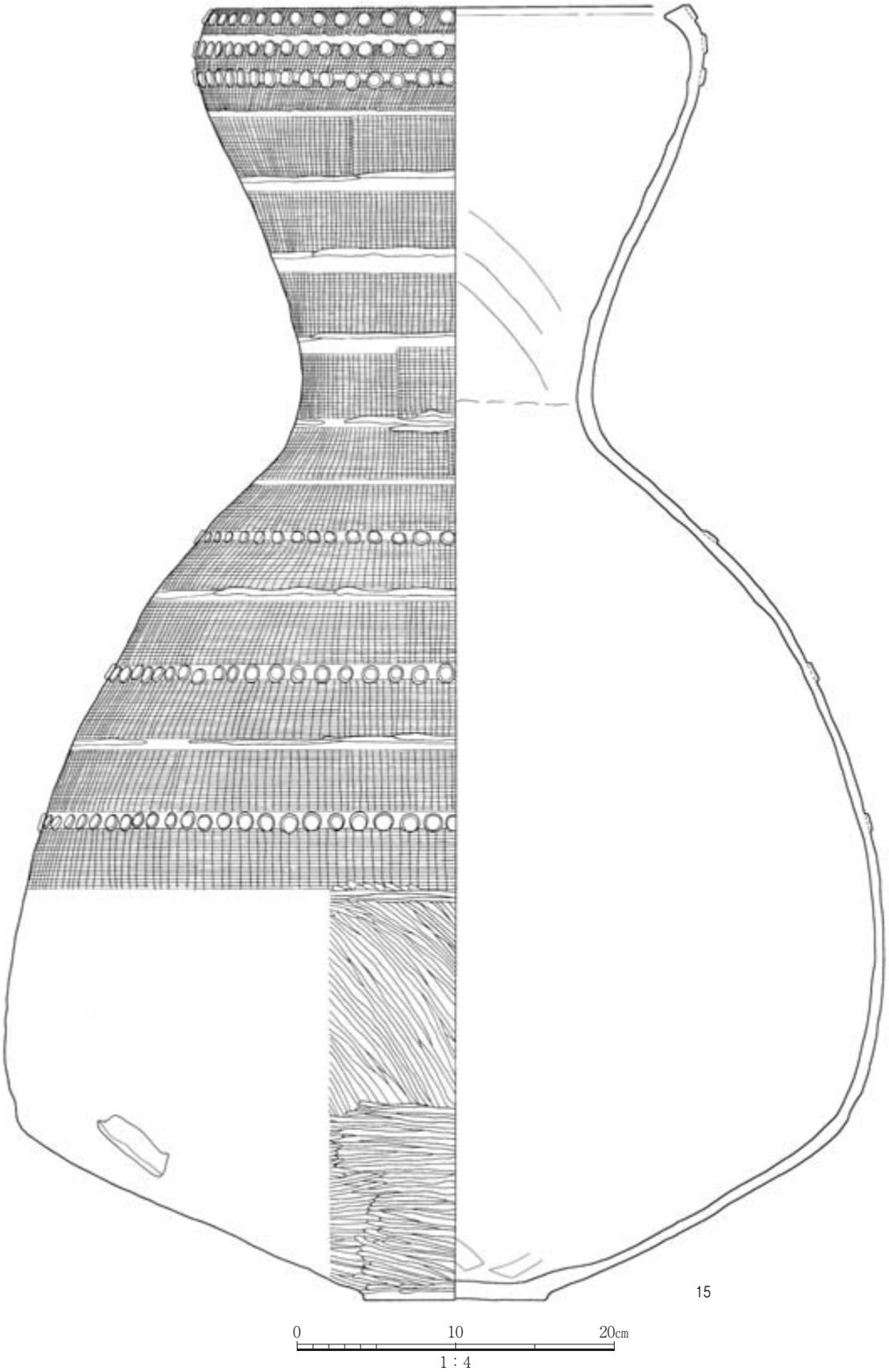


図13　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図（２）

厚しており、器面調整は外面が縦方向の密なヘラミガキで、内面は左上がりのハケのあと、右上がりのヘラミガキを疎らに施している。頸部の内面は横方向のヘラミガキを密に施している。胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。

22は口頸部の大半を打ち欠いた広口壺Ａ類とみられるものである。最大径は体部の下半にあり、底部の近くに外面から内面に向かって２箇所の穿孔がある。体部の調整は、外面が横方向の断続的なヘラミガキのあと、縦方向のヘラミガキを加えており、内面は底部が左上がりのハケで、体部はユビオサエおよびナデで整えている。底部の裏面にも横方向のヘラミガキのあと、円弧を描くヘラミガキを加えている。色調･胎土は甕Ａ類28と変わらない。この土器は頸部を斜め上方にして､内部が空洞になった状態で出土した。内底面のほぼ中央でモクズガニが息絶えており、球形になる体部の上半近くには多数のカニの爪跡があった。

11は口径32.3㎝、器高33.1㎝の大型の器台である。口縁部は筒部から大きく開き、端部を上下に拡張する。脚裾部は筒部から｢ハ｣の字状に開く。口縁部の外端面に細い凹線文を施したあと、円形浮文を貼り付けている。筒部および脚裾部には太い凹線文を施すが、筒部の凹線文は内外の凹みが対応することから、これは、指先で内外面を挟むようにして回転させながら下から上に連続して施したものと解される。そして、筒部の上端まで凹線文を施したのち、口頸部を成形したようである。筒部内面の上端にヘラ記号が見られるほか、口縁部の内面に刺突文が巡り、筒部の下端の４方向に径４～4.5㎝の円形スカシ孔を穿つ。浅黄橙色を呈し、胎土中に長石・雲母・チャート・シャモット粒を含む。

高杯Ａ類９、広口壺Ｂ類13は器台11の南側から出土した。９は杯部を意図的に欠損した高杯Ａ類の脚部で、脚裾部も打ち欠いている。器面調整は外面がハケのあと、縦方向のヘラミガキで、内面は柱状部に下から粘土円板で蓋をしたあと、ヘラミガキを施している。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石･雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。13は口縁部が無花果形の体部から直立する短い頸部を経て水平に開く広口壺Ｂ類である。口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、頸部から体部の器面調整は外面が縦方向のハケのあと、同方向のヘラミガキで、内面は右上がりのハケののち、底部ならびに頸部をユビオサエで整えている。底部の裏面はヘラケズリのあとナデを加えて平滑にしている。器体の外面に煤が付着しており、煮沸に使われている。体部の下半を穿孔している。灰黄色を呈し、胎土中に雲母・チャート・長石粒を含む。

高杯Ａ類８、大型鉢14は、墳丘東部基底のほぼ中央部から出土した。８は脚部の大半を欠損した高杯Ａ類で、垂下した口縁部の外端面には、上端と下端に凹線文が巡る。口縁部内面の突起は低い。杯部の調整は、外面が縦方向のヘラミガキで、内面は左右に交差するヘラミガキである。柱状部の調整は外面は縦方向のヘラミガキであるが､内面にはシボリ目が残る。浅黄色を呈し､胎土中に雲母･チャート粒を含む。14は、口径53.3㎝、器高25.7㎝で、体部の中程が張りのある大型鉢である。口縁部は頸部の上端に幅広い粘土紐を足して折り曲げたように成形しており、一見段状口縁部のようである。口縁部の外端面には櫛描簾状文のあと、点状の刺突文を施している。体部外面の上半には２帯の幅広い櫛描簾状文を施しており、下半は横方向の交差するヘラミガキを密に施している。体部の内面の調整は上半が横方向のヘラミガキで、中程以下はヨコナデののち、縦方向のヘラミガキを疎らに施してお

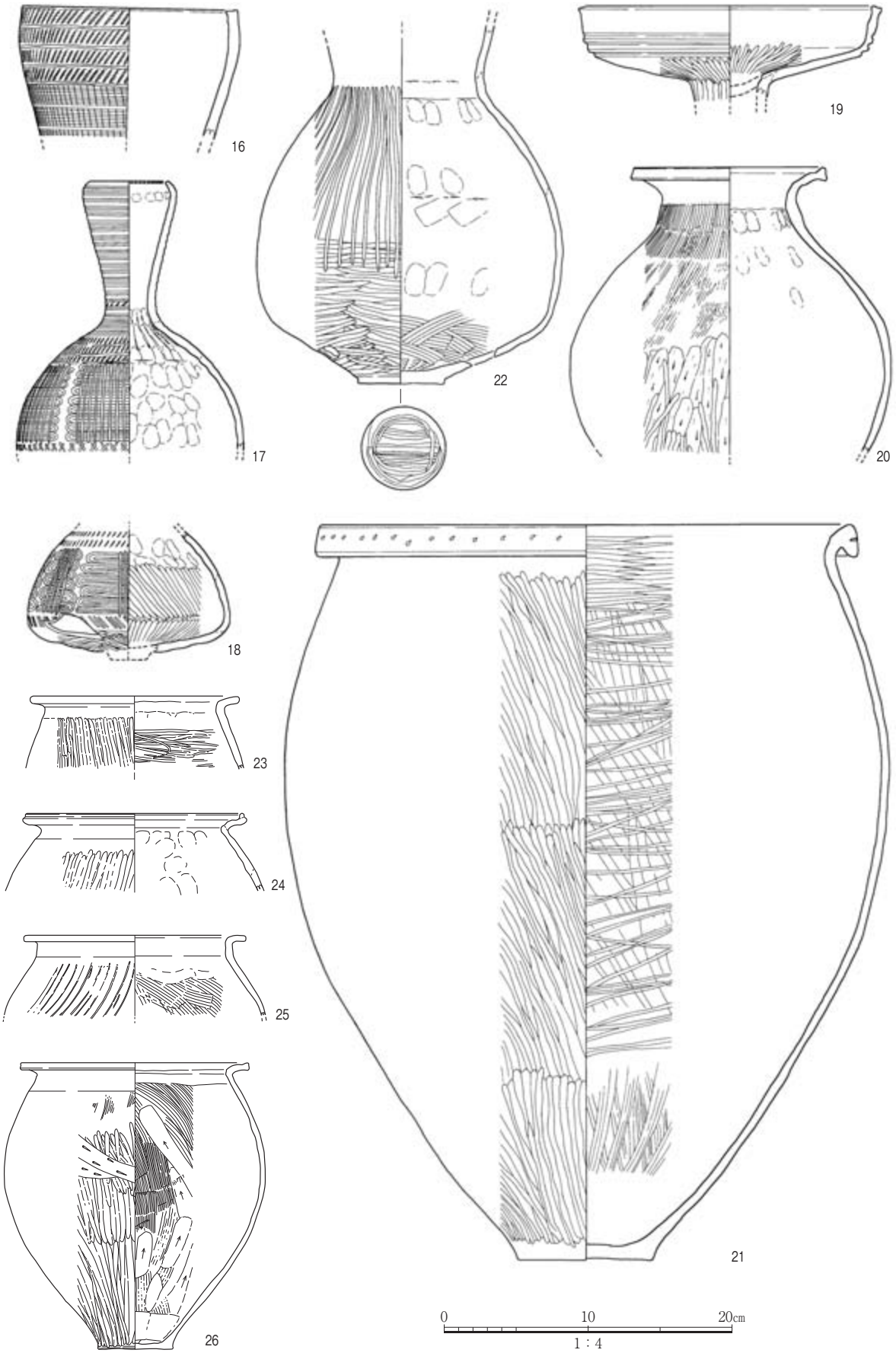


図14　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図（３）

り、底部も内外面に横方向のヘラミガキを加えて平滑に仕上げている。にぶい黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。

細頸壺17・18は墳丘東側の墳丘が段築状にテラス面となるTP＋3.5mのコンターラインの近くから出土した。前者は体部の中程以下を、後者は口頸部および底部の中程を打ち欠いている。細頸壺17の口縁部は、体部から外上方に直線的に立つ頸部の上端から内側に屈曲しており、上端面にキザミメを施す。口頸部の外面は２条１単位の原体による櫛描直線文を強弱を入れながら交互に施しており、球形に近い体部の外面にも櫛描刺突文を３帯、次いで３条１単位の原体による横型の流水文を上から下に向かって描いたあと、縦方向のヘラミガキを等間隔に加えている。このあと細いヘラによる斜格子文を施している。器体の内面は口頸部をヨコナデ調整で、体部はユビオサエで整えている。口縁部の内面にはユビオサエが、頸部下端から体部の内面はユビナデやユビオサエで整えている。18は細頸壺の体部とみられるもので、外面を櫛描刺突文、３条１単位の原体による横型の櫛描流水文および４条１単位の縦方向のヘラミガキ、ヘラ状工具による斜線文などで加飾しており、器体の内外面もヘラミガキを密に施して平滑に仕上げている。体部の下半に穿孔がある。17・18はともに細頸壺の優品であろう。灰褐色～にぶい黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。

細頸壺16・高杯B類19・広口壺B類20・甕D類21・甕A類26は、**東周溝**のほぼ中央部で出土した。

16は大型の細頸壺の口頸部の破片である。器表面に上から４帯の櫛描刺突文を施したあと、文様間に横方向のヘラミガキ状の線を引く。これの下に３帯以上の櫛描簾状文を施したあと、文様間に横方向のヘラミガキ状の線を入れる。黄灰色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。なお、細頸壺のほかの部位については、**東周溝**はもとより墳丘墓の四周の周溝を探索したが確認されなかった。周溝内から出土した同様な土器については、墳丘墓にいたるまでに打ち壊されて別の場所に破棄されたものと考えられる。

19は脚部ならびに口縁部の一部を打ち欠かれた口径20.0㎝の高杯B類で、口縁部は浅い杯体部からわずかに開いて立つ。口縁部の上端面が浅く凹むほか、口縁部の下端には３条の凹線文が巡る。器体の調整は内外面とも縦方向のヘラミガキである。浅黄橙色を呈し、胎土中に長石・石英・チャート・雲母・シャモット粒を含む。

20は口径13.0㎝、器高19.9㎝以上の広口壺B類で、体部の下半以下を打ち欠いている。口縁部はわずかに内傾して立つ短い頸部から大きく開き、内外面をヨコナデ調整している。体部の調整は外面が右上がりのハケのあと、上方から下方へのヘラケズリおよび縦方向のヘラミガキで、内面はユビオサエおよびナデである。浅黄橙色～灰黄色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。

21は口径36.8㎝、器高51.0㎝の、最大径が体部の中程にある大型の甕D類である。緩やかに外反する口縁部から断面三角形の端部が垂下しており、これの外端面に点状の刺突文が巡る。体部の調整は外面が下から上に向かって３段のヘラミガキを施しており、内面は粗い左右のハケのあと、横方向の疎らなヘラミガキを加え、頸部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキを密に施す。底部の裏面も横方向のヘラミガキで平滑に整えている。暗オリーブ灰色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。26は口径15.7㎝、器高19.9㎝の甕A類である。口縁部は最大径が体部の中程に

ある器体から水平に開いており、口縁端部をわずかに肥厚している。口縁部および頸部の内外面に強いヨコナデ調整を加えている。体部の調整は外面が縦方向のハケのあと、同方向の断続的なヘラミガキならびに左上がりのヘラケズリを疎らに施し、内面は左上がりのハケのあと、右から左上がりの粗いナデを施している。黄橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。

10は脚部の中程以下を打ち欠いた脚台付きの水差しで、底部にも穿孔が１箇所ある。脚台部には顕著な打ち欠き痕がある。直口の口縁部は、張りのある体部下半から内傾しながら巾着袋状に狭まる頸部を経て外上方に開く。体部の上端近くに断面長方形の把手が付く。口頸部から体部の下半にかけて櫛描簾状文状の刺突文、ヘラによる刺突文、櫛描簾状文状の刺突文、櫛描簾状文２帯、頸部下から体部の下端に向かって３本一組のキザミメを加えた断面三角形の棒状浮文を５方向に貼り付けている。水差しの底部から脚台にかけての外面の調整は横方向から縦方向のヘラミガキである。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。

12は口縁端部を垂下した広口壺Ａ類の口縁部片である。口縁部の外端面に櫛描波状文を施したあと、小型の円形浮文を貼付けている。

15は口径29.7㎝、器高81.7㎝の大型の細頸壺である。口縁部は外上方に開きながら立つ筒状の頸部から内側に屈曲しており、上端面はヨコナデによってわずかに凹む。口縁部から最大径が下方にある体部の中程にかけて14帯の幅2.0～3.4㎝の櫛描簾状文を時計回りに施したあと、口縁部および体部に３段の円形浮文を貼り付けている。器体の調整は、体部下半の外面が左上がりから横方向のヘラミガキで、内面は同方向のナデである。底部の裏面も横方向から円弧を描くヘラミガキで平滑に整えている。体部の下端近くに外面から内面に向けて穿孔が１箇所ある。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。

広口壺Ａ類31・33、広口壺Ｂ類32、甕Ａ類67、甕Ｄ類69は**西周溝**の北部から出土した(図11・16・21、原色図版５、図版８・34・38)。

31は口径15.5㎝、器高28.8㎝で、最大径が無花果形を呈する体部の下方にある広口壺Ａ類である。口縁部は外上方に直線的に開く頸部からわずかに開いたのち、粘土紐を足して垂下している。口縁部の外端面から体部の上端にかけて櫛描簾状文を時計回りに施している。器体の調整は頸部の内面が左上がりのナデ、体部は外面を縦方向から横方向のヘラミガキを密に施しており、内面は時計回りのナデである。底部の裏面は２方向のヘラミガキで平滑に整えている。底部に穿孔が１箇所ある。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む、河内の土器である。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されたものである。32は口径15.0㎝、器高26.7㎝で、最大径が体部の中程にある広口壺Ｂ類である。一部を打ち欠く口縁部は短い筒状の頸部から外反しており、端部を上下に肥厚している。口頸部の調整は内外面ともにヨコナデで、体部は外面が縦方向のハケのあと、中程以下を縦方向のヘラミガキで、内面は下半を横方向のナデ、上半を縦方向のハケののち、横方向のヘラケズリおよび縦方向のナデで調整している。灰黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英を含む。33は口径28.2㎝、器高59.0㎝の広口壺Ａ類で、口縁部は一旦筒状に立ったあと、大きく開く頸部の上端に粘土紐を足して垂下しており、外端面に点状の刺突文を施している。口縁部の内外面に強いヨコ

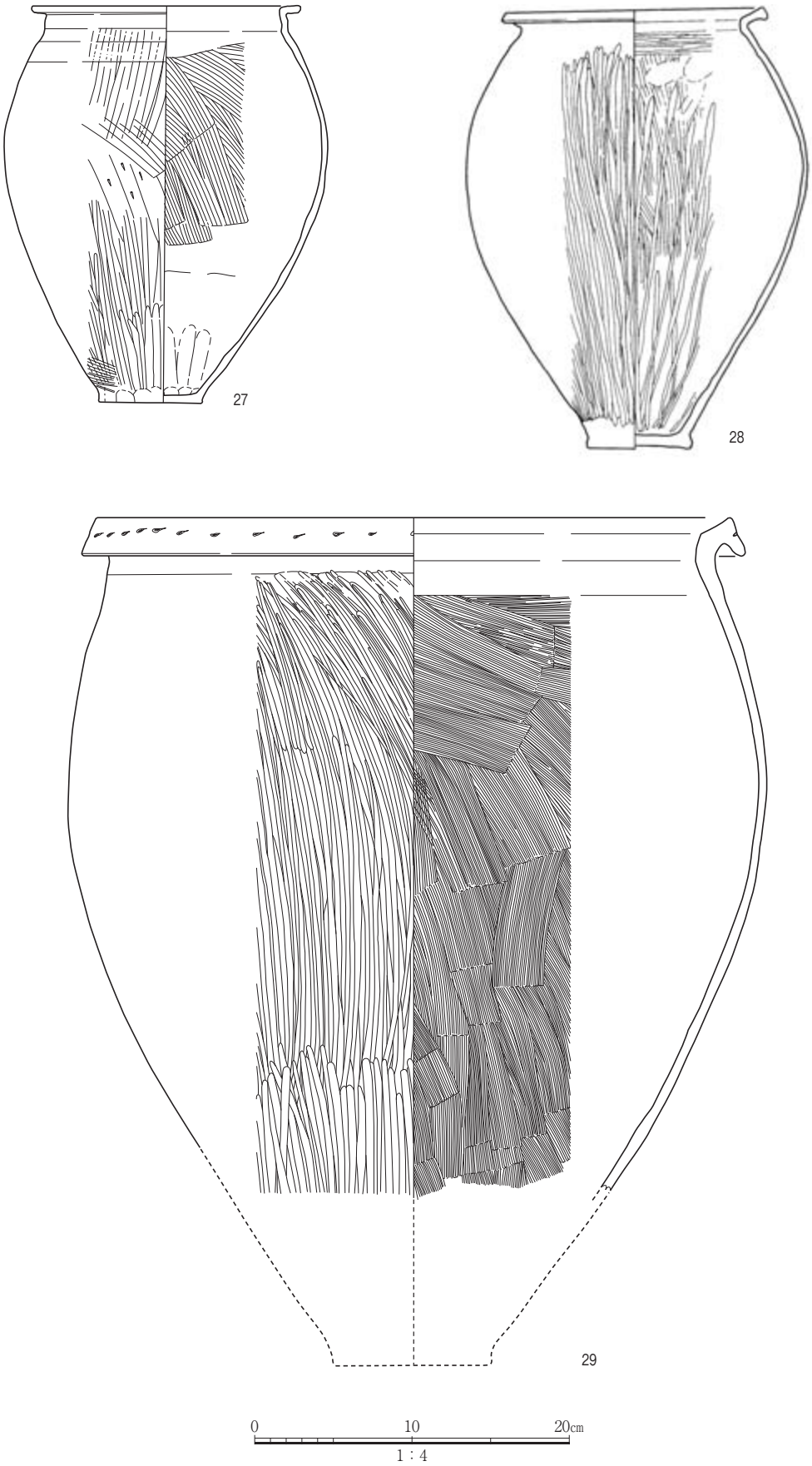


図15　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土遺物実測図（４）

ナデ調整を加えており、下端を丸くおさめる。頸部の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は下半部が横方向のヘラミガキ、上半部はヨコナデおよび左上がりのナデである。体部は無花果形を呈するが、最大径が中程にあって、下端で内に窄まり底部にいたる。体部の調整は外面が横から縦方向のヘラミガキ、内面は底部から体部の上端にいたる左上がりのハケである。底部の裏面は同方向のヘラミガキで平滑に整えている。口縁部および体部の上半を意図的に打ち欠いている。色調・胎土は広口壺Ａ類31と変わらない、河内の土器である。

67は口径14.2㎝、器高23.4㎝の甕Ａ類で、口縁部および体部を打ち欠いている。口縁部は短く立つ頸部から水平に屈曲しており、端部を丸くおさめている。器体の調整は口頸部の内外面はヨコナデで、最大径が中程にある寸高の体部は外面が縦方向のストロークの長いヘラミガキで、内面は下半がユビナデで、上半は板状工具によるナデである。底部の裏面は縦方向のヘラミガキのあと、外縁に弧状のヘラミガキを加えている。灰黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。69は口径44.0㎝、器高57.6㎝の大型の甕Ｄ類である。口縁部は頸部から一旦短く開いたのち、粘土紐を足して垂下しており、内外面に強いヨコナデ調整を加えている。最大径が中程にある体部の調整は、器体を倒立させたのち、口縁部から底部に向けて縦方向のヘラミガキを２回に分けて施している。内面は底部から口縁部に向けて左上がりの粗いハケを３回に分けて施したあと、上半に右上がりのヘラミガキを疎らに施している。底部の裏面は同方向のヘラミガキを加えて平滑に整えている。底部の外面に穿孔が１箇所ある。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使われたものである。

広口壺Ａ類30・34～36、広口壺Ｂ類37～39・44・45、壺底部40、広口壺Ｃ類41～43、蓋47・49、台付無頸壺48・50・51、台付鉢53・54、高杯Ｂ類56・57、水差し58、甕Ａ類59・66、甕Ｂ類60・61、甕Ｃ類68、甕63～65、鉢62は**西周溝**中央の墳丘基底部の近くから、まとまって出土した土器である。以下、30から器形ごとに報告する（図11・16～21、図版34～38）。

30は口径21.8㎝、器高35.9㎝の広口壺Ａ類で、緩やかに開く頸部の上端に粘土紐を足して口縁部を垂下しており、外端面から頸部の下端にかけて櫛描簾状文を時計回りに施している。口縁部の外端面には簾状文を施したあと、点状の刺突文を加えている。体部は最大径が下端近くにある無花果状を呈し、調整は外面がストロークの長い縦方向のヘラミガキのあと、横方向の孤状のヘラミガキを断続的に施しており、内面は左上がりの粗いハケのあと、外面と同じ位置に横方向のヘラミガキを加えている。内底面にはクモの巣状のハケメが残る。口頸部の内面は左上がりのハケのあと、頸部下端をユビオサエで整えるほか、この上を２条の波打つ条線が巡る。口縁部を打ち欠くほか、体部の外面に煤が付着することから、煮炊きに使われたものである。色調はにぶい橙色～灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母粒を多く含む河内の土器である。34は緩やかに開いた頸部の上端に粘土紐を足して口縁部を垂下させた広口壺Ａ類で、頸部下半以下を意図的に打ち欠いている。口縁部の外端面および頸部の外面に時計回りに櫛描簾状文を施しており、口頸部の内面は左上がりのナデのあと、櫛描文の原体を使って横方向にナデており、工具痕が見られる。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。35は口径17.7㎝、器高30.0㎝以上の広口壺Ａ類で、底部を打ち欠いている。口縁部は緩やかに開く頸部の上端に粘土紐を足して垂下している。体部の最大径は中程にあ

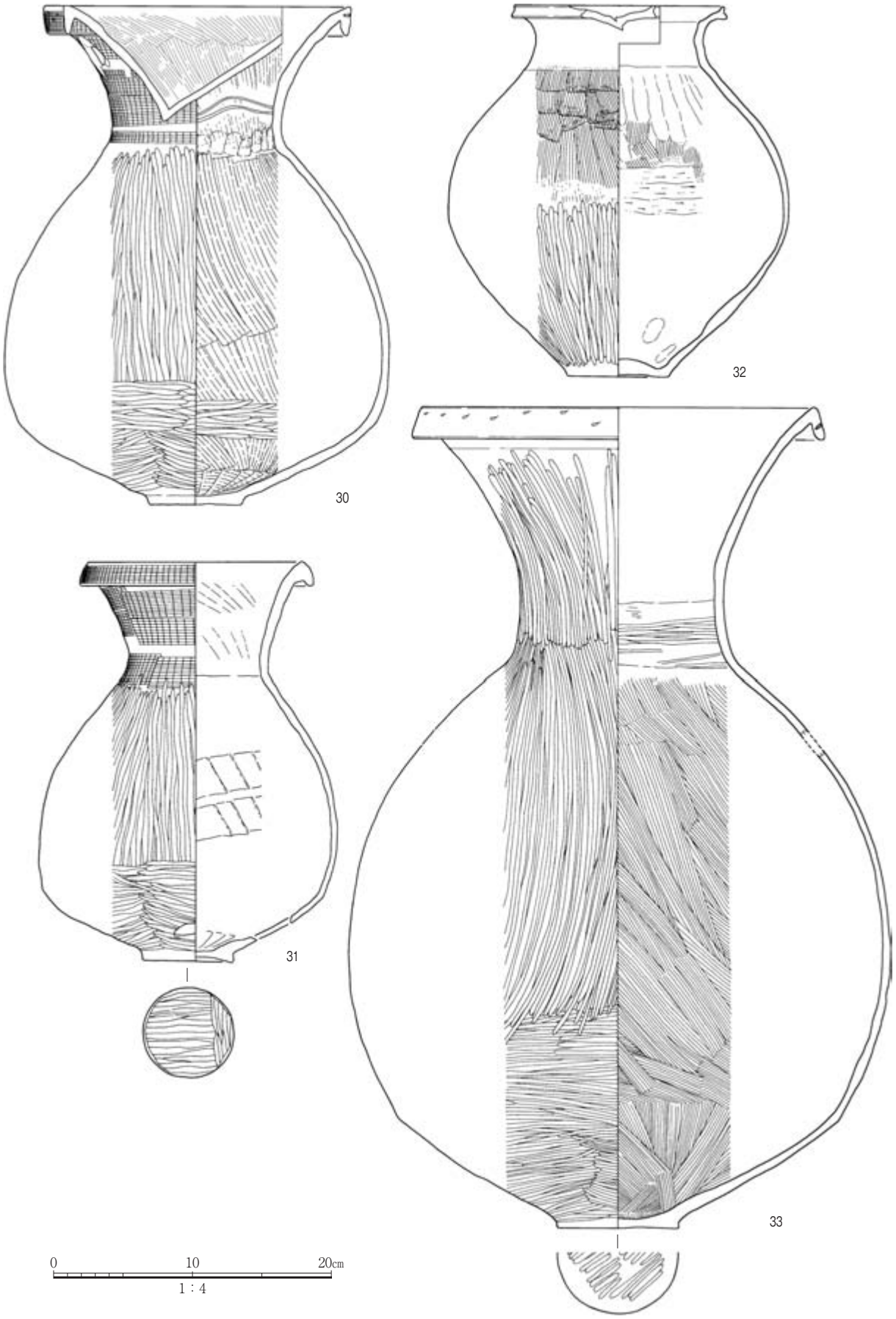


図16　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図（１）

り無花果形を呈するが、底部の近くで内側に大きく屈曲する。口縁部の外端面から体部の下半近くまで８帯の櫛描簾状文を施しており、施文方向は上から２・３帯目は逆時計回り、５～７帯目は時計回りである。体部の中程以下から底部にかけての調整は、外面が横から多角形方向のヘラミガキで、内面は左上がりのハケおよび横方向のヘラミガキを加えたのち、右上がりのナデである。頸部の内面は縦方向のユビナデで整えている。黄灰色を呈し、胎土は34と変わらない、河内の土器である。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されたものである。36は口径19.2㎝、器高42.7㎝の広口壺Ａ類で、口縁部は外上方に開く頸部の上端に粘土紐を足して垂下している。体部は無花果形を呈し、最大径は下半近くにある。口頸部内外面の上半に強いヨコナデを加えており、口縁部の外端面にはヨコナデによる直線文様の条線が残るほか、点状の刺突文を施している。体部は外面が横方向のあと縦方向のヘラミガキを施したのち、ヘラミガキの重なる位置に乱れた波状文状のヘラミガキを加えている。器体の内面は底部が右から左上がりのハケ、体部は下方から上方へのナデで、頸部下半の内面は横方向のナデおよびユビオサエで整えている。体部下端に穿孔が１箇所ある。褐色～明茶褐色を呈し、胎土は34と変わらない、河内の土器である。37は口径12.4㎝の広口壺B類で、体部の中程以下を打ち欠いている。口縁部は短い筒状の頸部から一旦緩やかに開いたのち、端部を上下に肥厚しており、外端面に浅い凹線が１条巡る。口縁部には２個一対の紐孔を４方向に穿つ。器体の調整は外面が平行タタキのあと、縦方向のハケで、内面は右上がりのハケのあと、左上がりのナデである。にぶい黄橙色を呈し、胎土中にチャート・雲母・長石・石英粒を含む。38は口径13.0㎝、器高25.9㎝の広口壺B類で、口縁部は短い筒状の頸部から大きく開いたのち、端部を上下に肥厚している。口縁部の内外面に強いヨコナデを加えており、口縁端部を丸くおさめている。最大径が中程にある体部の調整は、外面が縦方向のハケのあと、下半部に縦方向のナデを加えてから同方向のヘラミガキを足している。底部から体部内面の調整は、ユビオサエならびに右上がりから左上がりのナデである。器体の外面に煤が付着しており、煮炊きに使われたものである。にぶい黄橙色を呈し、胎土中にチャート・長石・雲母・石英粒を含む。39は口径14.4㎝、器高29.4㎝の広口壺B類で、口縁部に打ち欠きがある。口縁部は筒状の短い頸部から外上方に大きく開いたあと、上下端をわずかに拡張し、外端面に３条のにぶい凹線文を施している。頸部の中程に２個一対の紐孔を四方に穿つ。最大径が中程にある体部の調整は、外面が左上がりの平行タタキのあと、縦方向のハケならびに同方向のヘラミガキを加えている。体部内面の調整は、右上がりのハケのあと、同方向のナデである。底部の外面はヘラミガキのあと、縦方向のナデで、頸部ならびに底部の内面はユビオサエで整えている。灰黄色を呈し、胎土中に長石・石英・チャート粒を含む。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使われていたものである。40は底径4.9㎝の広口壺B類の可能性のある体部下半から底部にかけての破片である。器体の上半部を打ち欠いており、調整は外面が縦方向のハケのあと、同方向のヘラミガキ、内面は縦方向のハケのあと、同方向のナデである。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に雲母・長石・チャート粒を含む。41は口径15.9㎝、器高16.8㎝以上の広口壺C類で、体部の中程以下を打ち欠いている。口縁部は筒状の頸部から一旦水平に開いたあと、粘土紐を足して上下に拡張している。口縁部の外端面には４条の擬凹線文が巡る。最大径は扁球形に近い体部の中程にあり、中程以下を横方向のヘラミガキで調整している。体部内面の

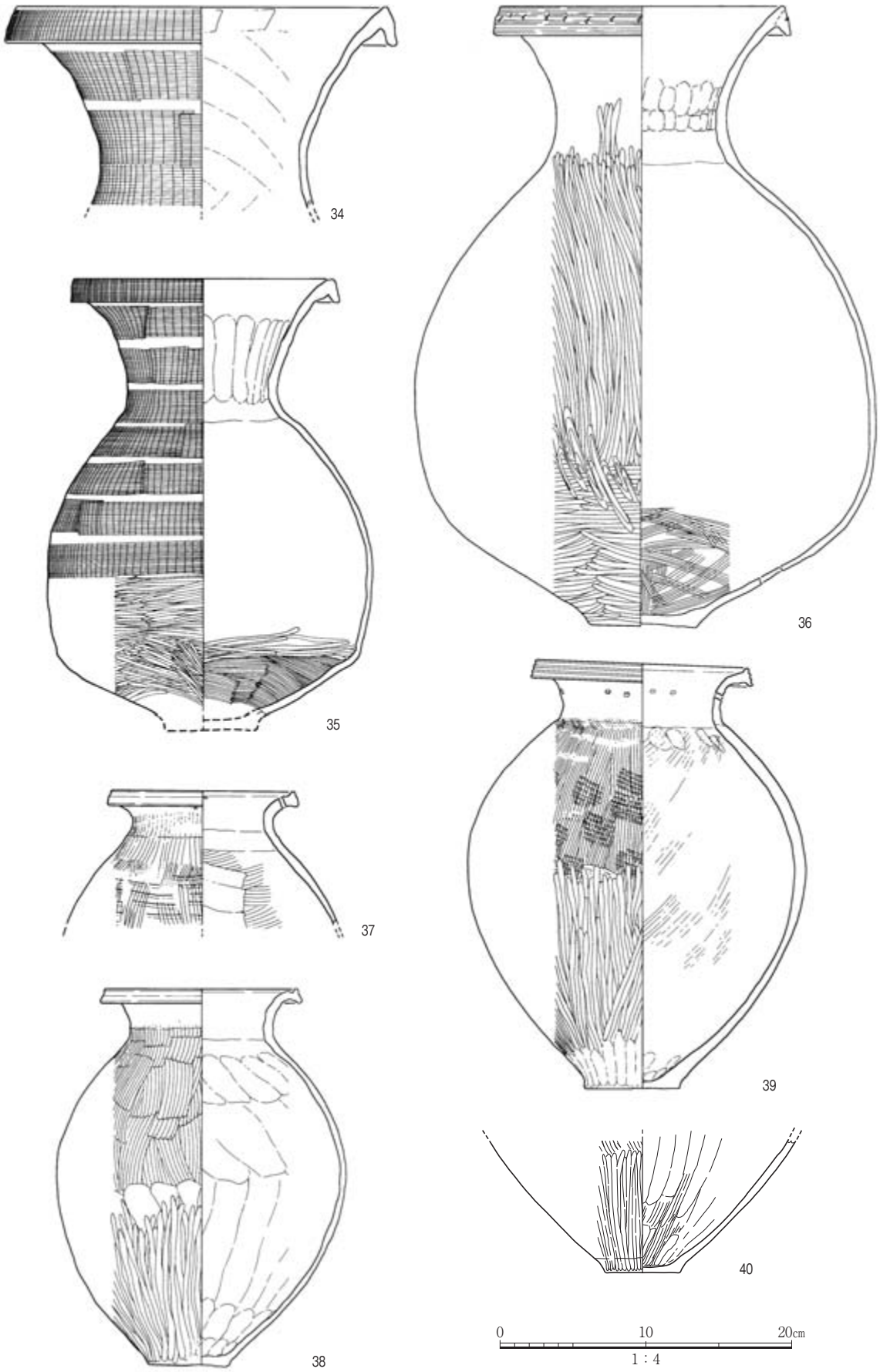


図17　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図（２）

調整は左上がりのハケである。頸部から体部の中程にかけて、櫛描波状文１帯、同直線文５帯、同波状文１帯を時計回りに施している。浅黄橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。42は口径20.1㎝、器高24.5㎝以上の広口壺C類で、体部の下半以下を打ち欠いている。口縁部は直立する頸部から一旦外上方に開いたのち、水平に屈曲し端部を上下に肥厚している。最大径は球形に近い体部の中程にある。口縁部の外端面に櫛描波状文、同内面に扇形文、頸部の下端から体部の中程にかけて櫛描波状文１帯、同直線文９帯、同波状文１帯を時計回りに施している。器体の調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、頸部の外面は左上がりのヘラケズリ、同内面はユビオサエで整えており、体部の外面は櫛描波状文を施文したのち、横方向のヘラミガキを施している。体部の内面は左上がりのハケのあと、ユビオサエで整えている。淡黄橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。43は口径20.5㎝、器高30.7㎝の広口壺C類である。口縁部は太く短い頸部から一旦水平に開いたのち、粘土紐を足して端部を上下に拡張している。最大径は球形に近い体部の下半にあり、底部の近くを１箇所穿孔している。底部裏面の器壁は薄い。口縁部の外端面に櫛描波状文、頸部の下半から体部の中程にかけて櫛描直線文と同波状文を交互に３帯配している。口頸部から体部の調整は、外面が上半はヨコナデ、下半が横から縦方向のヘラミガキで、内面はユビオサエならびに横方向のナデである。底部は内外面とも横方向のナデおよびユビオサエで整えている。淡橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されたものである。44は口径11.1㎝、器高23.6㎝の広口壺B類である。口縁部は筒状の頸部から緩やかに開いたのち、同端部を上下に肥厚しており、口縁部の外端面の下端には浅い凹線文が巡る。最大径が中程にある体部の調整は、外面が左上がりのハケのあと、縦方向のヘラミガキで、内面はユビオサエおよびていねいなナデである。底部の内面には一部にヘラミガキ状のナデが見られる。口縁部および体部を打ち欠く。器体外面のほぼ全体に煤が付着しており、煮炊きに使われたものである。45は口径15.8㎝、器高28.6㎝の広口壺B類である。口縁部は短い筒状の頸部から一旦水平に開いたのち、上方に肥厚している。口縁部の内外面の調整はヨコナデであるが、頸部の内面にはユビオサエが残る。最大径は体部の中程にあり、調整は外面が縦方向のハケのあと、同方向のヘラケズリを施したのち、下半部に縦方向のヘラミガキを加えている。体部内面の調整はヘラ状工具によるナデである。体部の下半を打ち欠いている。淡黄橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート粒を含む。口頸部から体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されたものである。

47は口径13.8㎝、器高3.5㎝の蓋である。体部は中央が浅く凹む器体中央のつまみから口縁部に向かって一旦緩やかに開いてから水平に屈曲し、口縁部を上方に拡張している。口縁部の近くに２個一対の紐孔を２方向に穿つ。器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデで、体部の外面は縦方向のヘラミガキのあと、つまみに横方のヘラミガキを加えており、内面は条線が残る板状工具によるナデのあと、中央部をナデる。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・石英・長石粒を含む河内の土器である。口縁部から体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されたものである。47は出土位置や大きさなどからみて、後述する48と組み合うものと思われる。48は口径13.4㎝、器高16.5㎝の台付無頸壺で、径10.4㎝の脚台部を打ち欠くほか、体部下半を穿孔している。内傾する体部の上端に粘土紐を足して

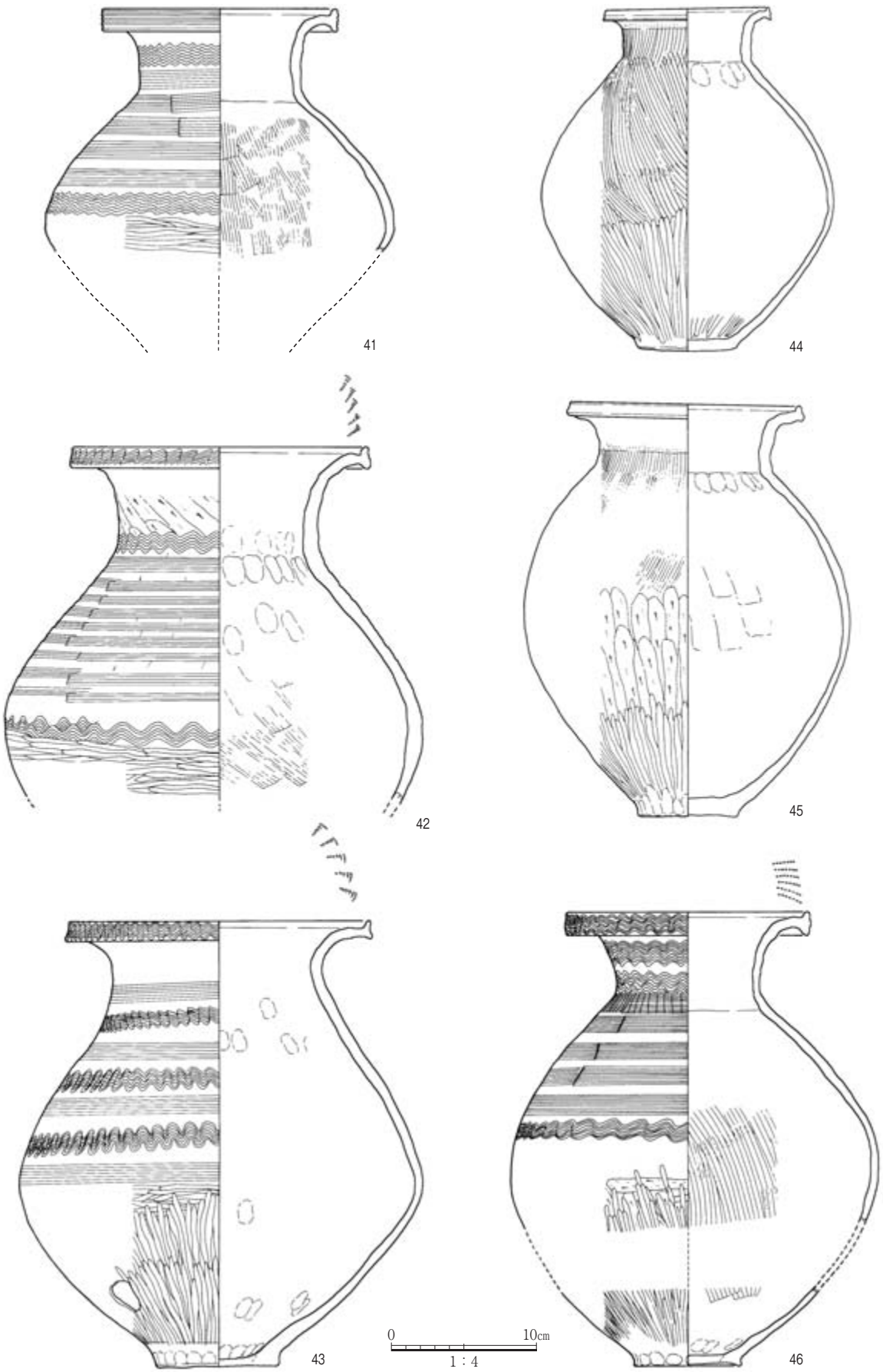


図18　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図（３）

低い段状の口縁部を形成している。器体は体部上半と同下部から脚台部を個別に成形したあと、上下を接合し、脚部に粘土円板を充填したあと、ヘラミガキを放射状および「ロ」の字状に施している。体部上半の内面は横方向のナデ、体部下半の外面は縦方向のヘラミガキのあと、横方向のヘラミガキを弧状に施している。脚部の外面は縦方向のヘラミガキのあと小さな円孔を穿つほか、横方向の列点文および刺突文を密に加えている。口縁部の外端面に刺突文、体部の外面には櫛描簾状文を施したのち、４本１組のキザミメを入れた棒状浮文を６方向に貼り付けている。口縁部の直下の２方向に２個一対の紐孔を穿つ。にぶい黄色を呈し、角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。49は口径10.0㎝、器高3.1㎝の蓋である。口縁部は、器体中央の低いつまみから体部の下端に向かって一旦「ハ」の字状に開いたあと、口縁部を上方に短く折り曲げている。口縁部の内外面はヨコナデ調整で、器体の調整は外面が粗いヘラケズリからナデで、内面は粗い縦方向のナデである。口縁部の内側に２個一対の紐孔を４方向に穿つ。淡黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。50は口径12.0㎝、器高11.3㎝の体部に底径9.4㎝の脚部が付いた台付無頸壺である。わずかに内傾する体部の上端に粘土紐を足して段状口縁部を成形している。器体は体部の上半と下半および脚部を個別に成形したあと上下を接合し、脚部の接合部に粘土円板を充填してからハケを施している。体部の上半と接合後の内面にはヨコナデおよびユビナデを加え、口縁部および体部の外面は刺突文次いで櫛描簾状文を２帯施したあと、３本一組のキザミメを加えた棒状浮文を６方向に施している。裾に向かって「ハ」の字状に開く脚部の外面には小さな円孔を穿つほか、列点文および刺突文を施している。灰白色～灰黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。51は口径18.3㎝、器高18.1㎝の台付無頸壺で、口縁部から体部の上半を打ち欠いている。口縁部は内傾する体部の上端に粘土紐を足して段状に成形している。体部の上半、体部の下半から脚部にかけて個別に成形したあと、体部下半の中央部に粘土円板を充填して「ロ」の字状および放射状にヘラミガキを施し、体部の上半を接合後、横方向のヘラミガキを密に加えている。口縁部から体部の外面は、前者に刺突文を、後者に櫛描簾状文を２帯、同じ原体を使った刺突文を１帯施したのち、キザミメを入れた３本１組の棒状浮文を６方向に貼り付けている。体部下半の外面の調整は横ならびに縦方向のヘラミガキである。底径12.9㎝の脚端部はわずかに肥厚しており、緩やかに開く裾部には刺突文を施したのち、小さな円孔を２段穿っている。口縁部の直下には、２個一対の紐孔を２方向に穿つ。灰黄色～暗灰黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。

53は口径22.2㎝、器高16.5㎝で、器体の上部が椀状に直線的に開く台付鉢である。鉢部から脚部にかけて連続して成形しており、鉢部の中央に粘土円板を充填している。口縁部の上端が左右に肥厚しており、ここにキザミメを施している。鉢部外面の上半には綾杉状の刺突文を５帯施しているほか、鉢部には断面方形で、背側に刺突穴のある把手もしくは飾り耳を貼り付けていたようである。ここでは一対の把手として復元したが確証はない。鉢部の下半から脚部外面の調整は、縦方向のヘラミガキで、内面は鉢部が横方向ならびに縦方向の暗文状の疎らなヘラミガキである。脚部は裾部が左上りのハケで、柱状部にはシボリメおよびユビオサエが残る。脚端部は上方に肥厚しており、内側に６方向の小孔を穿つ。鉢部ならびに脚部を打ち欠いている。鉢部は橙色、脚部は浅黄橙色を呈し、前者は長石・

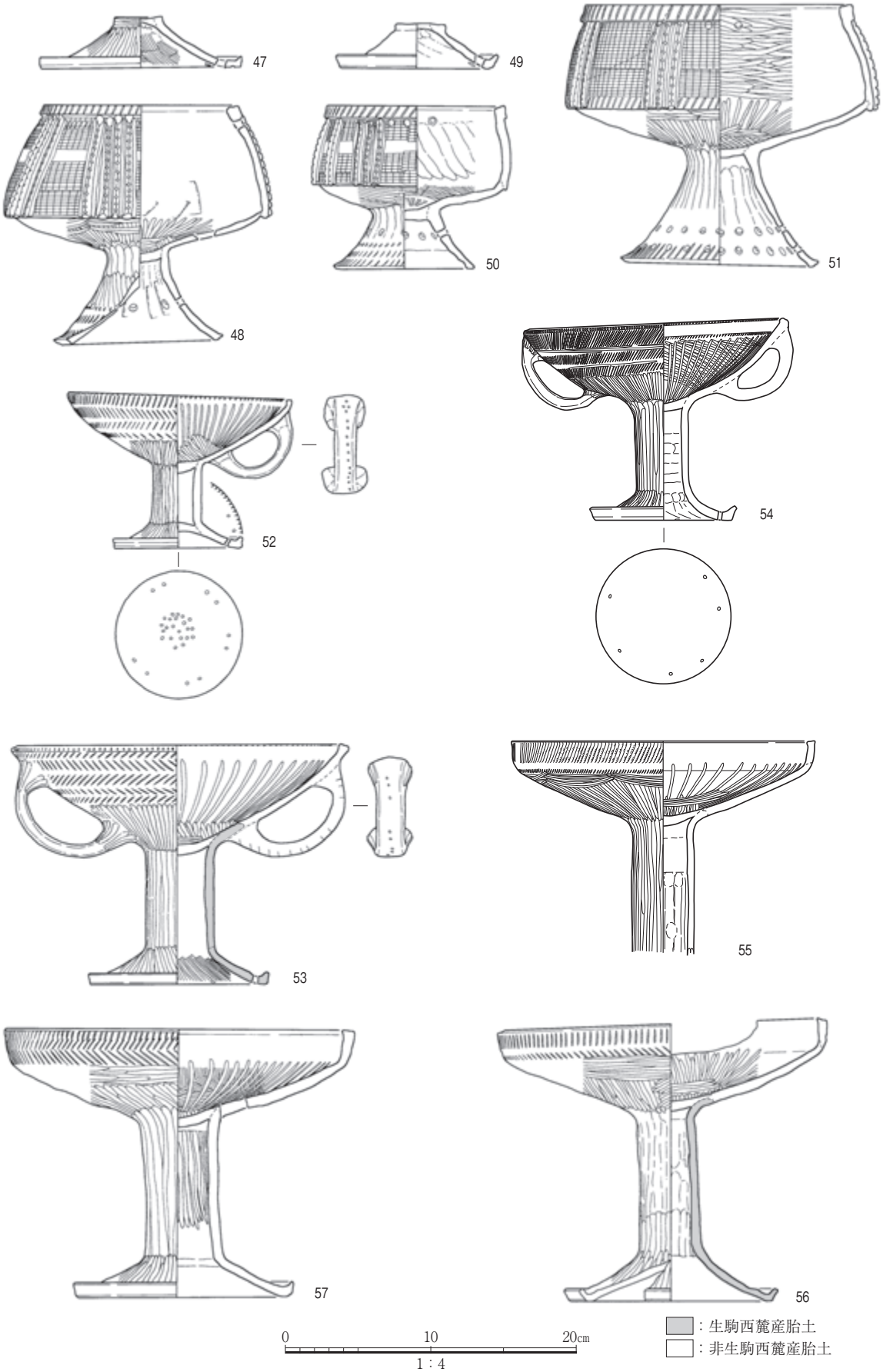


図19　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図（４）

チャート・雲母・石英粒を、後者は角閃石・雲母・長石・石英粒を含み、色調や胎土が異なっている。鉢部と脚部の胎土が異なる土器はＹ１号墳丘墓ではほかにも１例確認されたが、ともに生駒西麓産の胎土と非生駒西麓産の胎土が使われていた。胎土の違いについては生駒西麓産の胎土を使った土器作りの場に、河内低地部や他地域から運ばれた胎土が持ち込まれたものか、逆に生駒西麓産の胎土が他地域に搬出されたものかと想定されたが、点数が少ないこともあって断定はしがたい。本報告では前者の可能性を提示しておきたい。

54は口径17.4㎝、器高13.9㎝の台付鉢で、鉢部には断面方形の一対の環状の把手もしくは飾り耳を貼り付けている。口縁部はわずかに内湾しながら外上方に開く鉢部の上端近くに強いヨコナデを加えて内に肥厚させている。鉢部および脚部は一体として成形しており、脚部の中央部に粘土円板を充填している。柱状部から短く開く脚裾部の先端近くを外上方に肥厚している。口縁端部の内外面および口縁部内面にキザミメ、体部の中程から口縁部の外面に３帯の刺突文が巡る。なお、刺突文間は横方向のヘラミガキを１条加えて区画している。鉢部の調整は外面の下半が縦方向のヘラミガキで、内面は左上りのヘラミガキのあと、正放射暗文状のヘラミガキを加えている。脚部は柱状部から裾部の外面が縦方向のヘラミガキで、内面は縦ならびに横方向のナデである。裾部には２個一対の小さな円孔を３方向に穿つ。口縁部を打ち欠いている。灰褐色を呈し、胎土は51と変わらない。

56は口径21.5㎝、器高19.5㎝の高杯B類で、口縁部および杯体部、脚裾部を打ち欠いている。口縁部は外上方に内湾しながら開く杯体部から直立しており、強いヨコナデを加えて上端面が浅く凹む。口縁部の外端面には縦ならびに斜め方向の櫛描文と同原体による刺突文が巡る。杯部と脚部を個別に成形したあと、双方を接合し柱状部に粘土円板を充填しており、接合部には脚部と同じ胎土を塗り重ねて補強している。脚端部を外上方に拡張している。器体の調整は、杯部の外面が縦方向から横方向のヘラミガキで、内面は縦方向のヘラミガキのあと、中央部に縦横のヘラミガキを重ねている。脚部の調整は外面が縦方向の断続的なヘラミガキで、内面は粗い縦方向のナデおよび横方向のナデである。杯部は浅黄橙色、脚部は灰黄褐色を呈し、前者は長石･チャート･雲母･石英粒を、後者は角閃石･雲母･長石・石英粒を含み、色調や胎土が異なっている。台付鉢53と同じく生駒西麓産の胎土を使った土器作りの場に、河内低地部や他地域から運ばれた胎土が持ち込まれたものか、逆に生駒西麓産の胎土が他地域に搬出されたものと想定される。57は口径23.8㎝、器高18.6㎝の高杯B類で、杯部に打ち欠きおよび穿孔がある。口縁部は外上方に直線的に開く杯部からわずかに開いて立つ。脚端部を上方に肥厚しており、杯部と脚部を連続成形したあと、柱状部に粘土円板を充填する。口縁部に強いヨコナデを加えて、同端部を左右に肥厚しており、口縁部の外端面には櫛描文の原体による綾杉状の刺突文が巡る。杯体部の調整は外面が縦方向から横方向のヘラミガキで、内面はハケのあと、縦方向の暗文状のヘラミガキを疎らに施している。脚部の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、脚部の内面は柱状部が縦方向のヘラミガキ、同下半から脚端部がヨコナデである。明褐灰色を呈し、胎土中に角閃石･雲母･長石・シャモット・石英粒を含む、河内の土器である。

58は口径10.1㎝、器高19.3㎝の水差しで、口頸部および体部を打ち欠いている。最大径が体部の中程にある扁球形に近い器体から短い口頸部が立つ。口頸部には外面に５条の凹線文が巡る。半環状の

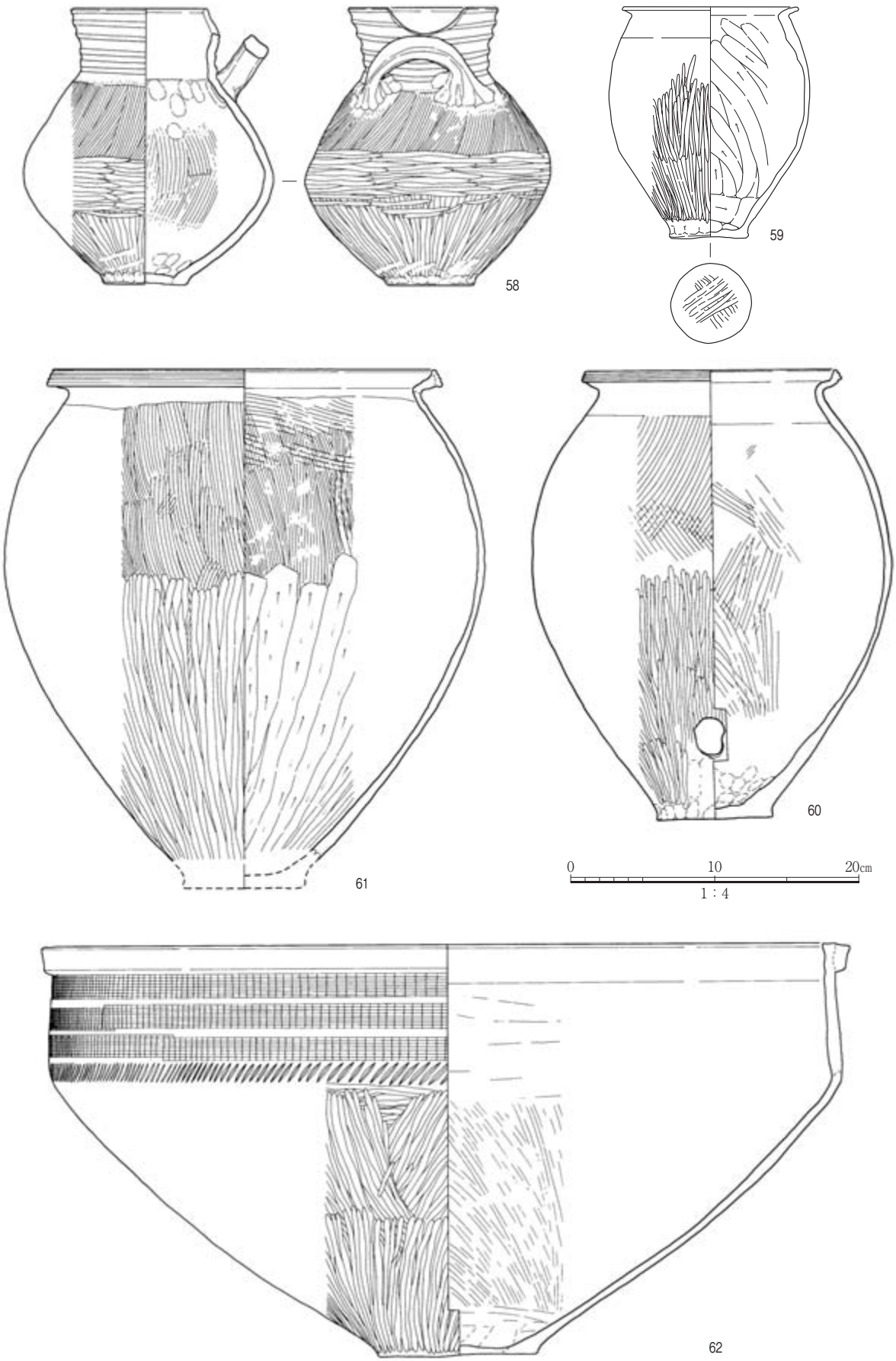


図20　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図（５）

把手は断面が長方形で、体部の上端に貼り付けており、把手側の口頸部は半円形に抉っている。口頸部の内外面の調整はヨコナデである。体部の調整は外面が右上がりのハケのあと、下半部に縦方向のヘラミガキを施したのち、横方向のヘラミガキを重ねており、内面は縦方向のハケのあとナデである。低い底部は平底で、内外面ともユビオサエで整えている。浅黄橙色を呈し、胎土中に石英･長石･チャート・雲母粒を含む。

59は口径12.0㎝、器高16.1㎝の小型の甕A類で、口縁部および体部の一部を打ち欠いている。口縁部は頸部から短く開いており、最大径は体部の中程にある。口頸部の内外面をヨコナデ調整している。体部の調整は、外面が縦方向の２段のヘラミガキで、内面は底部の近くが横方向のナデで、これより上方は左上りのナデである。底部裏面のヘラミガキは交差している。橙色～浅黄橙色を呈し、胎土中に石英・チャート・長石・雲母粒を含む。60は口径17.2㎝、器高31.3㎝の甕B類で、体部の下半を１箇所穿孔している。口縁部は内傾する頸部から一旦大きく開いたあと、上方に肥厚しており、外端面に２条のにぶい凹線文が巡る。口頸部から体部上半にかけての内外面の調整はヨコナデで、体部の調整は外面が右および左上りのハケのあと、縦方向のヘラミガキを３段にわたって施しており、内面は左、右、左上りのハケののち、ナデを加えている。低い底部の内外面はユビオサエで整えている。黄橙色を呈し、胎土中に石英・長石・チャート粒を含む。61は口径26.2㎝、器高34.2㎝以上の中型の甕B類で、器体および底部を打ち欠いている。口縁部は最大径が中程にある体部から頸部を経て一旦「く」の字状に開いたあと、粘土紐を足して上下に肥厚しており、外端面に３条の浅い凹線文が巡る。体部の調整は外面が縦方向のハケのあと、同方向のストロークの長いヘラミガキで、内面は縦方向のハケののち、右上がりのヘラケズリおよび粗い横方向のハケを疎らに施す。浅黄橙色～褐灰色を呈し、角閃石・雲母・長石・石英・シャモット粒を含む。

62は口径54.8㎝、器高28.4㎝の大型鉢で、体部に打ち欠きが見られる。直立する体部の上端近くに強いヨコナデ調整を加えたあと、粘土紐を足して段状口縁部を形成している。体部は低い底部から外上方に一旦開いたあと、直立して口縁部にいたる。口頸部の内外面の調整はヨコナデで、体部上半の外面には、３帯の櫛描簾状文ならびに櫛描文の原体による１帯の刺突文を施しており、中程以下は横方向のヘラミガキのあと２段の縦方向のヘラミガキを加えている。内面は左上りの粗いハケののち、横方向のナデである。底部の内面は横方向のナデで、外面はヘラミガキで平滑に整えている。橙色～淡黄橙色を呈し、角閃石・雲母・石英・長石・チャート粒を含む。

63は口径8.2㎝の小型の甕A類で、体部の中程以下を打ち欠いている。頸部から短く開く口縁部の端部にキザミメを施す。体部の調整は外面がナデのあと、縦方向のヘラミガキで、内面は横方向の粗いナデである。暗黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。64は口径9.3㎝、器高9.8㎝の小型の甕A類で、器体の各所が欠損(打ち欠き？)している。口縁部は頸部から短く開いており、端部を丸くおさめている。最大径は体部の上半にあり、調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は縦方向ならびに左上りの粗いハケのあと、ナデを加えている。器体外面には煤が付着することから、煮炊きに使われたものである。暗灰褐色を呈し、胎土は63と変わらない。65は底径3.4㎝の小型の甕A類の底部である。器体の調整は、外面がヘラケズリおよびヘラミガキで、内

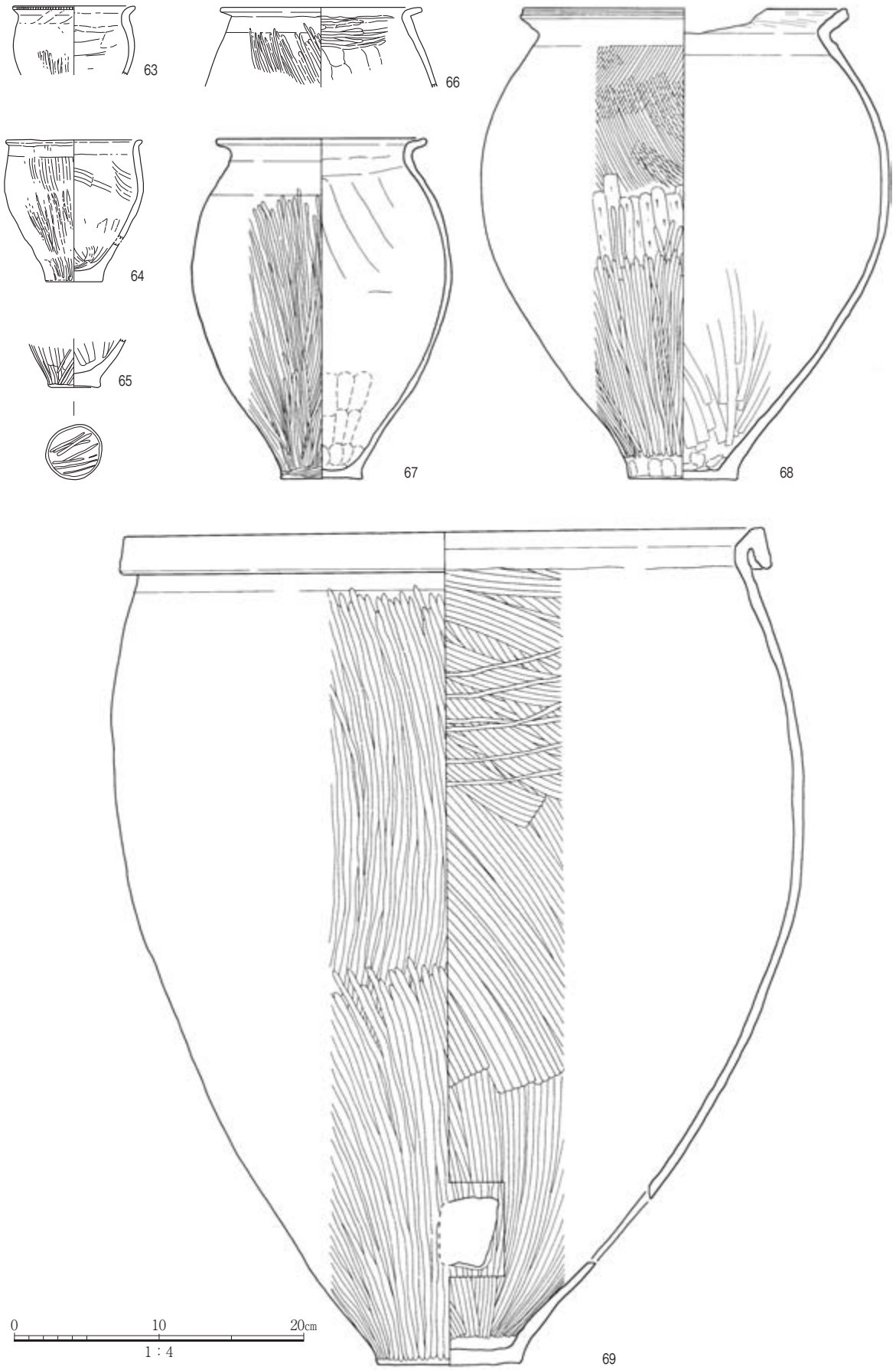


図21　Ｙ１号墳丘墓西周溝出土遺物実測図（６）

面はナデ、底部裏面はヘラミガキである。暗灰黄色を呈し、胎土は63と変わらない。体部下半より上部は打ち欠かれたものと思われる。66は口径13.9㎝の甕A類で、体部の中程以下を欠損(打ち欠き？)している。口縁部は頸部から水平に屈曲しており、器体の調整は外面が左上りのヘラミガキで、内面は上半が横方向のヘラミガキ、下半はナデである。暗茶褐色を呈し、胎土中に角閃石粒を含む河内の土器である。68は口径22.0㎝、器高32.6㎝の甕C類で、口縁部および体部を打ち欠いている。口縁部は頸部から外上方に開き、同端部に１条の凹線文が巡る。口頸部は内外面とも強いヨコナデ調整を加えており、最大径が中程にある寸高の体部の調整は、外面が右から左上りのハケのあと、縦方向のヘラケズリおよび同方向のヘラミガキで、内面は縦方向の板ナデののち、横方向のナデである。底部の内外面はユビオサエで整えている。にぶい黄橙色を呈し、胎土中にチャート・雲母・長石・石英粒を含む。

46・52・55は墳丘西側の中程近くから出土した(図11・18・19、図版36)。

46は口径16.4㎝、復元器高31.3㎝の広口壺C類で、体部の中程を大きく打ち欠いており、同一個体と同定しえた底部とは接合しない。口縁部は筒状の頸部から一旦水平に開いたのち、粘土紐を足して上下に拡張している。最大径が中程にある体部は球形に近いもので、底部は器壁が薄く低い。口頸部の内面の調整はヨコナデで、体部は外面が横方向のヘラケズリのあと、左上がりのヘラミガキを施しており、内面は左上りのハケののち、ナデである。底部は内外面ともユビオサエで整えている。口縁部の外端面から頸部の下端にかけて３帯の櫛描波状文、体部の上端から中程近くにかけて櫛描簾状文１帯､同直線文４帯､同波状文１帯を時計回りに施している。黄橙色を呈し､胎土中に石英･長石･チャート粒を含む。

52は口径15.3㎝、器高10.8㎝で、椀形の浅い鉢部の上端を屈曲した台付鉢である。鉢部には片側に断面方形の把手もしくは飾り耳が付く。これの背には点状の刺突文が見られる。口縁端部の内面にキザミメ、鉢部の外面に綾杉状の刺突文を４帯施している。脚部は別作りで、鉢部に接合しており、大きく開く脚裾部の内面には粘土円板を貼り付けている。脚裾部を上方に肥厚しており、ここにもキザミメを施している。脚端部に近い位置に２個一対の紐孔を５方向に穿つほか、中央にも多数の小孔を開けている。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。鉢部を欠損(打ち欠き？)している。

55は口径20.8㎝の高杯B類で、口縁部の一部および脚裾部を打ち欠いている。口縁部は緩やかに大きく外上方に開く体部から直立し、外端面に櫛歯による刺突文のあと、浅い凹線状のヨコナデを施している。杯部と脚部を個別に成形し、双方を接合したあと、柱状部に粘土円板を充填している。器体の調整は杯部の外面が縦から横方向のヘラミガキで、内面は縦方向の暗文状のヘラミガキを疎らに施したあと、底部の中央に縦横のヘラミガキを重ねている。柱状部の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は上半が横方向のナデ、下半はユビオサエおよび縦方向のナデである。にぶい橙色～にぶい黄橙色を呈し、胎土中に長石・チャート・雲母・シャモットを含む。

70～79は**北周溝**の西部から墳丘西北裾部より一括で出土した土器である(図11・22～24、図版39・40)。

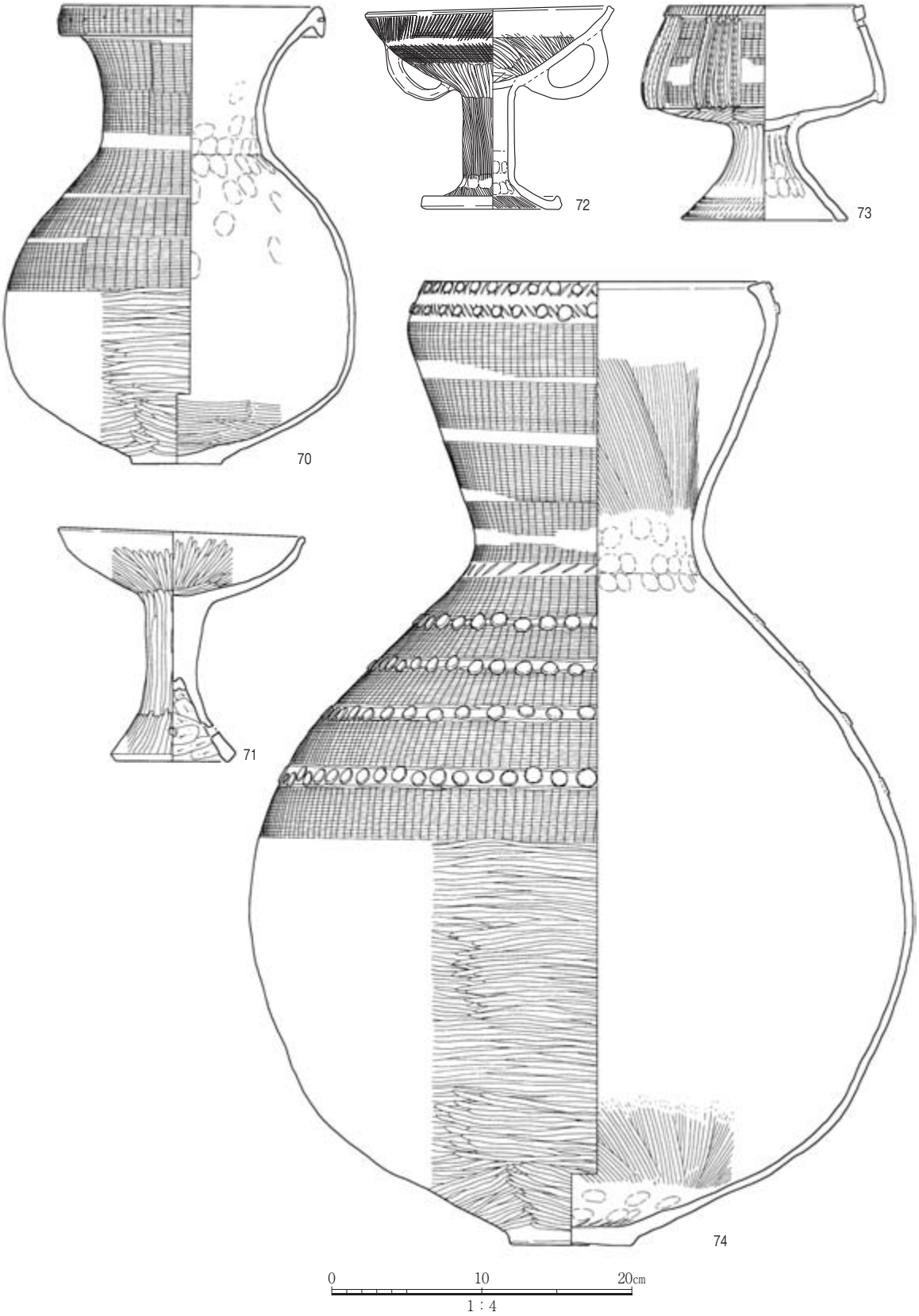


図22　Ｙ１号墳丘墓北周溝出土遺物実測図（１）

70は口径17.0㎝、器高30.5㎝の広口壺A類である。最大径は体部の下半にあり、頸部は丸味のある体部から一旦直立してから緩やかに開いて垂下した口縁部にいたる。口縁部の外端面には櫛描簾状文のあと、点状の刺突文を施しており、頸部から体部の中程にかけて上から下に向かって幅4.5～6.0㎝の５帯の櫛描簾状文を時計回りに施している。体部および底部の調整は体部外面の中程以下を横方向の断続的なヘラミガキで、内面は横方向にナデ整えるが、頸部の下半から体部の上半にかけてはユビオサエ、底部の内面は横方向のハケで調整している。底部裏面は横方向のヘラミガキで平滑に整えている。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。

71は口径16.1㎝、器高15.6㎝の高杯C類で、やや浅い椀状の杯部から短い口縁部が外上方に開く。口縁部の内外面に強いヨコナデを加えており、口縁端部を丸くおさめている。脚部は柱状部が中実で、裾部は短く「ハ」の字状に開き、４方向に円形スカシ孔を穿つ。器体の調整は、杯部の内外面および脚部の外面が縦方向のヘラミガキで、脚裾部の内面は横方向のヘラケズリである。浅黄橙色で、胎土中に石英・長石・チャート・雲母粒を含む。72は口径16.1㎝、器高13.6㎝の台付鉢で、鉢部に一対の大小の環状の把手もしくは飾り耳を付けている。鉢部は浅い椀状を呈し、口縁部に強いヨコナデを加えており、口縁端部は内側にわずかに肥厚する。鉢部外面の上半に細い簾状文状の刺突文を矢羽根状に施文したあと、縦方向のヘラミガキを加えている。鉢部内面の調整は底にハケメが残るが、これより上は左上がりのヘラミガキである。脚部は鉢底部から連続して成形しており、大きく開く裾部の上端をつまみ上げている。鉢部と脚部の接合部は粘土円板を充填しており、脚部の外面および裾部の内面の調整はハケである。柱状部下端の内外面はユビオサエで整えている。浅黄色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。73は口径12.8㎝、器高14.4㎝、最大径が体部の下方にある台付無頸壺である。脚台部と体部の下半を連続して成形し、中央に粘土円板を充填してから体部の上半部を成形したあと、上端に粘土紐を貼り付けて低い段状の口縁部を作っている。口縁部の外端面に細い刺突文、体部の外面には櫛描簾状文を４帯施したあと、８箇所にキザミメを入れた４条一組の棒状浮文を貼り付けている。体部の裏面から脚部中程の外面の調整は弧状および縦方向のヘラミガキで、脚部の内面の調整はユビオサエとヨコナデである。「ハ」の字状に開く脚裾部の外面には細い４条の櫛描刺突文を施している。灰褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。

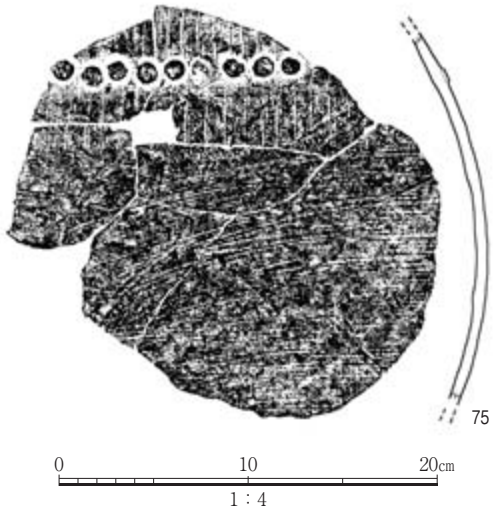


図23　Ｙ１号墳丘墓北周溝出土遺物実測図（２）

74は口径22.7㎝、器高64.2㎝の大型の細頸壺である。口縁部は、一端外上方に直線的に開く頸部から緩やかに湾曲しており、体部の形態は球形に近い。大きな口頸部および体部の割に底部は小さく華奢である。口縁部はヨコナデ調整のあと、２帯の矢羽根状の細い刺突文と円形浮文を施している。口縁部の下端から体部の中程にかけて10帯の幅3.3～3.8㎝の

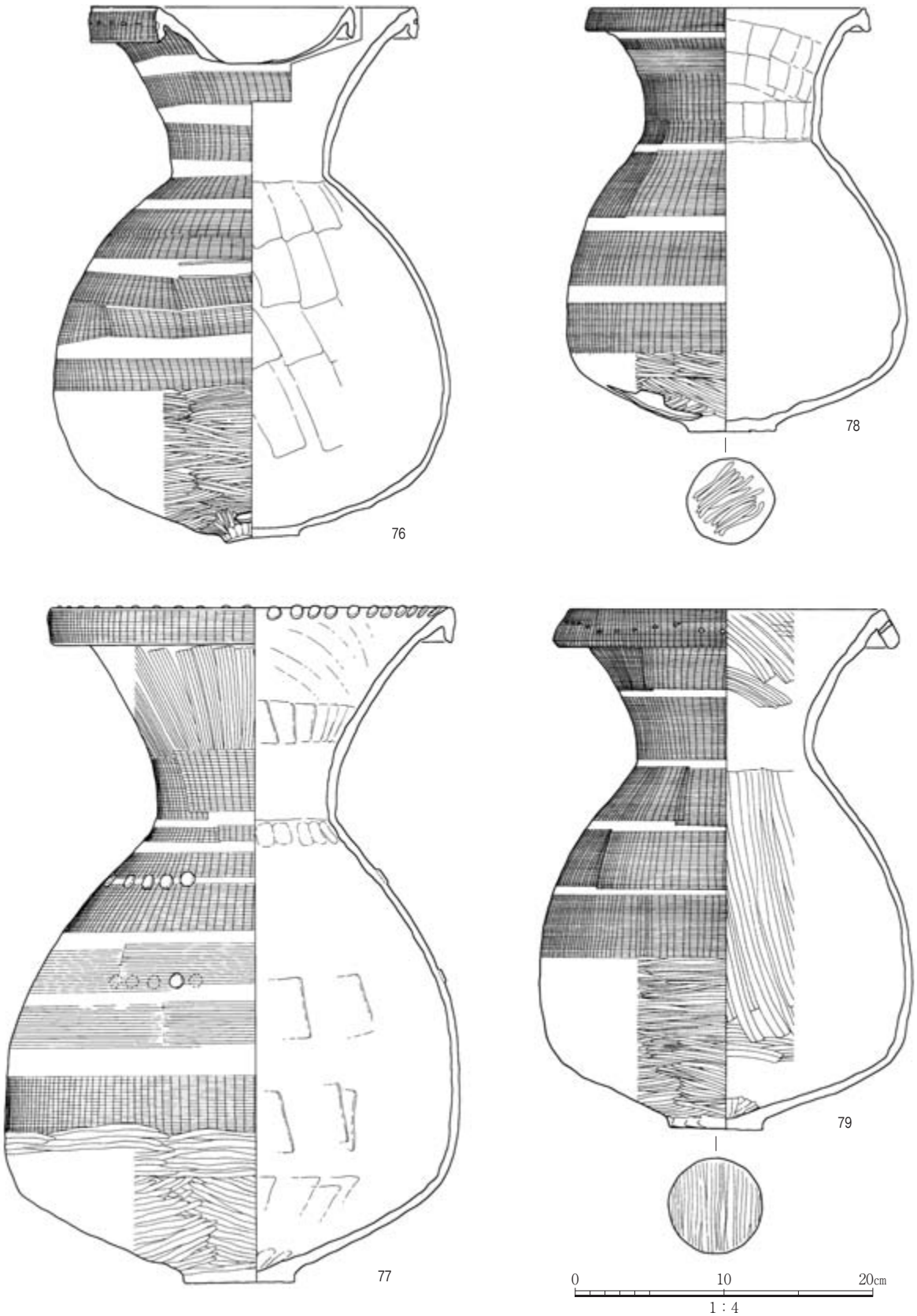


図24　Ｙ１号墳丘墓北周溝出土遺物実測図（３）

櫛描簾状文を巡らせたあと、頸部の下端に刺突文、上から６段目以下の簾状文間に円形浮文を貼り付けている。体部外面の中程から底部にかけて横方向のヘラミガキを施したのち、底部に多角形状のヘラミガキを加えており、裏面もヘラミガキを密に加えて平滑にしている。口頸部の内面は左上がりのハケのあと、上端から口縁部にかけてヨコナデ調整を施している。頸部の屈曲部および底部の内面はユビオサエで整えており、体部の内面は横方向のナデ調整である。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。75は大型の細頸壺の体部とみられる破片で、外面には櫛描簾状文を施したのち、この間に円形浮文を貼り付けている。体部の調整は外面が横方向のヘラミガキで、内面は同方向のナデである。にぶい黄橙色を呈し、胎土は74と変わらない。76は口径21.6㎝、器高36.0㎝の広口壺Ａ類で、口縁部は緩やかに開く頸部の上端に粘土紐を足して垂下させており、口縁部の外端面は櫛描簾状文のあと、点状の刺突文を施している。口縁部の外端面には一部ににぶい凹線文が見られるが櫛描簾状文で覆われており全周していない。体部は最大径が下半部にある下膨れの無花果形を呈しており、口頸部から体部の下半の近くまで粗い櫛描簾状文を時計回りに上から下に施している。体部および底部の調整は外面が横方向の弧状の断続的なヘラミガキで、底部に縦方向のヘラミガキを加えており、内面は左ならびに横方向のナデである。口縁部に打ち欠きが見られるほか、底部を穿孔している。なお、底部から体部の外面に煤が付着することから、煮炊きに使われたことがわかる。褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。77は口径26.8㎝、器高45.5㎝の広口壺Ａ類で、口縁部は体部から外上方に大きく開く頸部の上端に粘土紐を足して垂下させており、その外端面に櫛描簾状文を施し、内面には円形浮文を貼り付けている。頸部の外面には縦方向のハケのあと、下半近くに櫛描簾状文を施しており、下半部に張りのある無花果形の体部の外面には、上端から下半部まで櫛描簾状文を施しているが、体部の中程の２帯については櫛状工具を止めた際の縦線が弱く、一部施文が不安定な箇所がある。体部の上半から中程にかけて櫛描簾状文間に２帯の円形浮文を貼り付けているが、上段のものは５点の円形浮文のうち、１点を除いて剥落していた。下段の円形浮文は２個ずつ４個１組で貼り付けられていたが、ほかは密接する円形浮文である。口頸部から底部にかけての内面は、板状工具による横方向の粗いナデのあと、上半部から頸部にかけてユビオサエで整えている。底部の裏面はヘラミガキを加えて平滑に仕上げている。灰黄色を呈し、胎土は76と変わらない。河内の土器である。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使用されたものである。78は口径18.2㎝、器高28.5㎝の広口壺Ａ類で、口縁部は筒状の頸部から緩やかに開く上端に粘土紐を足して成形している。口縁部の外端面から最大径が下半にある無花果状の体部の下端近くまで７帯の幅の広い粗い櫛描簾状文を施しており、頸部下端および体部の櫛描簾状文の間は広めに空けている。頸部の内面は左上がりのナデ、底部から体部の内面も左上がりのナデで調整している。体部の下端および底部の外面は、多角形状から横方向のヘラミガキで、底部の裏面も横方向のヘラミガキで平滑に整えている。底部に１箇所の穿孔がある。色調や胎土は77と変わらない。河内の土器である。79は口径21.0㎝、器高34.9㎝の広口壺Ａ類で、口縁部は体部の上半から外上方に大きく開く頸部の上端に粘土紐を足して垂下している。口縁部の下端を丸くおさめており、外端面には櫛描簾状文のあと、点状で口縁部を貫通する刺突文を施している。頸部から最大径が下端近くにある無花果状の

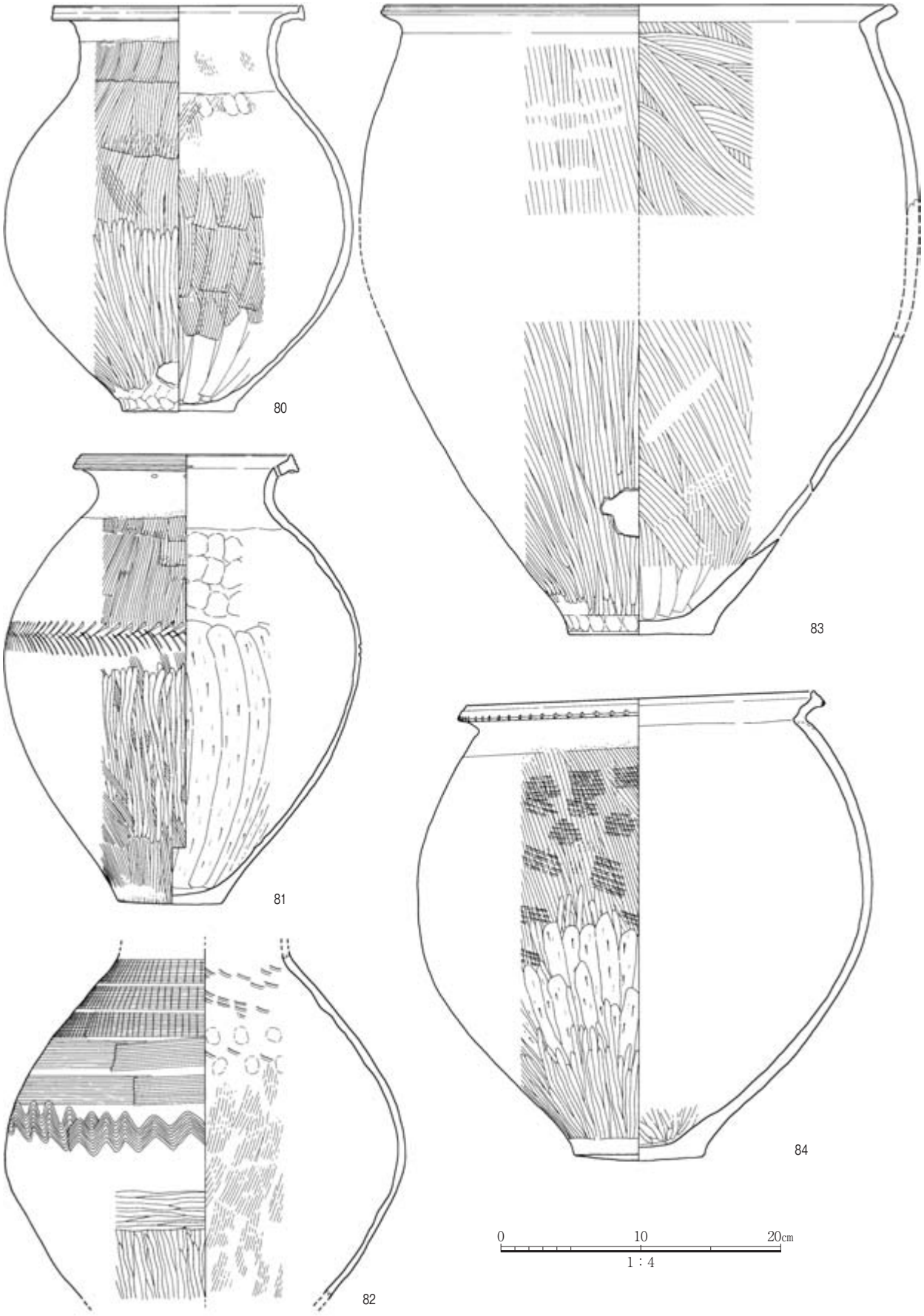


図25　Ｙ１号墳丘墓南周溝出土遺物実測図

体部の下半部の近くまで3.5～4.0cm前後の５帯の幅広い櫛描簾状文を時計回りに施している。体部下半部から底部の外面の調整は横方向のヘラミガキで、頸部から底部にかけての内面の調整は左上がりのハケ状のナデである。底部の裏面は縦方向のヘラミガキで平滑に整えている。体部の中程から底部の外面にかけて煤が付着していることから、煮炊きに使われたことがわかる。口縁部の打ち欠きや穿孔は見られなかった。灰白色～黄灰色を呈し、胎土は76と変わらない。河内の土器である。

80～84は**南周溝**から出土した土器である(図11・25、図版33)。

80は口径17.6cm、器高29.0cmの広口壺B類で、体部下半を穿孔している。口縁部は太い筒状の頸部から一旦水平に開いたのち、粘土紐を足して上下に拡張している。口頸部の調整はヨコナデで、口縁部の外端面は浅い凹線状を呈する。最大径が中程にある球形に近い体部の調整は、外面が縦方向のハケのあと、下半部に縦方向のヘラミガキを加えており、内面は縦方向のハケののち、上半部を横方向のナデおよびユビオサエで整えている。底部の外面はユビオサエ、同内面はハケおよびユビオサエで、裏面はヘラケズリのあとナデを加えており、器壁は薄い。橙色～浅黄橙色を呈し、胎土中に石英･チャート・長石・雲母粒を含む。81は口径15.0cm、器高32.1cmの広口壺B類で、体部を欠損(打ち欠き？)している。口縁部は短い筒状の頸部から緩やかに外反したのち、上下に肥厚しており、外端面には３条のにぶい凹線文が巡る。口縁部に２個一対の紐孔を４方向に穿つ。口頸部の調整は内外面ともヨコナデである。最大径が中程にある寸高の体部の調整は、外面が縦方向のハケののち、中程以下に縦方向のヘラミガキを加えており、内面は下半が下から上へのヘラケズリで、上半はユビオサエで整えている。体部の中程には貝殻腹縁による綾杉状の刺突文が巡る。底部の裏面はヘラミガキで平滑に整えている。茶褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。82は頸部以上および体部の下半以下を欠損(打ち欠き？)した広口壺A類の大型の破片である。最大径は体部の中程にあり、頸部から体部の中程にかけて同一原体による櫛描簾状文３帯、同直線文２帯、同波状文１帯を施している。体部の調整は外面が下半を縦方向のヘラミガキのあと、横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のハケおよびユビオサエで整えている。灰白色を呈し、胎土中に長石・石英・チャート・雲母粒を含む。

83は口径36.0cm､器高45.0cm前後に復元しえた大型の甕C類で､口縁部は頸部から外上方に短く開く。体部の中程を大きく欠損(打ち欠き？)するほか、体部下半には穿孔が１箇所ある。口縁部の内外面に強いヨコナデを加えており、端部がにぶい凹線状をなす。体部の調整は外面が左上りの粗いハケのあと、同方向のストロークの長いヘラミガキで、内面は左上りの粗いハケおよびナデである。底部の外面はユビオサエで、内面はハケのあとナデる。灰白色～浅黄橙色で、胎土中に雲母･長石･石英･チャート粒を含む。84は口径24.8cm、器高33.1cmの大型の甕E類で、口縁部および体部を欠損(打ち欠き？)している。口縁部は頸部から短く開いたのち、上下に肥厚しており、外端部にキザミメを施す。口頸部の調整は内外面ともヨコナデで、最大径が中程にある体部の調整は、外面が左上りのタタキのあと、同方向の粗いハケおよび縦方向のヘラケズリならびに同方向のヘラミガキである。器体内面の調整は底部から体部の下半にかけてヘラミガキで、上半は、横方向のナデで整えている。底部の裏面にはヘラケズリを加えている。体部の中程以下に煤の付着が見られる。橙色～黄橙色を呈し、胎土中に石英･

長石・チャート粒を含む。

ⅱ)木製品

Ｙ１号墳丘墓では**東・西周溝**を中心に農具、容器、祭祀具、薄板、用途不明品などの木製品が出土した(図26～30、原色図版６、図版10・12・41～45)。このほか、コウヤマキ製の木棺材を加工した際の切れ端やチップ、切断痕のある常緑樹の枝などが墳丘基底中央に近い**東周溝**の南部からまとまって出土した。これらの木製品のうち、高杯や農具は比較的近い位置から出土したが、中には四脚容器の蓋と身のように墳丘を挟んで東西の周溝の離れた場所から出土したものもあった(図26)。

一方、先述したように墳丘の20号主体部上で炭化した薄い板を検出した。同様な形態のコウヤマキ製の薄板は**東・西周溝**でも出土しており、これらについては墳丘の主体部の上に「墓標」として立てられていたのではないかと推定された。つまり、周溝から出土したコウヤマキ製の薄板は、埋葬の度に「墓標」として立てられたあと、墳丘墓での最終の埋葬が終わって土饅頭を整地した際に抜かれて周溝内に投棄されたものとみられるのである。

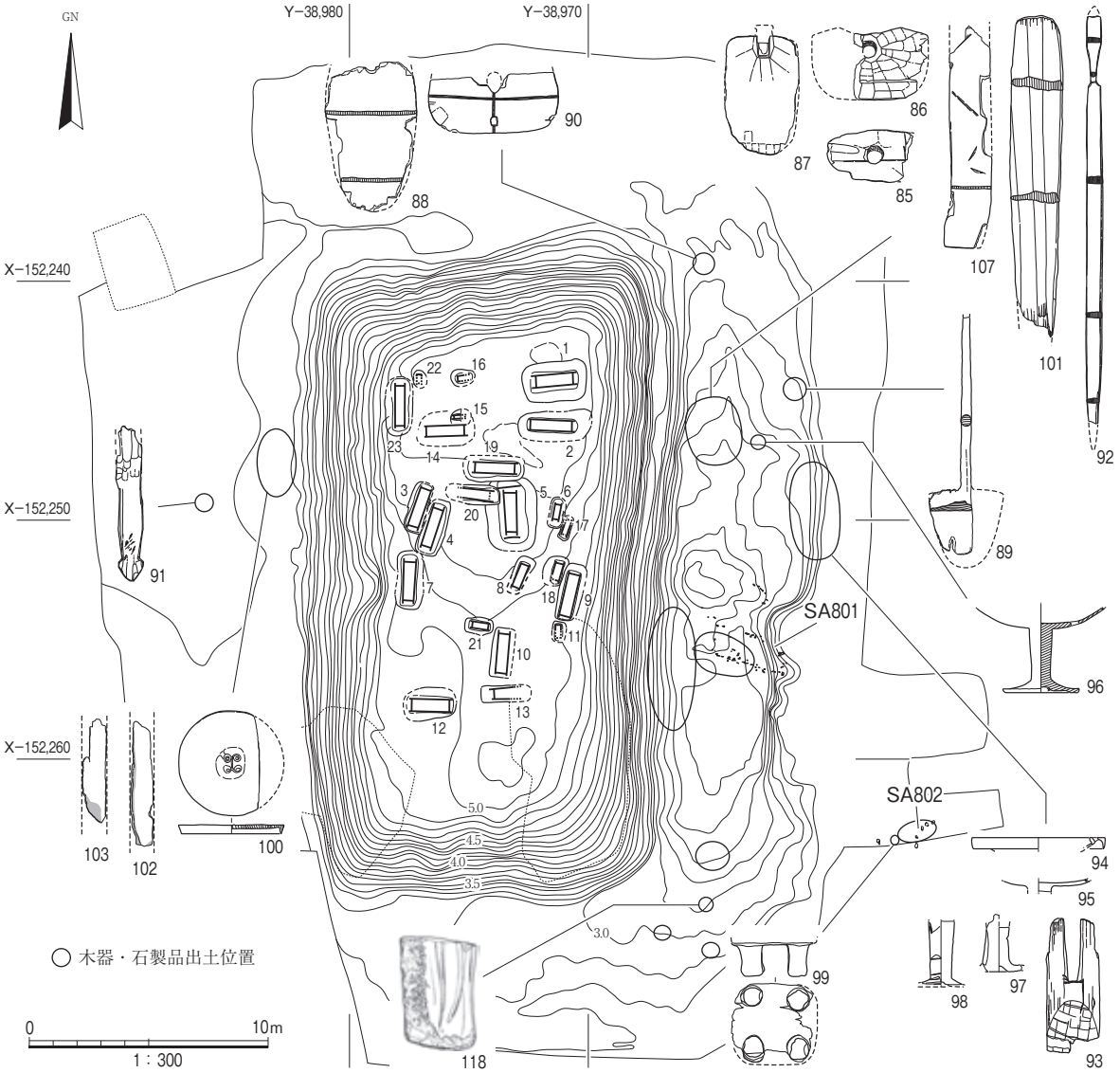


図26　Ｙ１号墳丘墓木製品および石製品出土状況

本報告では**Ｙ１号墳丘墓**の発掘調査を終えてから30年が経過したこともあって、調査後の早い段階にPEGで保存処理した木製品以外のコウヤマキのチップや薄板および樹木や枝については変形あるいは破損してしまい報告しえなかった。以下に農具から順を追って報告する。

ａ.農具

直柄横鍬２点、泥除１点、組合せ平鋤２点、一木平鋤１点がある(図27・28、原色図版15、図版41～43)。これらは、東周溝内に投棄した時点で打ち壊されており、燃やされて器表面の炭化が進んでいたため、加工痕や使用痕などについては明らかでない。

85は直柄横鍬で、残存長11.7㎝、残存幅19.2㎝、頭部厚さ1.8㎝。腐朽が進んでおり全体の形状は不明である。後面は緩やかな舟形突起を削り出し、前面は平坦に削られている。着装角度は70度である。柄孔が円形であることから、柄は断面円形と推定される。なお、後面頭部に破砕した痕跡が認められ、おそらく石斧によって打ち砕いたと推定される。木取りは柾目取りである。86は、身の長さ16.2㎝、残存幅16.6㎝、刃縁部の厚さ0.9㎝の身部がやや横長の組合せ式の直柄横鍬である。身部の前面は若干内湾しており、肩はやや下がりぎみである。ソケット孔は円形で、前面から後面に向って穿つ。柄は断面円形であろう。身部を意図的に破砕しており、加工痕は明らかでない。木取りは柾目取りである。87は、肩部幅15.0㎝、身の長さ26.6㎝、厚さ2.5㎝、刃縁幅10.0㎝のやや長めのスコップ状を呈する組合せ式の平鋤である。柄孔は長方形にくり抜かれており、孔の近くから孔に向けて緩やかな舟形突起状に削り出されている。刃縁部の上面には加工痕が、同下面には使用痕が見られる。木取りは柾目取りである。88は肩部幅20.5㎝、身の長さ33.4㎝、厚さ2.3㎝、刃縁幅が13.0㎝の身部がやや湾曲した長手の組合せ平鋤である。柄との結合部は前面から後面に向かって丸く抉られている。器面が腐朽しており、調整痕は見られなかった。木取りは柾目取りである。樹種はアカガシ亜属であろう。89は、残存長53.0㎝、身の残存長14.6㎝、肩部残存幅9.7㎝、刃縁残存幅7.0㎝の身がスコップ状を呈する一木造りの平鋤である。前面はやや内湾ぎみに削り出しており、後面は柄につながる部分を舟形突起状に削り出しているが、両面とも加工痕は明らかでない。柄は断面円形を呈する。木取りは柾目取りである。

90は残存長13.5㎝、幅29.0㎝、厚さ0.5㎝の隅丸長方形を呈する横長で下部の両端を丸く加工した薄い板状の泥除で、上半部を打ち欠いている。中央に楕円形の孔を穿つほか、コーナーにも円孔とみられる形跡があるが、これも一般的な泥除と同じである。表裏面とも鉄製工具による加工痕が認められる。木取りは板目取りである。

ｂ.祭祀具ほか

91は**西周溝**、92・93は**東周溝**から出土した木製品である(図28、原色図版15、図版42・43)。

91は残存長34.6㎝、柄頭厚1.6㎝、柄部厚2.0㎝、刃部厚0.9㎝の刀形木製品の柄の可能性のあるものである。表裏面には鉄製工具による加工痕が明瞭に見られ、刀身に相当する側の刃部を先に向って薄く削っている。柄の頭部は三角形状に加工しており、厚みも柄部に比べて厚く作られており、形状からみて環頭太刀を模倣した可能性がある。樹種はコウヤマキで、木取りは柾目取りである。

92は両端を欠損しているが、残存長91.0㎝、頭部幅3.4㎝、頭部厚1.4㎝、首部幅1.2㎝、首部厚0.8

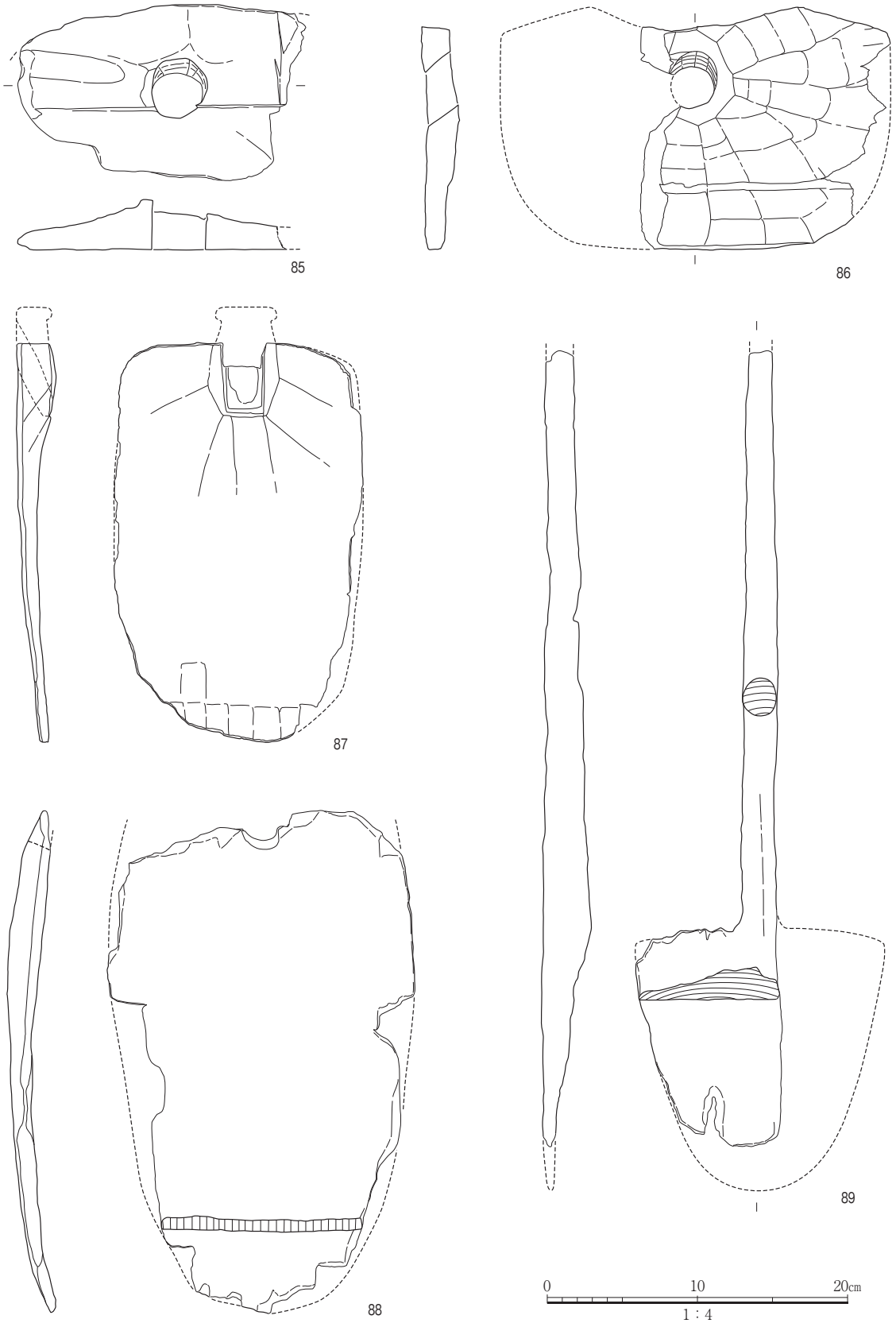


図27　Ｙ１号墳丘墓東周溝出土木製品実測図

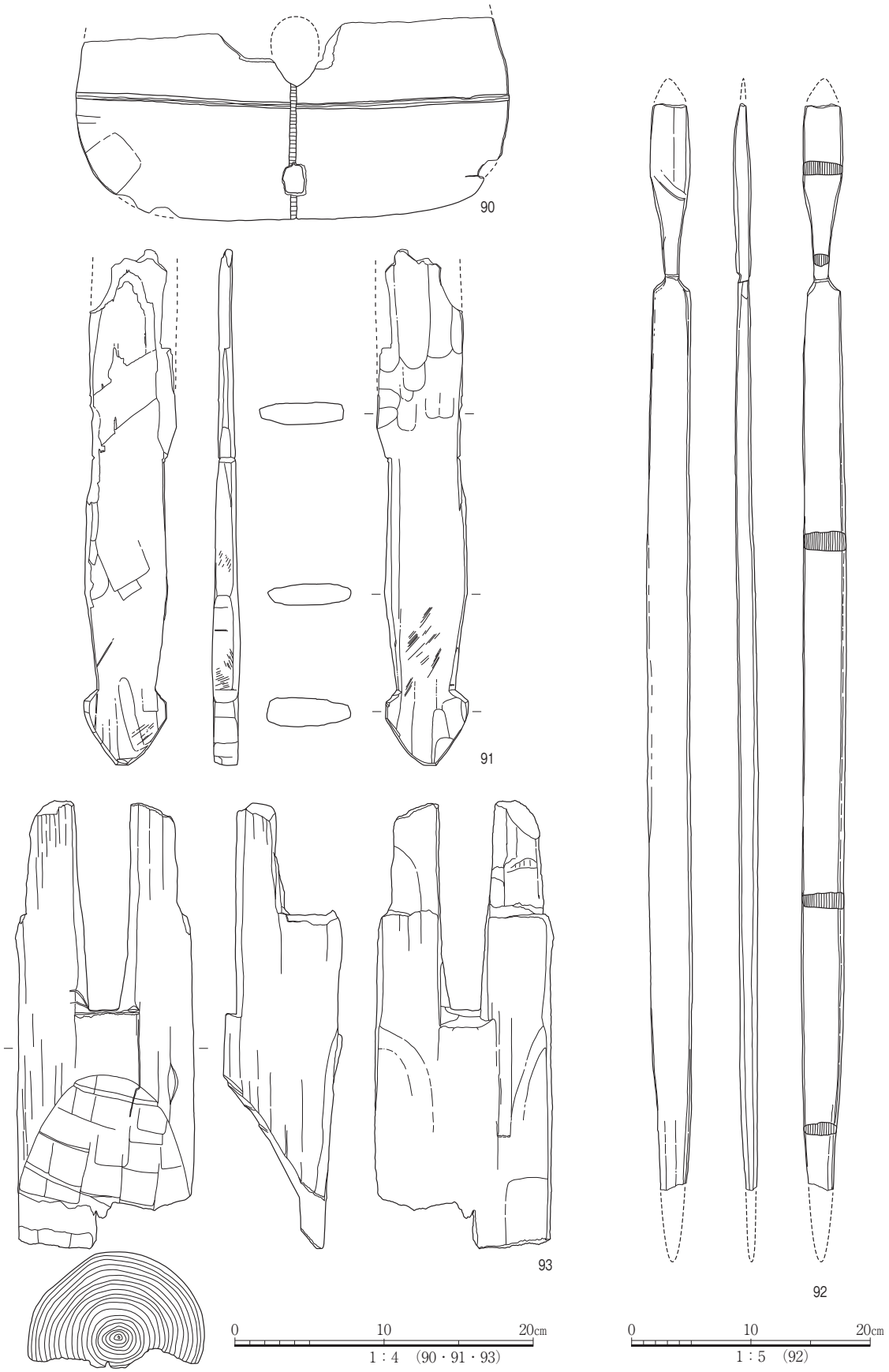


図28　Ｙ１号墳丘墓周溝出土木製品実測図（１）

東周溝：90・92・93、西周溝：91

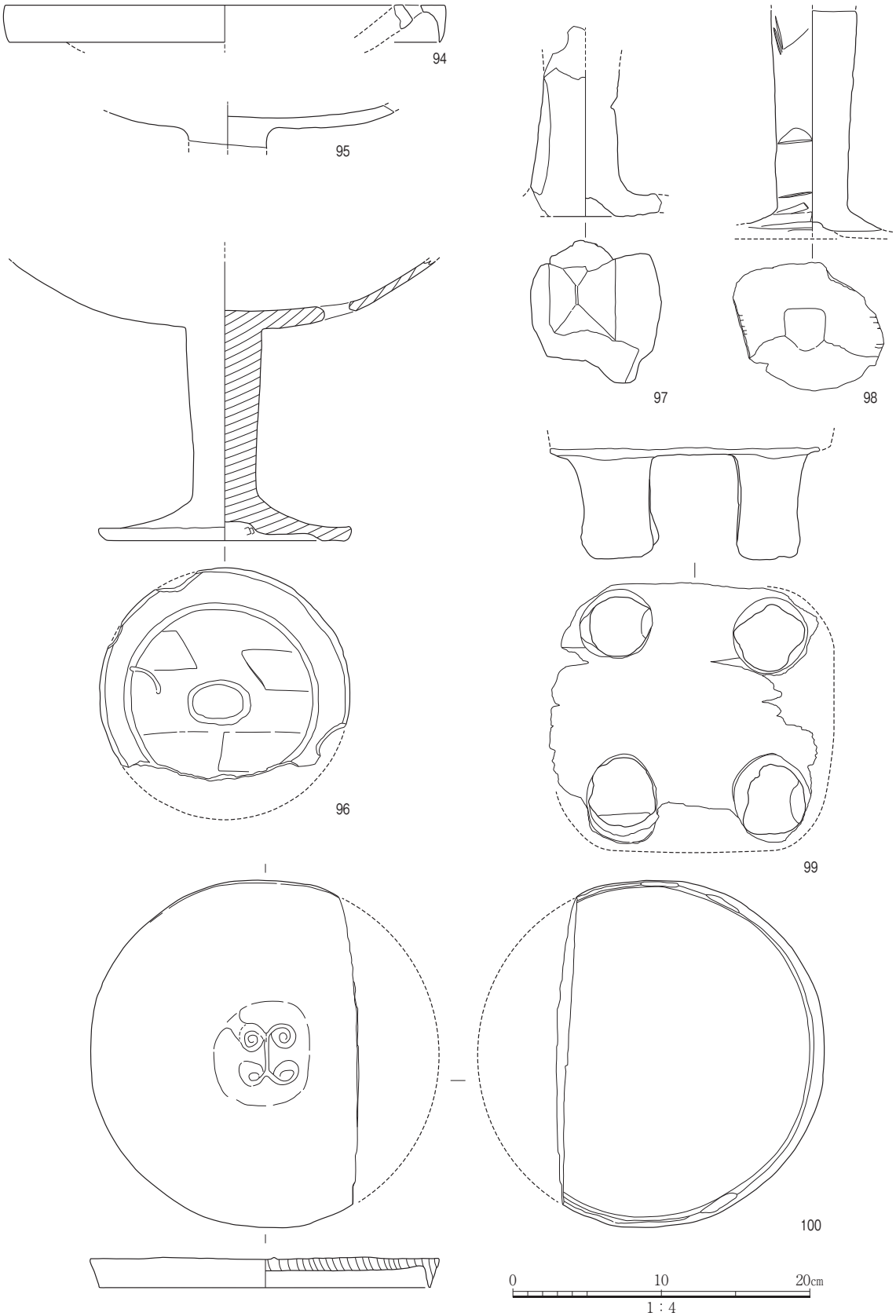


図29　Ｙ１号墳丘墓周溝出土木製品実測図（２）

東周溝：94～99、西周溝：100

cm、体部幅3.7cm、体部厚1.7cmの剣形あるいは槍形木製品かと思われるものである。頭部は中程から上端に向かって細く加工しており、同下端は細長く削り込んでいる。身部は肩部から同下端まで残存長75.2cmあり、下端に向かって細くなっている。体部側面に明瞭な加工痕がある。木取りは柾目取りである。93は樹皮を剥いだ直径11.8cmの丸太材を縦に半裁したあと、材の一端中央部を縦方向に頭貫状の切り込みを入れている。さらに、周溝に投棄する時点で斜方上面より切断しており、残存部の長さは約30cmである。加工部ならびに切断面の鉄製工具による加工痕は明瞭である。建築部材の可能性もあるが、高杯に共伴していることやほかに建物関係の部材が見られないので祭祀具に含めた。樹種はコウヤマキである。

c.容器

容器には高杯および四脚容器とその蓋とみられるものがあるが、ともに全体の形状を留めたものは無く、高杯は杯部および口縁部・脚部の破片が出土したのみである(図29、原色図版15、図版44)。これらの木製品は先述したように穿孔したり意図的に破損したあと、燃やされたものがあった。

94～99は東周溝から出土した。

94は口径29.6cmの高杯の口縁部の破片である。上面が水平で垂下した口縁部は、端部を丸くおさめている。口縁部の内端に突起部があった痕跡が見られる。全体に腐朽が進んでおり、加工痕は不明瞭である。木取りは板目取りである。95は一木造りの高杯の杯部の破片である。杯部は緩やかに内湾しながら外上方に伸びており、脚部との境は明瞭である。頸部径は5.2cmである。杯部内面から外面に向って切断した痕跡が見られるほか、脚部と杯部を切断したあと、その切断面を加工している。96は残存高18.8cm、頸部径5.0cm、脚台径16.8cmの一木造りの高杯である。杯部は内底面から緩やかに内湾しながら立ち、内外面ともていねいに加工しているが加工痕は腐朽が進んでおり明らかでない。柱状部は裾部から杯部に向かって緩やかに膨らんでおり、脚台部は杯部に比べてやや小ぶりである。脚部の裏面は中央に横軸轆轤の軸受けとみられる楕円形の窪みがあり、外縁から幅約2.0cmが帯状の接地面で、これより内側が一段低くなる。杯部の内面から外面に向かって穿孔するほか、脚裾部を打ち欠いたあと、火にかけており、杯部・脚部ともに焼け焦げた痕がある。また、95と同様に杯部と脚部を右上方より切断するように壊そうとした形跡が確認された。97は残存高9.9cm、柱状部径5.4cmの一木造りの高杯の脚部である。外面は腐朽が著しく加工痕は不明である。柱状部は脚裾部に向って緩やかに膨らみながら伸び、脚台部の裏面には横軸轆轤の軸受けとみられる長方形の窪みがある。なお、脚台部裏面から柱状部に向って切断痕跡および脚部と杯部を切断した痕跡が認められる。98は残存高14.9cm、柱状部径5.6cmの一木造りの高杯の脚部である。柱状部は脚台に向って徐々に細くなる。器体の外面には一部鉄製工具による加工痕が見られる。脚台部の裏面には横軸轆轤の軸受けとみられる長方形の窪みがある。脚台部外面も鉄製工具による加工痕がある。なお、杯部と脚部は切断されており、脚部に右斜方上面より切断しようとした痕跡がある。

99は脚高7.0cm、脚径4.2～4.8cmの四脚容器の脚部で、脚部はいずれも下方に開く円柱状を呈している。脚部ならびに底部は内外面ともに腐朽が著しいため加工痕は明らかでない。形態や大きさは四條畷市雁屋遺跡の１号・２号方形周溝墓の周溝から出土した四脚容器[四條畷市教育委員会1987]に類似

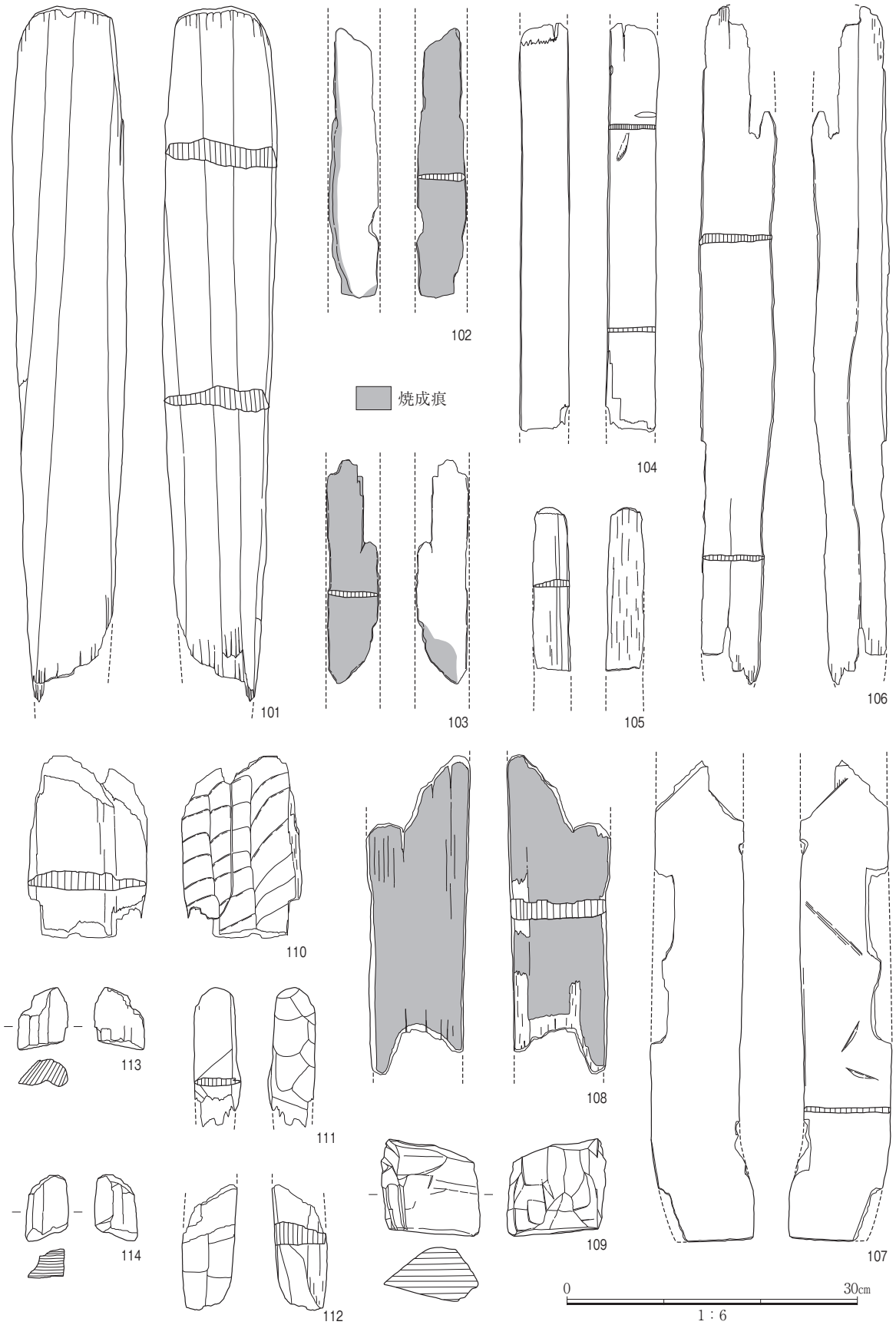


図30　Ｙ１号墳丘墓周溝出土木製品実測図（３）

東周溝：101・104～114、西周溝：102・103

するものであろう。

100は**西周溝**から出土した四脚容器の蓋で、口径22.3cm、高さ2.0cmある。器面の腐朽が著しいため、垂下した口縁部の形態は断定しがたいが、断面三角形の可能性がある。蓋の天井部外面の中央には、双頭渦文の浮き彫りがわずかに残っている。器体外縁部の約1/3を打ち欠いている。木取りは板目取りである。

d.「墓標」およびチップ・用途不明木製品ほか

101は東周溝から出土した残存長71.9cm、幅11.6cm、厚さ3.3cmの板状木製品で、丸味をもつ頭部が下端よりやや幅がある。板はみかん割りした材を縦に割り取っており、中央部が隆起している。樹種はコウヤマキで、木取りは柾目取りである。形状や法量を考慮すると、墳丘上に立てられていた可能

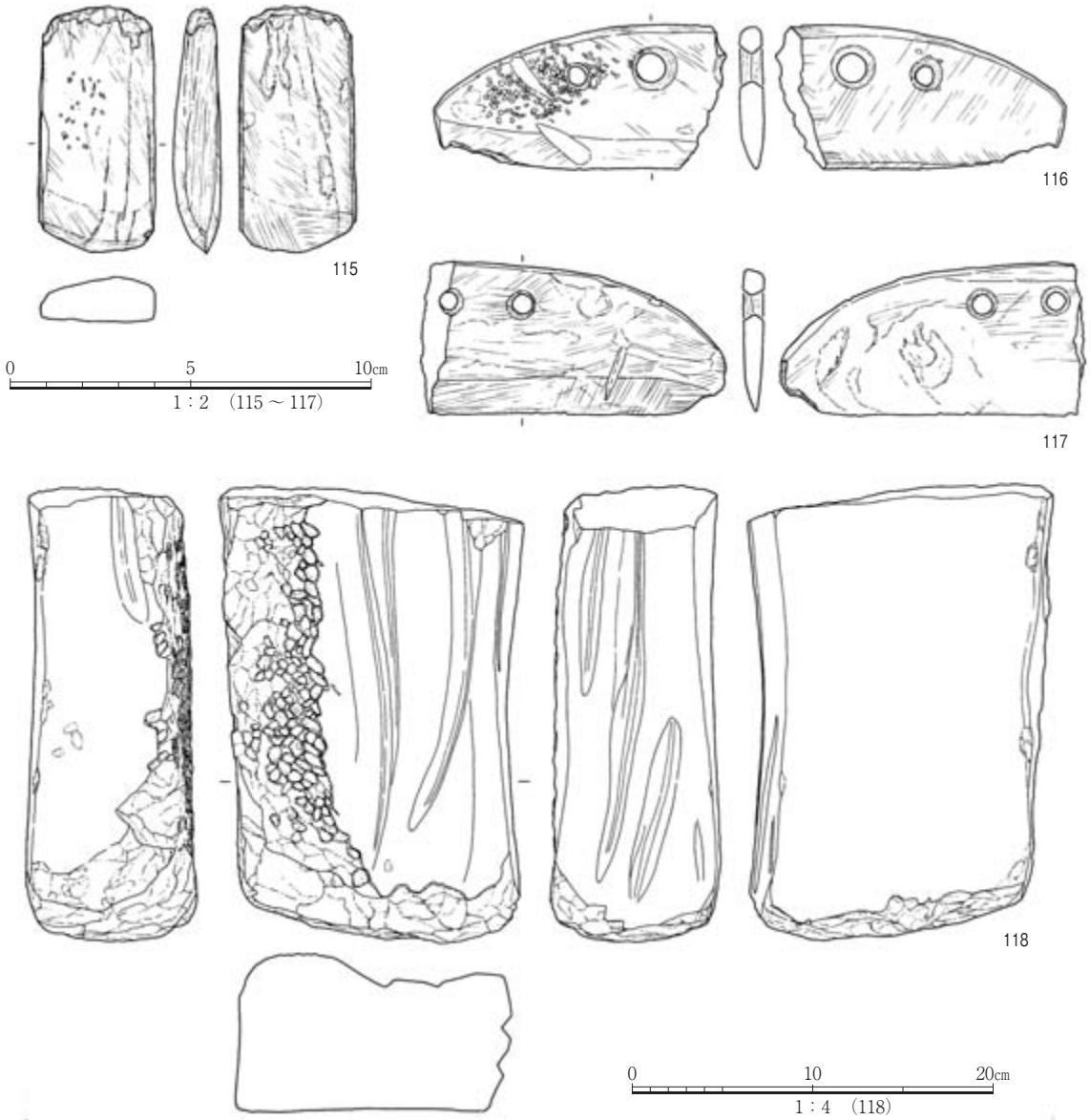


図31　Ｙ１号墳丘墓周溝出土石製品実測図
東周溝：115・116・118、西周溝：117

性が高く、墓標状の目印としての用途が考えられる(註４)。

102・103は**西周溝**から出土した薄板で、両面とも焼けており、前者は幅5.1㎝、厚さ0.9㎝、後者は幅5.3㎝、厚さ0.6㎝ある。樹種はコウヤマキで、木取りは柾目取りである。

104～106は**東周溝**の墳丘の中央南寄りで出土した薄板である。104は幅5.1㎝、厚さ0.5㎝、105は幅3.8㎝、厚さ0.7㎝、106は幅7.8㎝、厚さ1.1㎝ある。105の一端は丸く加工されている。これらの樹種はコウヤマキで、木取りは柾目取りである。用途は「墓標」の可能性があるものである。107は**東周溝**の北部から出土した幅9.5㎝、残存長49.7㎝、厚さ0.6㎝の薄板で、下端とした側が内にわずかに曲がっている。樹種はコウヤマキで、木取りは柾目取りである。「墓標」の可能性があるものである。108は**東周溝**の南部から出土した幅10.6㎝、厚さ2.2㎝の上下端を欠損した板材である。表裏面とも焼けて炭化している。樹種はコウヤマキで、木取りは柾目取りである。焼けているが「墓標」の可能性のあるものである。109は**東周溝**の墳丘の中央南寄りから出土した長さ10.0㎝、幅10.2㎝の各面に鉄製工具による切断痕が見られる断片である。樹種はコウヤマキで、木棺材を加工した際の切り屑であろう。110～114も**東周溝**の墳丘の中央南寄りから出土した幅4.4～12.4㎝、厚さ0.9～3.0㎝のコウヤマキのチップである。いずれも表裏面に鉄製工具の加工痕が顕著に見られるもので、木棺材を細部調整した際に生じたものであろう。同様のチップは**東・西周溝**の墳丘基底部に近い場所から多数出土したことから、**Ｙ１号墳丘墓**では組合式木棺の棺材の細部調整を墳丘墓内で行っていたことを証明するものとなっている。

ⅲ)石製品(図31、図版45)

115は**東周溝**の南部の底面から出土した長さ6.8㎝、幅3.3㎝、厚さ1.4㎝の扁平片刃石斧で、頭部には使用時の衝撃により欠けたとみられる傷がある。表裏面ならびに両側縁部には研磨時の磨痕がある。石材は緑色片岩である。116は**東周溝**の南部の底面から出土した長さ4.0㎝、残存幅8.1㎝、厚さ0.7㎝の緑色片岩製の磨製石庖丁で、中央の紐孔から左側を欠損している。表裏面ともていねいな研磨で整形しているが、片側に敲打痕がある。刃部は片刃で、使用痕が顕著に見られる。紐孔が３孔あるので欠損したあとも穿孔して使用した可能性がある。117は**西周溝**南西部から出土した長さ4.3㎝、残存幅8.5㎝、厚さ0.6㎝の緑色片岩製の磨製石庖丁で、右側を欠損している。表裏面とも研磨で整形しているが、素材の凹みが残っている。刃部は片刃で、使用痕が見られる。紐孔は２孔あり、ともに両面から穿孔している。118は**東周溝**南部の底面から出土した長さ26.0㎝、幅16.9㎝、厚さ9.4㎝の和泉砂岩製の砥石である。砥石の表面として図示した側に鋭利な金属器を砥いだ際にできた２条の細長い溝が残っている。側面の片側にも大小４条の鋭利な金属器を砥いだ際にできた溝がある。裏面は砥ぎ傷の無い滑らかな面であることから、刃幅の広い金属器を砥いだものと思われる。小口面は片方が折れており、もう片方も風化が進んでいる。表面および側面に敲打痕が見られる。調査当初、石材や風化を考慮した上で鋳型の転用も視野にいれて砥石を観察したが、鋳型を転用した根拠になるものは確認されなかった。

註）

（1）**Y1号墳丘墓**の層序と築造過程については大阪文化財研究所の趙哲済による研究成果がすでに提示されている[趙哲済1999]。これによると墳丘は周溝を掘った掘削土で積まれたこと、周堤が墳丘に伴って積まれたこと、墳丘は特異な積み方であったこと、築造過程についてはⅣ期に分けて復元している。本報告では原資料というべき墳丘の測量図および墳丘の南北中央セクション西壁地層断面図を提示し、事実報告として記載した。趙が提示したⅣ期に分けた墳丘の築造過程については発掘調査時に議論し、統一見解としてまとめたものであり、本報告とも齟齬はない。**Y1号墳丘墓**の基盤層、埋積層などの層位学的知見をもとに検討しているので参照されたい。

（2）**Y1号墳丘墓**で確認されたような埋葬後の墳丘頂部を整地した一例として、東大阪市の瓜生堂遺跡の２号方形周溝墓が挙げられる。２号方形周溝墓でも墳丘頂部に暗色化しているが整地土であろう厚さ10～20㎝の粘土の偽礫を含む黒褐色砂質土層が見られる[瓜生堂遺跡調査会1981]。２号方形周溝墓でも予定された埋葬が終わったあとで墳丘頂部を均したものと考えられる。整地後の墳丘上面は一見平坦な印象を受けるが、埋葬に際して墳丘に墓壙を穿ち、組合式箱形木棺を組み上げた後、被葬者を納棺し、墓壙を埋め戻す行為を複数回繰り返すと墳丘上には土饅頭が点々と並んだものと想定される。

（3）本報告での河内の土器は、色調が褐灰色あるいは灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母粒を多量に含むいわゆる生駒西麓産の土器を指す。**Y1号墳丘墓**から出土した弥生土器は、生駒西麓産と色調が黄橙色･灰白色･灰黄色で、胎土中にチャート粒を含む低地部産の土器に二分される。しかし、１つの個体でありながら生駒西麓産と低地部産の胎土を使ったものもあるため、本報告では生駒西麓産の土器を河内の土器とした。河内の土器の胎土の採土地は、東大阪市～八尾市域の生駒西麓の扇状地から低地部であった可能性がある。

（4）河内地域では東大阪市の巨摩・瓜生堂遺跡の弥生時代後期前葉の第２号方形周溝墓[大阪文化財センター1982] や大阪市の喜連東遺跡B地点の弥生時代後期前葉の墳丘墓[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]で、埋葬施設の上から墓標とみられる人頭大の石が検出されていることから、**Y1号墳丘墓**の薄板についても墓標の可能性がある。

第３節　Ｙ１号墳丘墓の埋葬施設および出土遺物

Ｙ１号墳丘墓では既述したように23基の埋葬施設(主体部)を検出した。このうち成人が14人で、９人が幼児を含む子供であった。これらの成人および幼児を含む子供の埋葬に際しては、後述するように遺存状況の良し悪しはあったが、すべて組合式木棺を用いていた。まず、**Ｙ１号墳丘墓**の各主体部の配置状況について述べたあと、個々の主体部について報告する。

Ｙ１号墳丘墓の主体部は、その位置や方向などから図32に示したように墳丘の北部に位置する**１・２・14～16・22・23号主体部**と、墳丘のほぼ中央部を占める**３～11・17～21号主体部**、墳丘の南部に位置する**12・13号主体部**の３群に区分される。それは北群の木棺の主軸方位が南北方向の**22・23号主体部**以外はすべて東西方向であり、中央部の主体部の木棺の主軸は、東西方向の**19～21号主体部**以外は南北方向で、南群は**12・13号主体部**とも主軸は東西であった。そして人骨が遺存した成人は、主軸が東西方向の時は東枕で、主軸が南北の時は北枕であり、子供についても朱の位置から見て成人と変わらないものと思われた。したがって、**Ｙ１号墳丘墓**での成人被葬者の頭位は、東枕が７体で、北枕は７体であり、子供は東枕が３体で、北枕は６体である。以上が木棺の主軸方位ならびに被葬者の頭位から見た各主体部の配置状況についての概要である。

なお、**Ｙ１号墳丘墓**の中心埋葬と考える**５号主体部**は、墳丘中央のやや北寄りに位置しており、被葬者の頭位は北枕であった。**５号主体部**は後述するように、**19・20号主体部**に墓壙の一部を掘り込まれている以外にはほかの埋葬施設との切り合いが確認されないことから、本墳丘墓の築造の契機となった最初の埋葬とみておきたい。

以下**１号主体部**から順を追って各主体部について報告するが、**６号主体部**ならびに**17号主体部**のように番号が離れていても近接するものは番号の早い順から報告した。また、人骨および**２・14号主体部**から出土した円環型銅釧については、第Ⅳ章で記述するのでここでは必要最小限度に留めた。

１号主体部　墳丘の東北隅に位置する東西方向の主体部で、南側には並列する位置に**２号主体部**がある(図32・33、原色図版７・８、図版13・14)。墓壙は長さ270㎝、幅190㎝で、深さは検出面から40.0㎝あり、墓壙底から組合式木棺を検出した。組合式木棺は側板および底板、西小口板の一部以外は腐朽していた。底板上面の両端近くに小口板が立つ型式である。北側板は底板上に乗るが、南側板は底板の側面に接している。底板と小口板との接合部の形状は腐朽して明らかでない。蓋板は棺内に落ち込んでおり、中央が深く両端が小口板の近くで見られた。棺材の樹種はすべてコウヤマキである。墓壙の埋土は大きく二分され、木棺の周囲は緑灰色粘土の偽礫を主体とする第8c・９層が混り合った埋土で、側板の上端まで埋め戻していた。木棺の上面の埋土および棺内の流入土は砂・礫を多く含む茶褐色粘土質シルトで、埋土と棺内流入土は区別しがたかった。

被葬者は東頭位で顔面はやや右に向き、肘は深く屈曲して体側に付け、膝を軽く屈曲させて右側に倒した仰臥位の状態で埋葬されていた。左耳のあたりからガラス勾玉と小玉が各１点出土した(図33、原色図版８・14、図版14)。

119は長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.35cmのガラス勾玉で、体部はやや扁平に作られている。紐孔は直径0.1cmあり、鋳型によるガラス溶解時に紐孔に芯を入れて作っている。色調はコバルトブルーを呈し、カリウムを多く含むアルカリ珪酸ガラスである。120は直径0.6cmのガラス小玉で、紐孔は径0.15cmある。紐孔のある側がやや平坦であるが、気泡の状況からみて金属芯にガラス素材を巻き付けて作ったものと思われる。色調はコバルトブルーを呈し、カリウムを多く含むアルカリ珪酸ガラスである。

２号主体部　墳丘の東北部の**１号主体部**の南側に位置する東西方向の主体部である(図32・34・35、原色図版７・13・14、図版13～15)。墓壙は長さ310cm、幅125cm以上、深さは検出面から90cmある。墓壙の底で、組合式木棺を検出した。墓壙内の埋土は第10層の偽礫を少量含む第8b・8c・９層を主体とするが、墓壙の上部は酸化鉄で汚染された砂・礫を含む粘土質シルトであった。墓壙内東部の木棺

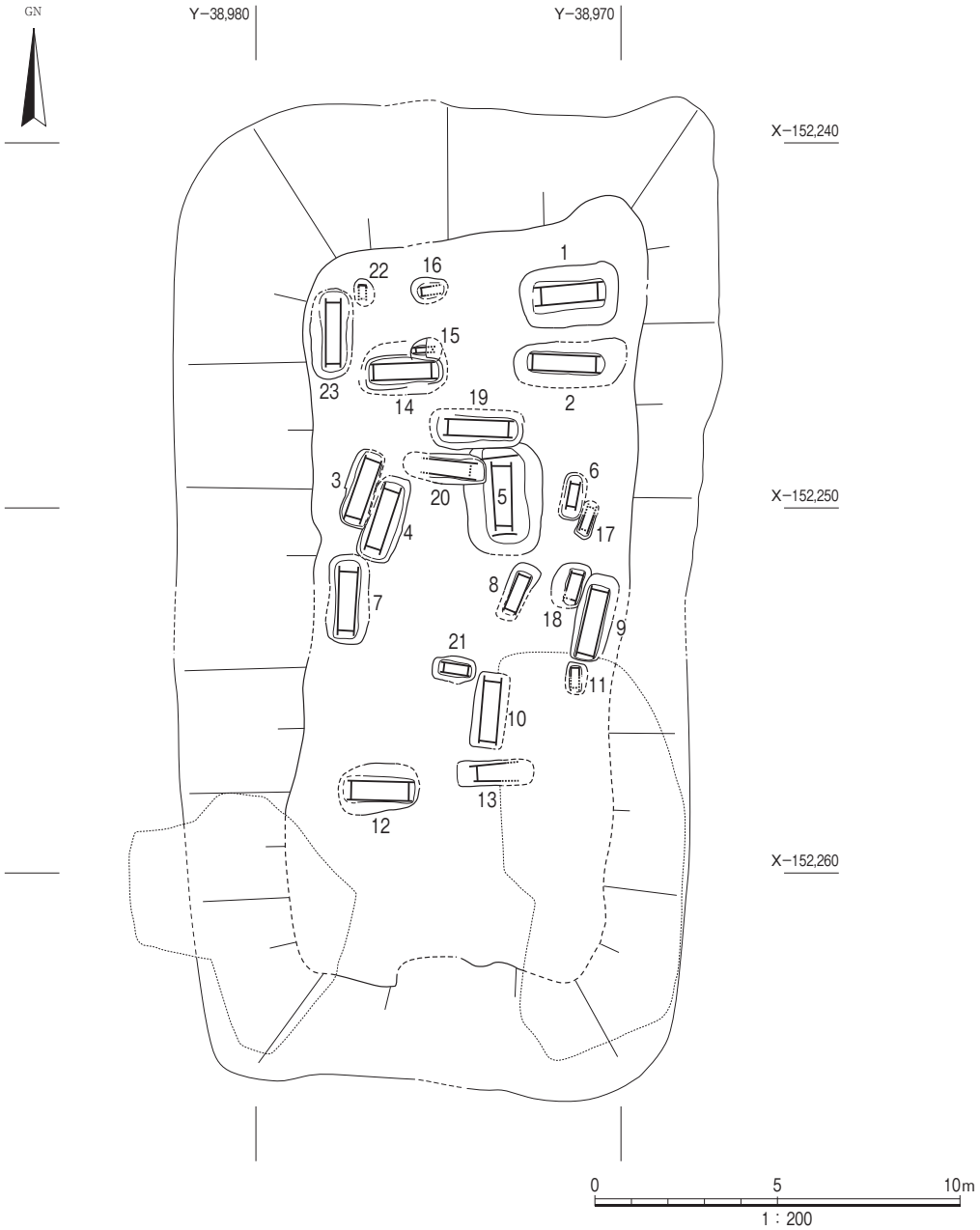


図32　Ｙ１号墳丘墓主体部配置図

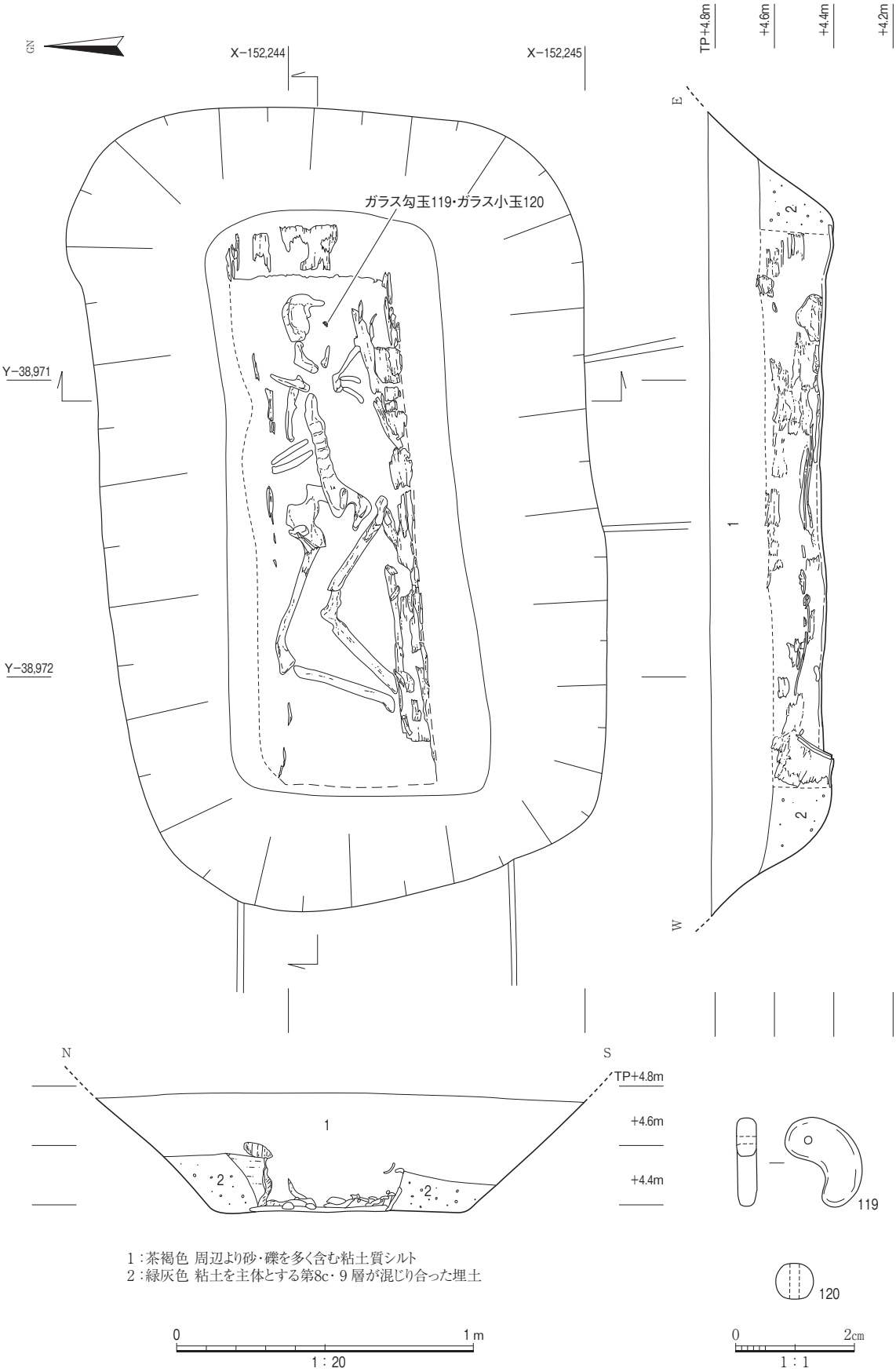


図33　Ｙ１号墳丘墓１号主体部平面・見透し断面図および着装品実測図

上の埋土内では、杯部を打ち欠いた高杯の脚部が焼土を伴って出土した(図34)。**Ｙ１号墳丘墓**では後述するように墓壙内や墓壙上から高杯や台付無頸壺、甕、水差しなどの供献土器が出土したが、**２号主体部**のように焼土を伴ったものはほかには確認されなかった。本例は、木棺を墓壙に納め、埋め戻す過程で火を焚き、杯部を打ち欠いた高杯を置く行為がなされたのち、墓壙内を完全に埋め戻したことを物語っており、弥生時代の葬送儀礼の有り様を示す希少な例である。底板の上面の両端近くに小口板が立つ型式の組合式木棺である。両側板とも底板上に乗る。底板と小口板との接合部は断定しがたいが、小口板の内側より外側が一段下がることから、ここに溝が切られていた可能性がある。蓋板は断片となって棺内に落下していた。木棺材はすべてコウヤマキで、蓋板はすでに大半が腐朽していたが、両側板や両小口板ならびに底板は比較的残りが良く、小口板は柾目材を縦方向に使用していた。

被葬者は東頭位で顔面はやや右に向き、右耳付近から三角形のガラス平玉が１点出土した。右肘は体側に付けて深く屈曲しており、手首には円環型銅釧を着装していた。また、両膝は揃えて軽く屈曲させており、右側に倒した仰臥位の状態で埋葬していた。なお、下顎骨付近には少量の赤色顔料(朱)の付着が認められた。

121は脚部径が12.0㎝の高杯Ａ類の脚部とみられるもので、脚裾部は柱状部から短く開く。裾端部の上端を肥厚しており、端部の内外面をヨコナデ調整している。柱状部ならびに裾部の調整は外面が縦方向の幅のあるヘラミガキで、内面はシボリメおよび時計回りのヘラケズリである。二次的な被熱を受けており、器面が白味をおびた浅黄褐色を呈する。胎土中に長石･チャート･石英･雲母･シャモット粒を含む。調査中に本資料と接合する杯部を探したが周溝内および墳丘上では確認されなかった。

122は長さ0.7㎝、幅0.65㎝、厚さ0.2㎝の三角形を呈するガラス平玉である(図35、原色図版14)。色調は淡いコバルトブルーで、外縁部を細かく調整している。鉛バリウムガラス製品の破片を再加工したガラス玉で、中央に片側から径0.1㎝の紐孔を穿っている。

123の円環型銅釧は、被葬者の右腕に着装されていた(図35、原色図版13、図版15)。被葬者の右腕が、肘関節から胸の上へ折り曲げられているため、手首辺りにある円環型銅釧は頭部とも近い位置にある。円環型銅釧の環体外形はほとんど正円に近いものである。環体の断面形は上下に平坦面をもち、内外側面の中央がやや丸みをもって張出している(図35、原色図版14、図版46)。法量は、直径6.20～6.47㎝、環体幅0.28～0.33㎝、環体高0.56～0.62㎝、重さ22.0ｇである。表面の色調は漆黒色を呈し、表面の成分分析を非破壊で行った結果、高濃度の銅(Cu)と錫(Sn)を検出しており、青銅系の合金であることがわかった。

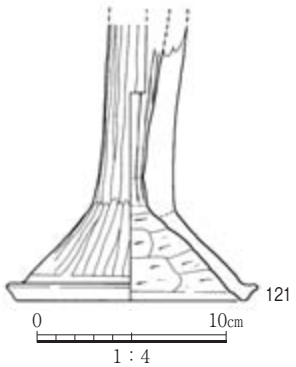


図34　Ｙ１号墳丘墓２号主体部墓壙内供献土器出土状況(南から)および実測図

３号主体部　墳丘の北西部、**４号主体部**の西側に並行して

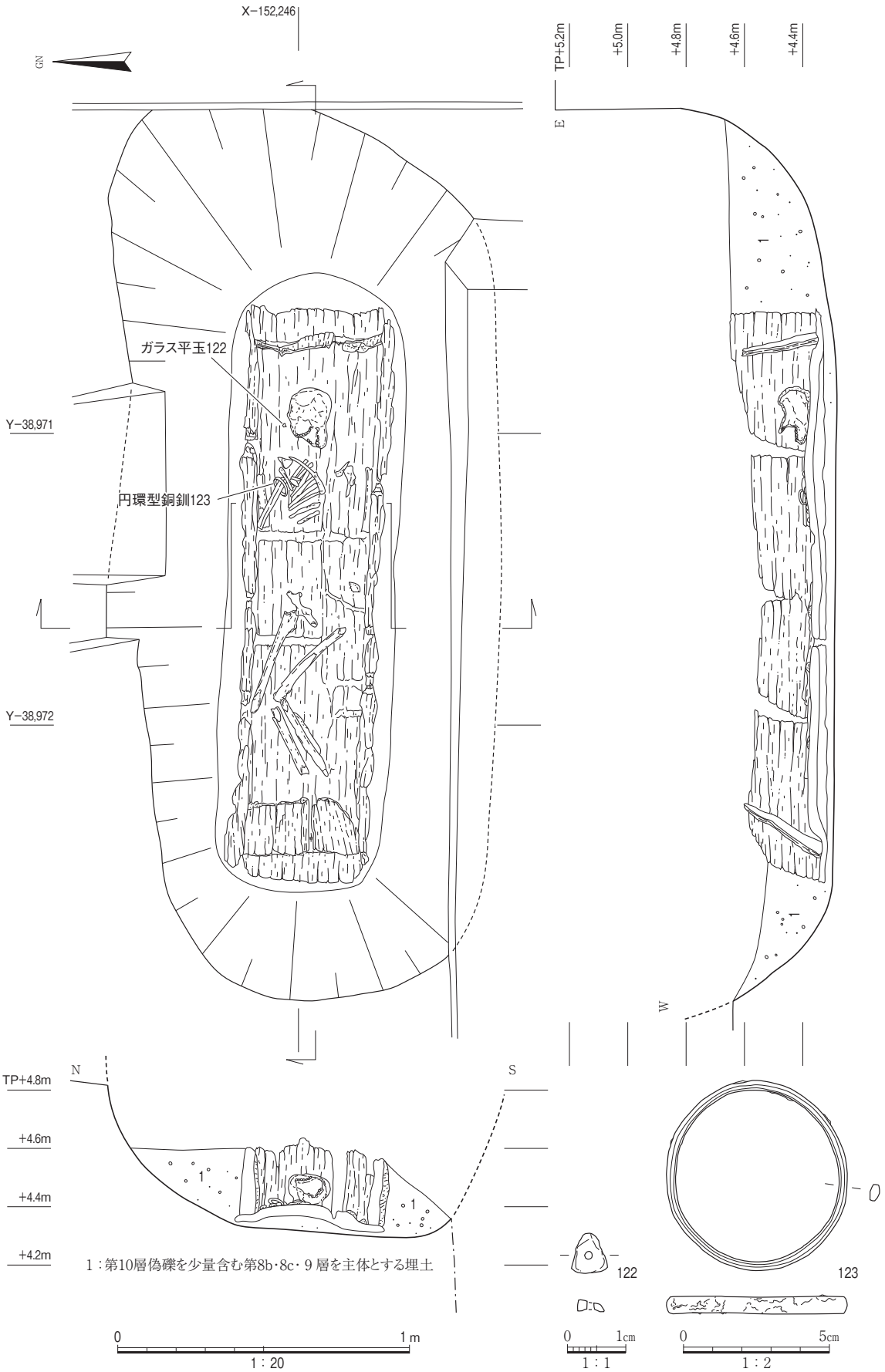


図35　Ｙ１号墳丘墓２号主体部平面・見透し断面図および着装品実測図

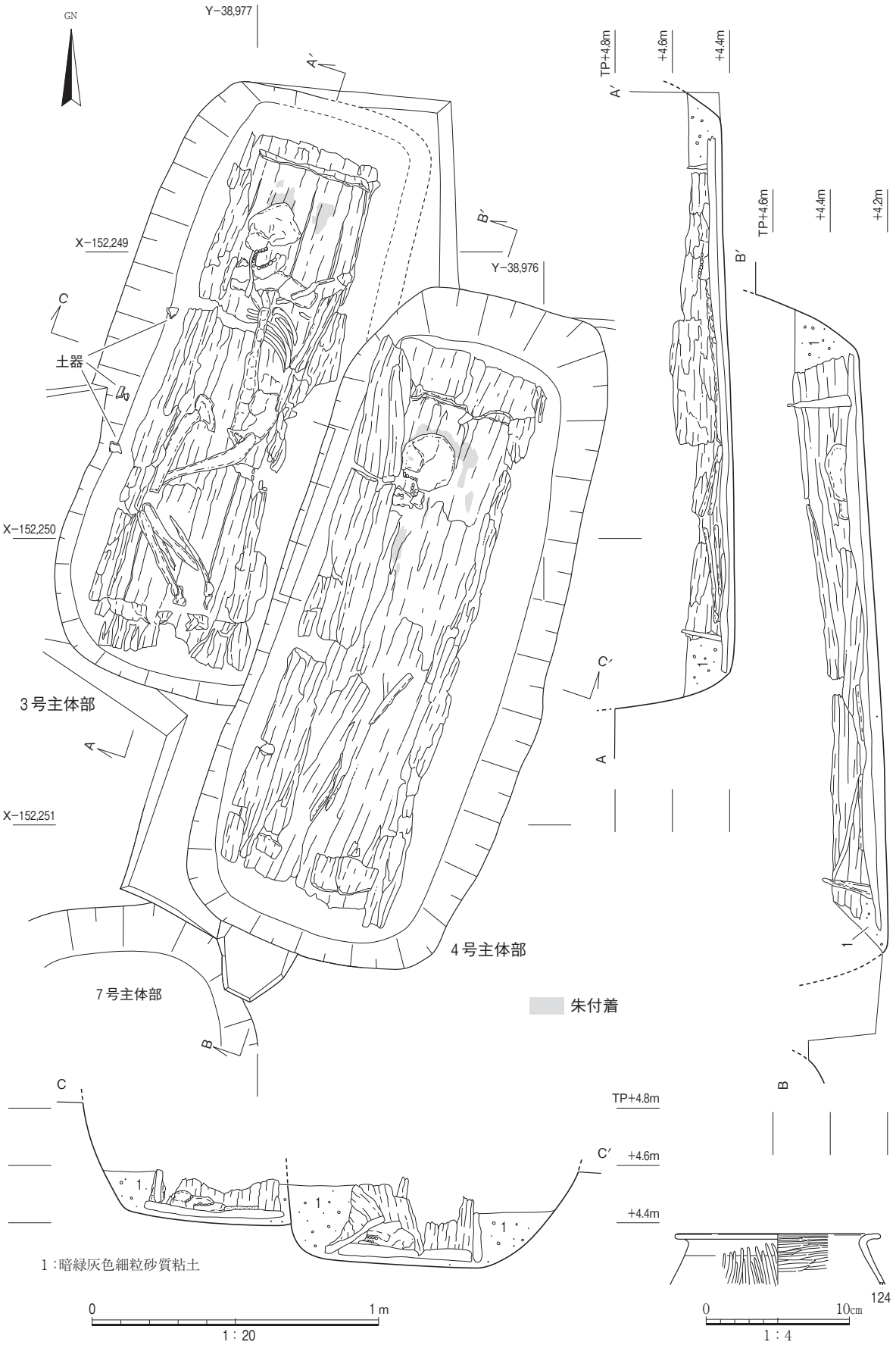


図36　Ｙ１号墳丘墓３・４号主体部平面・見透し断面図および供献土器実測図

位置する(図32・36、図版16)。墓壙は長さ215㎝、幅100㎝（推定)、深さは検出面から40.0㎝ある。組合式木棺が設置された墓壙内の埋土は、墳丘盛土がこなれた偽礫を含む暗緑灰色細粒砂質粘土であった。組合式木棺の底板は長さ186㎝、幅58.0㎝、厚さ3.0㎝あり、底板上の両小口板を両側から側板で挟み込み、底板の両端近くに小口板が立つ型式である。両側板とも底板上に乗る。底板と小口板との接合部は腐朽しており明らかでない。蓋板は断片となって棺内に落下していた。棺材はすべてコウヤマキであった。墓壙の東側を**４号主体部**の墓壙に掘り込まれていたが、**３号主体部**の組合式木棺の東側板は損傷を受けていなかった。また、墓壙内西部の浅い位置から破砕された小型の甕124が出土したが、これ以外には特に遺物は見られなかった。木棺内には北頭位の仰臥位で、顔面はやや右を向き、左右の肘を体側に付けて深く屈曲し、膝を軽く屈曲させて右側に倒した状態の被葬者が埋葬されていた。なお、頭蓋骨の後頭部のあたりに薄い赤色顔料(朱)が見られた。

124は口径14.4㎝の小型の甕Ａ類で、口縁部は頸部から水平に屈曲しており、同端部を丸くおさめる(図36)。口縁部の内外面をヨコナデ調整したあと、頸部の内面に横方向のヘラミガキを加え、頸部から体部の外面は縦方向のヘラミガキで調整している。体部の内面は逆時計回りのナデである。胎土に角閃石・雲母・長石粒を多量に含む河内の土器である。

４号主体部　墳丘の北西部、**３号主体部**の東側に並行して位置する(図32・36、図版16)。墓壙は長さ240㎝、幅100㎝(推定)、深さは検出面から35.0㎝ある。墓壙の埋土は、先述した**３号主体部**と変わらない墳丘盛土がこなれた偽礫を含む暗緑灰色細粒砂質粘土であった。組合式木棺の底板は長さ197㎝、幅65.0㎝、厚さ5.0㎝あり、底板上の両小口板を両側から側板で挟み込み、底板の両端近くに小口板が立つ型式である。両側板とも底板の側面に接している。底板と小口板の接合部の底板側に凹みが部分的に見られたので、溝が切られていた可能性がある。蓋板は断片となって棺内に落下していた。棺材はすべてコウヤマキであった。

被葬者は北頭位で、顔面を右に向けており、下顎骨はほぼ関節するが口をあけた状態である。四肢骨の残りはきわめて悪いが、伸展葬であろう。頭蓋骨の周辺ならびに歯牙には、一部赤色顔料(朱)の着色が見られた。

５号主体部　**Ｙ１号墳丘墓**の墳丘中央部よりやや東北に寄った場所に位置しており、主体部の西北部を**19・20号主体部**に掘り込まれている(図32・37、原色図版７・９・10、図版13・17・18)。墓壙の主軸は墳丘墓の主軸と同じ南北方向で、長さ290㎝以上、幅216㎝、深さは検出面から55.0㎝ある。墓壙の埋土は墳丘盛土の偽礫に比べて細かい砂粒混りシルト質粘土の偽礫を含む暗灰黄色シルト質粘土が主体であった。墓壙南部の浅い位置から体部の上半以上を打ち欠いた台付無頸壺125が出土した(図37、図版46)。

125は脚部径8.2㎝、脚部高5.2㎝の台付無頸壺で、口頸部を打ち欠くほか、体部下半を穿孔している。最大径は張りのある体部の下半にあり、外面を櫛描簾状文で加飾している。無頸壺と脚部を連続して成形しており、柱状部に粘土円板を内面から充填したあとハケを加えている。体部下半の調整は外面が孤状ならびに横方向のヘラミガキで、内面は横方向のナデである。柱状部から脚裾部にかけての調整は外面が縦方向のナデから同方向のヘラミガキで、内面は横方向のナデおよびヨコナデである。胎

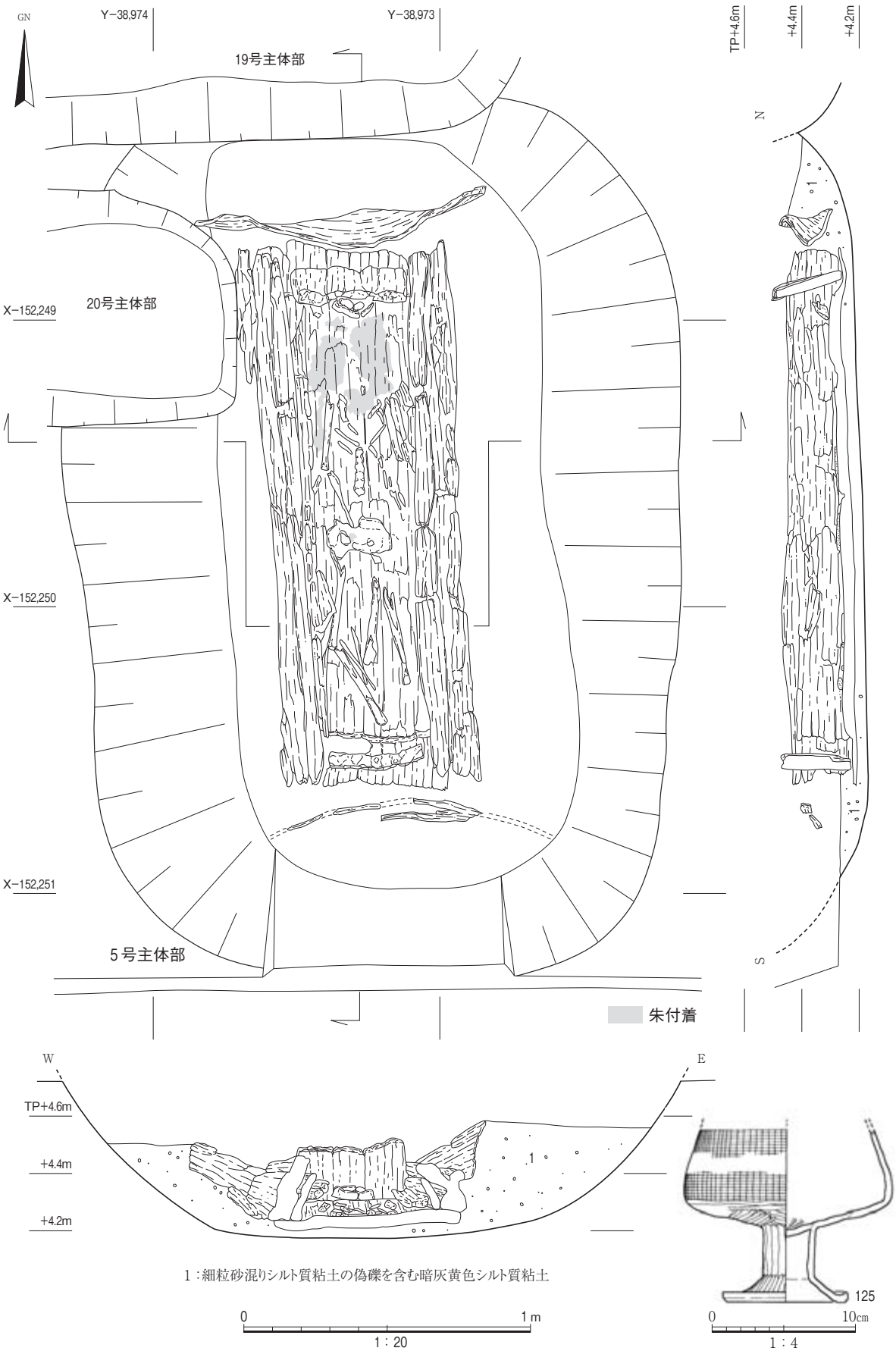


図37　Ｙ１号墳丘墓５号主体部平面・見透し断面図および供献土器実測図

土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。

本主体部の構造は、後述するようにほかの主体部の組合式木棺と比べて異例な構造であり、部材は残っていたものはすべてコウヤマキであった。埋葬施設の平面および断面図にも示したように各部材の接合部は腐朽して残っていなかったほか、側板や外側の小口板も腐朽が進んで残りが悪く、小口板と側板の組合せ関係については不明な部分もあった。しかし、腐朽し大きく変形した部材を本来の位置に復元しながら、各部材の組合せを検討した結果、以下のような埋葬施設の構築過程ならびに図38に示すような構造を復元しえた。

まず、墳丘に底が平らな墓壙を掘り下げて、その中央やや西寄りに幅65.0㎝、長さ190㎝以上の底板を置き、この両端に外側の小口板を底板に沿って設置し、次いで内側に２枚の小口板を溝か段に立て両側板で挟んだあと、底板に沿って外側の側板２枚を立て、これを小口面の両側から押えるように側板を差し込む溝穴を彫った長さ110㎝以上、幅30㎝以上の外側の小口板を設置している。これらの一連の作業を行いながら適時埋めて、側板および外側小口板の上端近くまで埋め戻したようである。このあと、被葬者を棺内に納めて葬送の儀式が執り行われたのち、内側の小口板の上に落し込むように蓋板を被せ、次いで外側の小口板ならびに側板を覆うように２枚目の蓋板をしたあと、墓壙内を埋め戻している。以上のような構造の埋葬施設については、底板は１枚であるが、これ以外の側板・小口板・蓋板が２枚ずつあることから、調査時には２重木棺と呼んだ。しかし、被葬者を納めた棺内の内側の小口板と外側の小口板間に２箇所の空間が生まれること、底板は１枚ながら側板・小口板・蓋板がそれぞれ２枚あることを重視して、中国の前漢代の貴族階層以下の有力者が用いたような木槨の構造に系譜の辿れる、弥生時代中期後葉の列島内では稀な木槨の一種とみておきたい。

一方、被葬者は頭部を北にし、頭蓋骨は圧砕され後頭骨と思われる骨片は原位置よりやや上方にずれた位置にあった。右脛骨は遠・近位が逆になっており、左脛骨は大腿骨とほぼ並行し外側に位置するが、ほかの骨には大きな移動は認められなかった。仰臥位で埋葬されたものと思われる。被葬者の頭部から腹部にかけて赤色顔料(朱)が残っており、最も厚い部分は0.5㎝あった。なお、朱が撒かれ

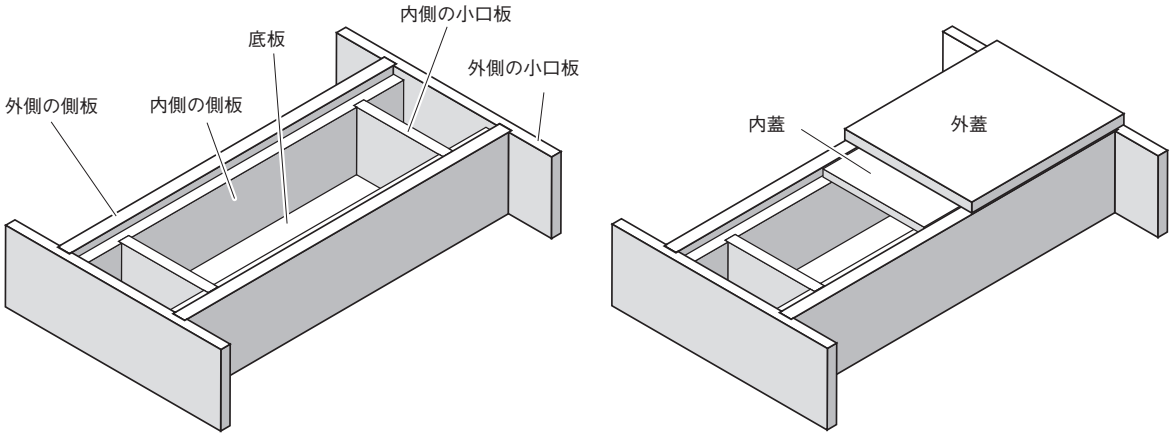


図38　木槨の構造

た範囲は、**Ｙ１号墳丘墓**の中では本主体部が最も広く、朱の残存量も多かったが、貴重な多くの朱を確保し、木槨に埋葬された**５号主体部**の被葬者の地位は**Ｙ１号墳丘墓**の中心埋葬者として相応しい人物であったとみて大過ないであろう。

６号主体部　**５号主体部**の東側に隣接する南北方向の主体部で、南東に接して並列する**17号主体部**がある(図32・39、原色図版７、図版13・19)。ともに調査時に設定したトレンチによって墓壙ならびに木棺が壊れており、残りは良くない。**６号主体部**の墓壙は長さ130㎝、幅65㎝前後、深さは検出面から20㎝前後ある。埋土は粘土偽礫を含む灰黄褐色シルト質粘土である。墓壙内には両小口板間の長さ67㎝、側板間の幅30㎝の組合式木棺があった。底板の両端近くに小口板が立つ型式である。両側

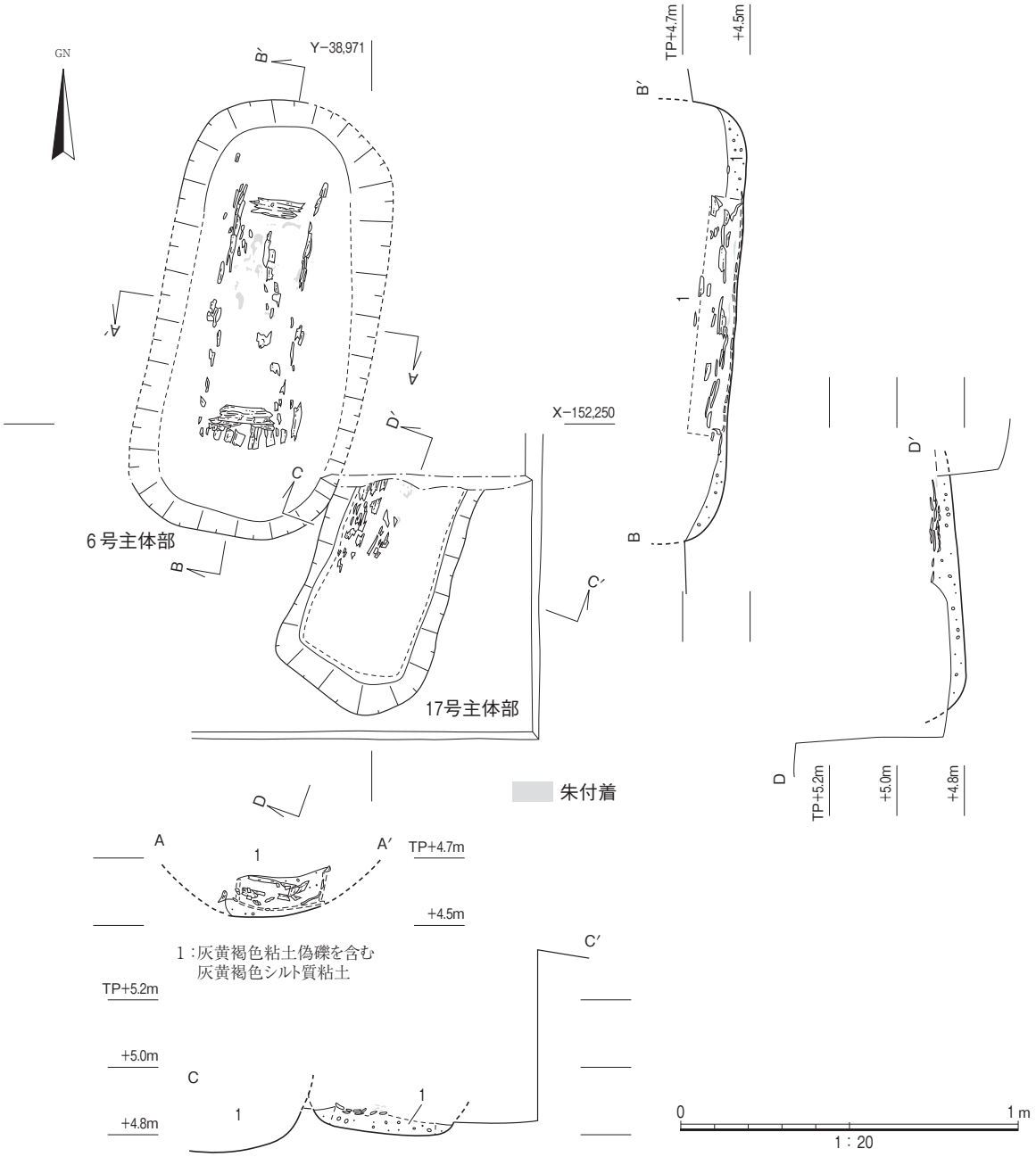


図39　Ｙ１号墳丘墓６・17号主体部平面・見透し断面図

板ともに底板の側面に接している。底板と小口板の接合部は腐朽して明らかでない。蓋板も腐朽しており、断片となって棺内に落下していた。棺材の厚さは1.0～2.0cmあり、樹種はコウヤマキである。木棺内には被葬者の歯・骨は残っていなかったが、北部に赤色顔料(朱)が見られた。木棺の小口間の長さは67cm、側板間の幅が30cmあることから、被葬者は子供で、北枕であろう。

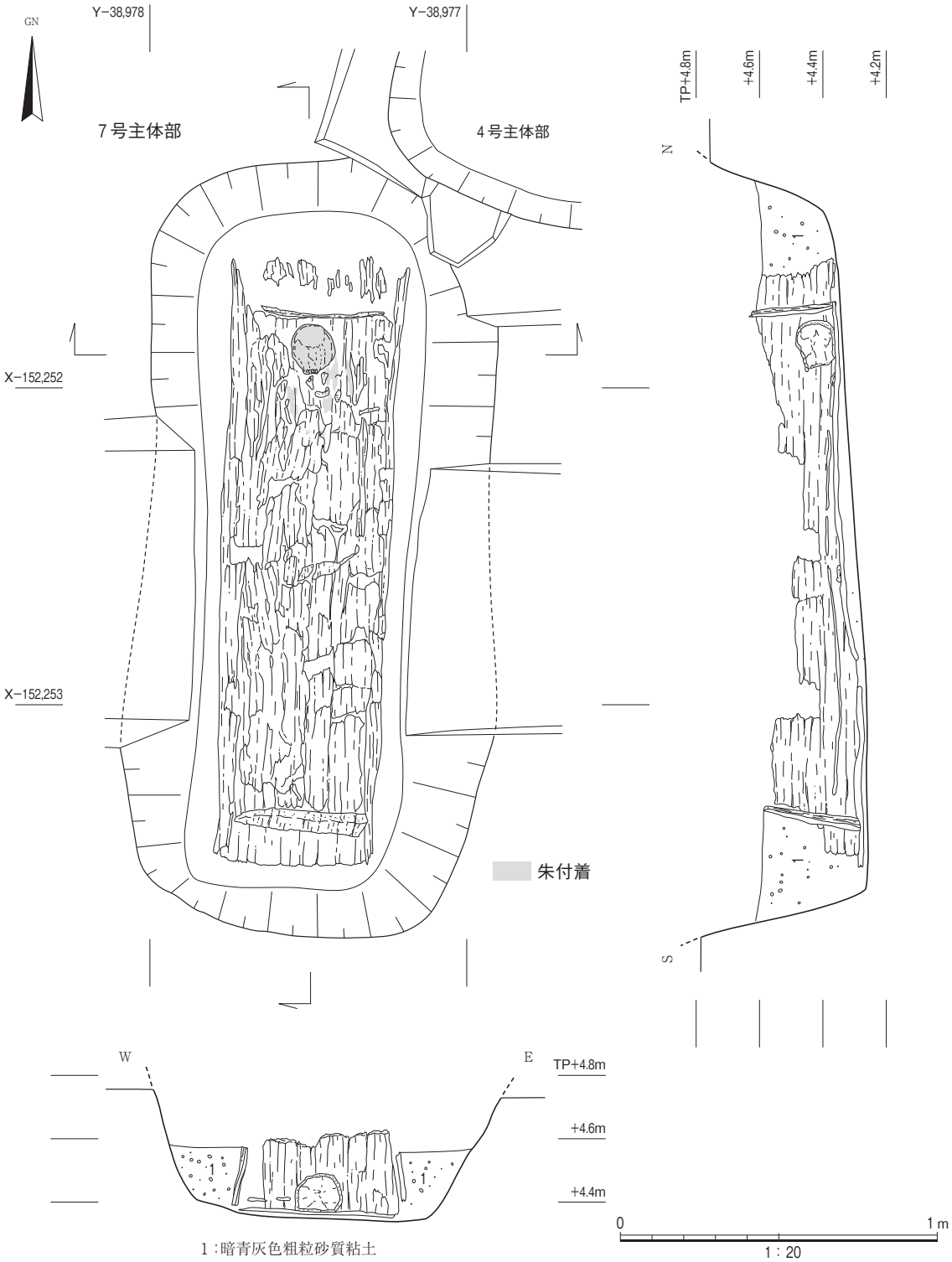


図40　Ｙ１号墳丘墓７号主体部平面・見透し断面図

17号主体部　**６号主体部**の南東部に接する位置にある主体部で、北部はトレンチで壊れており、全容については明らかでない(図32・39、原色図版７、図版13・19)。墓壙は長さ75cm以上、幅46cm、深さは検出面から8.0cm前後ある。埋土は粘土偽礫を含む灰黄褐色シルト質粘土である。墓壙内の西側寄りに組合式木棺とみられる破片があったほか、墓壙の底面で底板の痕跡を確認した。棺材はコウヤマキで、一部に赤色顔料(朱)が見られた。棺内には被葬者に関するものはなにも見られなかったが、墓壙の大きさからみて被葬者は子供と思われる。

７号主体部　**Ｙ１号墳丘墓**の中心部から墳丘の西端近くに寄った位置にある南北方向の主体部で、これの東側７ｍのほぼ並列する位置に**９号主体部**がある(図32・40、図版18)。墓壙は長さ243cm、幅118cm、深さは検出面から50cm前後あり、東北部を**４号主体部**の掘形に切られていた。埋土は盛土のこなれた偽礫を含む暗青灰色粗粒砂質粘土であった。墓壙内の組合式木棺は長さ192cm、幅57cmで、厚さは2.0～3.0cmあったが残りが悪く、小口板を立てる部分が溝か段かについては明らかでない。底板の両端近くに小口板が立つ型式の組合式木棺である。側板と底板の接合部も腐朽して残りが悪かっ

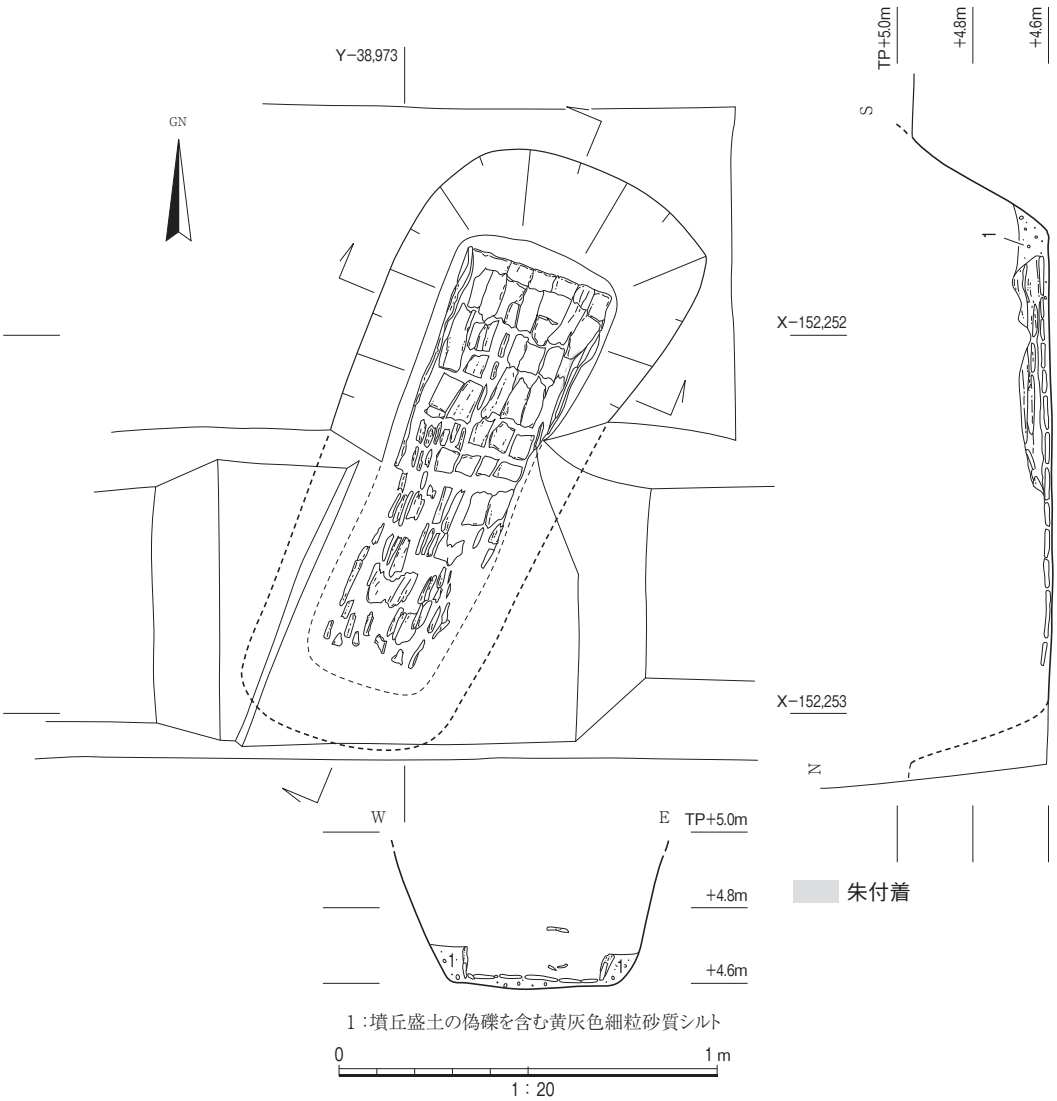


図41　Ｙ１号墳丘墓８号主体部平面・見透し断面図

たが、両側板とも底板に乗る。棺内には厚さ2.0cm前後の蓋板が落ち込んでいた。棺材はコウヤマキであった。

被葬者は頭部を北にして顔面はほぼ正面を向き、頭蓋骨付近には赤色顔料(朱)が撒かれていた。埋葬姿勢は伸展葬と推定されるが、頭蓋骨以外の人骨が残っていなかったので体位については明らかでない。

８号主体部　**５号主体部**の墓壙の東南部に近接した位置にある主軸をやや東に振る南北方向の主体部である(図32・41、図版19)。墓壙の南半分はトレンチの掘り下げで壊れてしまい明らかにしえないが、長さ160cm以上、幅75cm、深さは検出面から40cm前後ある。埋土は墳丘の盛土の偽礫を含む黄灰色細粒砂質シルトであった。

木棺は組合式木棺で、北小口板・両側板・底板のほか、棺内に落下した状態で小さな断片となった蓋板を確認した。底板の北端近くに小口板が立つ型式の組合式木棺である。木棺の南側については腐朽しており明らかでない。両側板も腐朽が進んでいたが、底板に接していた。棺内には北部で薄い赤色顔料(朱)が見られた以外に、被葬者の歯・骨は残っていなかった。底板の長さが110cm前後あり、幅が40cmあることから、子供が埋葬されていたものと思われる。

９号主体部　墳丘東側縁部の中央付近に位置する南北方向の主体部で、西側にある**18号主体部**の墓壙を掘り込むほか、南側には近接して**11号主体部**が位置している(図32・42、原色図版８、図版20)。

墓壙は長さ242cm、幅130cm、深さは検出面から55cm前後ある。埋土はこなれた粘土偽礫を含む暗灰色細粒砂質シルトであった。墓壙内には掘形の下場ラインに沿うように長さ202cm、幅58cmの底板が置かれ、これの上に両小口板を挟むように側板があった。

棺内の被葬者は南北方向で、頭骨は顔面を北側上方に向け、下顎骨は関節した位置にある。歯牙には赤色顔料(朱)が少量付着するほか、頭骨の回りにも赤色顔料(朱)が見られた。上肢は左右とも肘を体側に付け、肘関節は完全に屈曲し、尺骨は上腕骨の上に重なっている。下肢では大腿骨は左右とも粗線を右に向けている。右の大腿骨遠位部は左大腿骨遠位部の下になり、右腓骨の近位端が４cm程右に移動するがそのほかの骨は原位置にあった。なお、組合式木棺の蓋板は腐朽が進んでおり、旧状を留めていなかったが、底板および両側板については良く残っていた。また、両小口板は腐朽が進み0.05cm×10cm大であったが、木取りは柾目取りで、小口板の方向は北側が木目を縦に、南側は横にしていた。小口板と底板の接合部は腐朽が進んでおり、溝か段かについては明らかにしえなかった。底板の両端近くに小口板が立つ型式の組合式木棺である。両側板ともに底板上に乗る。東側板の両端には小口板の入る大きく抉れた溝の跡があった。棺材はすべてコウヤマキであった。

また、主体部掘形の東南部には、埋葬後に甕を横にして置いてあった。土器棺かとも思われたが、墳丘上を覆う最終埋葬後の整地層から器体が露出していたこと、内部に埋葬を裏付けるものが見られなかったことなどを考慮して、ここでは**９号主体部**の供献土器とみておきたい。

126は口径33.7cm、器高49.6cmの大型の甕Ａ類である(図43、図版46)。口頸部に強いヨコナデを加えて口縁部を水平に屈曲している。口縁端部を肥厚しており、外端面に点状の刺突文を波打つように施している。寸高で細身の器体の調整は外面が二段の縦方向のヘラミガキで、内面は不定方向にナデ

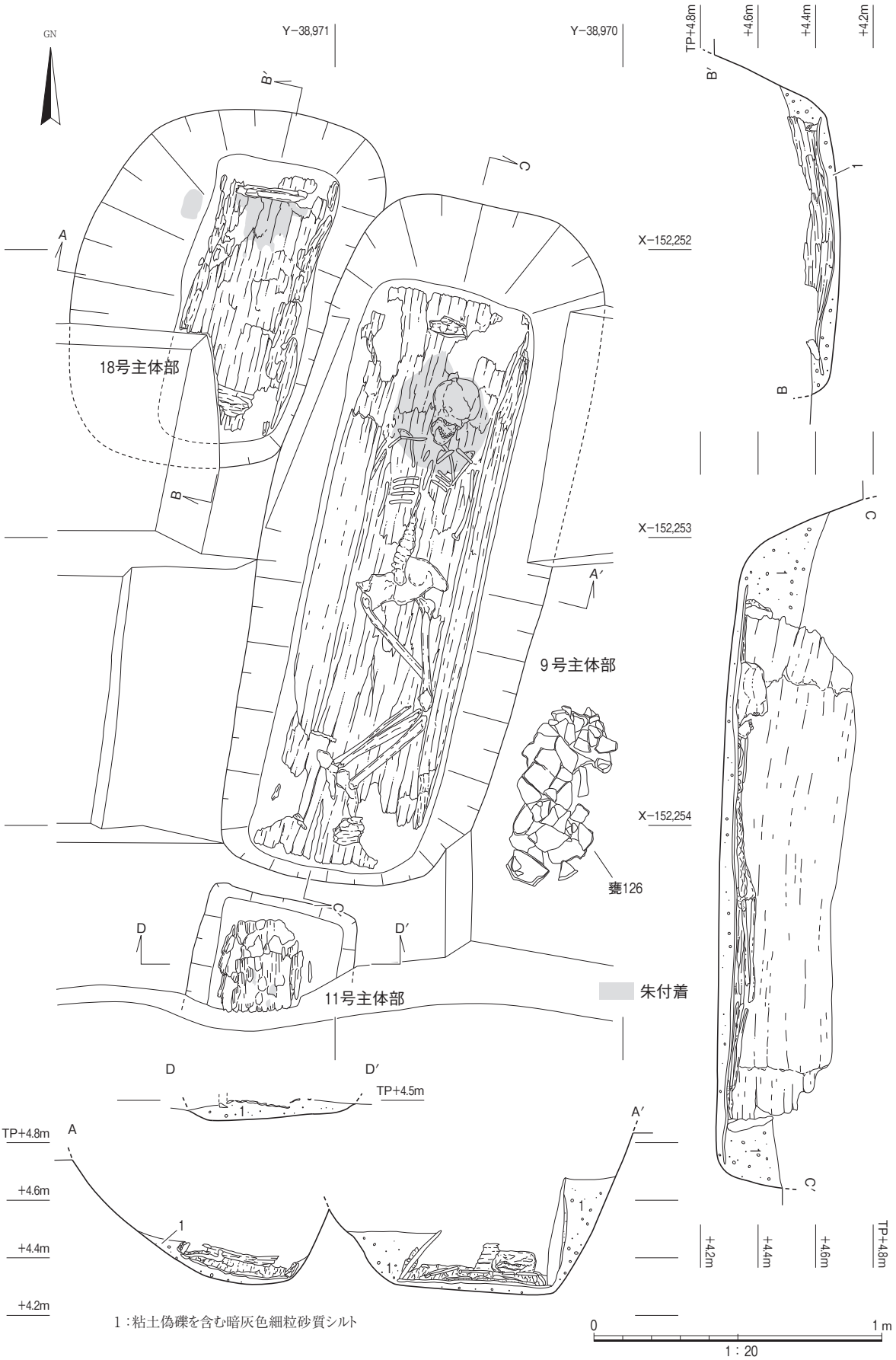


図42　Ｙ１号墳丘墓９・11・18号主体部平面・見透し断面図および供献土器出土状況

整えたのち、上半に横方向のやや疎らなヘラミガキを施している。底部裏面も一定方向のヘラミガキを加えて整えている。胎土中に角閃石・雲母・長石・石英粒を多く含む河内の土器で、畿内第Ⅳ様式中段階に属する土器である。

11号主体部　**９号主体部**の南側に接するように位置する主体部で、主軸は**９号主体部**と同じ南北方向である(図32・42、図版20・21)。主体部の南半分以上がトレンチの掘削で壊れてしまったが、墓壙は長さ43cm以上、幅56cm、深さは検出面から5.0cmで、埋土は粘土の偽礫を含む暗灰色細粒砂質シルトである。墓壙内には長さ35cm以上、幅33cmの組合式木棺が残っており、各部材は腐朽していたが、同定の結果コウヤマキであった。墓壙ならびに組合式木棺の規模からみて、被葬者は小児と思われる。なお、本主体部は盛土の浅い位置から検出されており、遺存状態は悪く、わずかに赤色顔料(朱)がみとめられたのみである。木棺の残りが悪く詳細は明らかでない。

18号主体部　**９号主体部**の西側に接するようにある主軸が南北方向の主体部で、墓壙を**９号主体部**の墓壙に掘り込まれている(図32・42、原色図版８、図版20・21)。墓壙は長さ126cm、幅90cm以上、深さは検出面から43cmあり、埋土は粘土の偽礫を含む暗灰色細粒砂質シルトである。墓壙内には長さ92cm、幅43cmの組合式木棺があり、厚さ0.2cmに満たない底板上に小口板・側板が残っており、北側の小口板の棺内側および棺外の西北部の埋土に薄い赤色顔料(朱)が見られた。底板上に両小口板および両側板が乗る型式の組合式木棺である。蓋板は断片となって棺内に落下していた。棺材はコウヤマキである。木棺の大きさからみて被葬者は子供と思われる。

10号主体部　**５号主体部**の南側６mに位置する南北方向の主体部で、墓壙および東側板の東部を現代の攪乱で破壊されていた(図32・44、原色図版10、図版22)。墓壙は長さ206

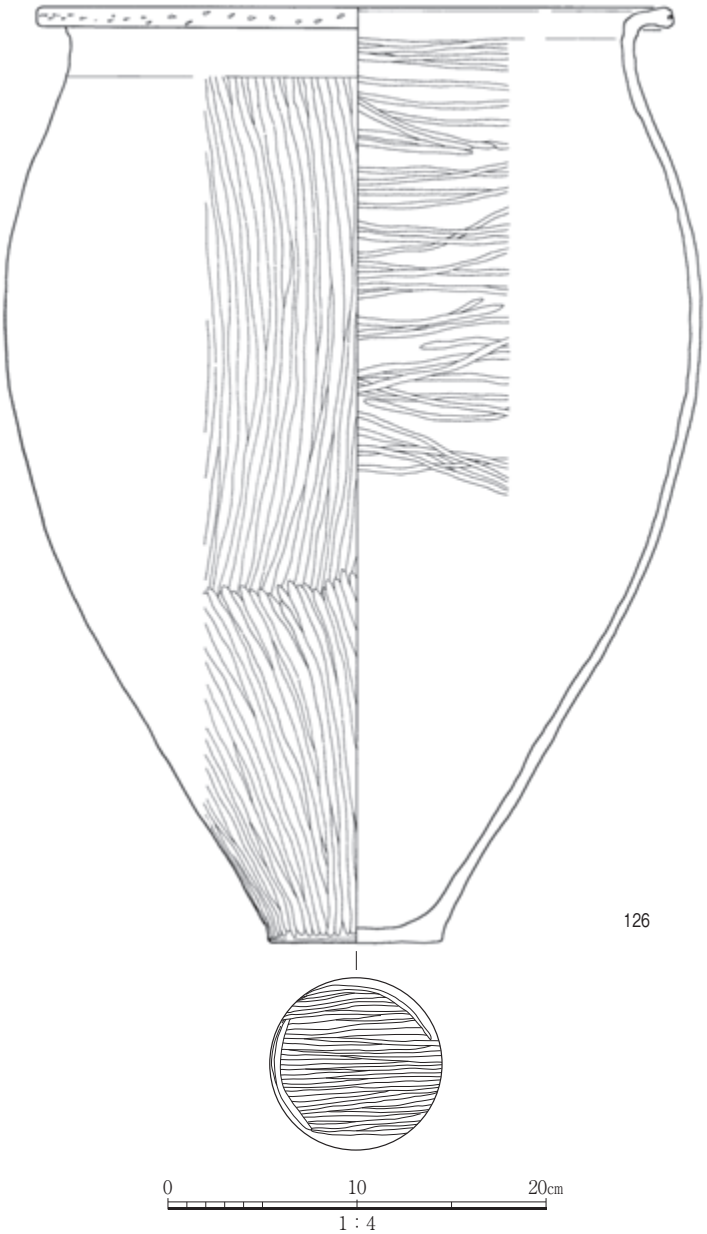
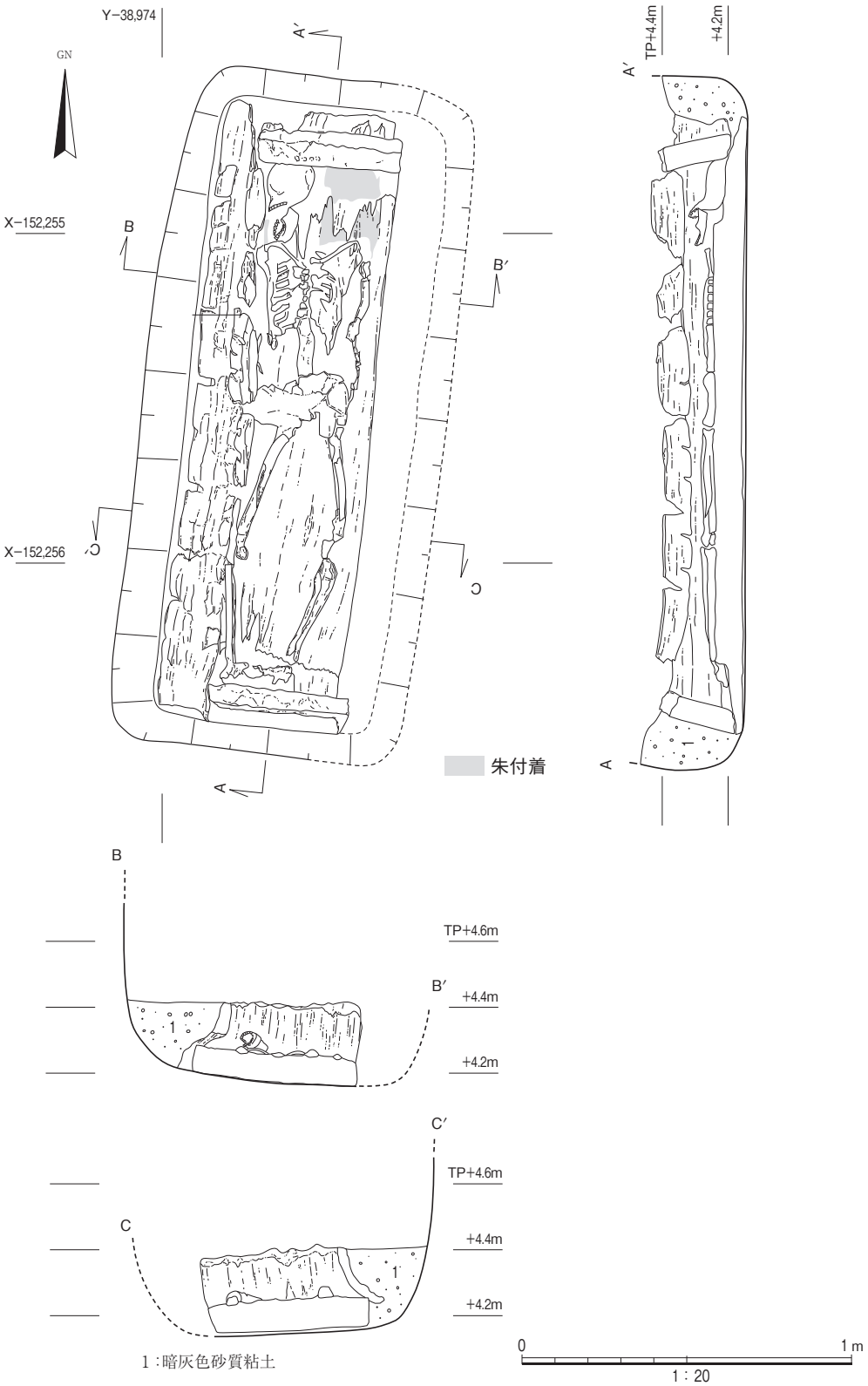


図43　Ｙ１号墳丘墓９号主体部供献土器実測図

cm、幅93cm以上、深さは検出面から55cm前後あり、埋土は暗灰色砂質粘土であった。組合式木棺は蓋板および側板以外は良く残っており、底板は長さ187cm、幅50cm前後、厚さ10cm前後ある。小口板は長さ20cm前後、幅44cm前後、厚さ0.7cm前後あり、これらの樹種は蓋板および側板を含めてコウヤ



1：暗灰色砂質粘土

図44　Ｙ１号墳丘墓10号主体部平面・見透し断面図

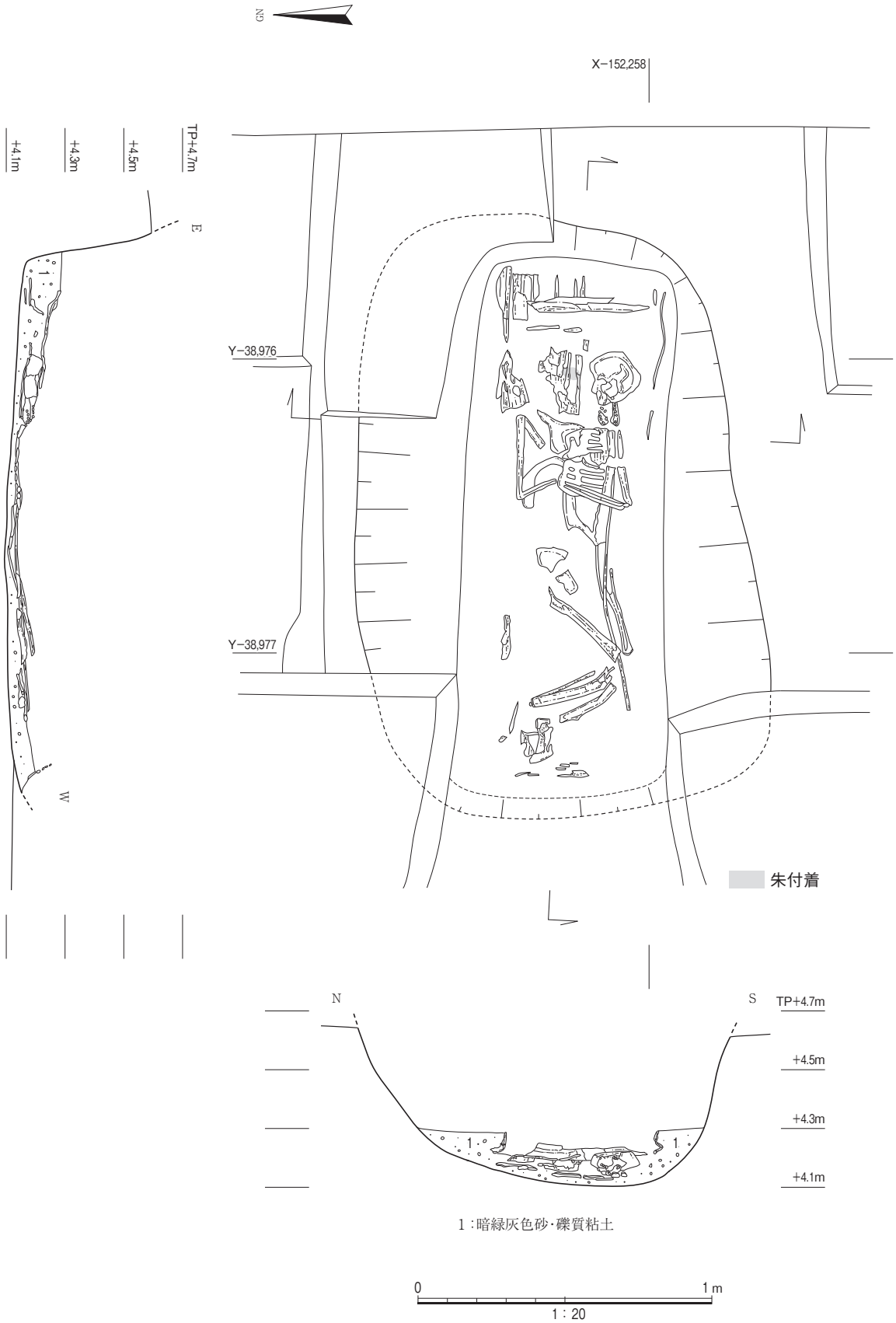


図45　Ｙ１号墳丘墓12号主体部平面・見透し断面図

マキであった。両小口板および西側板は底板上にあったが、小口板と底板の接合部は腐朽が進んでおり、溝か段かについては明らかにしえなかった。なお、西側板の厚さは３～４cmで、蓋板の厚さは３cmに満たなかった。底板の両端近くに小口板が立ち、側板が底板上に乗る型式の組合式木棺である。東側板は現代の攪乱で破壊されていたが、西側の側板は少し外にずれていたが底板上に残っていた。蓋板は腐朽して全体にひび割れていたがほぼ水平を保つ。

組合式木棺内の被葬者は、頭部を北に顔面は右側を向き、上肢を躯幹に添って伸展し、下肢はO脚になるような位置で、仰臥伸展葬されていた。歯にはごく微量の赤色顔料(朱)が付着していたほか、頭骨の東側には赤色顔料(朱)が撒かれていた。

12号主体部　Ｙ１号墳丘墓の西南部に位置する東西方向の主体部で、東に約３m離れた位置に直列するように本主体部と同一主軸の**13号主体部**がある(図32・45、図版26)。墓壙は長さ190cm以上、幅140cm、深さは検出面から55cm前後ある。主体部の西部は調査時のトレンチで破壊されて明らかでない。埋土は暗緑灰色砂・礫質粘土である。墓壙内には組合式木棺と東枕の被葬者の人骨が残存していたが、ともに遺存状況は悪かった。木棺の部材は東端部で側板・小口板・底板が、西端部で小口板が一部残っていたのみであるが、両小口板間の距離は160cmであった。木棺は大半が腐朽していたが、東側がかろうじて残っており、これから見て底板に小口板および側板が乗る型式の組合式木棺である。蓋板は断片となって、棺内に落下していた。

被葬者は東頭位の仰臥位で、頭骨は圧迫されていたが顔面はやや左を向き、左右の肘は体側に付け深く屈曲し、腹部で手を合せていた。膝は軽く屈曲させて左側に倒した状態で埋葬されていた。被葬者は成人であるが、性別や年齢については人骨の遺存状況がきわめて悪かったため、明らかでない。頭骨にごく少量であるが赤色顔料(朱)が見られた。

13号主体部　10号主体部の南に近接して位置する東西方向の主体部であるが、中央部以東を現代の攪乱で、墓壙の西端を調査時のトレンチで失っており、全容は明らかでない(図32・46、図版23)。墓壙は長さ135cm以上、幅70cmで、深さは検出面から20cm前後ある。残りは悪いが、底板上に小口板および側板が乗る型式の組合式木棺である。埋土は極細粒砂や粘土の偽礫を含む暗緑灰色粘土質シルトである。墓壙内には底板・両側

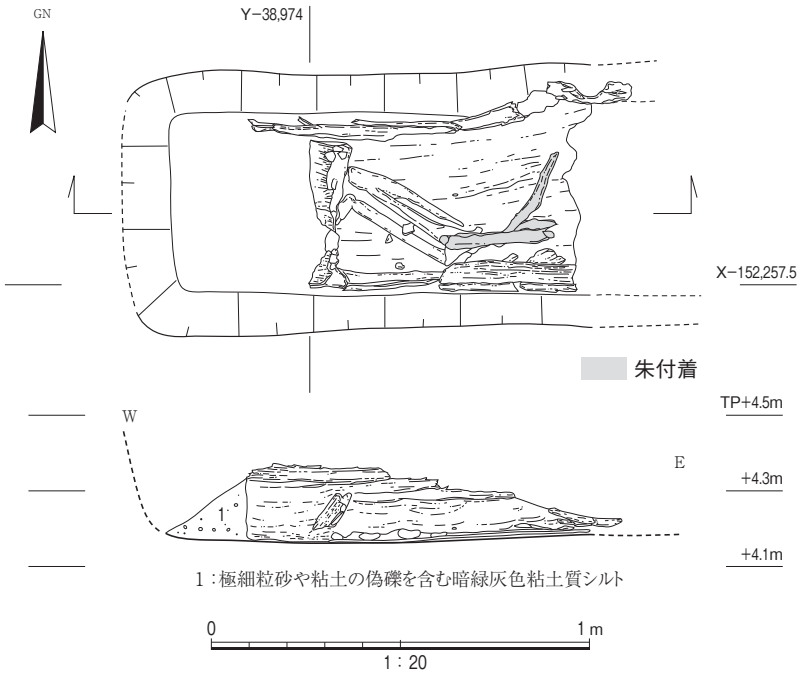


図46　Ｙ１号墳丘墓13号主体部平面・見透し断面図

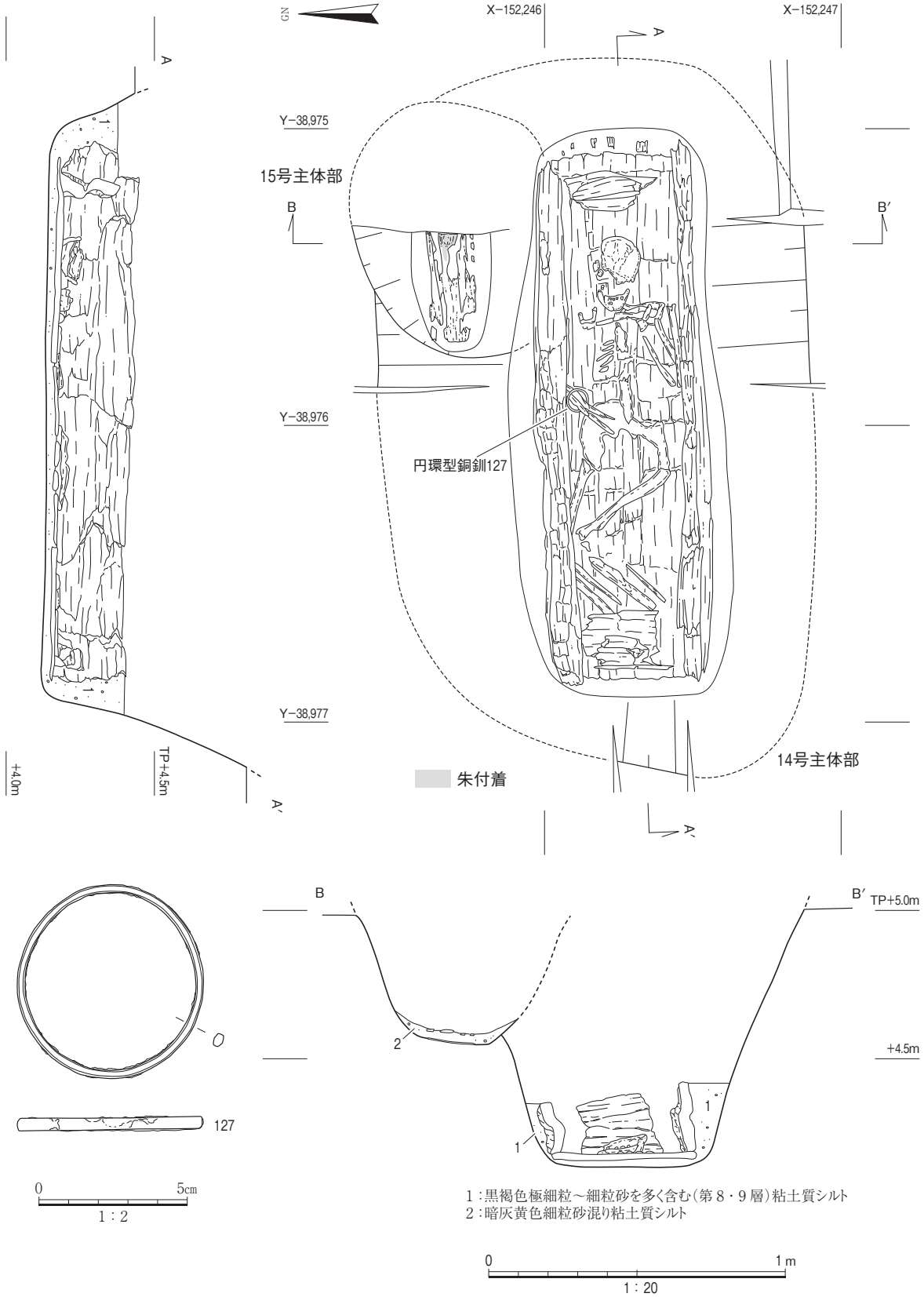


図47　Ｙ１号墳丘墓14・15号主体部平面・見透し断面図および着装品実測図

板・西側小口板からなる組合式木棺があり、棺内には被葬者の大腿骨ならびに脛骨、腓骨が残っていたのみである。大腿骨に赤色顔料(朱)の付着が見られた。被葬者は人骨の大きさからみて成人で、性別は明らかでない。

14号主体部　**２号主体部**の西側２ｍに位置する東西方向の主体部で、墓壙の東北部を**15号主体部**に掘り込まれている(図32・47、原色図版11・13、図版24)。本主体部の西側の近接した位置には主軸が南北方向の**23号主体部**がある。本主体部は調査期間が残り少なくなったことから、木棺を現地で開くことを断念し、主体部を切り取り発泡ウレタンで梱包後、長原分室に搬送して引き続き棺内の調査を実施した。

墓壙は長さ240㎝、幅145㎝、深さは検出面から85㎝前後ある。埋土は黒褐色極細粒砂～細粒砂を多く含む(第８・９層)粘土質シルトである。組合式木棺の各部材は、蓋板を除いて比較的良く残っており、側板の長さ183㎝、底板の長さ178㎝で、両小口は幅25.0～30.0㎝、高さ10.0～20.0㎝、厚さ2.0～3.0㎝あった。底板の両端近くに小口板が立ち、両側板も底板上に乗る型式の組合式木棺である。蓋板は残りが悪く、中央が棺内に落ち込んでいた。両小口板とも横にして使用していた。棺材の樹種はコウヤマキである。棺内には東頭位の成人の被葬者が仰臥位で埋葬されており、すべての骨は原位置を保っていた。上肢は右肘を120度屈曲させ、手は左寛骨上にあり、前腕中央よりやや近い位置に円環型銅釧をはめている。左肘は深く屈曲し、手は肩から胸付近上にある。下肢は膝がやや屈曲しており、右に倒れている。

127の円環型銅釧は、被葬者の右腕に着装されていた(図47、原色図版13・14、図版24・46)。胴部に沿った右腕は、肘関節から先が腹部側に曲げられているため、肘関節と手首の中間にある釧は被葬者の腰に位置する。**２号主体部**の円環型銅釧と直径ではほとんど差がないが、環体の高さを比べると、**14号主体部**の円環型銅釧は低く、両者を並べ比較した感じでは**14号主体部**の円環型銅釧が、よりていねいに仕上げの研磨が行われているようである。環体の断面

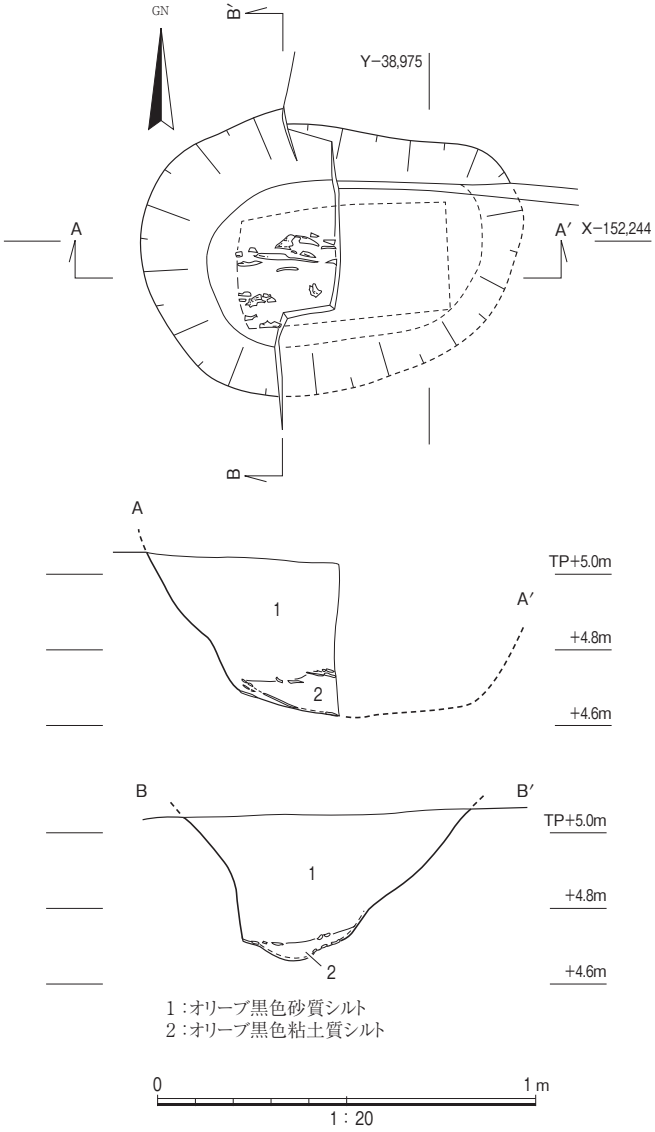


図48　Ｙ１号墳丘墓16号主体部平面・見透し断面図

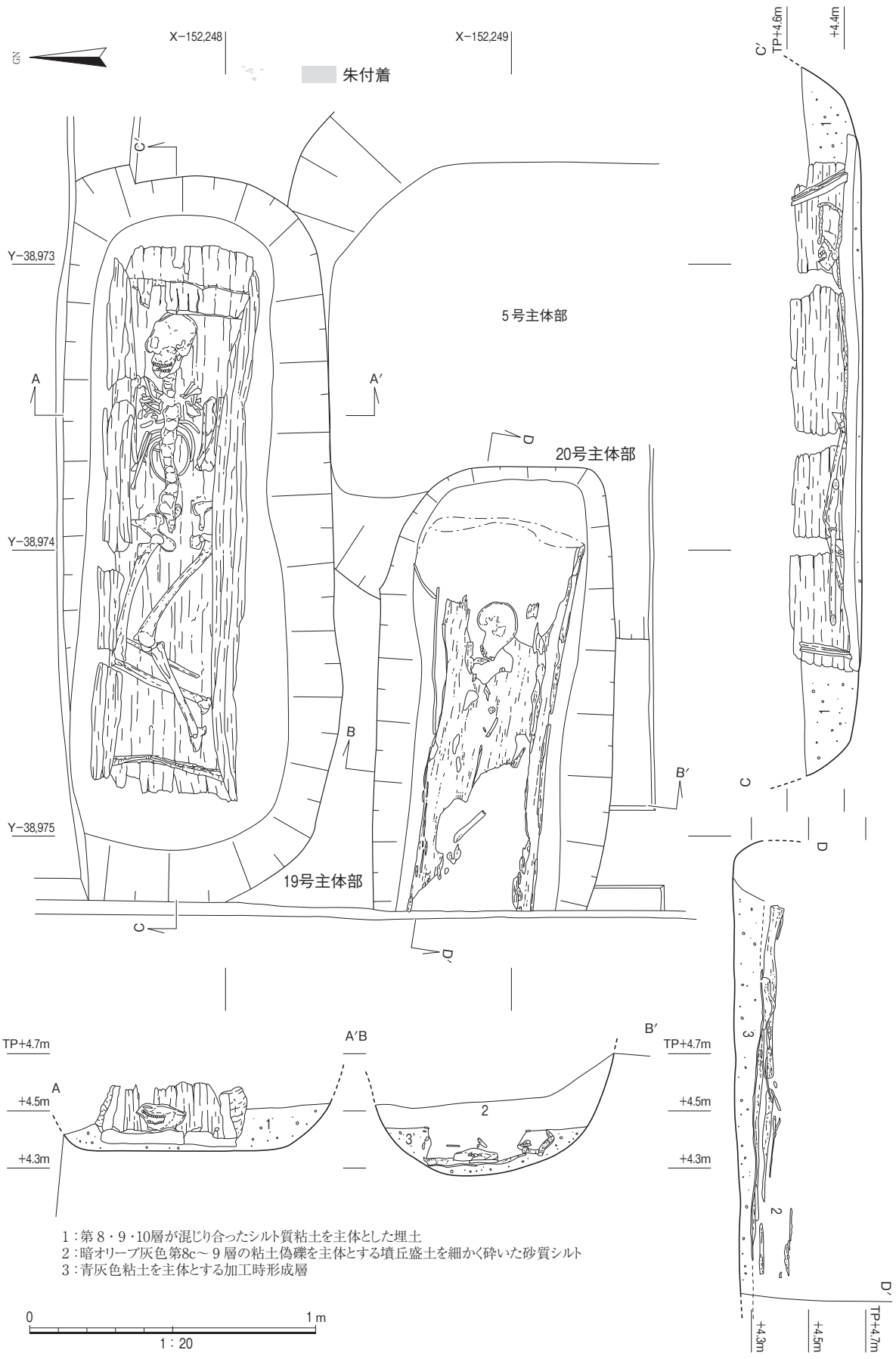
形は**２号主体部**のものと同様、上下に面を成し、内外側面がやや膨らむものである。法量は、直径6.25～6.52㎝、環体幅0.24～0.28㎝、環体高0.41～0.44㎝、重さ14.0ｇである。表面の色調は漆黒色で、表面の成分分析を非破壊で行った結果、高濃度の銅(Cu)と錫(Sn)を検出しており、青銅系の合金と考えられる。

15号主体部　**14号主体部**の北部、墓壙を掘り込むように位置する東西方向の主体部で、東部を調査時のトレンチで失っている(図32・47、原色図版11、図版24)。墓壙は長さ40㎝以上、幅60㎝以上、深さは検出面から40㎝前後あり、**14号主体部**の組合式木棺まで達していない。埋土は暗灰黄色細粒砂混り粘土質シルトで、第８層のこなれた偽礫を含む。墓壙内には組合式木棺の底板が残っていたが、ほかの部材は腐朽したようで見られなかった。底板の北部で薄い赤色顔料(朱)が確認されたことから、被葬者は子供で北枕と思われる。木棺の型式は全体に残りが悪く、組合式木棺であることが確認された以外詳細は明らかでない。

16号主体部　墳丘墓の北部、**15号主体部**から北側に約1.5m離れた位置にある東西方向の主体部である(図32・48)。墓壙は東部を調査時のトレンチで失っており、長さ100㎝以上、幅76㎝、深さは検出面から40㎝前後ある。埋土はオリーブ黒色砂質シルトで、木棺内にはオリーブ黒色粘土質シルトが堆積していた。墓壙内には長さ25㎝以上、幅25㎝以上の組合式木棺があったが、腐朽して残りが悪く、細部や型式は明らかでない。被葬者は木棺や墓壙の規模からみて、小児と考えられる。

19号主体部　**５号主体部**の墓壙の北端を掘り込む東西方向の主体部で、南側にある**20号主体部**と並行した位置にある(図32･49、原色図版７･13、図版13･25)。**19号主体部**も調査期間が残り少なくなったことから、現地での調査を断念し、主体部を切り取り発泡ウレタンで梱包したあと長原分室に搬送して引き続き調査を行った。なお、**20号主体部**も**５号主体部**の墓壙を掘り込むことから、**19号主体部**と対になる関係かもしれない。墓壙は長さ257㎝、幅97㎝以上、深さは検出面から20㎝前後ある。埋土は第８・９・10層の偽礫からなる粘土質シルトで、墓壙内の組合式木棺の蓋板は内に向かって折れ曲っており、棺内に黒褐色シルト質粘土が堆積していた。木棺の底板・両側板・両小口板は比較的形状を保っており、底板は厚さ3.0～5.0㎝あった。底板の両小口板が接する部分が溝状に凹むことから、底板に小口板を立て、両側から側板で挟み込む型式の組合式木棺と考えられる。各部材の樹種はコウヤマキである。木棺内には東頭位で顔面をやや右に向けた被葬者が埋葬されており、上腕を左右ともに躯幹に付け、肘は深く曲げ、両膝は揃えてやや屈曲させ右に倒した仰臥位であった。人骨ならびに棺内には赤色顔料(朱)は見られなかった。

20号主体部　**19号主体部**の南側に並行して位置する東西方向の主体部で、**５号主体部**の木槨を避けるように墓壙を掘り込んでいる(図32・49、原色図版７、図版13・27)。墓壙の西端は南北セクション内に当るため明らかでないが、長さ155㎝以上、幅83㎝、深さは検出面から40㎝前後ある。木棺の裏込めは、青灰色粘土を主体としており、棺外の埋土は暗オリーブ灰色第8c～９層を主体とする墳丘盛土を細かく砕いた砂質シルトである。なお、本主体部の盛土の上面では既述したように墓標とみられる炭化した薄い板が出土した。組合式木棺は腐朽が進んでいたが、底板および両側板は残存していた。棺材の残りは良くないが、底板上に両小口板および両側板が乗る型式の組合式木棺である。蓋板は断



1：第８・９・10層が混じり合ったシルト質粘土を主体とした埋土
2：暗オリーブ灰色第8c～９層の粘土偽礫を主体とする墳丘盛土を細かく砕いた砂質シルト
3：青灰色粘土を主体とする加工時形成層

図49　Ｙ１号墳丘墓19・20号主体部平面・見透し断面図

片になって棺内に落下していた。木棺内の東側小口板に近い場所に南向きの頭骨があったほか、西側にも胸郭の骨ならびに大腿骨、脛骨とみられる骨の断片が残っていた。被葬者は東枕で、歯が大きなことから15才位の若年者(男性)の可能性が高いとのことである。

21号主体部　墳丘のほぼ中央部、**10号主体部**の西北側に接するように位置している東西方向の主体部である(図32・50、原色図版12、図版26)。墓壙は長さ120㎝、幅80㎝、深さは検出面から60㎝前後ある。埋土は第９・10層の偽礫を含む灰褐色粘土である。墓壙内から高杯**128**が一個体出土した(図50、図版46)。

組合式木棺は長さ84㎝、幅32㎝、厚さ約1.0㎝あり、遺存状態は良くなかったが、両側板および底板についてはほぼ原形を留めていた。底板上の両端近くに小口板が立ち、側板は底板の側面に接する型式の組合式木棺である。蓋板は断片になって棺内に落下していた。棺内の東部に赤色顔料(朱)が見られた以外に人骨は確認されなかったが、朱の範囲および木棺の大きさから被葬者は子供で東枕で埋葬されたと考える。棺材の樹種はコウヤマキである。

128は口径16.0㎝、器高19.6㎝で、垂下した口縁部の外端面に２条のにぶい凹線文が巡る高杯Ａ類である。緩やかに内湾しながら立つ杯体部の上端に内傾する突起がある。体部および脚部外面の調整は縦方向のヘラミガキで、内面は杯部がヨコナデである。わずかに内湾しながら短く開く脚裾部の内

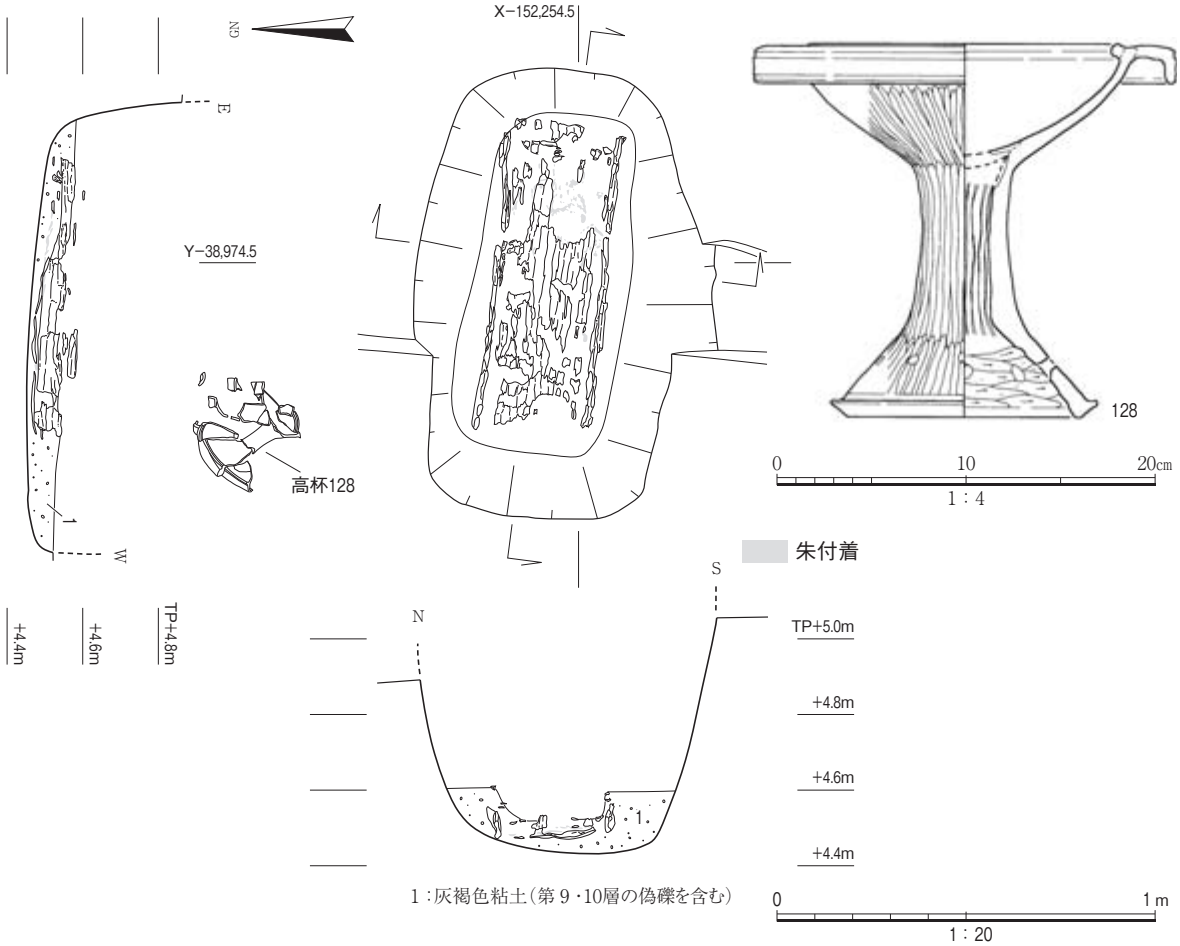


図50　Ｙ１号墳丘墓21号主体部平面・見透し断面図および供献土器実測図

面を横方向にヘラケズリ調整しており、外面には６個以上を数える円形スカシ孔を穿つ。柱状部の外面の調整は縦方向のヘラミガキで、内面にはシボリメが残る。浅黄色～橙色を呈し、胎土中に長石・石英・雲母・チャート粒を含む。杯部の中央部を脚部に向かって穿孔している。畿内第Ⅳ様式中段階に属するものである。

22号主体部　墳丘墓の西北部、**23号主体部**の東側に接する位置にあるが、遺構の大半を調査時のトレンチで失っている(図32・52)。墓壙は長さ27㎝以上、幅53㎝、深さは検出面から20㎝前後である。埋土は黄灰色粘土質シルトで、木棺の腐朽した部分はオリーブ黒色粘土質シルト、墓壙の周辺は第９・10層の粘土偽礫を多量に含む黒褐色～灰色粘土質シルトからなる盛土であった。木棺は腐朽しており残っていなかったが、この面に赤色顔料(朱)があった。被葬者は子供で、北枕で埋葬された可能性が

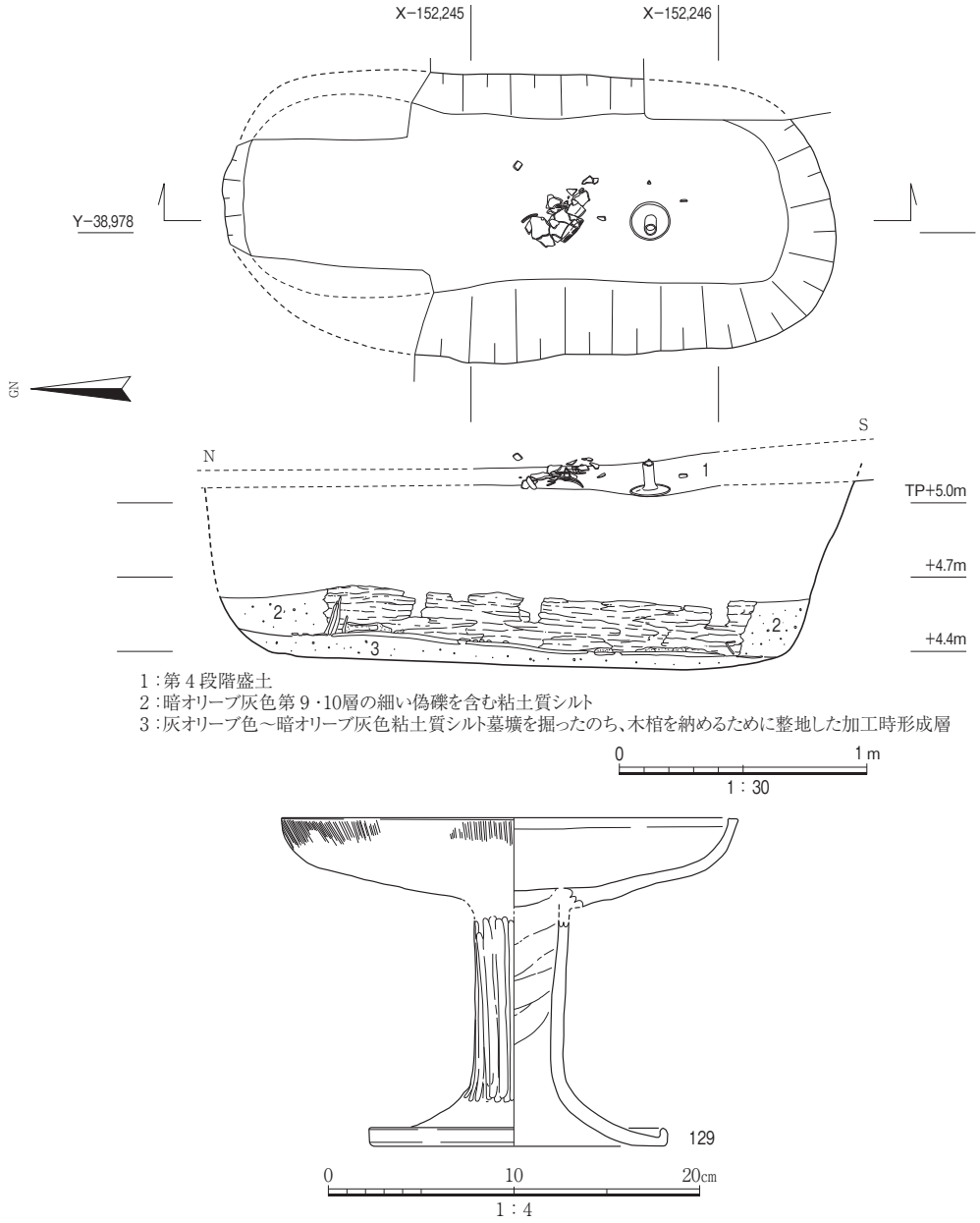


図51　Ｙ１号墳丘墓23号主体部供献土器出土状況および実測図

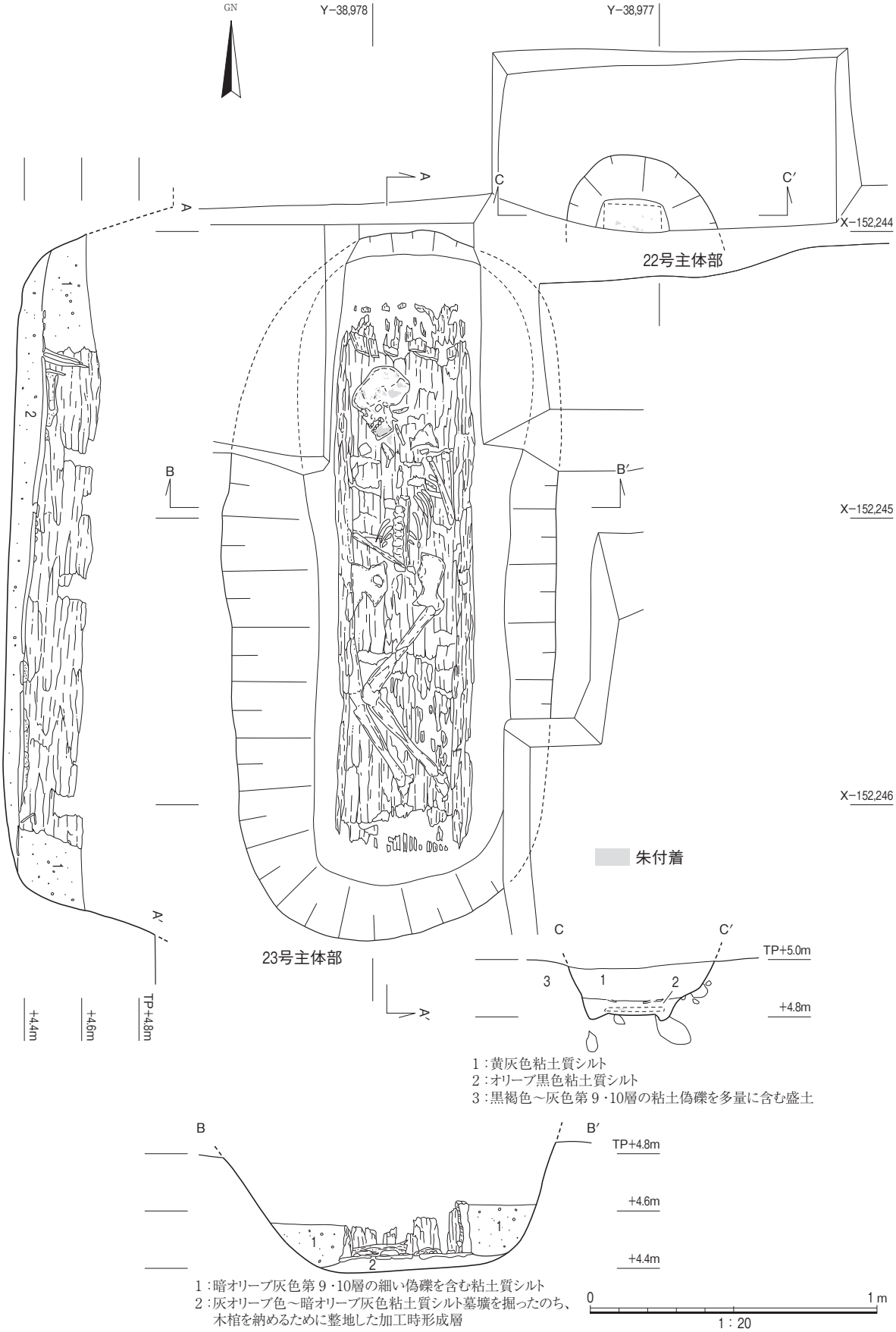


図52　Ｙ１号墳丘墓22・23号主体部平面・見透し断面図

高い。

23号主体部　墳丘墓の西北部に位置する南北方向の主体部で、東側にある**14号主体部**とは直列する関係にある(図32・51・52、原色図版12、図版28)。本主体部も調査期間の問題から組合式木棺の蓋板を検出した段階で、発泡ウレタンで梱包して長原分室に搬送し、棺内の調査を行った。墓壙は長さ247㎝、幅117㎝、深さは検出面から40㎝前後ある。埋土は第９・10層の細かい偽礫を含む暗オリーブ灰色粘土質シルトで、組合式木棺の底板を墓壙内に設置する際に厚さ5.0㎝の灰オリーブ色～暗オリーブ灰色粘土質シルトで整地していた。また、墓壙の検出面中程の盛土上で、杯部と脚部を意図的に壊したあと最終的な盛土で覆われた高杯B類**129**が一個体出土した(図51、図版46)。高杯の出土状態を考慮すると、棺内に被葬者を埋葬し墓壙内を埋め戻したあと、墓壙上の土饅頭の脇に破砕した高杯を供献したものと思われる。

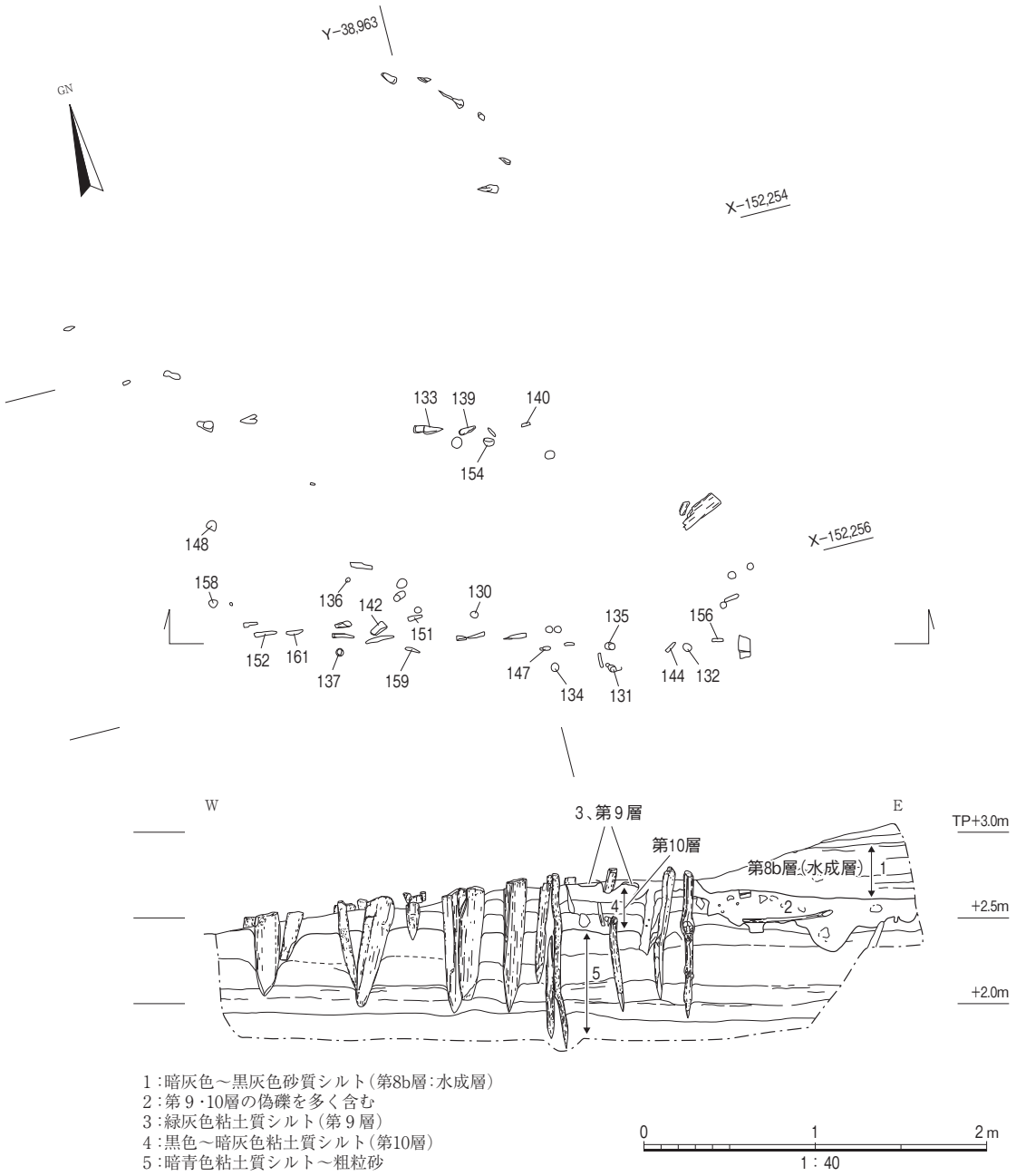
組合式木棺の蓋板および小口板は遺存状態が悪かったが、両側板と底板はほぼ旧状を留めており、底板は長さ191㎝、幅49㎝、厚さ1.0～2.0㎝である。底板上の両端近くに小口板が立ち、両側板も底板上に乗る型式の組合式木棺である。蓋板は残りが悪く棺内の中央部に落ち込んでいた。小口板と底板の接合部が溝か段かについては明らかでない。棺材の樹種はすべてコウヤマキである。棺内には北頭位で頭蓋骨は顎をひいた状態で、顔面は右を向き下顎骨は関節している。被葬者は仰臥位であり、上腕は躯幹に添わせ、右肘は120度位軽く屈曲させて手は左寛骨上に置く。また、両膝は軽く屈曲させており、右側に倒した状態である。顔面部には赤色顔料(朱)が付着していた。

129は杯部の口径が24.5㎝、器高17.8㎝の高杯B類である。口縁部は杯体部からわずかに内湾しながら立ち、端部を内側に肥厚している。口縁部の外端面に櫛描簾状文状の刺突文を施しているが、器面が風化しているため、詳細は明らかでない。杯部と脚部は別作りであり、接合したあとで粘土円板を充填している。脚裾部に強いヨコナデ調整を加えて、端部を上方に肥厚している。柱状部の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は右上りのナデである。器体の外面が風化していることから、一定期間墳丘上に置かれていたものと思われる。色調は橙色～淡橙色を呈し、胎土中に長石･石英･雲母･角閃石粒を多く含む河内の土器である。畿内第Ⅳ様式中段階でも新しい時期に属するものであろう。

第４節　Ｙ１号墳丘墓東周溝内底面の杭・矢板列

Ｙ１号墳丘墓の東周溝東南部の底面では杭を打設したSA801・SA802を検出した(図26・53・58、原色図版４)。以下SA801から報告する。

SA801　Ｙ１号墳丘墓の東周溝内底面で、東西約270cmにわたって多くの杭を確認した。墳丘に近い西側の杭・矢板列は第10層の黒色～暗灰色粘土質シルトの上面で、周溝東部の法面の下場に近い杭・矢板列の東部は第９層の緑灰色粘土質シルトの上面で検出したことから、SA801はＹ１号墳丘墓を築



1：暗灰色～黒灰色砂質シルト(第8b層：水成層)
2：第９・10層の偽礫を多く含む
3：緑灰色粘土質シルト(第９層)
4：黒色～暗灰色粘土質シルト(第10層)
5：暗青色粘土質シルト～粗粒砂

図53　SA801平面・断面図

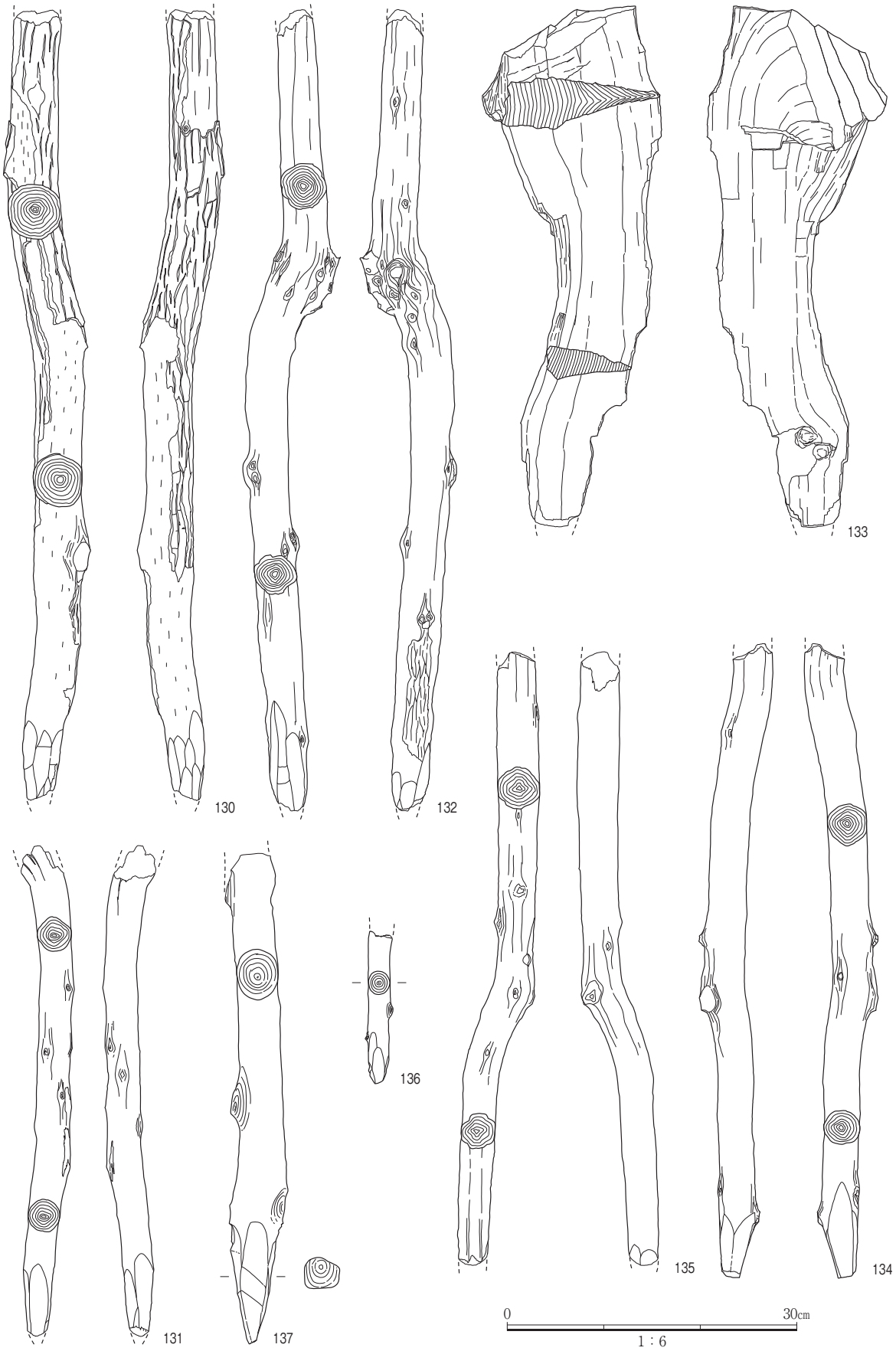


図54　SA801出土木製品実測図（1）

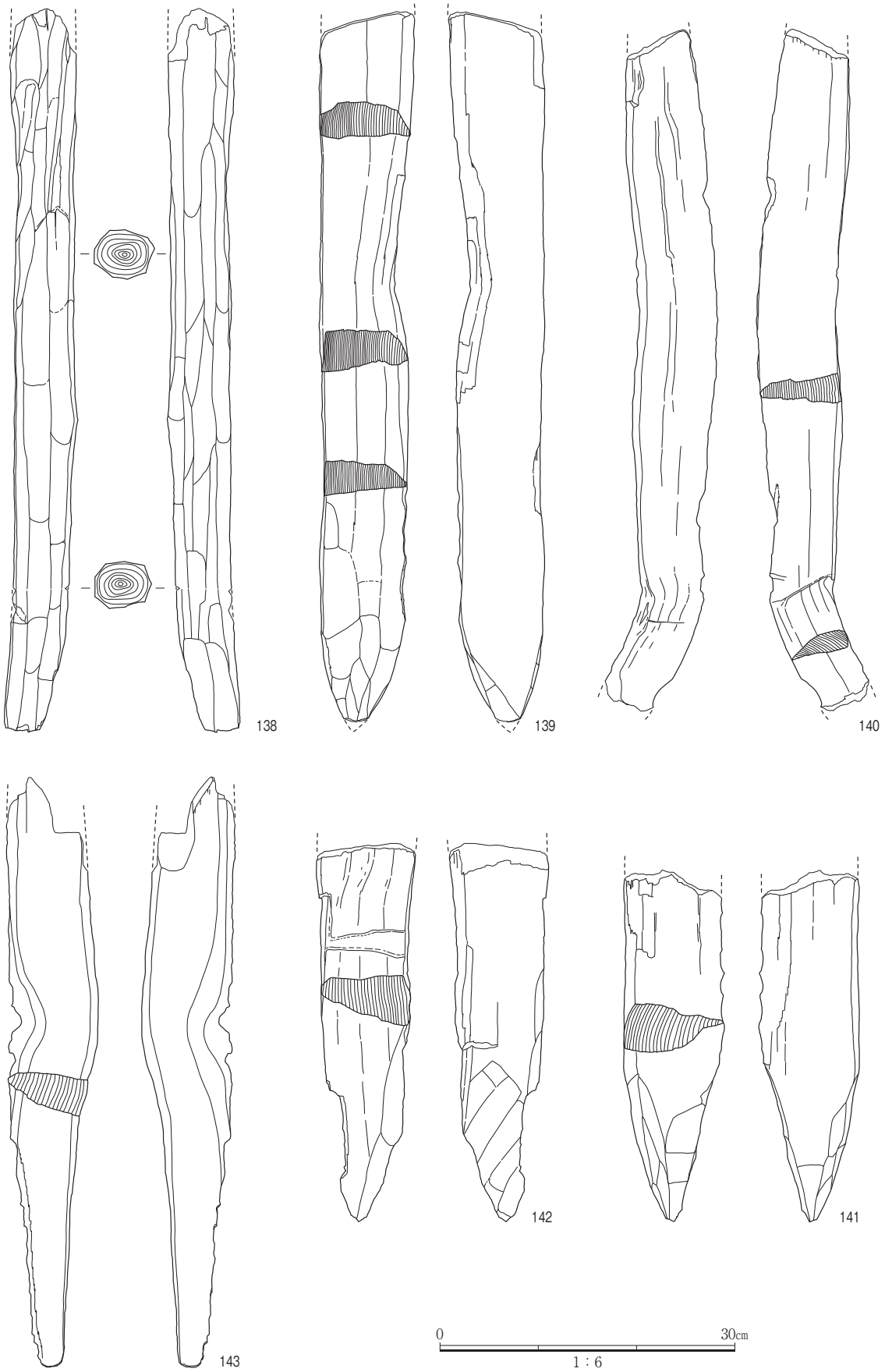


図55　SA801出土木製品実測図（2）

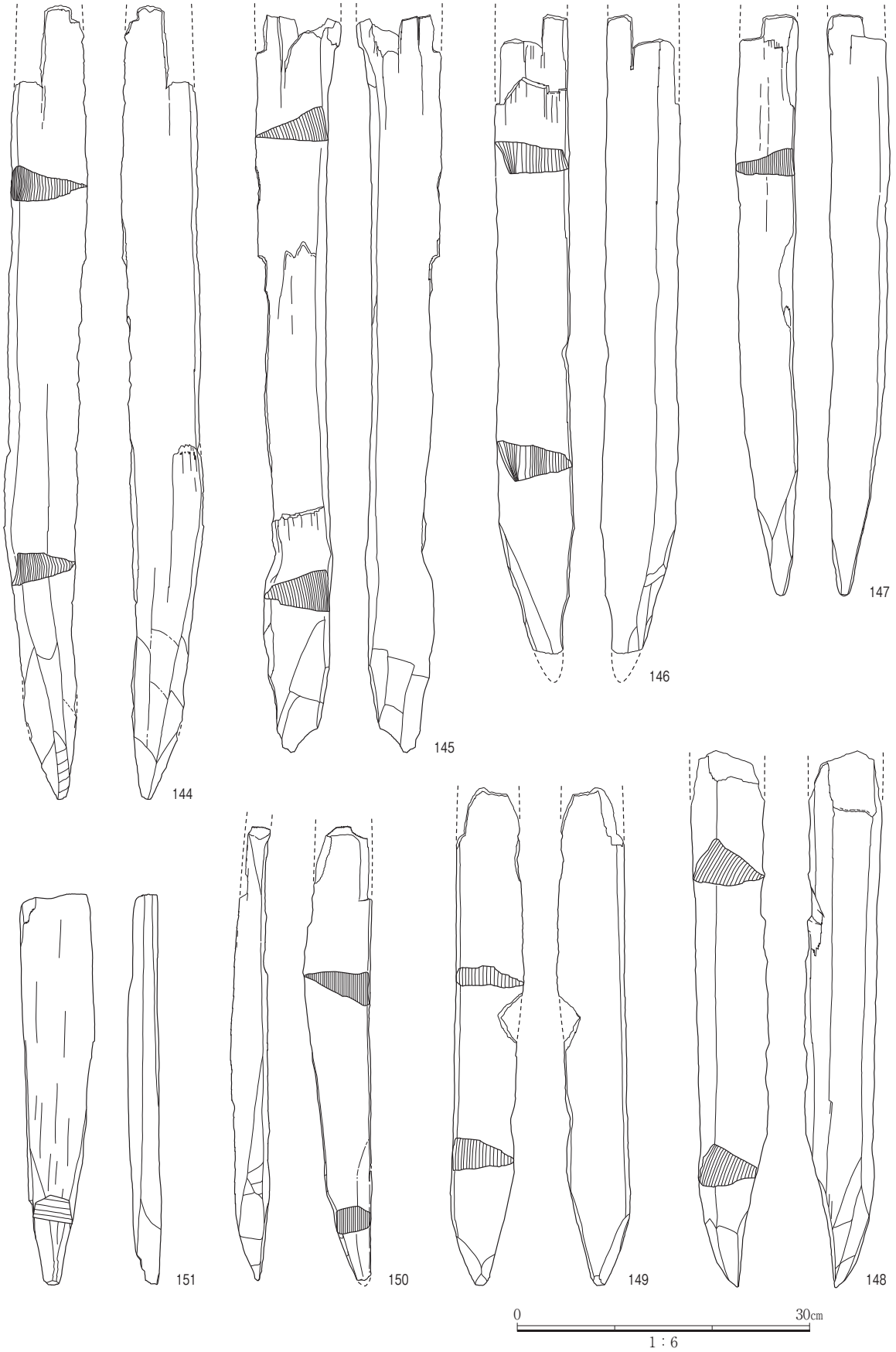


図56　SA801出土木製品実測図（3）

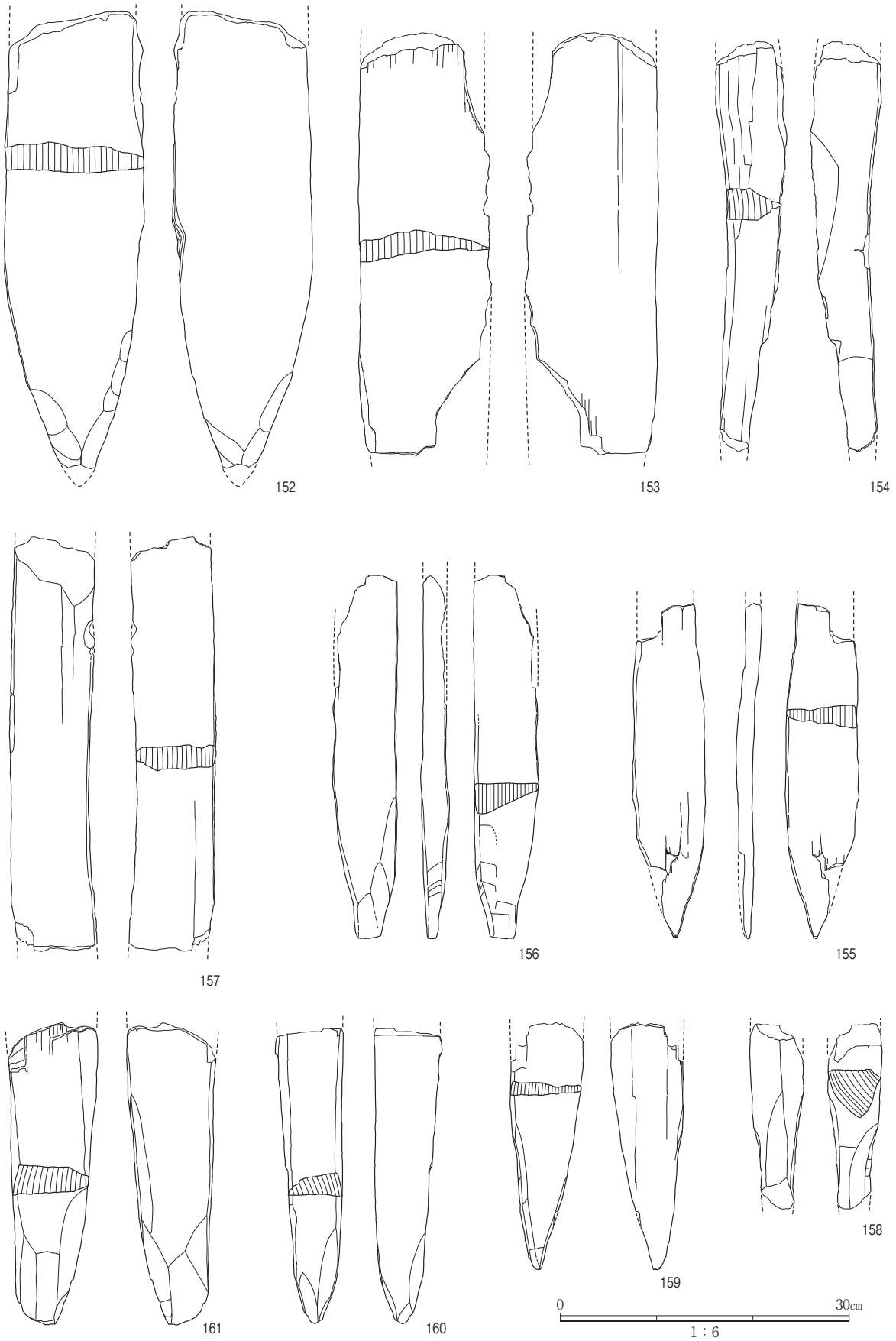


図57　SA801出土木製品実測図（4）

造する以前の遺構とみてまちがいないものと考えられる。杭列の杭も周溝が深くなる西側の杭の長さは、周溝が浅い東側の杭に比べて短い傾向にあり、これも杭が**Y１号墳丘墓**に先行する時期に打設されたことを示唆している。さらに**東周溝**内の東部には周溝の掘削以前に堆積した第8b層が見られることも先の指摘を裏づけている。

SA801は肉眼観察ではあるが杭列の西2/3がみかん割によるアカガシ亜属の矢板を用いており、これより東側1/3は直径6.0cm前後のクヌギの樹皮付きの丸太を使っている。杭列は南北２本の杭が一対になるように打設していることから、いわゆる水田畦畔の脇などを補強するための杭列の可能性がある。

130～132・134～137は、直径2.6cm～5.8cmの枝や幹の一端を鉄器で加工した杭であるが、130・132は一部に樹皮が残っている(図54)。いずれの杭先も鉄器で加工しており、尖ったものが多い。133は落葉広葉樹の丸太をみかん割にした矢板である。138は周囲を縦方向に鉄器で調整した杭で、片側を尖らせている。139はみかん割による杭で、先を鉄器で細かく調整して尖らせるほか、片面のみ縦長に削っている。140もみかん割による杭で、上下端を欠損している。141～143はみかん割による杭で、表裏面および側面とも未調整である。141・142は先を鉄器で尖らせている(図55)。144～150もみかん割による材を使った杭で、いずれも先を鉄器で加工して尖らせている。表裏面および側面が未調整のものが多い。151はみかん割りをした材の側面を鉄器で調整した杭で、先を細長く尖らせている(図56)。

152・155・156・159～161は、みかん割によるアカガシ亜属であろう材の一端を尖らせた矢板である(図57)。155以外の尖端には鉄器による加工痕が見られる。153・154・157は尖端を欠損しているが矢板とみられるものである。158はみかん割にした材の一端を鉄器で加工し尖らせた杭で、大半を欠損している。

以上の矢板ならびに杭はいずれも頭部を欠損しているが、これは**Y１号墳丘墓**の**東周溝**を掘削した際に削り取られた可能性がある。矢板列は断面図や図版からも明らかなように深く打ち込まれていることから、土留のためのものと考えられるが、詳細は明らかでない。なお、SA801の杭のうち、その多くがみかん割により４分割した丸太をさらに２つに割ったのち、外側を斜めに切り取って杭の素材にしたものが多かった。

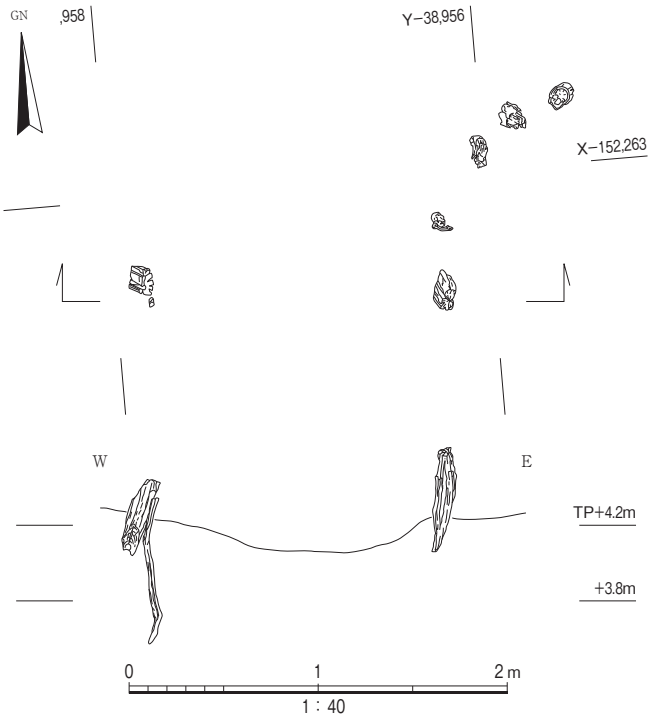


図58　SA802平面・断面図

SA802　SA801の東南部に位置する孤状の５本の杭およびこれより西に約1.5m

離れた位置にある杭で、検出時までに乾燥しており残りは悪い(図58)。孤状に打設された杭は径10cm前後で、樹皮が残っていたものが多い。

SA802は杭列の一部が調査範囲外であり、全容は明らかでないが、孤状に杭を打設した遺構の類例としては、島根県布田遺跡の円形杭列状遺構[島根県教育委員会1991]がある。布田遺跡の杭列は長径170cm、短径120cmの範囲にやや扁平な孤を描くように杭が打設されており、同様な杭列が流路内の浅い位置で５箇所確認されている。遺構の性格について調査者はウッドサークル、円形杭列状遺構と呼ばれる貯木施設とみられている[島根県教育委員会1988・1991]。

第５節　Ｙ２号墳丘墓の墳丘と周溝および出土遺物

Ｙ２号墳丘墓の調査は第Ⅱ章で既述したように、上層遺構の底から弥生時代中期後葉の壺が出土したことに端を発したこともあって、短期間で墳丘の規模や主体部の実態を把握するために実施することになった。まず土器棺とみられる壺が出土した地点を中心に東西14m、南北4.0mの東西トレンチを設定し、土器棺とみられる土器の掘込み面の確認と、庄内式～布留式期の遺構面以下の層序ならびに遺構の確認調査を実施した。その結果、トレンチの西部で組合式木棺３基と土器棺１基を検出した(図59)。また、**Ｙ１号墳丘墓**調査個所の南壁断面沿いに設定した南北トレンチでも墳丘の盛土ならびに主体部が確認されて、図60に示したように**Ｙ２号墳丘墓**の墳丘基底部の東西幅が13m、盛土の高さは、弥生時代中期後葉の暗色帯から約1.0～1.5mあることを確認した(図60)。また、後に**Ｙ１号墳丘墓**の**南周溝**から**Ｙ２号墳丘墓**の墳丘にかけて設定した南北トレンチの調査などの知見から、**Ｙ２号墳丘**

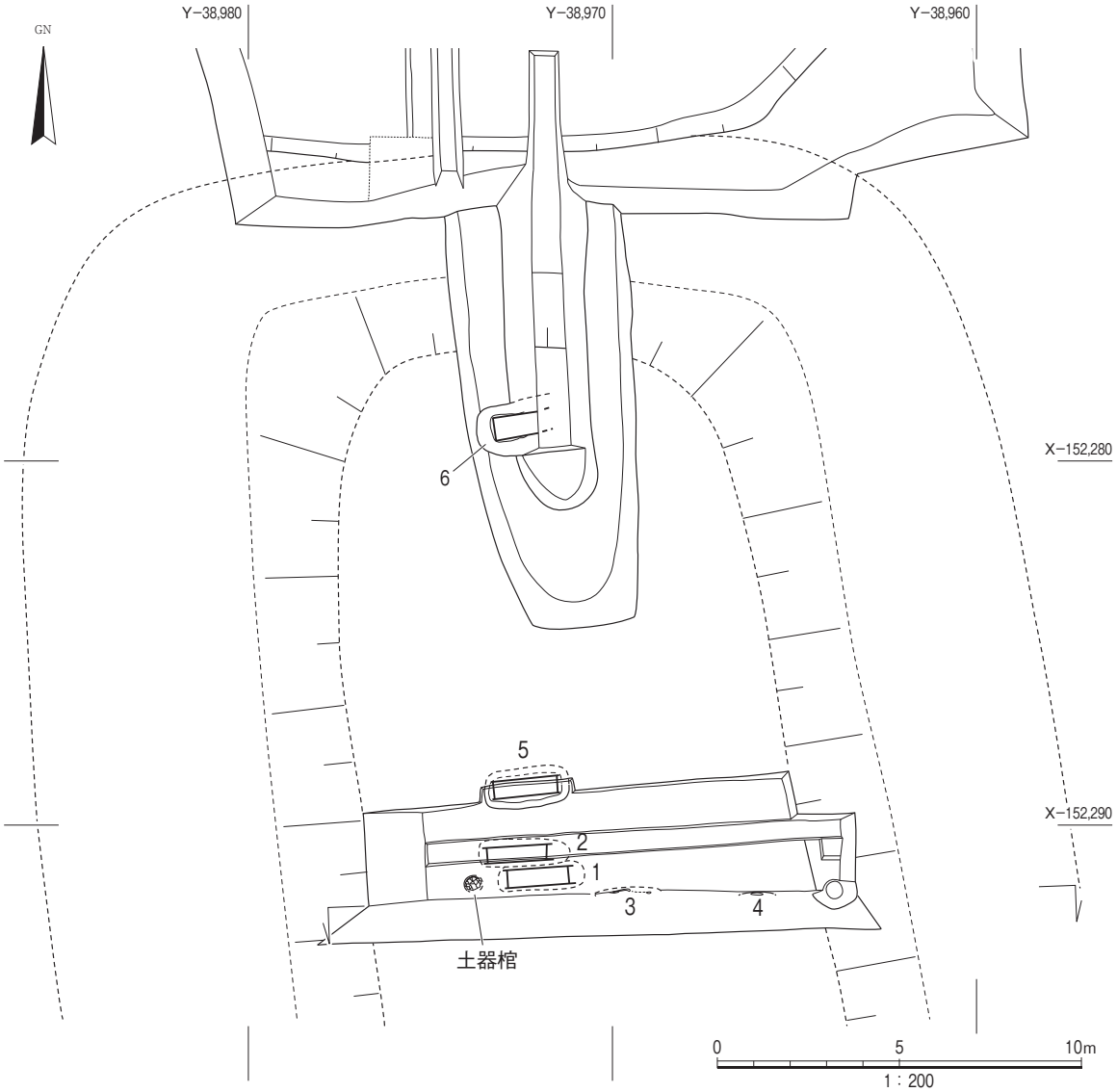
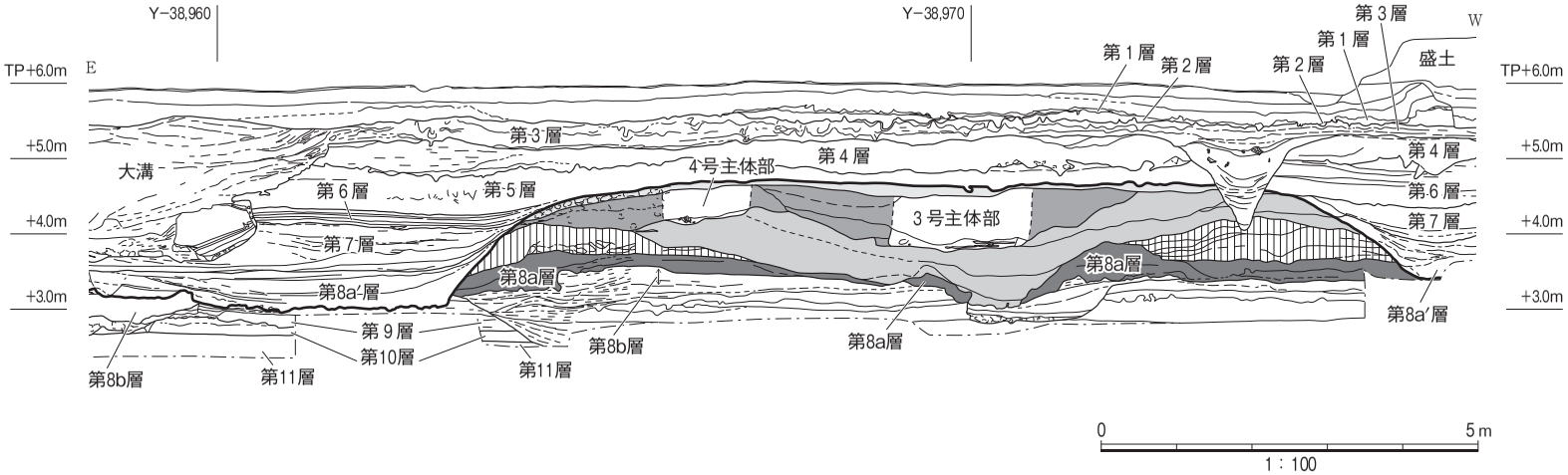
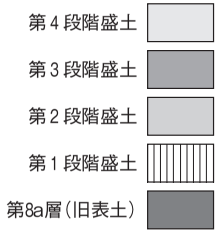


図59　Ｙ２号墳丘墓主体部配置図





第１層：灰褐色シルト質粘土
第２層：褐～灰褐色粘土質シルト
第３層：暗灰褐色粘土質シルト・暗青灰色粘土質シルト
第４層：暗灰色細粒砂質シルト
第５層：灰色粘土質シルト
第６層：（カラフル粘土）青灰・緑灰色シルト質粘土
第７層：暗灰色シルト質粘土（炭化物含）・暗青灰色粘土質シルト・
　　深緑色粘土質シルト～粘土・暗青灰色粘土
第8a′層：暗青灰色シルト質粘土・緑灰色粘土質シルト・暗灰～暗青灰色粘土質シルト
第8a層：暗緑灰色粘土質シルト・黒灰色粗粒砂質粘土・黒色粘土質シルト
第8b層：暗灰色粘土質シルト
第９層：暗灰色シルト質粘土
第10層：黒灰色シルト質粘土
第11層：暗青灰色シルト質粘土

図60　Ｙ２号墳丘墓南壁地層断面図

墓の長軸は南北方向であり、調査区内での墳丘基底部の長さは25m以上を測ることが明らかとなった(図59)。以下、Ｙ２号墳丘墓の墳丘および周溝について記述する。

Ｙ２号墳丘墓の墳丘は、Ｙ１号墳丘墓と同様に弥生時代中期後葉の旧表土層である第8a層の上面に盛土して築造していた(図60)。第8a層上面の標高はTP＋3.6m前後あり、Ｙ１号墳丘墓の旧表土面よりわずかに高い。

Ｙ１号墳丘墓の南北中央セクションに沿って設定したＹ２号墳丘墓の南北トレンチの西壁地層断面図(図９)ならびに東西トレンチ南壁地層断面図(図60)に示したように、Ｙ２号墳丘墓も第8a層上面の墳丘範囲の外周に第１段階の盛土をしたのち、盛土間に第２段階の盛土を行っている。この後さらに第３段階の盛土を行って墳丘を完成し、順を追って各埋葬をしている。予定されたすべての埋葬を終えたのち、Ｙ１号墳丘墓と同様に墳丘上の各埋葬に伴う土饅頭を均して第４段階の盛土としている。なお、組合式木棺の周辺の第３段階の盛土内から弥生土器の破片が出土した。第8a層に伴うものであろう。

以上の盛土の土取の範囲はＹ２号墳丘墓の各周溝の予定場所と考えられるが、南壁地層断面を観察したところ第8a・8b層～第９層に及ぶことが確認された。また、Ｙ２号墳丘墓とＹ１号墳丘墓間にある周溝の西壁地層断面を観察した結果、Ｙ２号墳丘墓の北周溝がＹ１号墳丘墓の南周溝を幅約４m、深さ20～30㎝掘り込んでいることが判明した(図９)。これは、Ｙ２号墳丘墓がＹ１号墳丘墓の築造後、さほど時を経ないで築造されたことを示唆しており、後述するようにＹ２号墳丘墓の出土土器がＹ１号墳丘墓の出土土器に比べて後出的なこととも矛盾しない。

Ｙ２号墳丘墓北周溝内および東周溝内には墳丘墓の機能時堆積層と考えられる第8a′層の暗青灰色シルト質粘土・緑灰色粘土質シルト・暗灰～暗青灰色粘土質シルトが互層になって堆積しており、北周溝内底面から弥生土器が出土した(図61、図版47)。

162は口径18.8㎝の広口壺Ａ類で、体部の上半以下を欠損している。口縁部を外開きに垂下しており、内外面の調整はヨコナデである。口頸部の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面は上半がユビナデ、下半は左回りのヘラケズリである。灰黄褐色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を多く含む河内の土器である。163は体部の下半以上を欠損しているが、広口壺Ａ類の体部と思われるものである。体部の下半が張りのある器体で、調整は外面が横方向のヘラミガキ、内面は左回りのハケである。底部は裏面に一定方向のヘラミガキを施しており、内面にはユビオサエが残る。色調および胎土は162と変わらない、河内の土器である。164は口径11.2㎝、器高24.2㎝以上で、最大径が体部の下半近くにあって一端屈曲したあと、丸味のある底部にいたる瓢箪形の壺である。口縁部は外上方に直線的に伸びる頸部の上端から水平に開く。器体の調整は外面がヨコナデで、内面は上半がユビオサエおよびナデ、下半は横方向のナデである。体部の外面に煤が付着しており、煮炊きに使われたようである。灰黄褐色を呈し、角閃石・雲母・長石粒を多く含む河内の土器である。この瓢箪形壺は管見による限り類例のみられない希少な資料である。

165は口径12.4㎝で体部の上半以下を欠損した小型の甕Ａ類である。大きく開いた口縁部の上端を上方に肥厚している。体部の調整は内外面ともに粗いハケである。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に長石・チャート・シャモット粒を含む。166は口径24.8㎝の大型の甕Ｂ類で、頸部から「く」の字形に屈

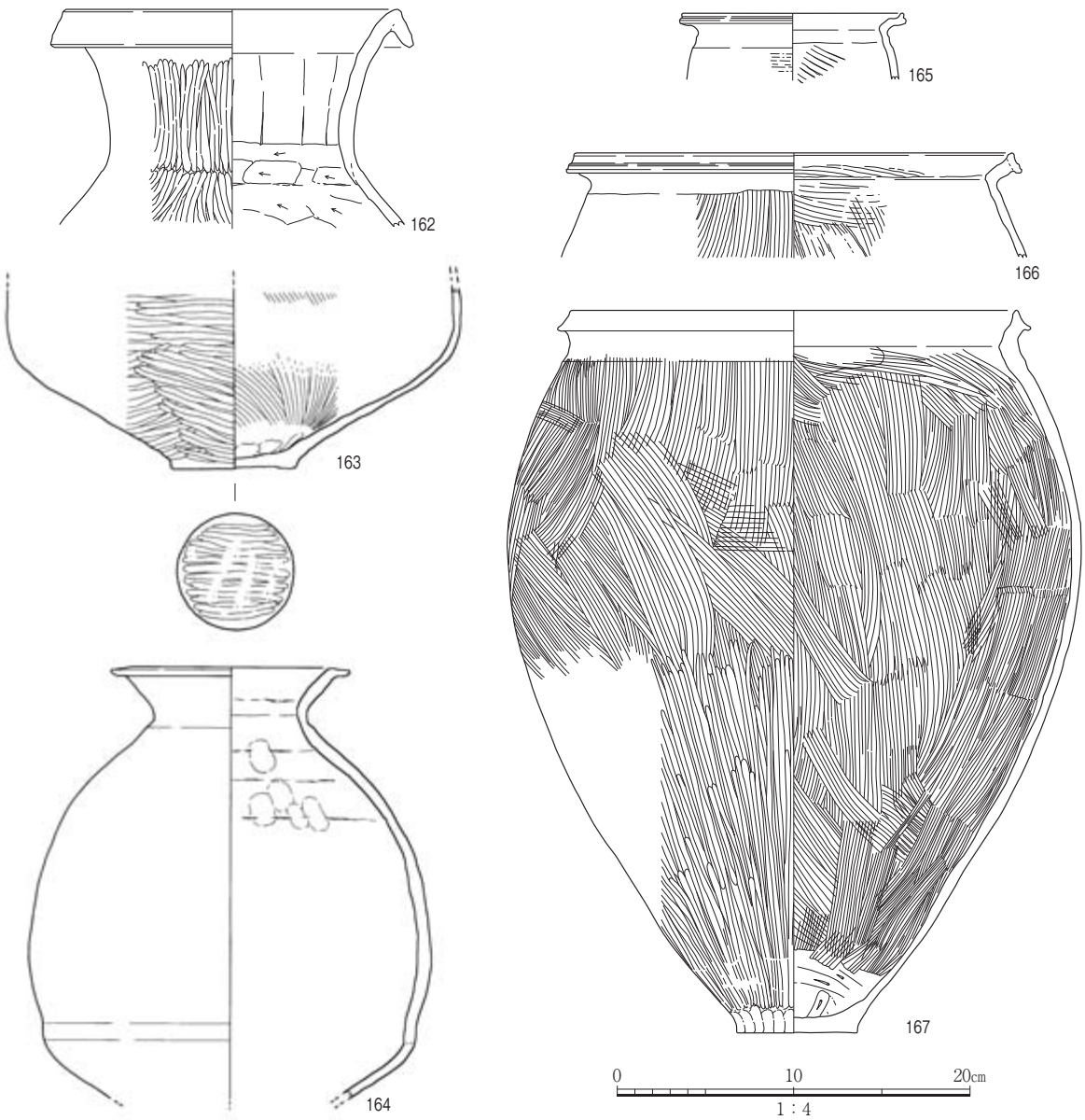


図61　Ｙ２号墳丘墓北周溝出土遺物実測図

曲した口縁部の外端面には２条の浅い凹線文が巡る。口縁部をヨコナデ調整するが、内面にはハケメが残る。体部の調整は外面が右上がりのハケで、内面は左上りのハケである。明褐灰色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・石英・チャート粒を含む。167は口径25.2cm、器高41.0cmの大型の甕B類である。口縁部は頸部から外上方に短く開いたあと、強いヨコナデを加えて端部を上下に肥厚している。最大径は寸高の体部の上半にあり、調整は外面が左上りのハケのあと、同方向のヘラミガキで、内面は左上りのハケである。底部の内底面をヘラケズリで整えている。体部の外面に煤が付着している。にぶい橙色を呈し、胎土中に長石・石英・雲母・チャート粒を含む。

以上の土器は、広口壺A類162・163も櫛描文が見られないものであり、畿内第Ⅳ様式新段階に属するものであろう。弥生土器の型式を考慮すると**Ｙ２号墳丘墓**の築造時期は弥生時代中期末(紀元前後)頃と考えられる。

第６節　Ｙ２号墳丘墓の埋葬施設および出土遺物

土器棺　**１号主体部**の組合式木棺から西側に65㎝離れた位置で壺を棺身にした**土器棺**を検出した(図62)。**土器棺**は上部を上層の遺構の掘込みで破壊されていたが、直径50㎝前後の墓壙内に正位置で埋納されていた。**土器棺**の調査時に近くから、棺蓋に転用されていた可能性のある大型の台付鉢の破片が出土した。**土器棺**内には歯骨は見られなかった。

170は底径8.0㎝、器高28.5㎝以上、最大径が40.0㎝の壺の体部である。器体の調整は外面が縦方向のヘラミガキのあと、横方向のヘラミガキで、内面は左上りの幅広い粗いハケを施している。底部の内面は横方向にナデ整えているが、ハケの工具痕がある。体部の中程以上を欠損しているが、その形

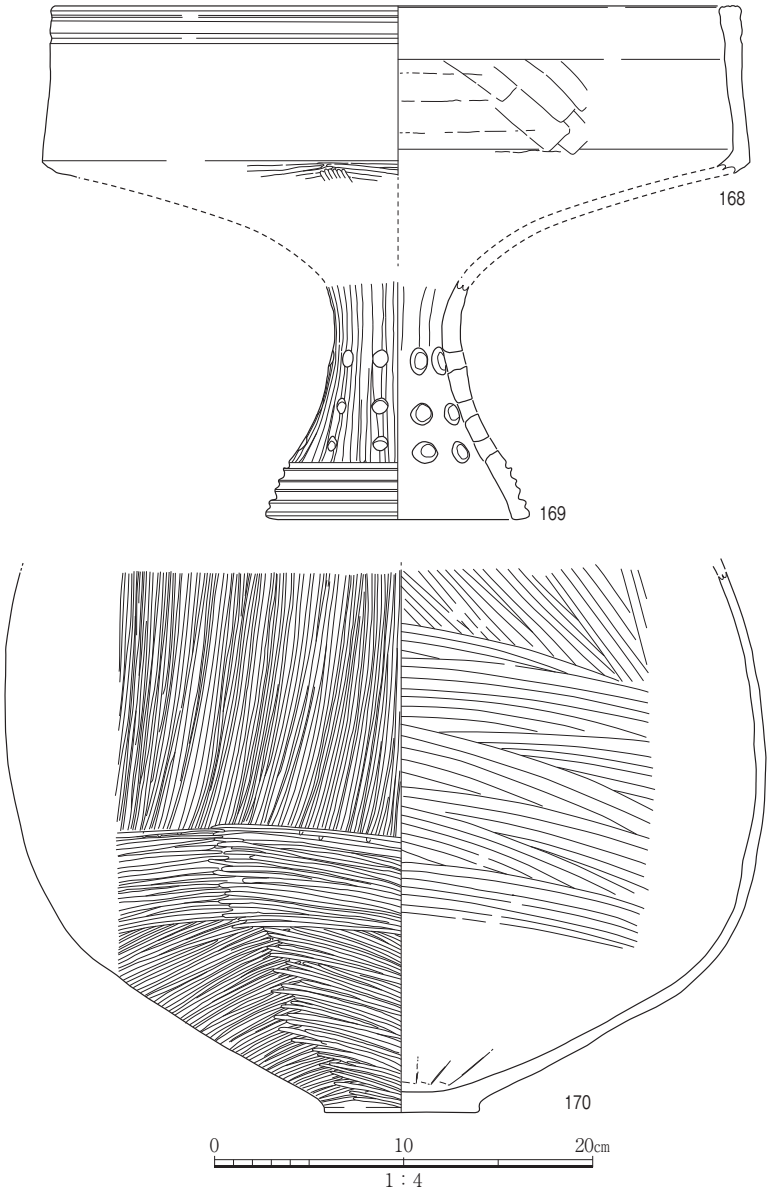


図62　Ｙ２号墳丘墓土器棺実測図

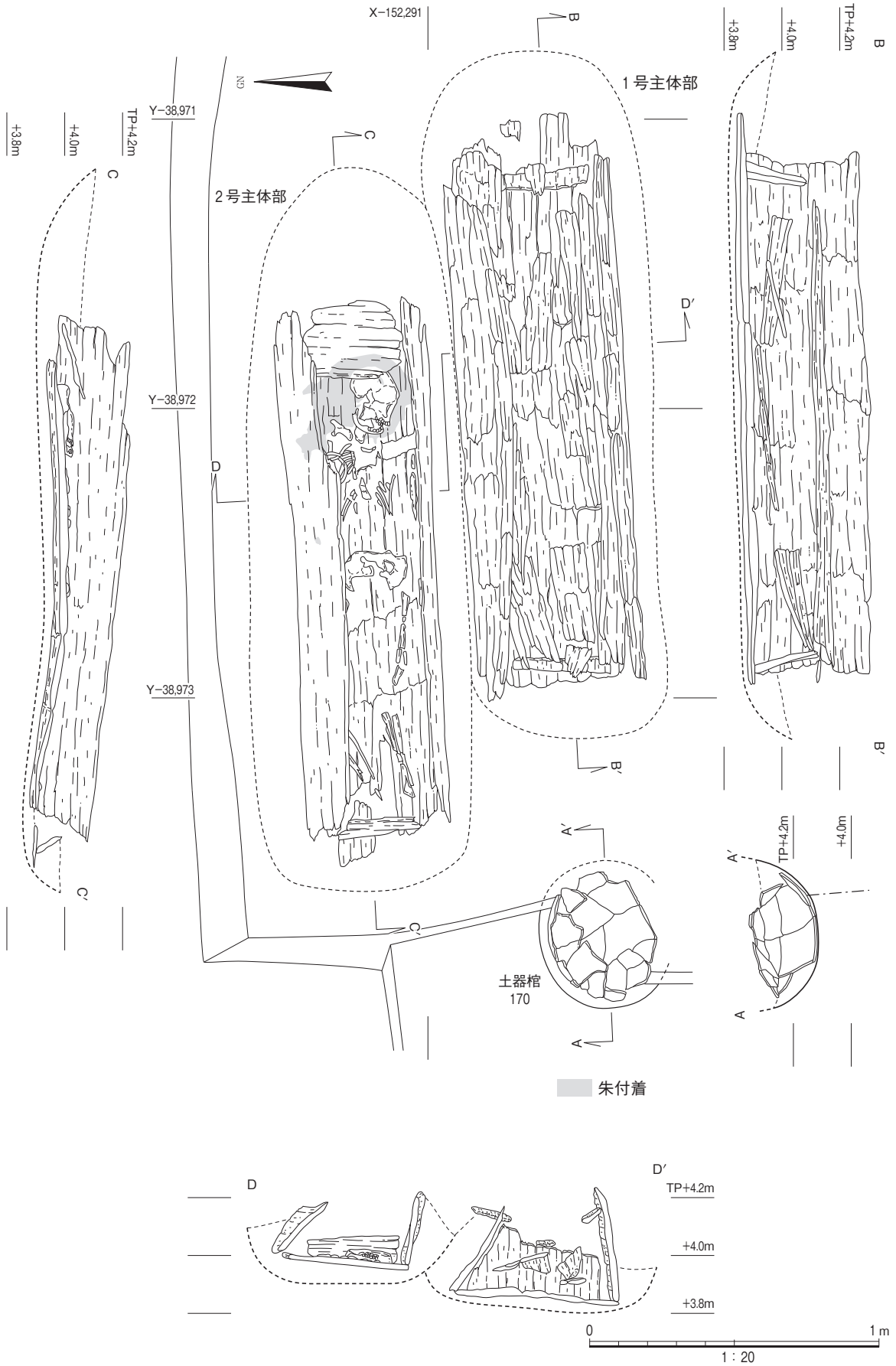


図63　Ｙ２号墳丘墓１・２号主体部および土器棺平面・見透し断面図

態からみて、畿内第Ⅳ様式新段階に属する広口壺A類を棺身に転用したものであろう。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に角閃石・雲母・長石粒を含む河内の土器である。

168は口径38.2㎝の口縁部が体部から直立する大型の台付鉢である。口縁部の上面および内外面は強いヨコナデ調整により浅く凹んでおり、外端面に２条のにぶい凹線文が巡る。体部の調整は外面が横および縦方向のヘラミガキで、内面は左上りのナデならびにヨコナデである。淡黄色を呈し、胎土中に長石・石英・チャート・雲母粒を含む。169は底径14.0㎝、器高が12.6㎝以上ある台付鉢の脚台である。脚台は筒状で細身の器体から脚裾に向かって短く直線的に開く。器体の外面には縦方向のヘラミガキのあと、上下に３個並ぶ円形スカシ孔を多方向に穿つほか、脚裾部の外面に５条の凹線文が巡る。にぶい黄橙色を呈し、胎土中に長石・石英・チャート・雲母粒を含む。168と169には接合関係はないが、２点とも土器棺の近くから出土したことを考慮して、ここでは同一個体で土器棺の蓋に転用されたものとみておきたい。以上の土器は畿内第Ⅳ様式新段階に属するものであり、土器棺に転用された広口壺とも時期的な齟齬はない(図62、図版47)。

１号主体部　東西トレンチの西寄りに位置する東西方向の主体部で、北側に並行する**２号主体部**の墓壙に掘り込まれている。墓壙は長さ238㎝前後、幅75㎝前後あり、深さは組合式木棺の底板から40㎝以上ある。**１号**および**２号主体部**の組合式木棺の底板のレベル差は7.0㎝前後あり、**２号主体部**が**１号主体部**の墓壙を掘り込むこととも矛盾しない(図59・63、原色図版16、図版29)。

組合式木棺は比較的旧状を留めており、底板は長さ198㎝、幅57㎝、側板は長さ182㎝、幅412㎝で、厚さは3.0～4.0㎝あった。小口板と底板の接合部は腐朽しており、溝か段かは明らかでない(図62)。底板上の両端近くに小口板が立ち、側板も底板上に乗る型式の組合式木棺である。棺材の樹種はコウヤマキである。棺内には被葬者の人骨や歯が残っていたが遺存状態は悪い。

２号主体部　**１号主体部**の北に並行する東西方向の主体部で、**１号主体部**の墓壙を切るが組合式木棺自体には達してない。墓壙は長さ250㎝、幅75㎝前後あり、深さは組合式木棺の検出面から33㎝前後ある。埋土は暗緑灰色粘土質シルトの偽礫が主体であった。組合式木棺は蓋板以外の残りが良く、側板は長さ183㎝、幅26.0㎝、底板は176㎝、幅42.0㎝で、それぞれの厚さは3.0㎝前後ある(図59・63、原色図版16、図版29)。棺材の樹種はコウヤマキである。柾目取りの小口板を両側とも横向きに立てており、小口板と底板の接合部は腐朽しており溝か段かは明らかでない。底板の両端近くに小口板が立ち、側板も底板上に乗る型式の組合式木棺である。木棺内には東頭位の被葬者が伸展仰臥位で埋葬されていた。顔面はやや左を向き、左肘は深く曲げ、両下肢は膝を軽く屈曲して右に倒していた。また、顔面付近ならびに頭骨の周辺には赤色顔料(朱)の付着が認められた。

３号主体部　南壁地層断面で確認した東西方向の主体部であるが、大半が調査範囲外であるため、詳細は明らかでない。墓壙の長さは約183㎝で、深さは検出面から27.0㎝前後であった。埋土は緑黒色粘土質シルトおよび暗緑灰色粘土質シルトからなり、棺内の流入土との見分けはしがたかった(図59・60・64)。墓壙内の西部には腐朽した組合式木棺が残っていたが、棺材の樹種を含め、木棺の詳細については明らかにしえなかった。

４号主体部　**３号主体部**の東側約２m離れた位置で検出したが、その大半が調査範囲外のため詳細

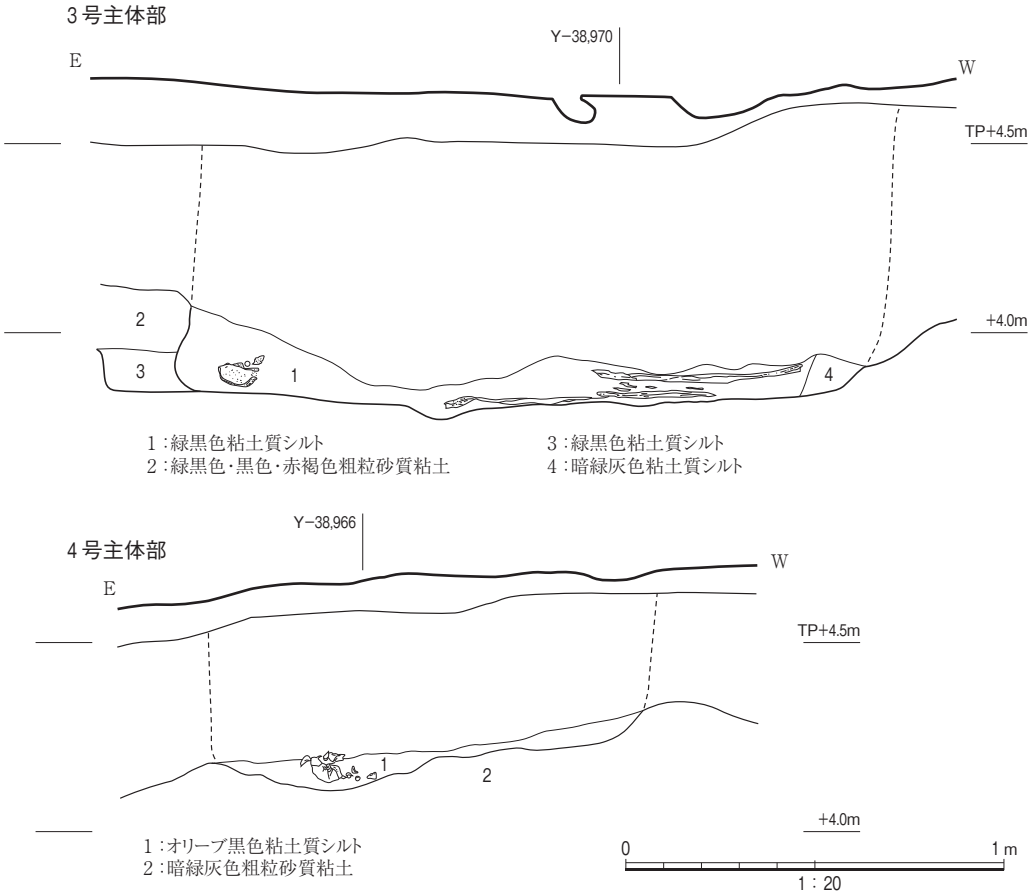


図64　Ｙ２号墳丘墓３・４号主体部断面図

は明らかでない。墓壙の幅が60cm前後あることから、南北方向の主体部の可能性がある。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトで、組合式木棺の棺材の一部が確認されたが残りが悪く構造は不明である(図59・60・64)。

５号主体部　東西トレンチの北端部、**１号主体部**の北側約60cmに位置する東西方向の主体部である(図59・65)。墓壙の北側を調査時のトレンチで失っているが、長さ233cm、幅111cm（推定)、深さは組合式木棺の確認面から25cm前後ある。埋土は墳丘盛土の偽礫を含む黒色～暗緑灰色粘土である。

墓壙内の組合式木棺は腐朽しており、小口板および側板が残っていたのみで、底板は一部を除き確認できなかった。小口板の方向は東側が縦で、西側は横であった。

棺内には東頭位の被葬者が仰臥位で埋葬されていた。顔面はやや右に向いており、骨は原位置を保っていた。右肘は伸展し、両膝も伸展していたと思われる。また、頭骨ならびにこの周辺に赤色顔料(朱)が付着していた。

６号主体部　南北トレンチの中程で確認した東西方向の主体部であるが、トレンチを設定した際に主体部の東部を失っている。本主体部は**Ｙ２号墳丘墓**の主体部の中では墳丘の北端近くに位置している(図９・59・66、原色図版17、図版30)。墓壙は長さ150cm以上、幅148cm前後、深さは墓壙の確認面から約85cmある。埋土は暗緑灰色第９層＞第10層粘土偽礫からなる。

組合式木棺は調査時のトレンチで失った以外は比較的良く残っており、縦に２枚に割れている蓋

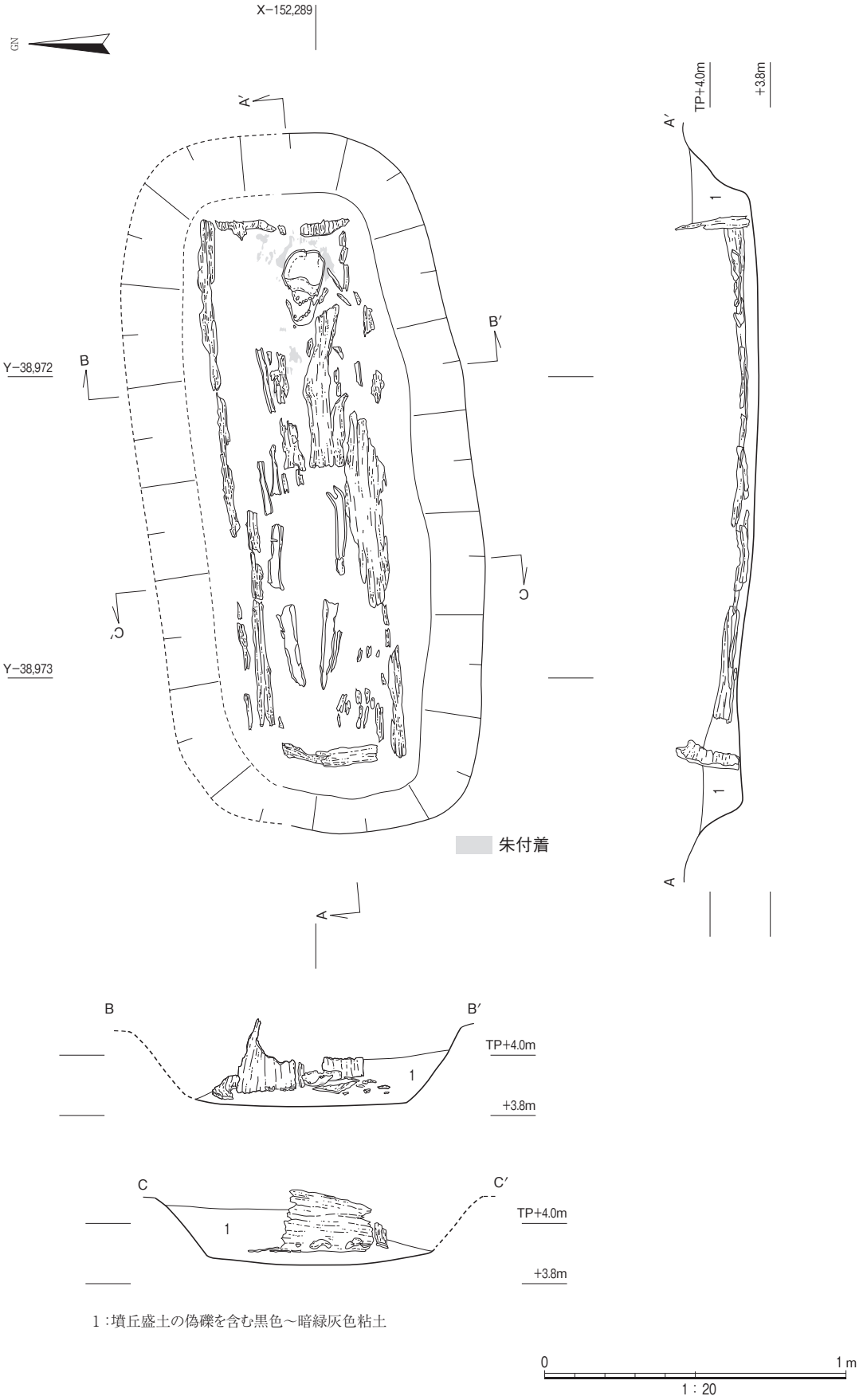


図65　Ｙ２号墳丘墓５号主体部平面・見透し断面図

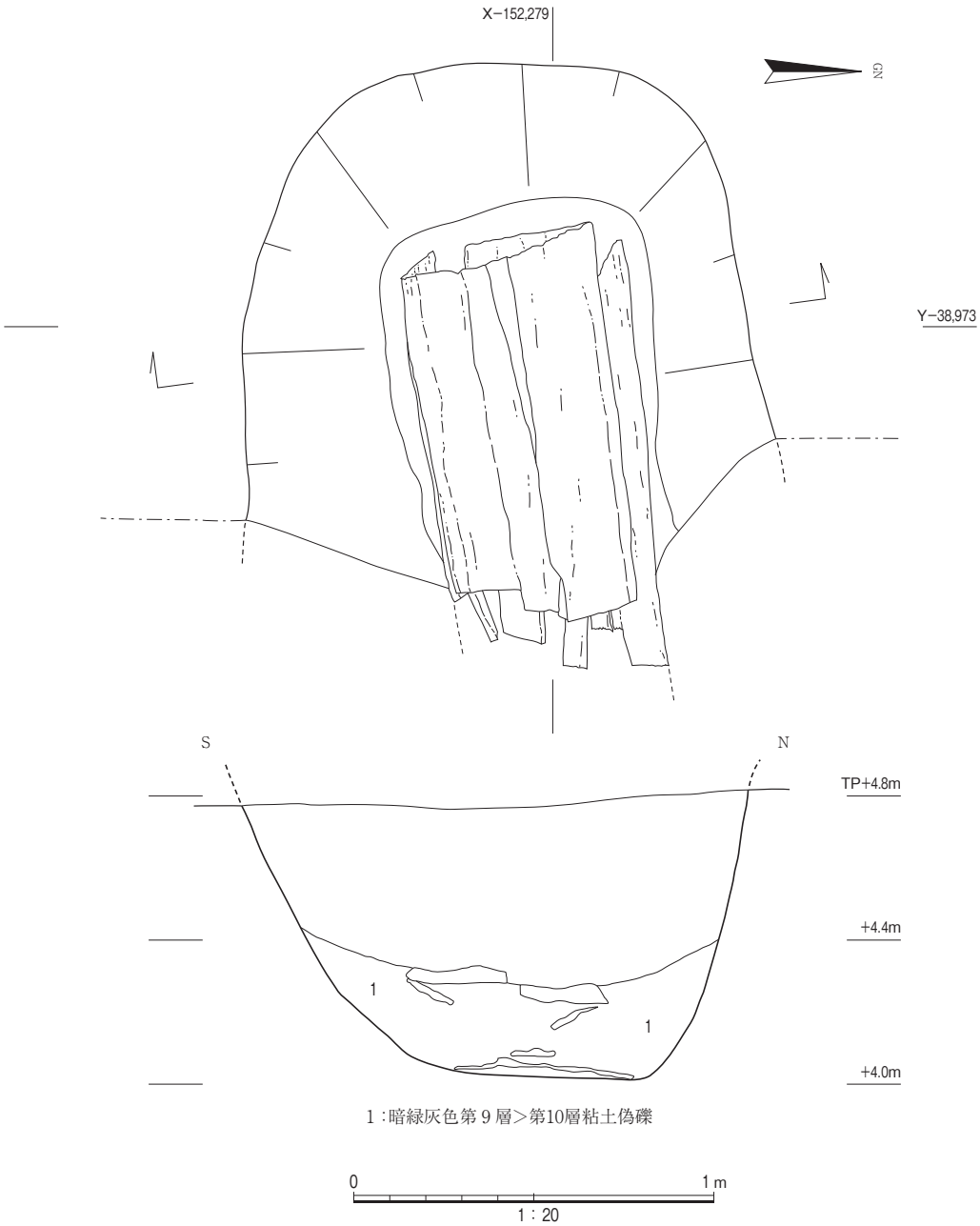


図66　Ｙ２号墳丘墓６号主体部平面・断面図

板の厚さは約5.0cmあった。棺内には人骨は残っていなかったほか、赤色顔料(朱)も見られなかった。棺材の樹種はコウヤマキである。

以上、**Ｙ２号墳丘墓**の主体部について報告したが、その多くが組合式木棺の残りが悪く、被葬者の遺骸も１・２・５号主体部以外では確認しえなかった。**Ｙ２号墳丘墓**の調査は終始トレンチ調査であったため、正確な主体部の数については断定しがたいが、主体部の方位が土器棺以外はすべて東西方向であることは注目すべきことであろう。また、１・２・５号主体部の位置が、墳丘の西部にかたよっている点についても注意しておきたい。

表４　Ｙ１・２号墳丘墓木棺計測表

Ｙ１号墳丘墓

主体部番号	墓壙最大長(cm)	墓壙最大幅(cm)	木棺最大長(cm)	小口間最大長(cm)	木棺最大幅(cm)	主体部状況
1	270	190	190	160(推定)	57	西端にトレンチが入る
2	310	125以上	196	171	50	南端はトレンチで消滅
3	215	100(推定)	186	163	58	４号と切合う
4	240	100(推定)	197	166	65	３号と切合う
5	290以上	216	220	167	103 (両側板幅：76)	19・20号と切合う
6	130	65前後	82	67	30	－
7	243	118	192	161	57	４号と切合う、木棺は腐食が進む
8	160以上	75	110前後	不明	40	南端はトレンチで消滅、木棺は腐食が進む
9	242	130	202	178	58	18号と切合う
10	206	93以上	187	168	50前後	東端は攪乱で消滅
11	43以上	56	35以上	不明	33	南半分は攪乱で消滅
12	190以上	140	173以上	160	58	西端はトレンチで消滅、木棺は腐食が進む
13	135以上	70	102以上	不明	56	東半分は攪乱、西端はトレンチで消滅
14	240	145	183	155	59	15号と切合う
15	40以上	60以上	37以上	不明	現存16	14号と切合う、東半分はトレンチで消滅、 木棺は腐食が進む
16	100以上	76	25以上	不明	25以上	東半分はトレンチで消滅、木棺は腐食が進む
17	75以上	46	63以上	不明	30(推定)	北端はトレンチで消滅、木棺は腐食が進む
18	126	90以上	92	74	43	９号と切合う、南西端はトレンチで消滅
19	257	97以上	194	163	53	５号と切合う、北端はトレンチで消滅
20	155以上	83	130以上	不明	44	５号と切合う、 西端はセクションにかかり未調査、腐食進む
21	120	80	84	75	32	－
22	27以上	53	10以上	不明	20(推定)	南半分はトレンチで消滅
23	247	117	191	160	49	－

Ｙ２号墳丘墓

主体部番号	墓壙最大長(cm)	墓壙最大幅(cm)	木棺最大長(cm)	小口間最大長(cm)	木棺最大幅(cm)	主体部状況
1	238(推定)	75(推定)	198	168	57	２号と切合う、写真より復元
2	250(推定)	75(推定)	176	180	42	１号と切合う、写真より復元
3	183	不明	不明	不明	不明	南半分はセクションにかかり未調査
4	不明	不明	不明	不明	不明	南半分はセクションにかかり未調査
5	233	111(推定)	183	175	54	北側はトレンチで消滅
6	150以上	148前後	124以上	不明	64	東半分はトレンチで消滅

表５　Ｙ１・２号墳丘墓遺物観察表（１）

掲載番号	器種	器形	層位	遺構名	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土／材質	焼成
1	弥生土器	直口壺	第６層	Y1号墳丘墓	－	6.6	15.4	3.7	灰白黄色	長石･石英･チャート	良好
2	弥生土器	高杯	第６層	Y1号墳丘墓	－	13.5	9.2	7.4	にぶい黄橙色～赤黄褐色	石英･シャモット	良好
3	弥生土器	高杯	第６層	Y1号墳丘墓	－	－	(3.1)	13.7	にぶい黄褐色	角閃石･石英	良好
4	弥生土器	甕	第６層	Y1号墳丘墓	－	－	(11.2)	4.3	黄灰色	石英	良好
5	鉄製品	鑿	－	Y1号墳丘墓	墳丘盛土内	長(10.3)	幅1.1	厚0.6	－	－	－
6	石器	凸基有茎式打製石鏃	－	Y1号墳丘墓	墳丘盛土内	長(4.4)	幅1.9	厚0.6	－	サヌカイト風化未進	－
7	石製品	磨製石庖丁	－	Y1号墳丘墓	墳丘盛土内	長4.3	幅(6.2)	厚0.7	－	千枚岩	－
8	弥生土器	高杯A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	15.2	(11.0)	－	浅黄色	雲母･チャート	良好
9	弥生土器	高杯A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(7.6)	10.1	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
10	弥生土器	水差し	－	Y1号墳丘墓	東周溝	9.6	(21.9)	－	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
11	弥生土器	器台	－	Y1号墳丘墓	東周溝	32.3	33.1	29.5	浅黄橙色	長石･雲母･チャート･シャモット	良好
12	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	22.8	(2.6)	－	にぶい橙色～浅黄橙色	長石･石英･チャート	良好
13	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	14.9	26.5	6.7	灰黄色	雲母･チャート･長石	良好
14	弥生土器	鉢	－	Y1号墳丘墓	東周溝	53.3	25.7	12.0	にぶい黄褐色	角閃石･雲母･長石	良好
15	弥生土器	細頸壺	－	Y1号墳丘墓	東周溝	29.7	81.7	11.4	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
16	弥生土器	細頸壺	－	Y1号墳丘墓	東周溝	14.8	(9.0)	－	黄灰色	角閃石･雲母･長石	良好
17	弥生土器	細頸壺	－	Y1号墳丘墓	東周溝	5.4	(18.7)	－	灰褐色	角閃石･雲母･長石	良好
18	弥生土器	細頸壺	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(8.3)	－	にぶい黄色	角閃石･雲母･長石	良好
19	弥生土器	高杯B類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	20.0	(6.6)	－	浅黄橙色	長石･石英･チャート･雲母･シャモット	良好
20	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	13.0	(19.9)	－	浅黄橙色～灰黄色	石英･長石･チャート･雲母	良好
21	弥生土器	甕D類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	36.8	51.0	9.1	暗オリーブ灰色	角閃石･雲母･長石	良好
22	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(24.9)	5.8	褐色～明茶褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
23	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	14.2	(5.0)	－	暗灰褐色	角閃石･雲母	良好
24	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	15.0	(5.5)	－	にぶい橙色	長石･チャート	良好
25	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	14.8	(5.6)	－	暗灰褐色	角閃石･雲母	良好
26	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	15.7	19.9	5.2	黄橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
27	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	16.9	25.4	6.6	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
28	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	16.4	28.0	6.4	褐色～明茶褐色	角閃石･雲母･長石	良好
29	弥生土器	甕D類	－	Y1号墳丘墓	東周溝	40.4	(43.0)	－	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石	良好
30	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	21.8	35.9	6.4	にぶい橙色～灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
31	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	15.5	28.8	6.4	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
32	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	15.0	26.7	7.2	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
33	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	28.2	59.0	8.8	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
34	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	25.4	(13.9)	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
35	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	17.7	(30.0)	－	黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
36	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	19.2	42.7	7.2	褐色～明茶褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
37	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	12.4	(9.2)	－	にぶい黄橙色	チャート･雲母･長石･石英	良好
38	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	13.0	25.9	5.2	にぶい黄橙色	チャート･長石･雲母･石英	良好
39	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	14.4	29.4	6.4	灰黄色	長石･石英･チャート	良好
40	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	－	(9.3)	4.9	にぶい黄橙色	雲母･長石･チャート	良好
41	弥生土器	広口壺C類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	15.9	(16.8)	－	浅黄橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
42	弥生土器	広口壺C類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	20.1	(24.5)	－	淡黄橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
43	弥生土器	広口壺C類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	20.5	30.7	8.3	淡橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
44	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	11.1	23.6	6.8	橙色～にぶい黄橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
45	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	15.8	28.6	6.6	淡黄橙色	石英･長石･チャート	良好
46	弥生土器	広口壺C類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	16.4	(31.3)	7.2	黄橙色	石英･長石･チャート	良好
47	弥生土器	蓋	－	Y1号墳丘墓	西周溝	13.8	3.5	－	灰黄褐色	角閃石･雲母･石英･長石	良好
48	弥生土器	台付無頸壺	－	Y1号墳丘墓	西周溝	13.4	16.5	10.4	にぶい黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
49	弥生土器	蓋	－	Y1号墳丘墓	西周溝	10.0	3.1	－	淡黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
50	弥生土器	台付無頸壺	－	Y1号墳丘墓	西周溝	12.0	11.3	9.4	灰白色～灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
51	弥生土器	台付無頸壺	－	Y1号墳丘墓	西周溝	18.3	18.1	12.9	灰黄色～暗灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
52	弥生土器	台付鉢	－	Y1号墳丘墓	西周溝	15.3	10.8	8.7	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
53	弥生土器	台付鉢	－	Y1号墳丘墓	西周溝	22.2	16.5	12.0	鉢部：橙色 脚部：浅黄橙色	鉢部:長石･チャート･雲母･石英 脚部:角閃石･雲母･長石･石英	良好
54	弥生土器	台付鉢	－	Y1号墳丘墓	西周溝	17.4	13.9	9.4	灰褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
55	弥生土器	高杯B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	20.8	(14.6)	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母･シャモット	良好
56	弥生土器	高杯B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	21.5	19.5	13.8	杯部:浅黄橙色 脚部:灰黄褐色	杯部:長石･チャート･雲母･石英 脚部:角閃石･雲母･長石･石英	良好
57	弥生土器	高杯B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	23.8	18.6	14.5	明褐灰色	角閃石･雲母･長石･シャモット･石英	良好
58	弥生土器	水差し	－	Y1号墳丘墓	西周溝	10.1	19.3	5.9	浅黄橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
59	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	12.0	16.1	5.3	橙色～浅黄橙色	石英･チャート･長石･雲母	良好
60	弥生土器	甕B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	17.2	31.3	7.8	黄橙色	石英･長石･チャート	良好
61	弥生土器	甕B類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	26.2	(34.2)	－	浅黄橙色～褐灰色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
62	弥生土器	鉢	－	Y1号墳丘墓	西周溝	54.8	28.4	10.7	橙色～淡黄橙色	角閃石･雲母･石英･長石･チャート	良好
63	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	8.2	(4.8)	－	暗黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
64	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	9.3	9.8	3.8	暗灰褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好

表５　Ｙ１・２号墳丘墓遺物観察表（２）

掲載番号	器種	器形	層位	遺構名	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土／材質	焼成
65	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	－	(3.3)	3.4	暗灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
66	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	13.9	(5.5)	－	暗茶褐色	角閃石	良好
67	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	14.2	23.4	5.6	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
68	弥生土器	甕C類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	22.0	32.6	7.3	にぶい黄橙色	チャート･雲母･長石･石英	良好
69	弥生土器	甕D類	－	Y1号墳丘墓	西周溝	44.0	57.6	9.9	灰黄褐色	長石･石英･角閃石･雲母･シャモット	良好
70	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	北周溝	17.0	30.5	5.9	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
71	弥生土器	高杯C類	－	Y1号墳丘墓	北周溝	16.1	15.6	7.5	浅黄橙色	石英･長石･チャート･雲母	良好
72	弥生土器	台付鉢	－	Y1号墳丘墓	北周溝	16.1	13.6	8.8	浅黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
73	弥生土器	台付無頸壺	－	Y1号墳丘墓	北周溝	12.8	14.4	10.8	灰褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
74	弥生土器	細頸壺	－	Y1号墳丘墓	北周溝	22.7	64.2	8.0	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
75	弥生土器	細頸壺	－	Y1号墳丘墓	北周溝	－	(19.8)	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
76	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	北周溝	21.6	36.0	5.0	褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
77	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	北周溝	26.8	45.5	7.4	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
78	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	北周溝	18.2	28.5	5.7	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
79	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	北周溝	21.0	34.9	6.2	灰白色～黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
80	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	南周溝	17.6	29.0	7.8	橙色～浅黄橙色	石英･チャート･長石･雲母	良好
81	弥生土器	広口壺B類	－	Y1号墳丘墓	南周溝	15.0	32.1	7.4	茶褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
82	弥生土器	広口壺A類	－	Y1号墳丘墓	南周溝	－	(24.7)	－	灰白色	長石･石英･チャート･雲母	良好
83	弥生土器	甕C類	－	Y1号墳丘墓	南周溝	36.0	(45.0)	10.0	灰白色～浅黄橙色	雲母･長石･石英･チャート	良好
84	弥生土器	甕E類	－	Y1号墳丘墓	南周溝	24.8	33.1	9.0	橙色～黄橙色	石英･長石･チャート	良好
85	木製品	直柄横鍬	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(11.7)	幅(19.2)	厚3.3	－	－	－
86	木製品	直柄横鍬	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(16.2)	幅(16.6)	厚2.6	－	－	－
87	木製品	組合せ平鋤	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長26.6	幅16.6	厚2.5	－	－	－
88	木製品	組合せ平鋤	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長33.4	幅20.5	厚2.3	－	アカガシ亜属	－
89	木製品	一木平鋤	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(53.0)	幅(9.7)	厚3.2	－	－	－
90	木製品	泥除	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(13.5)	幅29.0	厚0.5	－	－	－
91	木製品	刀形木製品	－	Y1号墳丘墓	西周溝	長(34.6)	幅5.6	厚1.9	－	コウヤマキ	－
92	木製品	槍形木製品	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(91.0)	幅3.7	厚1.7	－	コウヤマキ	－
93	木製品	祭祀具?	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(30.0)	幅12.0	厚7.9	－	コウヤマキ	－
94	木製品	高杯	－	Y1号墳丘墓	東周溝	29.6	(2.5)	－	－	－	－
95	木製品	高杯	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(2.9)	－	－	－	－
96	木製品	高杯	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(18.8)	16.8	－	－	－
97	木製品	高杯	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(9.9)	－	－	－	－
98	木製品	高杯	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(14.9)	11.0	－	－	－
99	木製品	四脚容器	－	Y1号墳丘墓	東周溝	－	(7.6)	－	－	－	－
100	木製品	四脚容器蓋	－	Y1号墳丘墓	西周溝	22.3	2.0	－	－	－	－
101	木製品	墓標?	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(71.9)	幅11.6	厚3.3	－	コウヤマキ	－
102	木製品	薄板	－	Y1号墳丘墓	西周溝	長(27.9)	幅5.1	厚0.9	－	コウヤマキ	－
103	木製品	薄板	－	Y1号墳丘墓	西周溝	長(23.1)	幅5.3	厚0.6	－	コウヤマキ	－
104	木製品	薄板	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(42.2)	幅5.1	厚0.5	－	コウヤマキ	－
105	木製品	墓標	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(16.9)	幅3.8	厚0.7	－	コウヤマキ	－
106	木製品	薄板	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(70.1)	幅7.8	厚1.1	－	コウヤマキ	－
107	木製品	墓標?	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(49.7)	幅9.5	厚0.6	－	コウヤマキ	－
108	木製品	墓標?	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(32.9)	幅10.6	厚2.2	－	コウヤマキ	－
109	木製品	チップ	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長10.0	幅10.2	厚5.6	－	コウヤマキ	－
110	木製品	チップ	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長18.8	幅12.4	厚2.0	－	コウヤマキ	－
111	木製品	チップ	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(14.4)	幅4.8	厚0.9	－	コウヤマキ	－
112	木製品	チップ	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長(13.0)	幅5.7	厚2.4	－	コウヤマキ	－
113	木製品	チップ	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長6.4	幅5.2	厚2.8	－	コウヤマキ	－
114	木製品	チップ	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長6.8	幅4.4	厚3.0	－	コウヤマキ	－
115	石製品	扁平片刃石斧	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長6.8	幅3.3	厚1.4	－	緑色片岩	－
116	石製品	磨製石庖丁	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長4.0	幅(8.1)	厚0.7	－	緑色片岩	－
117	石製品	磨製石庖丁	－	Y1号墳丘墓	西周溝	長4.3	幅(8.5)	厚0.6	－	緑色片岩	－
118	石製品	砥石	－	Y1号墳丘墓	東周溝	長26.0	幅16.9	厚9.4	－	和泉砂岩	－
119	ガラス製品	ガラス勾玉	－	Y1号墳丘墓	1号主体部	長1.5	幅1.3	厚0.35	コバルトブルー	アルカリ珪酸ガラス	－
120	ガラス製品	ガラス小玉	－	Y1号墳丘墓	1号主体部	長0.6	幅0.6	－	コバルトブルー	アルカリ珪酸ガラス	－
121	弥生土器	高杯A類	－	Y1号墳丘墓	2号主体部	－	(14.6)	12.0	浅黄橙色	長石･チャート･石英･雲母･シャモット	良好
122	ガラス製品	ガラス平玉	－	Y1号墳丘墓	2号主体部	長0.7	幅0.65	厚0.2	コバルトブルー	鉛バリウムガラス	－
123	銅製品	円環型銅釧	－	Y1号墳丘墓	2号主体部	外径6.20～6.47 内径5.59～5.88	幅 0.28～0.33	厚 0.58～0.62	漆黒色	白銅	－
124	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	3号主体部	14.4	(3.6)	－	黄褐色	角閃石･雲母･長石	良好
125	弥生土器	台付無頸壺	－	Y1号墳丘墓	5号主体部	－	(12.0)	8.2	にぶい黄褐色～黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
126	弥生土器	甕A類	－	Y1号墳丘墓	9号主体部	33.7	49.6	9.0	橙色～明褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良
127	銅製品	円環型銅釧	－	Y1号墳丘墓	14号主体部	外径6.25～6.52 内径5.76～5.97	幅 0.24～0.28	厚 0.41～0.44	漆黒色	白銅	－
128	弥生土器	高杯A類	－	Y1号墳丘墓	21号主体部	16.0	19.6	12.2	浅黄色～橙色	長石･石英･雲母･チャート	良好

表５　Ｙ１・２号墳丘墓遺物観察表（３）

掲載番号	器種	器形	層位	遺構名	出土位置	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色調	胎土／材質	焼成
129	弥生土器	高杯B類	－	Y1号墳丘墓	23号主体部	24.5	17.8	15.7	橙色～淡橙色	長石･石英･雲母･角閃石	良好
130	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（81.9）	幅5.8	厚5.8	－	－	－
131	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（50.9）	幅3.8	厚3.6	－	－	－
132	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（82.8）	幅7.0	厚4.7	－	－	－
133	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（54.0）	幅18.5	厚5.4	－	－	－
134	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（65.7）	幅4.8	厚4.3	－	－	－
135	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長63.5	幅4.3	厚4.3	－	－	－
136	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（15.8）	幅2.6	厚2.5	－	－	－
137	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（50.8）	幅5.7	厚5.2	－	－	－
138	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（73.8）	幅6.8	厚5.0	－	－	－
139	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（72.3）	幅9.6	厚4.3	－	－	－
140	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（69.3）	幅11.5	厚3.0	－	－	－
141	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（35.8）	幅10.2	厚4.8	－	－	－
142	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（38.5）	幅10.1	厚5.0	－	－	－
143	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（60.1）	幅9.1	厚4.4	－	－	－
144	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（81.4）	幅8.0	厚3.6	－	－	－
145	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（75.7）	幅8.7	厚6.3	－	－	－
146	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（65.5）	幅7.5	厚4.2	－	－	－
147	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（59.6）	幅6.0	厚2.8	－	－	－
148	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（55.0）	幅7.6	厚4.8	－	－	－
149	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（51.0）	幅7.0	厚3.3	－	－	－
150	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（46.6）	幅6.9	厚3.7	－	－	－
151	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（40.1）	幅7.4	厚3.2	－	－	－
152	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（47.4）	幅14.5	厚3.0	－	－	－
153	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（43.8）	幅13.6	厚3.3	－	－	－
154	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（42.6）	幅7.1	厚3.4	－	－	－
155	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（34.8）	幅7.7	厚2.4	－	－	－
156	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（37.7）	幅6.8	厚3.1	－	－	－
157	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（43.0）	幅8.6	厚2.5	－	－	－
158	木製品	杭	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（19.2）	幅5.6	厚5.1	－	－	－
159	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（25.6）	幅7.6	厚1.5	－	－	－
160	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（30.7）	幅7.0	厚2.5	－	－	－
161	木製品	矢板	－	Y1号墳丘墓	SA801	長（31.4）	幅9.3	厚3.1	－	－	－
162	弥生土器	広口壺A類	－	Y2号墳丘墓	盛土	18.8	（12.8）	－	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石	良好
163	弥生土器	広口壺A類	－	Y2号墳丘墓	盛土	－	（10.4）	6.9	灰黄褐色～にぶい黄色	角閃石･雲母･長石	良好
164	弥生土器	瓢箪形壺	－	Y2号墳丘墓	北周溝内底	11.2	（24.2）	－	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石	良好
165	弥生土器	甕A類	－	Y2号墳丘墓	盛土	12.4	（3.8）	－	にぶい黄橙色	長石･チャート･シャモット	良好
166	弥生土器	甕B類	－	Y2号墳丘墓	盛土	24.8	（6.0）	－	明褐灰色	角閃石･雲母･石英･チャート	良好
167	弥生土器	甕B類	－	Y2号墳丘墓	北周溝内底	25.2	41.0	6.8	にぶい橙色	長石･石英･雲母･チャート	良好
168	弥生土器	台付鉢	－	Y2号墳丘墓	土器棺の近く	36.2	（9.1）	－	淡黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
169	弥生土器	台付鉢	－	Y2号墳丘墓	土器棺の近く	－	（12.6）	14.0	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
170	弥生土器	広口壺A類	－	Y2号墳丘墓	土器棺	－	（28.5）	8.0	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石	良好

第Ⅳ章　Ｙ１・２号墳丘墓の考察

第１節　Ｙ１号墳丘墓出土の弥生土器の器形構成と編年的位置づけ

ⅰ)はじめに

Ｙ１号墳丘墓では各周溝内ならびに主体部上から多くの弥生時代中期後葉に属する土器が出土した。これらの土器を器形ごとに分類し、出土個体総数に占める河内産と非河内産の割合と意味、葬送儀礼での土器の用途をはじめ、河内地域の弥生時代中期の土器編年[寺沢・森岡1989]を参考にして**Ｙ１号墳丘墓**および**Ｙ２号墳丘墓**から出土した弥生土器の編年的な位置づけを行いたい。

ⅱ)河内地域の弥生時代中期後葉の土器編年

まず、河内地域の弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)の土器編年について概観しておく。この地域の当該期の土器の研究は早くから先学によって行われており、基本的な編年体系が確立されている[小林行雄・杉原荘介1969・1973]。ただし、弥生式土器集成では凹線文の出現時期について畿内第Ⅲ様式を古・新段階に二分した場合の新段階とみており、本報告の編年のように凹線文を畿内第Ⅳ様式を区分するときの要素の１つとしてみる点が異なっている。また、弥生式土器集成の編年の根幹は戦前に行われた奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡の調査資料による編年体系を基本にしていることもあって、おもに北砂および南方部の出土資料によった唐古第Ⅲ・Ⅳ様式土器については明確に区分しがたい面があった。そのため、唐古第Ⅲ様式は櫛描文が盛行し、凹線文が出現する以前の段階を古段階に、凹線文が出現する新段階に二分された。つまり、唐古第Ⅲ様式新段階と凹線文が櫛描文とともに盛行した唐古第Ⅳ様式との区分は今一つ不明瞭であった。ただし、大阪府東大阪市にある西ノ辻遺跡N地点の旧河道内から出土した装飾性が少なくヘラミガキが多用された一群の土器[小林・杉原1973]について、「唐古第Ⅳ様式の最後の段階に近いもの」とみた指摘は卓見といえよう[小林行雄1973]。

以上のような唐古・鍵遺跡の土器編年を基調にした畿内地域の弥生時代の土器編年はまとめられて、畿内第１～第５様式土器編年として普及した[小林・杉原1969・1973]。その後、1970年代の終盤から1990年代にかけて高度経済成長に伴う近畿地域の発掘調査が激増する中で各地の弥生土器の資料が充実し、1989年に寺沢薫・森岡秀人両氏を中心に近畿各地の研究者により弥生土器の編年研究が行われ、河内、大和、紀伊、丹後・丹波地域の弥生土器の新しい様式編年が提示された[寺沢・森岡1989]。寺沢薫氏案によると、河内地域の第Ⅳ様式はⅣ－1～Ⅳ－４に区分され、既応の編年との対比関係は、Ⅳ－１・２が第Ⅲ様式(新)、Ⅳ－３・４が第Ⅳ様式に対比されている。

引き続いて1990年には和泉・摂津・山城・近江地域の弥生土器の様式編年が提示された[寺沢・森岡1990]。森岡秀人氏の案では摂津地域は第Ⅳ様式の始まりと終わりが周辺地域とわずかに異なるものの、Ⅳ－１・２様式が既応の編年の第Ⅲ様式新段階に、Ⅳ－３・４様式は畿内第Ⅳ様式に対応し、河内地域の土器編年とも整合している。和泉地域は畿内地域の既応の編年と比べて第Ⅳ様式の始まり

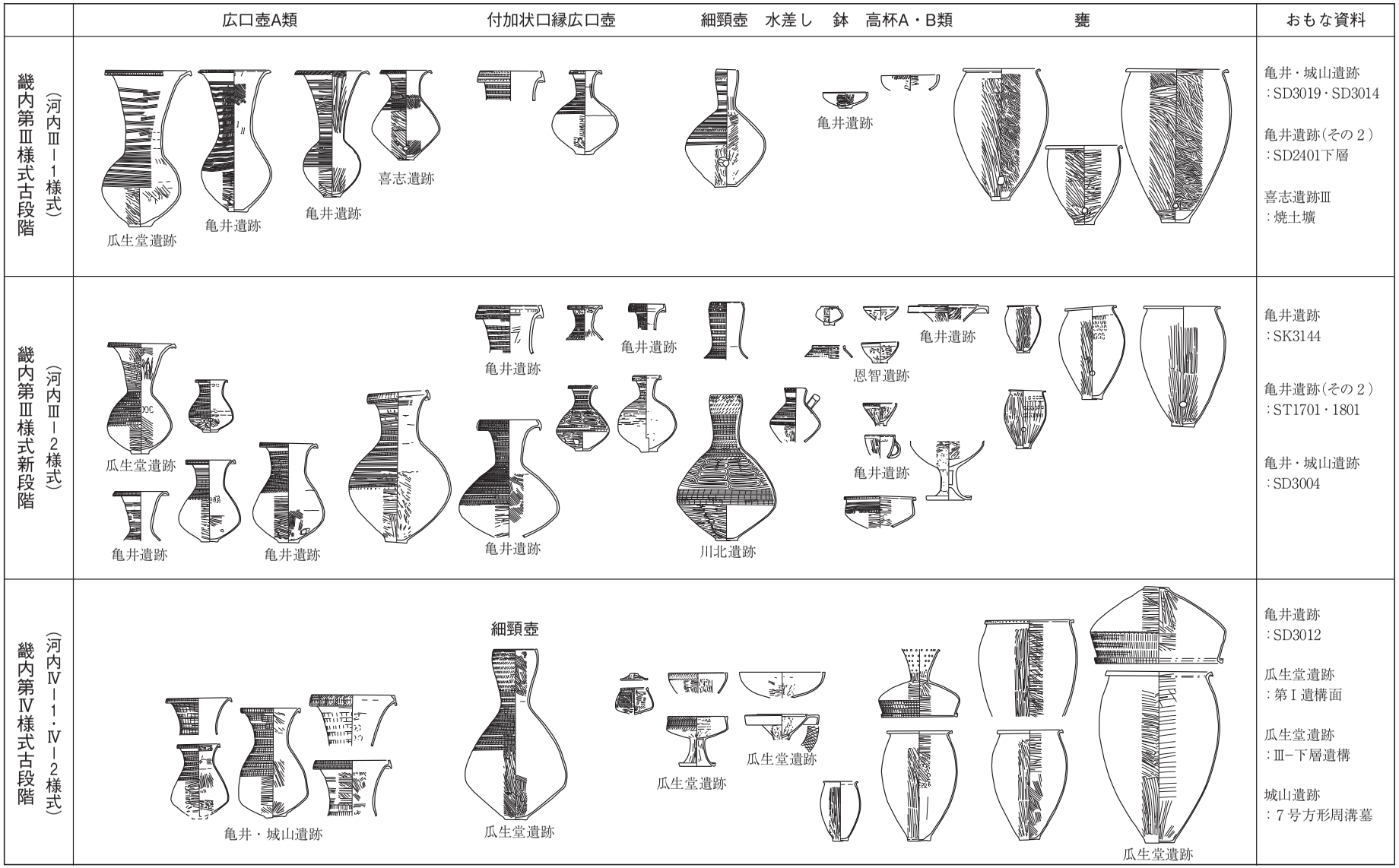


図67　弥生時代中期後半土器編年（１）

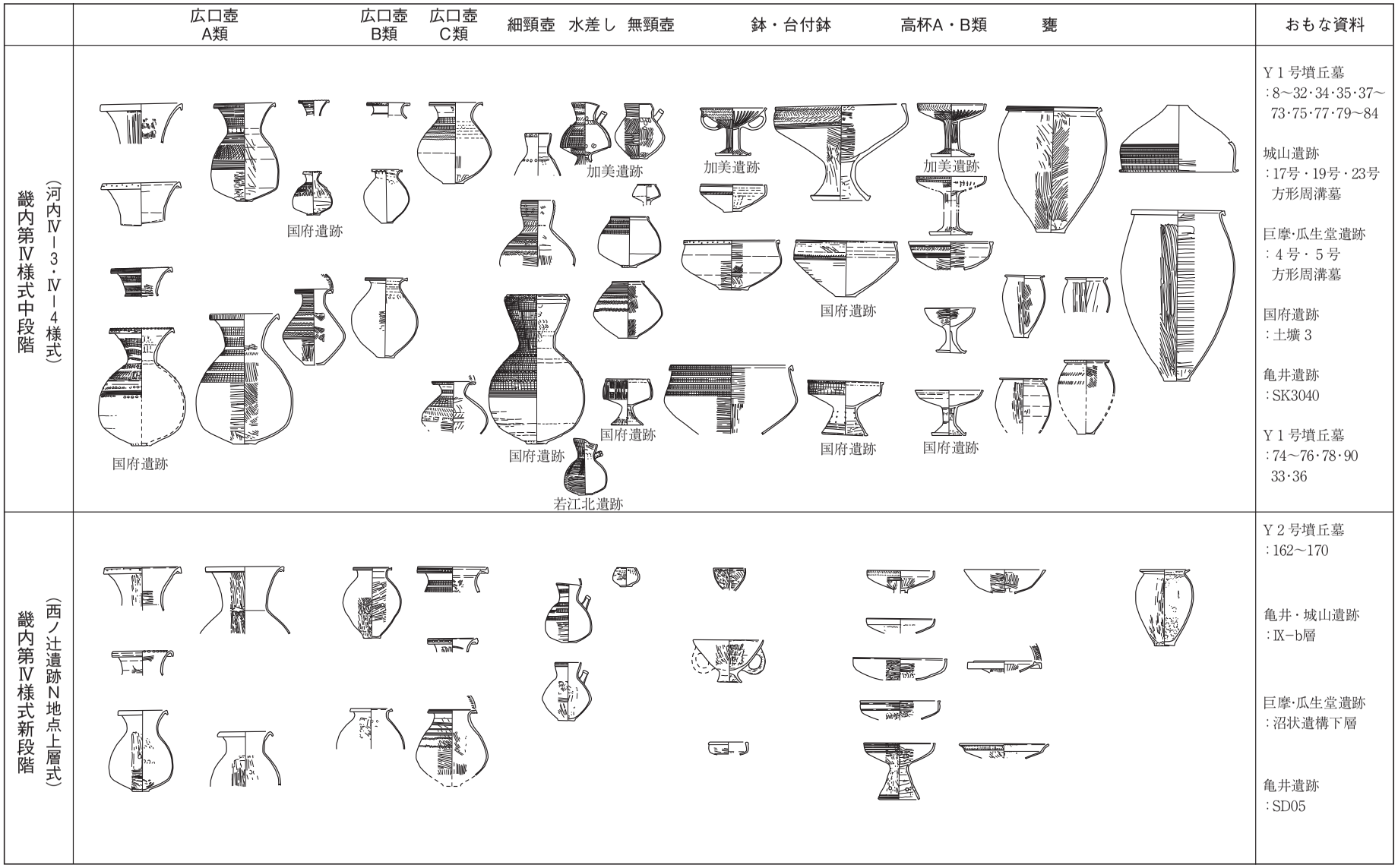


図67　弥生時代中期後半土器編年（２）

が若干遅れてはいるが大勢には問題なさそうである。以上のような編年体系については大方が認知しており、本報告でも土器編年の基準にしている。ただし、本報告では**Ｙ１号墳丘墓**および瓜生堂遺跡[瓜生堂遺跡調査会1981]、巨摩・瓜生堂遺跡[大阪文化財センター1982]、城山遺跡[大阪文化財センター1986c]などの弥生時代中期後葉の方形周溝墓での土器の在り方を再吟味して河内地域の第Ⅳ様式を古･中･新と３段階に区分し、第Ⅳ様式古段階を河内Ⅳ－１・２様式、第Ⅳ様式中段階を河内Ⅳ－３・４様式、第Ⅳ様式新段階を西ノ辻遺跡Ｎ地点上層式[小林行雄1973]に対応させている(図67)。

ⅲ）Ｙ１号墳丘墓出土の弥生土器の器形分類と所属時期

Ｙ１号墳丘墓から出土した弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)の土器群は、出土状態からみて、葬送儀礼で使われたあと墓壙内や墓壙上に供献されるか残された土器以外は、周溝内に投棄されたものと考える。今一度、弥生土器の出土状況図(図11)を見ると、**東周溝**では墳丘の基部に沿うように点在しており、５個体の土器が出土した地点以外には１箇所に土器が集中するところはない。しかし、**北周溝**および**西周溝**では、９個体および28個体の土器が狭い範囲に投棄されていることに気付く。これらの土器群は、単一時期・型式の土器で構成されている可能性が高く**Ｙ１号墳丘墓**の築造時期を決定する上でキーポイントになるものである。ここではまず多数の弥生土器が集中する地点から、編年の基準になりうる器形のうち同一時期とみられるものを抽出するほか、各器形の特徴や煤の有無などから土器群の葬送儀礼での使用状況についてみておきたい。

Ｙ１号墳丘墓から出土した弥生土器の総個体数は84個体あり、このうち河内産(いわゆる生駒西麓産の胎土とされるもの)の土器が50個体(60％)、非河内産が34個体(40％)を数えた(表６)。各出土地点別の個体数は、**東周溝**が22個体のうち河内産が13個体、非河内産が９個体あった。**西周溝**は40個体のうち、河内産が22個体、非河内産は18個体で、**北周溝**は10個体のうち、河内産が９個体、非河内産は１個体であり、**南周溝**は５個体のうち、河内産が１個体、非河内産は４個体を数えた。以上のことから、**Ｙ１号墳丘墓**の弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式)の土器は、河内産が非河内産をやや上回ること、前述したように**東周溝**は土器が点在し、**西周溝**ならびに**北周溝**は土器が集中する場所が数箇所あることが判明した。次に各器形の出土地点ごとの出土総数に占める割合を見ることにする。

表６　Ｙ１号墳丘墓の弥生土器の出土位置と器形別個体数の一覧表

器形(類)		東周溝			南周溝			西周溝			北周溝			墳丘上ほか		
		非河内	河内	小計	非河内	河内	小計	非河内	河内	小計	非河内	河内	計	非河内	河内	小計
広口壺	A	1	1	2	1		1		6	6		5	5			
	B	2		2	1	1	2	7		7						
	C							4		4						
細頸壺	(小型)		2	2												
	(大型)		2	2								2	2			
器台		1		1												
台付無頸壺								1	2	3		1	1		1	1
蓋								1	1	2						
水差し			1	1				1		1					1	1
高杯	A	1	1	2										2		2
	B	1		1					3	3					1	1
	C										1		1			
鉢（大型）			1	1				1		1						
台付鉢									3	3		1	1			
甕	A	3	3	6					6	6					2	2
	B							2		2						
	C				1		1	1		1						
	D		2	2					1	1						
	E				1		1									
小計		9	13	22	4	1	5	18	22	40	1	9	10	2	5	7
総計		84														

東周溝では、広口壺Ａ・B類をともに２個体、小型細頸壺２個体、大型細頸壺２個体、器台１個体、水差し１個体、高杯A類２個体・高杯B類１個体、大型鉢１個体、甕A類６個体・甕D類２個体を識別した。

西周溝では、広口壺A類６個体、広口壺B類７個体、広口壺C類４個体、台付無頸壺３個体、同蓋２個体、水差し１個体、高杯B類３個体、大型鉢１個体、台付鉢３個体、甕A類６個体･甕B類２個体･甕C類およびD類をともに１個体ずつ識別した。

北周溝では、広口壺A類５個体、大型細頸壺２個体(破片含む)、台付無頸壺１個体、高杯C類１個体、台付鉢１個体を識別した。

南周溝では、広口壺A類１個体、広口壺B類２個体、甕C類１個体、甕E類１個体を識別した。

墳丘上および主体部の墓壙内ほかでは、台付無頸壺１個体、水差し１個体(調査時に盗難)、高杯A類２個体、高杯B類１個体、甕A類２個体を識別した。

このうち、全体で各器形が出土総数に占める割合は広口壺29個体(34.5％)、細頸壺６個体(7.1％)、器台１個体(1.2％)、台付無頸壺５個体(6.0％)、同蓋２個体(2.4％)、甕が22個体(26.2％)、高杯９個体(10.7％)、台付鉢５個体(6.0％)、大型鉢２個体(2.4％)、水差し３個体(3.6％)で、機能別にみると水差し・器台を含む壺類が54.8％、甕26.2％、高杯および大型鉢、台付鉢が19.0％となり、貯蔵用の壺類が最も多く、次いで煮沸用の甕、供膳具ならびに盛る容器である高杯・台付鉢・大型鉢の順となり、壺類が約半数を占める。ところが壺類のうち、広口壺Ａ・B類など16個体には煤が付着していることから、**Ｙ１号墳丘墓**に投棄する前に煮炊きに使われたものであることが判明した。これらを煮沸用である甕に加えると38個体(45％)となり、煮沸に使った器形が出土土器の約半数を占めることが見えてくる。つまり、弥生時代の葬送儀礼の場面では『魏志倭人伝』の一文に記されているような歌舞飲食が行われたことは疑う余地はないが、**Ｙ１号墳丘墓**では出土土器総量に占める煮炊きに使われた甕や壺の割合が多いことはまちがいなさそうである。**Ｙ１号墳丘墓**では大型の甕のみでなく、容量の大きい広口壺A類や同B類に煤が付着したものが多く見られたが、これは葬送儀礼の参加者数が多かったことや共飲共食儀礼が重要な行為であったことを示唆している。また、非河内産の土器の中には胎土は河内ながら器形は播磨以西とみられる広口壺Ｂ類81、色調が白味をおびた櫛描簾状文・直線文・波状文が施された広口壺A類82、同様な色調を呈する広口壺Ｂ類39・44、色調が赤色をおびた黄橙色で胎土中にチャート・長石粒を含む広口壺Ｃ類41～43・46、大型鉢62、甕C類83、甕E類84など摂津・和泉・大和など、遠方の土器とみられるものを含むが、これは**Ｙ１号墳丘墓**の被葬者が他地域との交易や交流が行えた卓越した立場にあったことや、自身が所属する集団内部での権力の大きさを物語るものといえよう。

一方、**Ｙ１号墳丘墓**での埋葬に関わる葬送儀礼が幾度行われたかについては明確な答えを出せないが、成人のみに限っても14人の被葬者が確認されていることから、葬送儀礼の規模の大小はあったとしても**Ｙ１号墳丘墓**の**墳丘**および**周溝**内で確認された17箇所に分布する弥生土器(群)を成人被葬者の葬送儀礼に関わるものとみることも可能であろう。このように解釈した場合は、西側墳丘基底の中央部付近に投棄された土器群については、規模の大きな葬送儀礼に伴うものと考えられる。

次に84個体の弥生土器の所属時期を明らかにして、**Ｙ１号墳丘墓**の築造時期をみておきたい。

Ｙ１号墳丘墓から出土した弥生土器の編年的な位置づけをする際に参考になるのは、広口壺Ａ類および大型の細頸壺などであろう。ここでは、広口壺Ａ類について検討する。畿内第Ⅳ様式古段階の広口壺Ａ類は、畿内第Ⅲ様式の広口壺Ａ類の系譜を引くものであり、第Ⅲ様式新段階の広口壺Ａ類の体部の形態は下膨れながらも球形を保っていたものが、畿内第Ⅳ様式古段階になると最大径は体部の下端近くに下がって、器体の形態も無花果形を呈するようになる。そして器体の半ば近くまで施されていた櫛描簾状文の範囲も幾分狭まる傾向が窺われる。同様なことは大型の細頸壺についても指摘しうる。この段階の広口壺の垂下した口縁部をはじめ、鉢や甕の口縁部の外端面にはヨコナデ技法の延長と指摘されている凹線文が登場する。また、数は少ないが口縁部に細筋、筒部に太い凹線文が施された器台、体部の下半が張りのある水差し、把手が付いた台付鉢などが新たに加わるとともに量が増える。以上のような畿内第Ⅳ様式古段階の特徴の見られる土器は**Ｙ１号墳丘墓**の土器群中には確認されなかった。

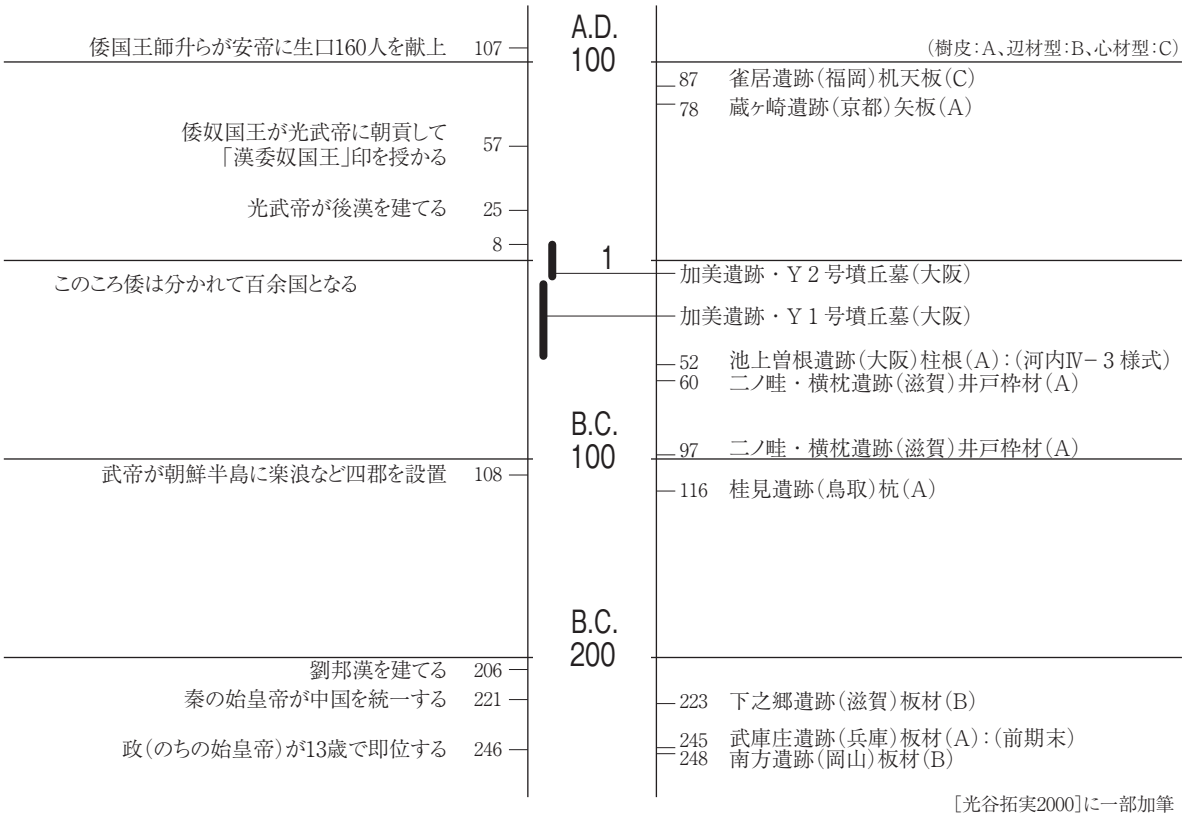
引き続いて畿内第Ⅳ様式中段階になると広口壺Ａ類の体部は無花果状を呈し、最大径が体部の下端にあって張りのあるものが主体を占めるが、最大径が体部の下端からやや高い位置に移り、その形態も球形を呈するものが登場する。前者は河内Ⅳ－３様式、後者は河内Ⅳ－４様式に相当するものと考えられる。器体外面を飾る櫛描簾状文の範囲も前者は底部近くまで施すものが多いが、後者は体部の中程までのものが見られるようになる。また、櫛描簾状文も前者はていねいなものが多いが、後者は波打つものや施文自体が粗いものが増える。なお、中段階から口縁部の外端面に櫛描簾状文を施文したあと、点状の刺突文を加えるものが登場する。

一方、大型細頸壺は、畿内第Ⅳ様式古段階では最大径が体部の中程にあり、形態も球形に近かったが、畿内第Ⅳ様式中段階になると15のように最大径が底部の近くに下がり、体部の形態は下膨れの無花果状を呈するようになる。さらに時期が新しくなると、74のように体部は球形を呈し、最大径も体部の中程に移るものが増える。また、一対の把手の付く台付鉢の量が増える。以上のような畿内第Ⅳ様式中段階の土器の諸特徴と**Ｙ１号墳丘墓**の土器群を構成する土器の特徴が一致することを追認しえたが、上述したように墳丘西側基底の中央部付近および墳丘基底の西北部に投棄された土器群（大型細頸壺を除く）が畿内第Ⅳ様式中段階の比較的古相のものと考えられる。

一方、畿内第Ⅳ様式新段階は、それまでの広口壺Ａ類の器体の外面を加飾していた櫛描簾状文が消えるほか、大型細頸壺も見られなくなる。口縁部が垂下した高杯Ａ類や把手付台付鉢も数が減るようである。大型鉢も櫛描簾状文が消えて無文化するとともに数も減っている。

Ｙ１号墳丘墓の広口壺Ａ類の中にもわずか３個体ではあるが口縁部外端面の点状の刺突文以外は無文のもの２個体33・36と、口縁部と頸部の大半を欠損した無文の広口壺Ａ類22がある。これらはいずれも最大径が無花果状を呈する体部の下半にあるものであり、西ノ辻遺跡Ｎ地点上層式の広口壺Ａ類のような体部が球形に近いものではない。加えて西ノ辻遺跡Ｎ地点上層式の広口壺Ａ類の場合は口縁部の内側に円形浮文を貼り付けているが、**Ｙ１号墳丘墓**の広口壺Ａ類では見られないことを重視すれば**Ｙ１号墳丘墓**の土器群は畿内第Ⅳ様式新段階まで下るものではないと指摘しうる。同様にほかの器形についても畿内第Ⅳ様式新段階に属するものが認められないことから、**Ｙ１号墳丘墓**の土器群は畿

表７　出土木製品の年輪年代と東アジア史関連事項



［光谷拓実2000］に一部加筆

内第Ⅳ様式中段階（河内Ⅳ－３・４様式）に属するもので、その前半に**５号主体部**の被葬者の埋葬を契機に**Ｙ１号墳丘墓**が築造されたのち、後半まで近親者や子供の埋葬が続いたものと考えられる。

一方、池上・曽根遺跡の神殿とされた大型掘立柱建物の柱の年輪年代値は紀元前52年と確定しており［光谷拓実2000］、Ⅳ期の大型柱穴の柱には河内Ⅳ－３様式に属する弥生土器が共伴していることが指摘されている（註１）。これは畿内第Ⅳ様式中段階の歴年代は紀元前52年頃に求められ、これが上限年代とも解釈されることから、**Ｙ１号墳丘墓**の築造年代（畿内第Ⅳ様式中段階）も紀元前52年頃とみても矛盾しないであろう。つまり、**Ｙ１号墳丘墓**の築造年代は朝鮮半島に漢の楽浪郡が置かれてから少し時を経た頃で、前漢後期（紀元前50年前後）に求められるのである。そして**Ｙ２号墳丘墓**は、**Ｙ１号墳丘墓**の埋葬が終わった頃から間のない弥生時代中期末（畿内第Ⅳ様式新段階）で、前漢末期（紀元前後）に築造された可能性が高い（表７）。

註）

（１）大型建物の考古学的年代観について、乾哲也氏は秋山浩三氏の大型建物の柱の年輪年代値および井戸出土土器の所属型式の検討による大型建物の歴年代観を追認し、大型建物の柱穴出土遺物の編年的な位置づけはほぼ確定しているという。それは河内地域のⅣ－３様式に対応する段階であるが、乾氏によれば本様式はⅢ様式の最末期からⅣ様式の初頭に属するものを含むことから、大型建物はⅣ期（畿内第Ⅳ様式）の初めの頃に建造されたものと指摘している［乾哲也・摂河泉地域史研究会1999］。秋山浩三氏は、大型建物Ⅰの柱穴12の年輪年代値がBC52年、同20の年代値がBC56年であり、これらに伴う土器様式の実年代がBC52年とみて、土器様式では弥生時代中期後半河内Ⅳ－3様式に接点をもつ「蓋然性が高い」という［秋山浩三2006］。

第２節　Ｙ１号墳丘墓の墳丘と埋葬施設

ⅰ)はじめに

Ｙ１号墳丘墓は墳丘の基底部の規模が南北25m、東西15m、周溝の最深部からの高さが約2.8mの河内地域で最大の弥生時代中期後葉の墳丘墓であり、これまでに同時期で本墳丘墓の規模を凌ぐものは近畿地方では確認されていない。墳丘墓の詳細については既述したとおりであるが、ここではⅱ)墳丘および周堤、ⅲ）Ｙ１号墳丘墓の組合式木棺と木槨、ⅳ）Ｙ１号墳丘墓にみられる漢文化と墳丘墓の意義について若干の検討を加えておく。

ⅱ)墳丘および周堤

Ｙ１号墳丘墓の墳丘・周溝・周堤の等高線図を見ると、TP＋3.4～4.0mの等高線の間隔が上下の間隔に比べて広く、いわゆる犬走り状の段をなすことがわかる(図７)。TP＋3.4～3.5mは、墳丘墓の構築面である第8a層の旧表土に相当することから、これより下の墳丘の採土場所でもある周溝内と墳丘の境に犬走り状の段を設けた可能性がある。この段は一部不明瞭な所もあるが、ほぼ墳丘を廻ることから、いわゆる二段築成の墳丘をイメージして造られたものかもしれない。このようにみると**Ｙ１号墳丘墓**の正面は、段築状の遺構の残りが良好な墳丘の東側になるであろう。

一方、墳丘の平面形は長方形で、その主軸は正南北であったことから、天測を行って主軸を求めたものと考えた。墳丘の主軸を正南北にする墳墓は、朝鮮半島では楽浪郡の王光墓[小場恒吉・榧本亀次郎1935]および貞柏洞２号墳・同53号墳、貞柏里127号墳ほか、楽浪漢墓では初期から中期にかけての墳墓[朝鮮総督府1919、楽浪漢墓刊行会1974・1975、大阪府立弥生文化博物館1993]で確認されることから、**Ｙ１号墳丘墓**における天測の技術も楽浪郡から伝わった可能性がある。

Ｙ１号墳丘墓の築造に当っては墳丘基底部および周溝の範囲を旧表土の上面に示したあと、周溝の範囲を掘削して墳丘の位置に盛土を行って、墳丘を築造しており、その手順は既述したように１期(第１段階)→２期(第２段階)→３期(第３段階)と復元した。そして墳丘墓の最終的な埋葬が終わったのち、４期(第４段階)として墳丘上を整地したと考えた。**Ｙ１号墳丘墓**の墳丘盛土の総量は以下に示すような計算式によって約463㎥になる(図68)。

墳丘頂部の規模、南北21m(a)・東西10m(b)および墳丘基底部の規模、南北25m(c)・東西15m(d)、高さ1.6m(h)で、台形柱の体積(V)を求める。

$V = h/6(ad + bc + 2(ab + dc))$

$V = h/6(565 + 2 \times 585)$

$V = 2776/6 = 462.66$ ㎥

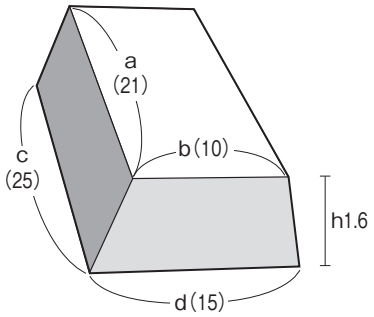


図68　墳丘盛土の総量を求める際の概念図

築造時期が**Ｙ１号墳丘墓**より少し先行するが瓜生堂遺跡の２号方形周溝墓は東西14m、南北18m、

深さ0.6mにわたって行われた掘削、盛土の作業土量が総計122㎥という[瓜生堂遺跡調査会1981]。このような両者にみられる墳丘盛土量の違いは、採土量の違いつまり、墓造りにおける労働力の違いが反映されているものと考えられる。**Ｙ１号墳丘墓**と同様の弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式中段階)の大規模な墓域である城山遺跡の方形周溝墓群のうち、墳丘の規模が比較的大きな23号方形周溝墓[大阪文化財センター1986c]の盛土量は71㎥余りで、周溝を共有しながら群集する方形周溝墓の墳丘の盛土量は、共同体の墓域から離脱して築造された**Ｙ１号墳丘墓**や**Ｙ２号墳丘墓**に比べて少ないことが歴然としている。

一方、周堤とした高まりは、**Ｙ１号墳丘墓**の**東周溝**ならびに**北周溝**に沿うように旧表上に盛土をして構築している。しかし、周堤は**北周溝**の南北中央セクション沿いのトレンチおよび**東周溝**の東南部に設定したトレンチで確認された以外は未確認のため、周堤が周溝の縁辺を全周するか否かについては明らかになってない(図７・８)。このような周溝の外部施設というべき周堤の類似例は、弥生時代中期後葉の西日本地域では見られなかった。

ⅲ）Ｙ１号墳丘墓の組合式木棺と木槨

Ｙ１号墳丘墓には成人14人、子供９人が埋葬された23基の主体部があった。これらの埋葬には木槨が確認された**５号主体部**以外は組合式木棺が用いられており、その棺材は判明したものはすべてコウヤマキであった。

組合式木棺は、底板の両端近くに小口板を立てる溝を彫るか、段状にカットした底板に両小口板を立てたあと、側板で小口板を挟み、蓋板を被せる型式(Ⅰ型式)であった。つまり、**Ｙ１号墳丘墓**には小口板を底板より地中深く埋める組合式木棺(Ⅱ型式)を使っていないのである(図69)。木棺材は腐朽しており、**10号主体部**の組合式木棺の底板および小口板以外には旧状を留めるものは見られなかった。**10号主体部**の組合式木棺の棺材を参考にすると棺材の底板･側板･蓋板は長さ190㎝前後、幅50㎝前後、

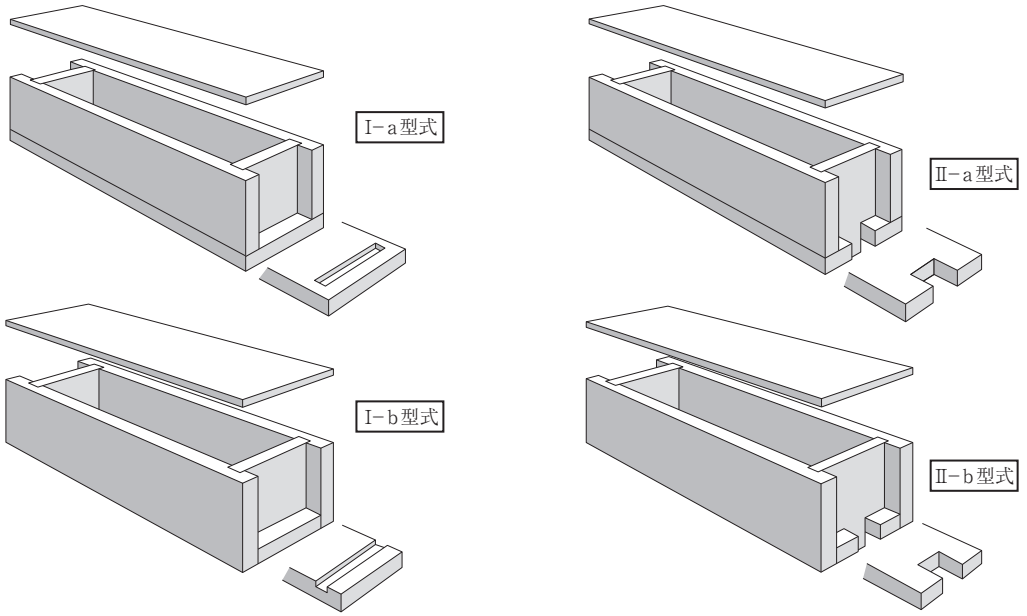


図69　弥生時代中期中葉～後葉の組合式木棺(Ⅰ・Ⅱ型式)の模式図([瓜生堂遺跡調査会1981]に一部加筆)

厚さ10cm前後であったと考えられる。小口板はこれを４等分に裁断して使ったようである。したがって、**Ｙ１号墳丘墓**の成人を埋葬した主体部の組合式木棺は、直径１ｍを超えるようなコウヤマキが使用されていることが判明した。コウヤマキは原生林から伐採したあと、現地あるいはその近隣で適切な長さに切断し、柾目取りの板材に分割したのち、さらに長さ190cm前後に切断したものと考えられた。そして棺材として切り出された板材は近くの集落に一旦運ばれたのち、これを必要とする集落に搬出されたものと思われる。

河内低地部の弥生時代中期後葉（畿内第Ⅳ様式）の方形周溝墓から確認された組合式木棺の棺材の寸法は、**Ｙ１号墳丘墓**の棺材に近いものが多く認められるが、これはコウヤマキの棺材の産出地が同じ地域であったことを示唆している。

一方、**Ｙ１号墳丘墓**で確認されたＩ型式の組合式木棺は、河内地域では大阪府四條畷市雁屋遺跡［四條畷市教育委員会1987］、東大阪市瓜生堂遺跡［瓜生堂遺跡調査会1981］、巨摩・瓜生堂遺跡［大阪文化財センター1982］、八尾市亀井遺跡［大阪文化財センター1983］および大阪市城山遺跡［大阪文化財センター1986c］など、弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式）～中期後葉（畿内第Ⅳ様式）の方形周溝墓の内部主体から確認されており、河内地域では一般的な組合式木棺である。このほかにも河内地域でよく見られる組合式木棺としては、小口板を底板より地中深く埋めたⅡ型式の組合式木棺が知られており、このようなＩ・Ⅱ型式の組合式木棺の違いについて、福永伸哉氏は「木棺型式は一つの集団の中では慣習的に決められていた」と考え、両者の違いは被葬者の出自の違いを示すと注目すべき見解を述べている［福永伸哉1985］。

河内地域における組合式木棺は、東大阪市池島・福万寺遺跡で検出された縄文時代晩期終末～弥生時代前期への移行期の、小口板を底板より地中深く埋めた３基の組合式木棺（Ⅱ型式）が最古の例［大阪府文化財センター2008］である。弥生時代中期前葉になると池島・福万寺遺跡と同型式の組合式木棺が引き続き採用されたほか、底板が一枚板か複数の板で、小口も板や丸太を使って底板より深く地中に埋め込む組合式木棺に加えて、底板の両端近くに小口板を立て、側板で挟むＩ型式の組合式木棺が登場しバリエーションに富む。弥生時代中期中葉～後葉になると一部の刳抜式木棺を除いて、底板の上に小口板を立て、側板で挟むＩ型式の組合式木棺および小口板を底板より地中に深く埋めたⅡ型式の組合式木棺が主流になることから、組合式木棺の統一が図られた可能性がある［田中1994］。

一方、福永氏が指摘された「組合式木棺の型式の違いは被葬者の出自が異なる」という見解にしたがえば、**Ｙ１号墳丘墓**のＩ型式の組合式木棺に埋葬された被葬者の出自は、河内地域が主体ということになる。加えて**５号主体部**の木槨の被葬者の出自はどのように考えるべきであろうか。第Ⅳ章第４・５節で**Ｙ１・２号墳丘墓**の被葬者の歯の検討を行った吉備登・多賀谷昭両氏によれば、**Ｙ１号墳丘墓**の弥生人は、土井ヶ浜遺跡や三津－永田遺跡の弥生人とは多少形態が異なり、現代の京都・福岡・朝鮮および中国の間に位置し、現代的であることから、土井ヶ浜遺跡や三津－永田遺跡の弥生人より多くの渡来人の影響を受けている可能性が高いという。つまり、**Ｙ１号墳丘墓**の被葬者は朝鮮・中国からの渡来人を含む可能性があるということである。

次に**５号主体部**の木槨の系譜についてみることにする。**５号主体部**の木槨は、既述したように１枚

の底板の両端近くに小口板を立て、両側から側板で挟むＩ型式の木棺の外側に側板を足したのち、両小口の外側にも幅の広い小口板を足して周囲を裏込め土で固定した構造である。したがって、木槨は一見、二重の組合式木棺のようにも見える。しかし、組合式木棺と木槨の間には小口板で仕切られた空間が生まれ、副葬品を収納するためのスペースになっている(図38、図版18の上段)。また、蓋は内蓋と外蓋の二重であり、内蓋は落とし蓋になるように内側の側板がやや低くなっていた(原色図版10の上段、図版17)。このような構造の木槨の類例は西日本地域では、弥生時代中期前葉のスダレ遺跡D54号墓[穂波町教育委員会1976]、同比恵遺跡SX03号墓[福岡市教育委員会1983]、弥生時代中期中葉の吉野ヶ里遺跡丘陵地区SP0912号墓[佐賀県教育委員会1994]など、蓋板・小口板・側板から構成された長方形を呈する箱形の木槨で(図38)、墓壙の底面に板や角材を敷いて床にしたＩ型木槨、墓壙の底面を直接床面にして組合式木棺を置くⅡ型木槨に類似したものがあり、Ｉ型木槨が**Ｙ１号墳丘墓**の木槨の構造に近いように思われた[田中1997]。

Ｙ１号墳丘墓が築造された畿内第Ⅳ様式中段階の暦年代は紀元前50年頃とみられるが、これは朝鮮半島の北部に紀元前108～紀元313年まで存在した楽浪郡が設置された初期の頃に相当する。この頃の楽浪郡治と推定されている楽浪土城の南側の丘陵地帯には、2000基余りの郡治に勤めた下級役人の墳墓であろう楽浪漢墓が営まれており、朝鮮総督府による発掘調査が実施されている。

Ｙ１号墳丘墓が築造された少し前に当る紀元前１世紀の前半に相当する初期の楽浪漢墓は、墳丘に１つの遺体を納めた単葬木槨墓であったが、これから少し遅れて、夫婦の棺を別々の木槨に入れて１つの墳丘に合葬した塀穴合葬木槨墓の築造が始まったようである。その後、規模の大きな木槨の中に複数の木棺を納めた同穴合葬木槨墓に移行することが判明している[大阪府立弥生文化博物館1993]。このような楽浪漢墓の木槨と**Ｙ１号墳丘墓**の木槨の共通性については、具体的に比較検討が行えるほどの資料が揃っているわけではないが、以下に示すような木槨の平面形態や構造、被葬者の頭位などに少なからず共通点が認められる。

それは単葬木槨墓の土城洞４号墳および塀穴合葬木槨墓である貞柏洞37号墳の木槨で、それぞれ細部に至るまで一致するわけではないが、外箱に当る木槨は平面形が長方形で、内に組合式木棺を納めた基本的な構造は同じである。また、平安南道大同郡大同江面梧野里古墳群第20号墳は、墳丘はすでに削平されて明らかでないが、１つの墳丘に３基の木槨を納めた同穴合葬木槨墓であり、このうちの第１木槨は長さ2.96mで、厚さ0.136mの厚板を３枚敷き並べて床面を形成し、これの四周に厚板を積んで槨壁としていた。木槨の平面形は長方形で、内法は長さ2.87m、幅0.715mで南壁に接して組合式木棺が１基あり、北壁との間には副葬品が納めてあった。木槨の天井は腐朽しており明らかでないが、木槨の周囲は粘土で固めてあったという[朝鮮総督府1919]。このような木槨の周囲を粘土で固める方法は、木槨や組合式木棺の周囲を粘土やシルトの偽礫で埋め戻した**Ｙ１号墳丘墓**とも共通した工法といえよう。また、被葬者の頭位であるが、紀元前１世紀頃の前漢の洛陽焼溝漢墓では基本的に北枕で葬られていることが判明しており、同時期の楽浪漢墓での頭位は東枕と北枕のものが併存しているが、紀元1世紀の後漢代になると例外を除き北枕に統一されるという[大阪府立弥生文化博物館1993]。

Ｙ１号墳丘墓の被葬者の頭位は北枕と東枕の両方が併存しており、紀元前１世紀後半頃の楽浪漢墓の頭位と同じであることは、双方の葬制に共通点が見出せる興味深い事実である。

ⅳ）Ｙ１号墳丘墓にみられる漢文化と墳丘墓の意義

これまでにも述べたように、単葬木槨墓および塀穴合葬木槨墓の木槨の構造や築造方法と**Ｙ１号墳丘墓**の木槨の構造に相通じる部分があること、被葬者の頭位に共通性が認められることなどは、河内と楽浪郡との間に交易や交流の機会があったことを示唆している。そして、**Ｙ１号墳丘墓**が築造された際にも、楽浪郡から漢の墓制に関するなんらかの情報が伝播したものと思われる。近年の調査で楽浪郡方面から流入した土器が、朝鮮半島の南部地域から対馬・壱岐を経て北部九州地域ならびに瀬戸内海沿岸地域や山陰地域にも分布していることが明らかになっている[寺井誠2007、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館2012]。河内湖岸でも大阪市榎並城跡伝承地遺跡の調査では、紀元前50年頃の朝鮮系無文土器が畿内第Ⅳ様式中段階の土器に共伴しており、これは河内と朝鮮半島との間に北部九州を経てなんらかの交易・交流経路が開かれていたことを物語っている[大阪文化財研究所2012b]。

また、**Ｙ１号墳丘墓**は築造時期が紀元前50年頃であり、墳丘の主軸が正南北であることから天測が行われた可能性が高いこと、**５号主体部**の木槨は紀元前１世紀の楽浪郡の単葬木槨墓や塀穴合葬木槨墓の系譜を引く可能性が高いこと、楽浪郡の初期の埋葬頭位と**Ｙ１号墳丘墓**の埋葬頭位が一致すること、２・14号主体部の被葬者は右腕に楽浪漢墓で一般的に見られる円環型銅釧を着装していること、**Ｙ１号墳丘墓**の被葬者は、後述する歯の分析結果から朝鮮・中国系の出身者(渡来人)を含む可能性が高いことなど、紀元前１世紀頃の楽浪郡との関係や前漢文化の影響を受けたことを想定しうる幾つかの根拠を内包することが明らかになった。今後**Ｙ１・２号墳丘墓**の被葬者の歯・骨のDNA鑑定が行われば、上述した考古学的な成果がさらに深まるとともに、紀元前１世紀頃の日本列島と朝鮮半島、そして大陸中原地域との歴史的な文化の交流実態が明らかになるであろう。

一方、これまでにも**Ｙ１号墳丘墓**は中心埋葬が確認できるものの、主体部の数が多いことを根拠にして、いわゆる有力家族墓とみられてきた。**Ｙ１号墳丘墓**とほぼ同時期と思われる佐賀県の吉野ケ里遺跡の墳丘墓は、主体部が８基の甕棺からなり、５基の甕棺に銅剣が副葬されていたが、そのうちの１基は把頭飾付銅剣やガラス製管玉など豪華な副葬品をもつ卓越した被葬者が埋葬されていた。この墳丘墓の南北には同時期の甕棺が400基群集していることから、墳丘墓は特定集団の被葬者の墓であって、特定首長の個人墓ではないという。墳丘墓は卓越した被葬者である首長およびその家族と密接な関係にある特定集団によって築造された集団墓の一種とみるのである[都出比呂志1991]。このような吉野ヶ里遺跡の墳丘墓の被葬者に対して、**Ｙ１号墳丘墓**の中心埋葬である**５号主体部**の被葬者の性格はどのようなものであったのだろうか。吉野ヶ里遺跡の墳丘墓の首長と同等の卓越した首長ながら特定首長ではない立場とみるのか、それとも河内低地で最大の拠点的環濠集落亀井遺跡の首長とみるとともに、河内低地に点在した中小の集落を統率した河内の首長というべき立場の人物とみるべきなのであろうか。

Ｙ１号墳丘墓の中心埋葬である**５号主体部**の被葬者は、当時大変貴重であった多くの赤色顔料(朱)が撒かれていること、土量が463㎥にも及ぶ河内地域では例を見ない壮大な墳丘の墳丘墓に埋葬され

ていること、天測による墳丘主軸の決定、単一型式の組合式木棺の使用、楽浪漢墓の木槨に類似した木槨の使用など、漢の葬制に基づく墓造り、葬送儀礼で使われた弥生土器や木製品の質と量などを総合的に検討した結果、以下のような結論に導かれる。

つまり、**Ｙ１号墳丘墓**の中心埋葬である**５号主体部**の男性被葬者は単なる有力家族の長ではなく、弥生時代中期後葉の河内低地に点在する集落の頂点に立った集団の首長とみてまちがいないであろう。ただし、いわゆる特定個人あるいは特定首長までは成長していなかったことは、同一墳丘墓内に多数の近親者の埋葬を伴うことから窺われる。また、被葬者の出自については歯の分析結果を考慮して、朝鮮・中国系の渡来人も含む河内(在地)の出身者である可能性が高いことを指摘しておきたい。

第３節　Ｙ１号墳丘墓出土の銅釧

櫻井久之(大阪市教育委員会)

１)銅釧の出土状況と形態

銅釧は、**Ｙ１号墳丘墓**の北辺グループを成す**２号主体部**および**14号主体部**から、それぞれ１点ずつ出土した(註１)。北辺グループとは、**１・２・14・15・16・22・23号**の各主体部で、中央グループとの間に若干の空間をおいて構築されている(図32)。確認された人骨を見るならば、北辺グループは女性が多く、中央グループは皆男性の可能性が考えられている。また、装身具を伴う主体部(**１・２・14号**)も北辺グループに限られる。このような北辺グループにあって、銅釧を出土した**２号主体部**と**14号主体部**は、墳丘上で東西方向にほぼ中軸線を揃えて並び、ともに頭位を東に向けた成人を埋葬したものである。

２号主体部の銅釧123の環体外形はほとんど正円に近いものだが、やや直線的な部分も認められる(図70、原色図版14、図版46)。環体の断面形は上下に平坦面をもち、内外側面の中央がやや丸みをもって張出している。法量は、直径6.20～6.47㎝、環体幅0.28～0.33㎝、環体高0.56～0.62㎝、重さ22.0ｇである。表面の色調は漆黒色を呈し、青銅系の合金製と思われる。なお、この主体部からは、遺体頭部の右側からガラス平玉(図35)も１点出土している。

14号主体部の銅釧127は、**２号主体部**のものと直径ではほとんど差がないが、環体の高さを比べると**14号主体部**の釧は低く、両者を並べ比較した感じでは**14号**のものの方がよりていねいに仕上げの研磨が行われているようである(図70、原色図版14、図版46)。環体の断面形は**２号主体部**のものと同様、

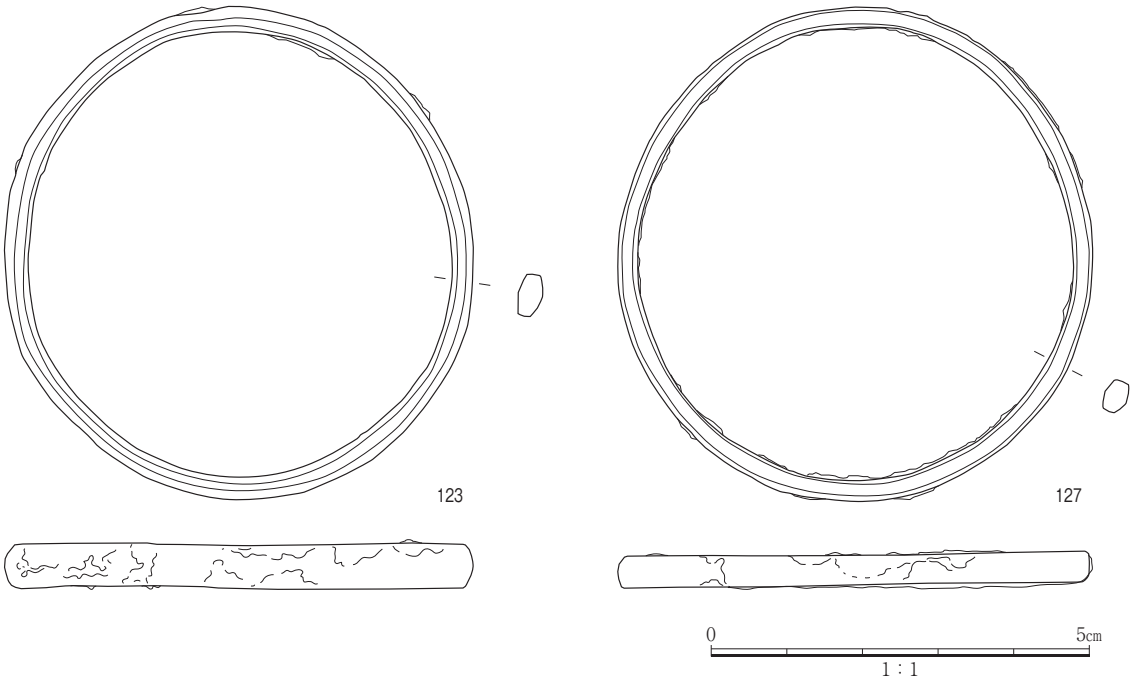


図70　Ｙ１号墳丘墓出土円環型銅釧実測図
２号主体部(123)、14号主体部(127)

上下に面を成し、内外側面がやや膨らむものである。法量は、直径6.25～6.52㎝、環体幅0.24～0.28㎝、環体高0.41～0.44㎝、重さ14.0ｇである。表面の色調は漆黒色、青銅系の合金製と推測される。棺内から銅釧以外の遺物は出土していない。

２)加美銅釧の意義

２号主体部、14号主体部どちらの銅釧も円環型銅釧と呼称されるものである。この円環型銅釧に関しては、小田富士雄氏による考察[小田富士雄1984]があり、氏はその中で、外径法量と断面形から形態分類を行っている。その分類に準じて加美遺跡の銅釧を称するなら、大型中細Ｄ類となろう(註２)。

加美遺跡例以前、近畿地方の円環型銅釧としては、大阪府鬼虎川遺跡の第７次調査[東大阪市文化財協会1982]において、その鋳型が出土していたが、加美遺跡における実例の出土は、完形品の発見として初例であり、埋葬主体に伴って着装状態の明らかな例として意義あるものといえる。以下、加美遺跡例から考えられるいくつかの問題について述べる。

現在、加美遺跡例のほか、近畿地方の弥生時代の銅釧は、兵庫県田能遺跡[尼崎市教育委員会1982]、京都府大風呂南墳墓群[白数真也1999]、大阪府巨摩遺跡[大阪文化財センター1982、大阪府文化財調査研究センター1996]、同府要池遺跡[渡邊昌宏1998]、同府長原遺跡[大阪市文化財協会2005]のゴホウラ系銅釧、大阪府芝生遺跡[森田克行1986]、同府亀井遺跡[大阪文化財センター1986a・b]、奈良県唐古・鍵遺跡[田原本町教育委員会2004]、同県平等坊・岩室遺跡[松本洋明・川村慎也1996]の円環型の銅釧片がある。

加美遺跡例以後、奈良県内でも円環型銅釧の出土が知られるようになったが、これらも鋳造品と見られ、環体の断面形も加美遺跡例と酷似している。ここでまず問題とすべきは、この円環型銅釧の系統上の位置づけであろう。[小田1984]によって、円環型銅釧は楽浪系銅釧とも呼称されるように(註３)、朝鮮半島の金属製釧からの系譜を引くものと考えられてきた。確かに、円環状の腕輪が朝鮮半島に存在し[大阪府立弥生文化博物館1993]、前期末に遡る円環型銅釧を出土した福岡県吉武高木遺跡110号甕棺墓例[福岡市教育委員会1986]に近接する主体部墓・甕棺墓から、多鈕細文鏡や細形銅剣などが多数見つかっていることを考えると、この銅釧も朝鮮半島系の遺物と思われる。しかし、ゴホウラ系銅釧と共時的に存在する、中～後期に属す円環型銅釧の一部については貝釧起源の可能性を否定できない。この時期の北部九州に見られるイモガイ横型貝釧と円環型銅釧の関係は、ゴホウラ製貝釧とゴホウラ系銅釧の関係に対比しうる。ゴホウラ系銅釧が存在する一方で、西日本にイモガイ横型貝釧に対応する銅釧がないという現状(註４)は、円環型をみな朝鮮半島系としている点に問題があると思われる。加美遺跡の２例がともに女性の着装するものであることも、円環型が女性に用いられるイモガイ横型貝釧を写していることを示すものであろう。環体断面が円形や楕円形のものを除いたこの時期の円環型銅釧に関しては、イモガイ横型貝釧をモデルとする可能性を考えるべきではなかろうか。

木下尚子氏の貝釧系銅釧の研究[木下尚子1982a]によれば、近畿地方のゴホウラ系銅釧は「常に在地色を基調にしていた」とされる。1998年に調査された大風呂南１号墓例も突起部の先端が省略化された北部九州に例のない形態であった。一方で出土状況もこの地域の特色を示すものと考えられる。弥

生時代中～後期、北部九州では貝釧あるいは銅釧を多数着装する場合が多く見られる。それに対し、中期後半にあたる加美の２例や田能遺跡第17号墓では、いずれも銅釧を１点だけ着装している。

北部九州における貝釧の多数着装は、ゴホウラ系貝釧では中期前半～中頃の諸岡型の段階から見られ、中期後半～末の立岩型では14個を着装する立岩堀田遺跡例[木下1982b]がよく知られている。また最近では、福岡県安徳台遺跡２号甕棺に、23個を装着し、20個を副葬する中期後葉の例が報告されている[茂和敏2004]。ゴホウラ系銅釧では後期に佐賀県桜馬場遺跡から26個が合口甕棺内より出土しており[木下1982a]、円環型銅釧を見ても、中期の佐賀県宇木汲田遺跡38号、64号、112号の各甕棺、後期の対馬塔の首遺跡第３号棺の例がある[小田1984]。近年では、佐賀県中原遺跡の甕棺墓(中期前半)から円環型11個の着装例が見つかっている。一方、近畿では、兵庫県夢野遺跡例のように貝釧が多量に一括埋納されることがあっても、個人の墓に伴うものではない。ゴホウラ系銅釧を13点出土した大風呂南１号墓では、これらの銅釧は遺体の頭部辺に一括されており、着装されていたと考えられるのはガラス製釧１点だけであった。北部九州と近畿を中心とする地では、それぞれ独自の認識を銅製、貝製を問わず、腕飾類に対して持っていたといえようか。

加美遺跡および田能遺跡例に見るような銅釧の単数着装を畿内の一習俗として位置づけて考えるには、まだ実例に乏しいものがある。しかし、鋳造製品であることは、同一形態の製品を多量に作れる利点があり、鬼虎川遺跡の鋳型などは連鋳式であることからみて、北部九州と同様に多量の製品が畿内にも存在したと考えられる。ところが埋葬主体に伴う出土状況は北部九州とまったく異なるわけである。

加美遺跡での出土状況でさらに注意されるのは、銅釧を出土した**２号主体部**、**14号主体部**ともに、**Ｙ１号墳丘墓**の中心となる埋葬主体ではない点である。中心主体と考えられるのは**５号主体部**で、墓壙の最大長290㎝以上、最大幅は216㎝を測り、小口、側板、蓋板がいずれも２重になるなど、卓越した規模をもつが、装身具は皆無なのである。田能遺跡の場合、ゴホウラ系銅釧を着装した17号墓の男性は３号方形周溝墓の中心主体と考えてよいものだが、加美遺跡では中心主体ではない埋葬施設から銅釧が出土している。この地域での円環型銅釧の着装が性差によって限定されるものであったためか、あるいはこの被葬者が、**Ｙ１号墳丘墓**を取り巻く地域集団内にあって、特殊な身分、職掌であったと考えるべきであろう。しかし、この点に関しては、先述した**Ｙ１号墳丘墓**の北辺グループ、中央グループ、南辺グループ、それぞれの主体部どうしの関係なども含めて考えなければならない。また、銅釧の着装が、単なるアクセサリーとして装着されたのではなく、地域集団内にあって、ある共通した認識を体現したものと思われる点についても注意する必要があろう。

最後に鬼虎川遺跡の銅釧鋳型と加美遺跡の銅釧との関係を考えてみたい。鬼虎川遺跡の銅釧鋳型(以下鬼虎川鋳型とする)は畿内第Ⅱ様式～第Ⅳ様式の土器とともに溝状凹地内から出土しており、一方、加美遺跡の銅釧は畿内第Ⅳ様式に属するものである。したがって、両者には時期的に接点がある。接点となる畿内第Ⅳ様式の頃、現在の河内平野の中央部には河内湖と呼ばれる湖があり、鬼虎川遺跡、加美遺跡はともに河内湖沿岸に近く、湖上交通を利用して両集落間の交渉は頻繁に行われていたことが予想される。

鬼虎川遺跡の鋳型(註５)は分厚い板状を呈するもので、片面に環状の溝があり、その環溝から0.5cmほど間隔をおいて、さらに１つの環溝の一部が遺存している。残りのよい環溝の法量は、内径約5.3cm、外径約6.5cm、深さ0.45～0.48cmである。したがって、この鋳型の製品が小田氏による分類の大型の円環型銅釧であることは確実である。しかし、環体の断面形、厚さ、幅などの実際は明らかにできない。それは鋳造時の銅の収縮具合や鋳造後に鋳張り部分を除去して、全体を研磨して仕上げる時点で、どの程度の調整が行なわれたかについて確言できないことによる。鋳型面に彫られる環溝は逆台形の断面形を呈するものであるが、その溝底の内側ラインで描かれる円は、長径約5.7cm　短径約5.5cmで完全な正円形ではない(註６)。**Ｙ１号墳丘墓２号主体部**の銅釧について円環の内法径を見ると、長径5.86cm、短径5.59cmであり、鋳型の数値と近似する。つまり両者は歪み方を同じくしており、加美例は鬼虎川鋳型に収まるとみられる。

鬼虎川鋳型は芋本隆裕氏によって合せ型として用いられた片方と考えられている[東大阪市文化財協会1982]。すると、同じ形態のもう１個の鋳型を想定した場合には、環体の高さが１cm弱の銅釧が作られることになる。環体高0.62cmの**Ｙ１号墳丘墓２号主体部**の銅釧はそれから外れるものでないが、鋳造後の研磨に手間がかかることは認めねばならない。

畿内第Ⅳ様式の時期、金属器の生産、流通が河内湖沿岸地域で行われ、古墳時代に続く貝釧系銅釧の使用が広く見られたことが明らかとなってきた。さらに、この地域独自の習俗が育まれていた可能性も窺えた。しかし、河内平野の低湿地の調査は、まだ点と線というのが実状であり、今回の加美遺跡の調査ですべてを語り尽せるものではない。銅釧の系譜や習俗に関する問題も、今後の調査によって徐々に具体化されて行くことであろう。

註)

(１)本稿は[田中清美・櫻井久之1987]をもとに、一部を修正・加筆したものである。

(２)小田富士雄氏は外径から大型６～８cmと、それ以下の中・小型を分け、環身の幅によって細身(0.2～0.3cm)・中細(0.4～0.6cm)・太身(0.6～0.8cm)とし、断面形でA類：円形、B類：楕円形、C類：方形、D類：長方形、E類：菱形に分類する。

(３)[高倉洋彰1991]には、南海産巻貝製腕輪の出現と前後する時期に見られる細身の円環型銅釧は、北部九州・朝鮮半島に製作の痕跡が認められず、中国系青銅器とみなされる、とある。また[渡邊1998]では、円環型の出現を外来的な要素と捉えるなら、弥生中期前半段階のものは楽浪郡成立以前となる可能性があり、同タイプの銅釧は朝鮮半島南部の影響によるものではないか、としている。さらに、[安藤広道2003]では福岡県吉武高木110号甕棺墓例が前期末に遡り、確実に楽浪郡設置以前であることから、楽浪系との呼称を用いることは不適切であろうと述べている。

(４)小田富士雄氏は、東海～関東地方において出土する帯状円環型銅釧を、イモガイ横型貝釧をモデルとしたものとする。しかし、このタイプは現在のところ西日本に分布しておらず、今後もその大勢を一変させるとは考えがたい。帯状の銅釧については東海地方以東の貝釧系銅釧の特色を示すものと考えるが、[井上洋一1989]では、この地方の縄文時代からの二枚貝などを用いた貝釧の影響が考えられている。

（５）［東大阪市文化財協会1982］の中で、芋本隆裕氏は鬼虎川遺跡の鋳型の銅釧系列上での位置づけを検討され、朝鮮半島系の銅釧と断定せず、畿内の伝統的な木製腕輪の影響も考慮する必要を述べている。福岡県拾六町ツイジ遺跡［岩永省三1997］から前期に属す木製釧の例が知られることも注視すべきかもしれない。しかし、その場合、素材の入手という点でより困難と思われる金属化が意図されるのかが疑問で、ならば、希少な南海産大型巻貝の代用として金属製品化が図られたものと考えたい。

（６）この数値は［東大阪市文化財協会1982］の実測図から計測したものである。

第４節　大阪市加美遺跡Ｙ１・２号墳丘墓出土の弥生人骨

吉備　登・多賀谷　昭(元大阪市立大学第２解剖学教室)

Ｙ１号墳丘墓からは23基、**Ｙ２号墳丘墓**からは６基の主体部が検出され、これらの主体部から出土した人骨のうち、**Ｙ１号墳丘墓**の12体、**Ｙ２号墳丘墓**の３体について調査したので報告する。

１）Ｙ１号墳丘墓出土の人骨

ｉ）１号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

東頭位で顔面はやや右に向き、肘は深く屈曲して体側に付け、膝を軽く屈曲させて右側に倒した仰臥位の状態で埋葬されていた。

ｂ.保存状態

人骨の保存状況はきわめて悪く発掘現場での観察では、おおまかな形態とその位置関係などより次のように推定した。

頭蓋骨：後頭骨片、下顎骨体が残存する。

胴骨：連なった椎骨塊はおそらく胸椎と腰椎と思われ、ほかに肋骨片がある。

四肢骨：右鎖骨、左右上腕骨、右橈骨と尺骨、左右の大腿骨・脛骨・腓骨が残存する。

ｃ.性別・年齢

性の判別はむずかしいが、人骨の全体の大きさから見ると成人ではないかと思われる。

ⅱ）２号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

東頭位で顔面はやや右に向き、右耳付近には小さな三角形のガラス平玉がある。右肘は体側に付けて深く屈曲し、手首には円環型銅釧をしており、また、両膝は揃えて軽く屈曲させ、右側に倒した仰臥位の状態で埋葬されていた。なお、下顎骨付近には少量の赤色顔料(朱)の付着が認められた。

ｂ.保存状態

ほぼ全身にわたる骨が残るが、それらはいずれも圧迫され変形、破損し、保存はきわめて悪い。おおまかな形態と位置関係などより次のように推定した。

頭蓋骨：残存するのは後頭骨後頭鱗部とそれに隣接する左右の頭頂骨片および下顎骨である。下顎骨は変形し、左右下顎枝の一部は欠損している。歯牙は下記の歯式に示すように、下顎の左第３大臼歯～左側切歯と右第２小臼歯、第１大臼歯が釘植する。左側切歯と犬歯の歯冠部は欠損している。また、それ以外の下顎の歯槽部が破損しているため存在の有無は不明である(図71)。

胴骨：右側の肋骨片と推定される。

四肢骨：左右肩甲骨の関節か付近、右上腕骨下1/2、左上腕骨骨体部、右前腕骨片、右鎖骨片、右寛骨の寛骨臼付近、左右の大腿骨・脛骨・腓骨のいずれも骨体部のみが残存する。

歯式																
咬耗度																
R																L
	/	/	M_1	P_2	/	/	/	/	/	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
咬耗度			2	1						※	※	2	1	2	2	1

＿：歯槽部残存　/：歯槽破損　○：歯槽開放　#：歯槽閉鎖　半角文字：歯根未形成
咬耗度はMartinの分類に従った。　※：咬耗度不明

図71　Ｙ１号墳丘墓２号主体部人骨の歯式

ｃ.性別・年齢

発掘当初は女性ではないかと思われたが、脳頭蓋の骨は非常に厚く、下顎骨では下顎体厚は左右とも16㎜、右下顎枝幅も35㎜と大きいことなどから男性の可能性もある。縫合の癒着は矢状縫合はほぼ完了し、人字縫合では内板は完了し、外板は半閉鎖状態にある。これらと歯の咬耗度がMartinの１～２度を示すことなどより、壮年の後半期(30代)と推定される。

ⅲ）３号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

４号主体部の北西に並行して埋葬されている。両者の水準高からの見解あるいはアゼの断面からの観察などより**４号主体部**が先に埋葬された可能性が大きい。北頭位の仰臥位で顔面はやや右を向き、左右の肘は体側に付け深く屈曲し、膝は軽く屈曲させて右側に倒した状態で埋葬されていた。

ｂ.保存状態

ほぼ全身にわたる骨が残るが、これらの骨質はきわめて脆弱で、保存はきわめて悪い。おおまかな形態と位置関係より次のように推定された。

頭蓋骨：残存するのは部位不明の脳頭蓋骨片、上顎骨、下顎骨の歯槽突起部である。歯牙は下記の歯式に示すように歯が釘植するが、右下第２大臼歯以外は歯根は脆弱で取り上げることは出来ない。なお、左下第３大臼歯は近心傾斜し、そのために左下第２大臼歯の接触部はカリエスになっていた(図72)。

歯式																
咬耗度	1	2	※										※	※	2	1
	M^3	M^2	M^1										P^2	M^1	M^2	M^3
R																L
		M_2				/	/	/	/	/	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3	
咬耗度		1									1	1	2	2	1	

図72　Ｙ１号墳丘墓３号主体部人骨の歯式

胴骨：胸椎、腰椎、肋骨片と推定される。

四肢骨:左右の鎖骨と上腕骨、左の橈骨と尺骨、右前腕部の長骨片と指骨の一部、左右の寛骨･大腿骨･脛骨・腓骨や足根骨の一部が残存する。

ｃ.性別・年齢

大坐骨切痕の角度はやや狭いが、変形があり正確ではないので性判別は困難である。第３大臼歯の咬耗はほとんどなく、ほかの歯の咬耗度もMartinの１～２度を示すことから、壮年期と推定される。

ⅳ）４号主体部の人骨

ａ．埋葬状況

北頭位で顔面は右に向け、下顎骨はほぼ関節するが口をあけた状態である。四肢骨の残りはきわめて悪いが、伸展葬と思われる。歯牙には、一部赤色顔料(朱)の着色が認められる。

ｂ．保存状態

頭蓋骨：残存するのは左側頭部付近の骨片と、上・下顎の歯槽部片で下記の通りである(図73)。

歯式												
咬耗度			1	1	2			※	2			
			P^2	P^1	C			C	P^1			
R												L
		M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1				M_1	M_2
咬耗度		2	1	1	2	2	2				2	※

図73　Ｙ１号墳丘墓４号主体部人骨の歯式

胴骨：残存せず。

四肢骨：左大腿骨骨体中央付近があるが、下腿部の長骨片は同定できない。

ｃ．性別・年齢

性別は判別できない。歯牙では切歯、犬歯の磨耗が認められるが、ほかには一般に咬耗度は小さくMartinの１～２度で、年齢は壮年前後と推定される。

ⅴ）５号主体部の人骨

ａ．埋葬状況

１号墳丘墓のほぼ中央に二重構造をもつ主体部に埋葬されており、周辺には数基の主体部が取り囲むように位置し、おそらくこの墳丘墓の中心主体であろうと推定されている。頭部を北にし、頭蓋骨は圧砕され後頭骨と思われる骨片は原位置よりやや上方にずれた位置にある。右脛骨は遠・近位が逆になり、左脛骨は大腿骨とほぼ並行し外側に位置するが、ほかの骨には大きな移動は認められない。仰臥位で埋葬されたと思われる。

ｂ．保存状態

頭蓋骨：後頭骨片、右側下顎骨には第３、第２大臼歯、左側下顎骨歯槽部には犬歯～第２小臼歯、右側上顎骨には第３大臼歯～犬歯、左側上顎骨には側切歯～第１小臼歯が釘植している。ほかに遊離歯も含めると下記の通りである(図74)。一部赤色顔料(朱)の着色が認められる。

歯式																
咬耗度	1	1	1	1	2	1	1	1		1	2	1		2	1	
	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1		I^2	C	P^1		M^1	M^2	
R																L
	M_3	M_2	M_1								C	P_1	P_2			M_3
咬耗度	1	1	1								2	1	1			1

図74　Ｙ１号墳丘墓５号主体部人骨の歯式

胴骨：肋骨片が少し認められる。

四肢骨：四肢骨の骨幹部は比較的良く保存されているが、緻密質の骨層板が一部剥離した部分もある。上肢では右肩甲骨は烏口突起と外側縁付近が、左肩甲骨は関節付近と左右の上腕骨骨体部が残り、下肢では左右大腿骨と脛骨や腓骨らしい長骨が残存する。

ｃ.性別・年齢

四肢骨の緻密質が一部剥離しているが、それらの骨はがっしりと大きく男性と推定される。なお、第３大臼歯の咬耗はあまりなく(Martinの１度)、ほかの大臼歯の咬耗度はMartinの１～２度と小さい。おそらく壮年前半期のものと推定される。

vi）７号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

頭部を北に顔面はほぼ正面を向き、頭蓋骨付近には赤色顔料(朱)がかけられていた。しかし、ほかには人骨が残存しないために体位は不明である。

ｂ.保存状態

頭蓋骨：ほぼ頭蓋骨の輪郭はわかるが、取り上げて復元することはできなかった。上顎骨歯槽部付近には右第２大臼歯が埋まっていた(図75)。

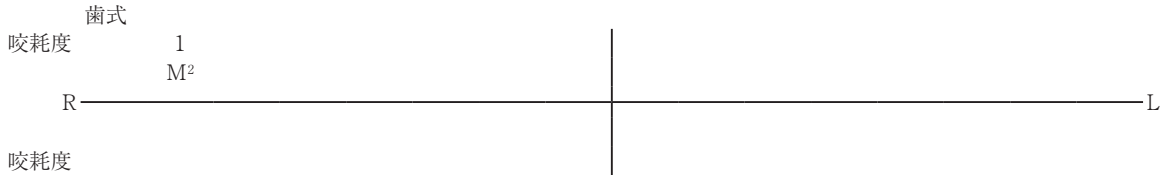


図75　Ｙ１号墳丘墓７号主体部人骨の歯式

胴骨：残存せず。

四肢骨：残存せず。

ｃ.性別・年齢

性別は不明。第２大臼歯の咬耗度はMartinの１度と小さい。おそらく壮年期のものと推定される。

vii）９号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

小さな**18号主体部**の南東部にほぼ並行して北頭位で埋葬されていた。頭骨、顔面を尾側上方に向け、下顎骨は関節した位置にある。歯牙には赤色顔料(朱)が少量付着する。上肢は左右とも肘を体側に付け、肘関節は完全に屈曲し、尺骨は上腕骨の上に重なっている。下肢では大腿骨は左右とも粗線を右に向けている。右の大腿骨遠位部は左大腿骨遠位部の下になり、右腓骨の近位端が４cm位右に移動するがそのほかの骨は原位置にある。

ｂ.保存状態

ほぼ全身の骨が残ってはいるがもろく圧砕されているために復元できない。

頭蓋骨：頭蓋骨の輪郭はわかるが、上より圧迫され骨は脆弱である。上顎、下顎骨の歯槽に釘植する歯牙は、下記の通りである(図76)。

歯式													
咬耗度	1	1	1	1									
	M^2	M^1	P^2	P^1									
R													L
	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	
咬耗度	1	1	1	1	1	2	※	※	2	2	1	1	

図76　Ｙ１号墳丘墓９号主体部人骨の歯式

胴骨：形態や位置関係より、下部胸椎と腰椎、仙骨片と推定されるものや肋骨片が残っている。

四肢骨：左右の鎖骨・上腕骨・尺骨らしい長骨片・寛骨片・大腿骨・脛骨・足根骨・中足骨が存在し、腓骨は右側のみ残っている。

ｃ．性別・年齢

男女の判別は困難である。歯牙の咬耗度はMartinの１～２度で、第３大臼歯は歯槽部にも存在しない。ほぼ成人並の大きさの骨格を持っており、おそらく壮年のものと考える。

viii）10号主体部の人骨

ａ．埋葬状況

頭部を北に顔面は右側を向き、上肢は躯幹に添って伸展させ、下肢はO脚になるような位置で、仰臥伸展葬されている。また、歯にはごく微量の赤色顔料(朱)の着色がある。

ｂ．保存状態

頭蓋骨：ほぼ頭蓋骨の輪郭は保たれているが、取り上げることはできなかった。下顎骨の歯槽部が一部残存し、右第１大臼歯～第３大臼歯、左第１小臼歯～左第３大臼歯が釘植し、上顎歯槽部付近に、右第３大臼歯へ左中切歯が釘植していた。ほかにも若干の歯冠片がある。また、右下第３大臼歯舌側にはカリエスによる陥凹が認められる。なお、切歯の咬耗面より鉗子状咬合の可能性が大きい(図77)。

歯式																
咬耗度	1	1	※	※	※	2	※	1	1							
	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1							
R																L
	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
咬耗度	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1

図77　Ｙ１号墳丘墓10号主体部人骨の歯式

胴骨：胸椎片、肋骨片あり。

四肢骨：左右の鎖骨や上腕骨および前腕骨と思われる骨片、また、左右の寛骨片・大腿骨・脛骨・距骨・踵骨が残存する。

ｃ．性別・年齢

大腿骨や脛骨はがっしりと太いために男性と思われる。第３大臼歯の咬耗はあまりないが、第１大臼歯ではMartinの２度で、おそらく壮年のものと推定される。

ix）14号主体部の人骨

ａ．埋葬状況

東頭位の仰臥位ですべての骨は原位置を保っている。上肢は右肘を120度屈曲させ、手は左寛骨上にあり、前腕中央よりやや近位に円環型銅釧をはめている。左肘は深く屈曲し、手は肩から胸付近上にある。下肢は膝をやや屈曲させ、右に倒している。

ｂ.保存状態

保存状態はきわめて悪い。

頭蓋骨：左側頭骨乳突部付近とそれに隣接する後頭骨後頭鱗部、左下顎骨体片に一部切歯らしいものが釘植するが、破損が激しく同定できない。遊離した歯牙は歯冠のみで、下記の通りである(図78)。

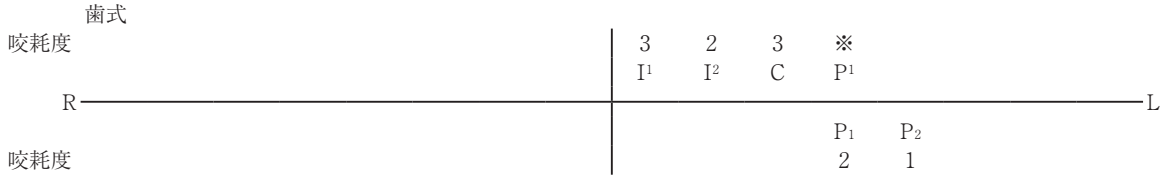


図78　Ｙ１号墳丘墓14号主体部人骨の歯式

胴骨：椎骨塊が残存する。

四肢骨：左鎖骨、左右の寛骨・上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨・腓骨であろうと思われる。

ｃ.性別・年齢

外後頭隆起の発達は弱く、大腿骨は華奢で細いことより女性ではないかと思われる。また、上顎の切歯、犬歯は磨耗が著しいが、下顎小臼歯の磨耗はあまりない。人字縫合の外板の癒着がほぼ完了し、頭頂乳突縫合はほぼ閉鎖している。これらより、壮年後半期(30代)から熟年前半期(40代)にかけてではないかと推定される。

ｘ)19号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

東頭位で顔面部はやや右を向き、左右ともに上腕は躯幹に付け、肘は深く曲げ、両膝は揃えてやや屈曲させ右に倒した仰臥位であった。

ｂ.保存状態

今回の調査では最も保存状態がよいが、頭蓋骨は破損して復元できなかった。

頭蓋骨：側頭骨片・後頭骨片・頭頂骨片・前頭骨片や上顎骨では歯槽突起と口蓋突起が残るが、顔面部は圧迫されている。歯牙は右第１大臼歯～左第２大臼歯まで釘植する。また、右下顎枝を欠いた下顎骨には右は第３大臼歯～側切歯、左は第３大臼歯から犬歯まであるが、左右とも第３大臼歯や右の犬歯・側切歯の歯冠はなく歯根のみ残り、ほかの切歯では破壊が著しく破片らしきものはあるが明確ではない。下顎第２大臼歯の頬側は左右ともカリエスにより欠損したと考えられる。咬合鋏状咬合と思われる(図79)。

ｃ.性別・年齢

後記の表７に示すように下顎骨や四肢骨は非常に大きくがっしりとしており、特に大腿骨は長く、背の高い男性のものと思われる。歯牙の咬耗度はMartinの１～３度を示し、矢状縫合の外板の癒着が

歯式																
咬耗度			2	1	2	2	2	2	※	2	3	2	2	2	1	
			M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	
R																L
	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2				C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
咬耗度	※	※	2	2	2	※	※				2	2	2	2	1	※

図79　Ｙ１号墳丘墓19号主体部人骨の歯式

完了していないことなどからおそらく壮年後半30代のものと推定される。

xi) 20号主体部の人骨

ａ. 埋葬状況

19号主体部の南西部にどちらも東頭位で並行しており、**20号主体部**は**５号主体部**の墓壙をきっているために、これらの埋葬時期においては若干のずれがあると思われる。

ｂ. 保存状態

保存状態はきわめて悪く、頭蓋骨以外はほとんど残存しない。

頭蓋骨：顔面部は圧迫され破損しており、脳頭蓋骨はあるがきわめて脆弱である。上顎骨と下顎骨の歯槽突起には下記のごとく多くの歯牙が釘植していた(図80)。

歯式																
咬耗度	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
R																L
	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1				I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
咬耗度	0	1	1	1	1				1	1	1	1	1	1	1	0

図80　Ｙ１号墳丘墓20号主体部人骨の歯式

胴骨：残存せず。

四肢骨：左右の不明な大腿骨骨体中央部はほぼ原位置にある。

ｃ. 性別・年齢

性の判別はむずかしいが、比較的大きな歯を持っているので男性の可能性が高い。第３大臼歯の歯根部は未形成で第２大臼歯の歯根部はほぼ形成を終わっている。また、歯の咬耗はほとんど認められないなどの点より15才位の若年者と推定される。

xii) 23号主体部の人骨

ａ. 埋葬状況

北頭位で頭蓋骨は顎をひいた状態で、顔面は右を向き下顎骨は関節する。仰臥位で上腕は躯幹に添わせ、右肘は120度位軽く屈曲させて手は左寛骨上に置く。また、両膝は軽く屈曲させ、右側に倒した状態である。なお、顔面部には赤色顔料(朱)が付着していた。

ｂ. 保存状態

ほぼ全身にわたる骨が残存するが、骨は脆弱で保存状態はきわめて悪い。

頭蓋骨：左側の頭蓋骨は圧迫され破損が著しい。上顎骨には左第３大臼歯と側切歯、下顎骨には左第２大臼歯～側切歯が釘植し、ほかにも若干の歯冠部片がある(図81)。

歯式																
咬耗度									※						※	
									I^2						M^3	
R																L
									I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2		
咬耗度									※	3	3	3	3	※		

図81　Ｙ１号墳丘墓23号主体部人骨の歯式

胴骨：下位胸椎と腰椎および右下位と左中位～下位付近の肋骨片がある。

四肢骨：右上腕骨骨体中央部と前腕部の長骨、左上腕骨骨体・尺骨および腓骨、左右の寛骨・大腿骨・脛骨および足根骨と思われる骨片が残存する。

ｃ.性別・年齢

寛骨が残っているが、破損部が多く性の判別には利用できない。しかし、大腿骨は非常に太くがっしりとしており、おそらく成人男性のものと推定される。また、歯牙の咬耗はかなり激しくMartinの３度を示し、熟年に達していたかもしれない。

２）Ｙ２号墳丘墓出土の人骨

ｉ）１号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

２号主体部の南東部にどちらも東頭位で並んで位置する。

ｂ.保存状態

保存状態はきわめて悪いが、歯冠部は良く残っていた。

頭蓋骨：脳頭蓋骨はあるが同定不可能である。上顎骨は正中口蓋縫合よりやや右よりに破損を受けて分離し、上顎の左中切歯は右側の歯列弓に位置し、左側の歯列弓とは離れた位置から発掘された(図82)。

歯式																
咬耗度	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
R																L
											C		P_2	M_1	M_2	M_3
咬耗度											1		1	1	1	1

図82　Ｙ２号墳丘墓１号主体部人骨の歯式

胴骨：残存せず。

四肢骨：右の大腿骨と脛骨の骨体中央部と思われる骨がやや頭側よりにあり、左大腿骨骨体部はほぼ原位置にある。そのほかには同定できない骨片が左の体側付近に散らばっていた。

ｃ.性別・年齢

性の判別はむずかしいが、大きな歯を持っているので男性の可能性が高い。なお、歯の咬耗は全体に少なく、第３大臼歯は萌出直後と思われるほど磨耗はない。おそらく若年者のものと推定される。

ⅱ）２号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

１号主体部と並行しており、東頭位の伸展仰臥位で埋葬されていた。顔面はやや左を向き、左肘は深く曲げ、両下肢は膝を軽く屈曲して右に倒していた。なお、顔面付近には赤色顔料(朱)の付着が認められる。

ｂ.保存状態

骨はきわめて脆弱であったが、歯冠部は比較的良く残存する。

頭蓋骨：前頭骨・頭頂骨・顔面頭蓋の部分骨片はあるが復元はできない。上顎骨と下顎骨の歯槽突起片には下記のごとく多くの歯牙が釘植していた(図83)。

歯式														
咬耗度			2	1			1	1	2	1	1	2	1
			P^2	P^1			I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2
R													L
	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2
咬耗度	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1

図83　Ｙ２号墳丘墓２号主体部人骨の歯式

胴骨：肋骨が残存する。

四肢骨:残存するのは右肩甲骨肩甲棘付近と鎖骨、左右の上腕骨、左尺骨、左右の寛骨片･大腿骨･脛骨･腓骨で、長骨の骨端部はいずれも損失していた。

ｃ.性別・年齢

頭蓋骨は比較的薄く、四肢骨は華奢であるために女性と思われる。また、右下顎の第３大臼歯の歯槽部は陥凹しており、死後に脱落したものと考えられる。また、歯の咬耗度より壮年者と推定される。

ⅲ）５号主体部の人骨

ａ.埋葬状況

東頭位の仰臥位で顔面はやや右向きで、骨は原位置を保っている。右肘は伸展し、両膝も伸展していたと思われる。なお、頭部には赤色顔料(朱)が付着していた。

ｂ.保存状態

骨は脆弱で保存状態は良くない。

頭蓋骨：後頭骨片と下顎骨体片がある。歯では右上の第１大臼歯の歯冠部があるが、ほかの歯は破損が激しく同定できない(図84)。

歯式														
咬耗度			2											
			M^1											
R														L
咬耗度														

図84　Ｙ２号墳丘墓５号主体部人骨の歯式

胴骨：残存せず。

表８　加美遺跡の人骨の計測値

下顎骨の計測値（単位㎜）

人骨番号		Y1－2号 左・右	Y1－19号 左・右
M.63(3)	下顎体厚	16・16	16・16
	下顎枝幅	※・35	※・※

上腕骨の計測値（単位㎜）

人骨番号		Y1－19号 左・右
M.5	中央最大径	25・24
M.6	中央最小径	17・18
M.7	骨体最小周	66・67
M.7a	中央周	70・70
M.6/5	骨断面示数	68.0・75.0

大腿骨の計測値（単位㎜）

人骨番号		Y1－19号 左・右
M.6	骨体中央矢状径	30・30
M.7	骨体中央横径	28・28
M.8	骨体中央周	94・93
M.6/7	骨体骨断面示数	107.1・107.1

脛骨の計測値（単位㎜）

人骨番号		Y1－19号 左・右
M.8	中央最大径	33・※
M.9	中央横径	21・※
M.10	骨体周	88・※
M.9/8	中央断面示数	63.6・※

四肢骨：鎖骨片、左右の上腕骨、右橈骨と尺骨、左右の大腿骨と脛骨・左腓骨が残存するがいずれも骨体部のみである。

ｃ．性別・年齢

性の判別は困難である。なお、第１大臼歯はMartinの２度を示すことより壮年者ではないかと推定される。

第５節　Ｙ１・２号墳丘墓出土人骨の地域的および時代的な特性

吉備　登・多賀谷　昭(元大阪市立大学)

日本人の由来やその成立過程を解明するために、古代の人々の地域的および時代的な特性を調べる種々の手段が講じられてきた。しかし、現代人の生体や人骨の計測又は非計測小変異および遺伝的多型形質などから推定する方法では、あくまで推定の域を越えることができない。また、古代人骨の資料ではその数が限定されており、日本人形成史のなかでも特に重要であると思われる畿内の弥生時代の人骨に関する研究報告としては森の宮遺跡[寺門之隆ほか1978]、田能遺跡[藤原知1982]、瓜生堂遺跡[池田次郎1982]などがあるが報告例は少なく、且つ、保存状態が良好な人骨が少ないために計測値および非計測小変異を用いての比較研究はほとんどされていない。今回報告する加美遺跡の弥生人骨の保存状態も決して良好とは言えず、計測できたのは下顎骨と四肢のごく一部と歯冠部のみであった。そのために、頭蓋骨や四肢骨を資料として使うことはできず、残存する可能性の大きい歯冠部に注目した。

一般に歯の形態・大きさは一般にpolygeneによる遺伝子支配と考えられており、個々の歯についての遺伝的変異性は一様ではないとされている[Townsend and Brown1978、Potter et al 1976、MIZOGUCHI1977]。そして、近年、歯の計測値における多変量解析を応用した研究としては、乳歯の歯冠計測値に関する因子分析[HANIHARA,K1974]、永久歯の歯冠計測値を使用した多変量的な研究[HANIHARA,K1976・1977、YAMADA,H.,・N.OHNO and T.SAKAI1979]などがあり、これらは外国人との比較により日本人の歯の特性を明らかにした。また、永久歯の歯冠計測値から古代人の血縁関係を推定する方法[土肥直美・田中良之・船越公威1986]などにも応用されている。そこで、加美弥生人の歯の計測値を用いて多変量解析をおこない、地域的および時代的な特性を明らかにすることを試みてみた。

１)資料と方法

歯の計測は[藤田恒太郎1949]の基準に従い、1/20㎜副尺付きノギスを用いて計測したもので、全歯の歯冠長・歯根長・歯全長・歯冠近遠心径・歯冠頬舌径を計測した。しかし、今回は遺跡などから出土する歯の形態を比較することが目的であり、加美遺跡においては歯根部は脆弱でほとんど計測不能で、歯の咬耗度も種々であるために歯の長さに関する項目は除外し、永久歯の歯冠部の近遠心径と頬舌径のみを使用した。比較に用いた資料には第３大臼歯の測定をしていないものがあるのでこれを省き、また、切歯と犬歯については歯石の沈着などによる誤差を生じやすいためにこれらの頬舌径は使用しなかった。

比較資料としては縄文人[BRACE,C.L.・M.NAGAI1982]、土井ヶ浜・三津－永田の弥生人、現代の京都、福岡、北海道アイヌ、朝鮮、および、台湾在住の福建系中国人[廖健源1984]と、著者の計測した岐阜県大垣市の花岡山古墳人を用いた。なお、計測値は、左右とも測れる時はその平均を、一方だ

けの時はその値を個体の値として取り扱った。比較のための距離尺度としてはshape distanceを用い、集団間関係の図示や変異がどの項目と関係しているかを調べるために主成分分析法を利用した。

２)結果

まず、各集団の男女別にそれらの集団間の比較をした。変動の76.2％を説明する第１主成分は上顎第１・第２小臼歯の近遠心径に対する上・下顎の第１大臼歯の頬舌径の割合と関係し、7.1％を説明する第２主成分は上・下顎の第１大臼歯の近遠心径に対する上顎第２大臼歯の頬舌径の割合と関係している(表12)。

図86は第１主成分を横軸に、第２主成分を縦軸にとって集団をプロットし、各集団の男女を線で結んだものである。同一集団では男性は女性より右側に来る傾向が一般に認められるが、男女間の距離は集団によって著しくばらついている。しかし、これは明らかに標本の大きさと関係しており、標本数が男女とも10以上の中国、縄文、弥生、京都、朝鮮、アイヌでは何れも男女は比較的近く、かつ、ほぼ一定の性差を示している。したがって男女間が極端に離れている古墳、加美、福岡については、サンプル数が極端に少ないことに問題があると考えられた。

そこで男女を単純平均した値を用いて比較をしてみると、変動の83.6％を説明する第１主成分は上顎第１・第２小臼歯の近遠心径に対する上・下顎の第１大臼歯の頬舌径の割合と関係し、7.9％を説明する第２主成分は上顎の第２大臼歯の頬舌径に対する上顎側切歯の近遠心径の割合と関係している(表13)。

第１主成分を横軸に、第２主成分を縦軸にとって集団をプロットしてみると、上顎第１・第２小臼歯の近遠心径に対する上・下顎の第１大臼歯の頬舌径の割合の大きい縄文が右側に、それとは反対の特徴をもつ中国が左側に位置し、ほかの集団はその間にある。上顎の第２大臼歯の頬舌径に対する上顎側切歯の近遠心径の大きいアイヌが上方に、その反対の特徴をもつ現代の京都・福岡・朝鮮は下方に位置している。なお、主成分軸を45度回転させたX軸で見ると縄文やアイヌはプラス側に、それらとは反対の特徴をもつ京都・中国・加美・朝鮮・福岡はマイナス側に、弥生や古墳はそれらの中間に位置している。加美弥生人は現代の京都・福岡・朝鮮と中国の中間に位置し、それらとは比較的近い

表９　歯冠の近遠心径と頬舌径による比較資料集団

集団名	標本数		著者	発行年	備考
	男	女			
縄文	85	61	C.L.BRACE & M.NAGAI	1982	太田、安宅、津雲、吉胡、姥山
弥生	40	16	C.L.BRACE & M.NAGAI	1982	土井ヶ浜、三津－永田
加美	7	2	吉備、多賀谷	2014	(弥生時代)、本報告
古墳	5	5	吉備、寺門	1992	花岡山古墳群
京都	24	18	C.L.BRACE & M.NAGAI	1982	(現代)
福岡	6	9	C.L.BRACE & M.NAGAI	1982	(現代)
アイヌ	22	20	C.L.BRACE & M.NAGAI	1982	(現代)北海道アイヌ
朝鮮	30	14	C.L.BRACE & M.NAGAI	1982	(現代)日本在住、朝鮮
中国	99	108	廖健源	1984	(現代)台湾在住の福建系

けれども、縄文やアイヌとは遠いという結果になった(図85)。

次に、第１主成分を横軸に、サイズを縦軸にとって集団をプロットしてみた(図87)。なお、[YAMADA,H. T.KOGISO and J.Y.LIAO1986]によると歯冠の近遠心径や頬舌径では相関係数が0.5前後であることが明らかにされているので、全変数間での相関係数を0.5と仮定してサイズのスケーリングを行った。その結果、縄文やアイヌはサイズが小さく、一方、加美は弥生よりさらに大きいことなどが判明した。また、この場合においても形態距離のみで比較した図86とほぼ同様で、加美と縄文は対照的な位置にあり、その中間に京都・朝鮮・福岡・弥生・古墳がくる。

３)考察

日本人の起源を知る上の最も重要な出来事は、狩猟、採集の縄文時代から水稲耕作の弥生時代およびそれ以降に起こった人骨形態の急激な変化であり、さらにそれをどう解釈するかという問題である。

表10　加美遺跡の男女別の歯冠部計測値(単位mm)

歯種	女性						男性					
	近遠心径			頬舌径			近遠心径			頬舌径		
	m	sd	n	m	sd	n	m	sd	n	m	sd	n
I^1	9.15	1.06	2	7.00		1	9.02	0.50	5	7.18	0.32	2
I^2	7.25	0.07	2	6.50	0.14	2	7.84	0.67	4	6.52	0.50	3
UC	7.95	0.07	2	8.15	0.35	2	8.38	0.47	5	8.71	0.54	5
P^1	7.45		1	9.55		1	7.36	0.66	4	9.58	0.45	4
P^2	7.40		1	9.75		1	7.14	0.73	4	9.63	0.38	4
M^1	10.60		1	11.60		1	10.81	0.57	4	12.18	0.30	4
M^2	10.10		1	11.00		1	10.44	0.83	5	12.23	0.34	5
M^3			0			0	8.93	0.55	4	11.40	1.06	4
I^1	5.90		1	5.20		1	5.80		1	6.80		1
I^2	6.50		1	5.70		1	6.58	0.25	2	6.60	0.28	2
LC	6.75		1			0	7.52	0.43	5	7.93	0.42	3
P^1	7.70	0.28	2	8.25	0.35	2	7.24	0.39	5	8.52	0.55	5
P^2	7.85	0.21	2	8.38	0.60	2	7.28	0.64	7	8.37	0.76	7
M^1	11.55		1	10.60		1	11.57	0.74	7	10.88	0.40	7
M^2	11.10		1	10.30		1	11.75	0.69	6	10.79	0.47	5
M^3			0			0	11.32	1.28	5	10.62	0.63	5

表11　花岡山古墳群の男女別の歯冠部計測値(単位mm)

歯種	女性						男性					
	近遠心径			頬舌径			近遠心径			頬舌径		
	m	sd	n	m	sd	n	m	sd	n	m	sd	n
I^1	8.05	0.35	2	6.85	0.21	2	8.85		1	7.65		1
I^2	6.95	0.69	3	6.55	0.31	3	6.93	1.46	3	6.15	1.10	3
UC	8.20	0.33	4	8.48	0.41	4	7.72	0.77	5	8.70	0.87	5
P^1	7.93	0.38	3	9.63	0.24	3	7.02	0.13	3	9.11	0.20	3
P^2	6.73	0.59	4	9.19	0.13	4	6.21	0.36	3	8.85	0.31	3
M^1	9.82	0.83	5	11.32	0.68	5	10.16	0.24	4	11.37	0.54	5
M^2	9.38	1.04	4	11.39	0.82	4	9.80	0.42	2	12.10	0.42	2
M^3	9.23	0.18	2	11.43	0.60	2	8.60	0.57	2	10.60	1.41	4
I^1	4.95	0.07	2	6.13	0.04	2	5.20	1.13	2	5.93	0.71	2
I^2	6.37	0.42	3	6.77	0.15	3	6.15	0.53	3	6.00	0.23	3
LC	7.03	0.31	4	7.99	0.26	4	7.35	0.92	2	8.58	0.60	2
P^1	7.24	0.32	5	7.95	0.56	5	6.45		1	7.40		1
P^2	7.48	0.30	4	8.41	0.40	4	6.58	0.49	3	8.00	0.36	3
M^1	11.24	0.62	4	10.99	0.47	4	11.10	1.13	5	10.83	0.45	5
M^2	11.19	0.25	4	10.65	0.77	4	10.48	0.92	5	10.16	0.62	5
M^3	9.99	0.28	4	10.50	1.21	4	9.35	0.64	2	9.05	0.21	2

そのために、古代より引き続いて残存し調査ができるものとしては、人骨および歯などの硬組織は非常に貴重な資料であることはいうまでもない。しかし、古人骨においては数量が限られてくるという問題がある。特に畿内においては古代人骨は極端に少なく、残存していても保存状態はきわめて悪い場合が多かった。そこで、今までに著者らが発表した古人骨の頭蓋骨計測値を使用した男性の場合の形態距離による集団間の主成分分析の結果では、石器時代の北朝鮮の雄基（Ung-Keui-pho）は紀元４～７世紀の南朝鮮の礼安里（Ryean-ri）とは近く、これらは日本の何処の縄文人とも遠いが、三津、土井ヶ浜の弥生人とは比較的近く、それ以上に古墳人の大和グループとは近かった。しかし、朝鮮の弥生人の形態の特徴は高顔・高身長であり、大和グループは短顔・高身長と少しの相違がある。なお、これらの結果は金関やその後の埴原、山口や池田らによる渡来説を支持する結果となった。そして大和グループはより渡来人の影響が大きかったのではないかと考えられる。しかし、女性の場合では礼安里（Ryean-ri）は三津、土井ヶ浜とは近いが、何処の古墳人とも近くなかった。古墳時代の女性では男性と異なる結果となった理由は資料数が大和グループが極端に少ないことに問題があると考えられる。これらについては、今後さらに資料を増やして検討する必要があると思われる。

このように、人骨からは畿内の弥生人の形態特性はほとんど解明されていないために、著者らは残存する可能性の高い歯冠部のエナメル質の近遠心径と頬舌径の計測値を使用して形態距離による集団間の主成分分析をおこなってみた。しかしながら、国内の古代人の歯の計測データはわずかしか公表されておらず、また、朝鮮や中国などの近隣諸国の古代人に関してはまったくないため、明確なことは言えないが、加美弥生人は土井ヶ浜や三津－永田の弥生人とは多少形態が異なり、現代の京都・福岡・朝鮮と中国の間に位置することから、非常に現代的であったと思われる。そのために、加美弥生人は土井ヶ浜や三津－永田の弥生人より多くの渡来人の影響を受けたと考えるか、また、渡来人のルーツに相違があったのかもしれない。歯に関してもより多くのデータを集めて検討を加えていきたいと思っている。

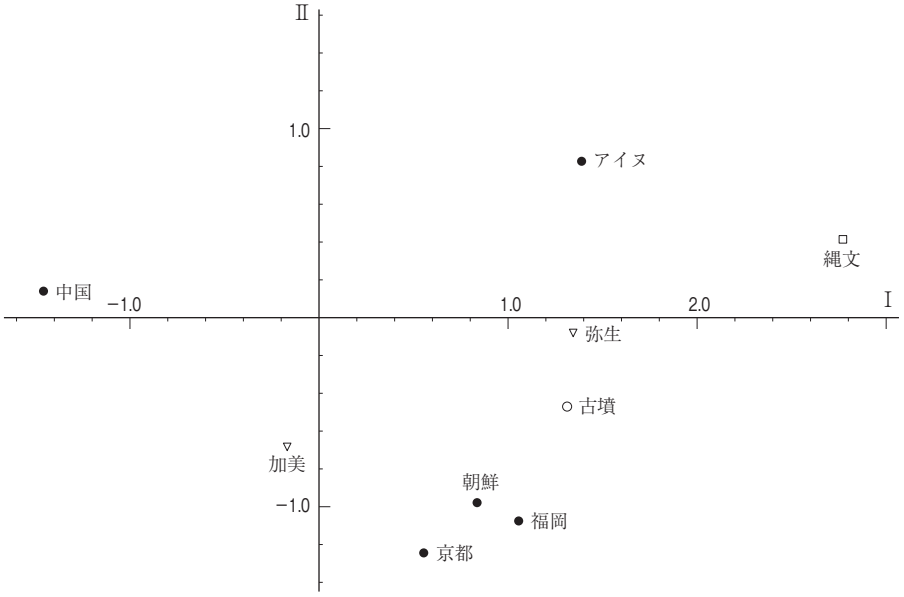


図85　第１・第２主成分による各集団間の比較(男女平均)

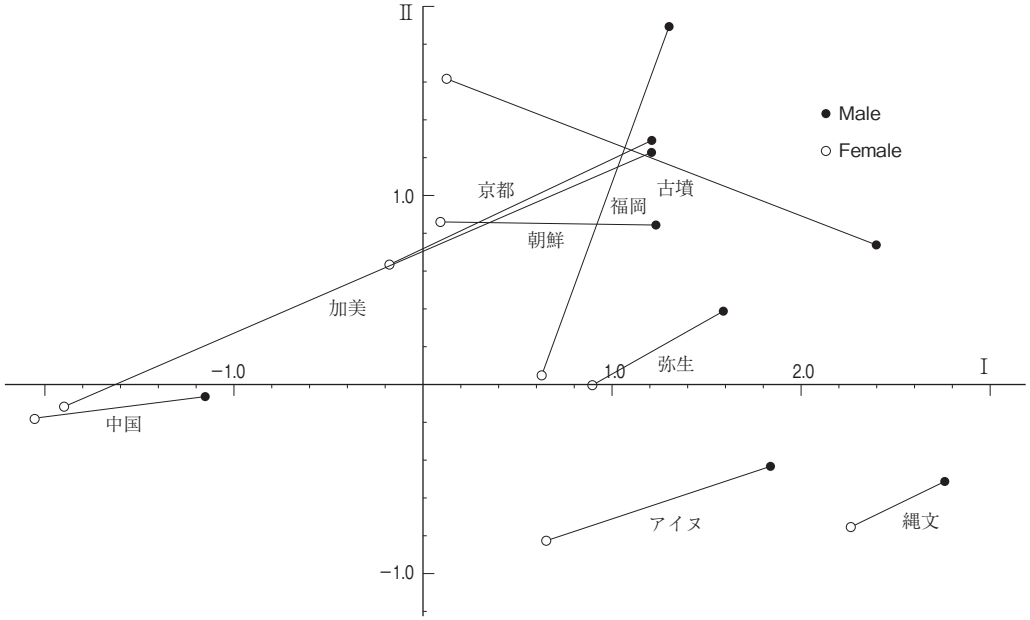


図86　第１・第２主成分による各集団間の比較(男女)

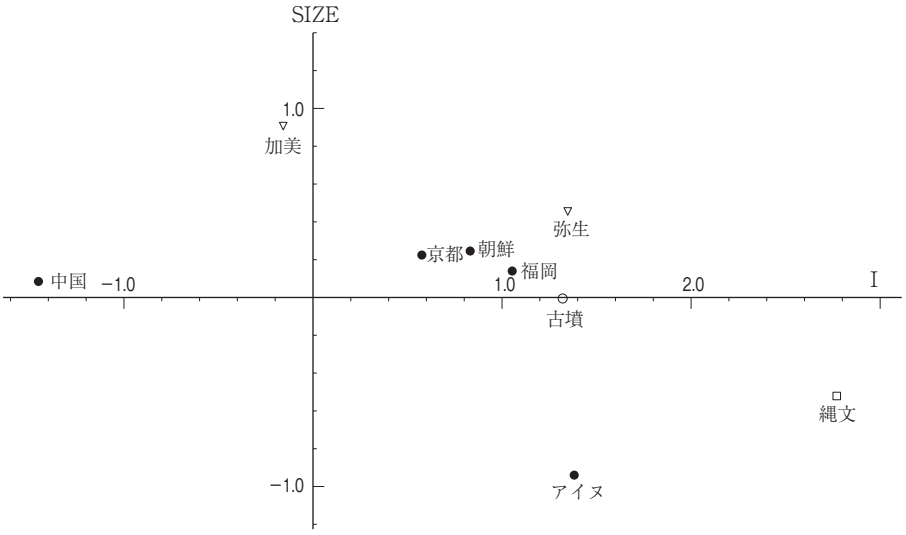


図87　第１主成分とSIZEによる各集団間の比較(男女平均)

Y1－2号　壮後期R　女？

歯冠長			※	※						※	※	※	※	※	※	※
歯根長			※	※						※	※	※	※	※	※	※
歯全長			※	※						※	※	※	※	※	※	※
近遠心径			11.1	7.2						※	※	7.0	6.7	11.0	10.6	9.4
頬舌径			10.8	7.8						※	※	8.6	7.7	11.0	10.1	9.8
咬耗度			2	1								2	1	2	2	1
	/	/	M_1	P_2	/	/	/	/	/	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

Y1－3号　壮年　R

歯冠長	※	※	※										※	※	※	※
歯根長	※	※	※										※	※	※	※
歯全長	※	※	※										※	※	※	※
近遠心径	8.8	9.6	※										※	※	10.1	9.4
頬舌径	11.2	12.2	※										※	※	12.1	11.4
咬耗度	1	2	※										※	※	2	1
	M^3	M^2	M^1										P^2	M^1	M^2	M^3

歯冠長		※										※	※	※	※	※
歯根長		※										※	※	※	※	※
歯全長		※										※	※	※	※	※
近遠心径		11.2										7.3	7.8	※	※	11.0
頬舌径		10.6										7.7	8.8	11.6	10.5	10.3
咬耗度		1										1	1	2	2	1
		M_2					/	/	/	/	/	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

Y1－4号　壮年　R

歯冠長				※	※	※					※	※				
歯根長				※	※	※					※	※				
歯全長				※	※	※					※	※				
近遠心径				6.9	6.8	7.8					※	7.4				
頬舌径				8.9	9.1	8.3					※	9.6				
咬耗度				1	1	2					※	2				
				P^2	P^1	C					C	P^1				

歯冠長			6.0	※	※	※	※	※						6.8	※	
歯根長			10.3	※	※	※	※	※						※	※	
歯全長			16.8	※	※	※	※	※						※	※	
近遠心径			11.2	7.1	7.0	6.5	※	※						11.3	※	
頬舌径			10.0	8.2	7.1	7.1	※	※						10.7	※	
咬耗度			2	1	1	2	2	2						2	※	
			M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1						M_1	M_2	

Y1－5号　壮前期R　男

歯冠長	6.5	6.8	6.7	6.5	※	※	※	※		※	※	6.8		6.6	6.8	
歯根長	※	※	※	※	※	※	※	※		※	※	※		※	※	
歯全長	※	※	※	※	※	※	※	※		※	※	※		※	※	
近遠心径	8.2	10.0	10.7	6.8	6.9	8.3	7.1	9.0		7.2	8.6	6.9		10.5	10.0	
頬舌径	10.0	11.9	12.1	9.4	9.2	8.4	6.0	※		※	※	8.7		12.3	12.0	
咬耗度	1	1	1	1	2	1	1	1		1	2	1		2	1	
	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1		I^2	C	P^1		M^1	M^2	

歯冠長	7.2	6.9	6.7								※	7.3	8.2			6.8
歯根長	※	※	※								※	※	※			※
歯全長	※	※	※								※	※	※			※
近遠心径	11.5	12.1	12.1								7.3	7.0	6.9			11.8
頬舌径	10.4	10.9	10.8								※	8.0	7.3			10.3
咬耗度	0	1	1								2	1	1			1
	M_3	M_2	M_1								C	P_1	P_2			M_3

＿：歯槽部残存　／：歯槽破損　※：計測不能　＄：齲蝕

図88　加美遺跡Ｙ１号墳丘墓の歯の計測値（１）

歯冠長	5.6
歯根長	※
歯全長	※
近遠心径	9.9
頬舌径	11.2
咬耗度	1
Y1－7号	M^2
壮年　R	L

歯冠長	
歯根長	
歯全長	
近遠心径	
頬舌径	
咬耗度	

歯冠長	※	※	※	※
歯根長	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※
近遠心径	10.1	10.6	※	※
頬舌径	12.2	12.0	※	※
咬耗度	1	1	1	1
Y1－9号	M^2	M^1	P^2	P^1
壮後期R				L

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2
歯冠長	5.7	7.1	7.8	9.1	※	※	※	※	※	※	8.2	※
歯根長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径	11.4	10.8	7.9	7.6	7.2	※	※	※	※	7.8	7.8	7.8
頬舌径	10.2	11.4	9.0	8.4	※	※	※	※	※	※	8.2	8.9
咬耗度	1	1	1	1	1	2	※	※	2	2	1	1

歯冠長	6.2	5.7	※	※	※	※	※	※	※
歯根長	※	※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径	8.8	10.5	※	※	※	8.9	※	9.2	9.5
頬舌径	11.7	12.6	※	※	※	9.5	※	※	※
咬耗度	1	1	※	※	※	2	※	1	1
Y1－10号	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1
壮後期R									L

男	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
歯冠長	6.2	5.9	※	6.2	7.0	※	8.6	※	※	8.7	9.6	7.4	7.8	5.8	※	※
歯根長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径	11.0	※	12.3	7.7	8.0	8.2	6.8	※	※	6.7	8.0	7.8	8.0	※	12.2	※
頬舌径	11.3	10.9	11.6	9.7	9.5	※	6.8	※	※	※	※	9.3	9.5	※	※	※
咬耗度	1＄	1＄	2	1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1

歯冠長	※	※	※	※
歯根長	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※
近遠心径	9.9	7.3	8.0	※
頬舌径	※	6.6	8.4	※
咬耗度	3	2	3	※
Y1－14号	I^1	I^2	C	P^1
壮後期R				L

女	P_1	P_2
歯冠長	8.8	7.3
歯根長	※	※
歯全長	※	※
近遠心径	7.9	8.0
頬舌径	8.5	8.8
咬耗度	2	1

＿：歯槽部残存　／：歯槽破損　※：計測不能　＄：齲蝕

図89　加美遺跡Ｙ１号墳丘墓の歯の計測値（２）

歯冠長			※	※	※	※	8.6	8.4	※	8.0	※	6.9	※	※	6.4
歯根長			※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長			※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径			10.2	6.5	6.8	7.6	7.7	8.6	8.0	7.8	7.8	6.7	6.2	10.0	9.3
頬舌径			11.8	9.5	9.5	8.3	※	7.4	※	7.0	8.2	9.6	9.4	11.7	11.8
咬耗度			2	1	2	2	2	2	※	2	3	2	2	2	1
Y1－19号			M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2
壮後期R															L
男	M_3	M_1	M_1	P_2	P_1	C	I_2	/	/	/	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
歯冠長	※	※	5.0	6.8	7.6	※	※				8.0	※	※	※	※	※
歯根長	※	※	※	※	※	※	※				※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※	※	※				※	※	※	※	※	※
近遠心径	※	※	10.5	6.8	7.0	※	※				7.0	7.0	6.7	10.4	11.2	※
頬舌径	※	※	10.6	8.2	8.0	※	※				7.6	7.8	8.2	10.0	※	※
咬耗度	※	※	2	2	2	※	※				2	2	2	2	1	※
歯冠長	5.3	7.8	6.6	7.5	9.3	11.5	11.2	12.2	11.8	10.8	11.8	9.2	7.8	6.9	7.0	5.4
歯根長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径	9.7	11.0	11.3	7.4	7.8	8.6	8.0	8.6	9.1	7.4	8.8	7.5	7.3	11.2	11.8	9.0
頬舌径	11.4	12.6	12.6	9.4	9.8	9.1	6.5	6.7	7.2	6.6	9.0	10.0	9.6	12.2	12.1	11.3
咬耗度	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
Y1－20号	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
15才　R															L
男	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1				I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
歯冠長	6.6	7.6	7.3	9.8	9.4				8.8	9.0	12.1	9.8	8.6	7.6	7.4	6.2
歯根長	※	※	※	※	※				※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※				※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径	11.5	12.0	11.8	7.4	7.3				5.8	6.4	7.8	7.3	7.8	11.8	12.4	11.8
頬舌径	10.3	10.4	10.9	8.4	8.5				6.8	6.4	8.4	8.5	8.5	11.0	10.9	10.6
咬耗度	0	1	1	1	1				1	1	1	1	1	1	1	0
歯冠長										※						※
歯根長										※						※
歯全長										※						※
近遠心径										※						※
頬舌径										※						※
咬耗度										※						※
Y1－23号										I^2						M^3
熟年　R																L
男										I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	
歯冠長										※	※	※	※	※	※	
歯根長										※	※	※	※	※	※	
歯全長										※	※	※	※	※	※	
近遠心径										※	※	※	6.6	11.0	※	
頬舌径										※	※	※	8.3	10.6	※	
咬耗度										※	3	3	3	3	※	

＿：歯槽部残存　／：歯槽破損　※：計測不能　＄：齲蝕

図90　加美遺跡Ｙ１号墳丘墓の歯の計測値（３）

歯冠長	6.6	7.0	6.6	8.2	9.0	11.2	11.7	11.8	11.3	※	11.6	9.2	8.3	5.9	7.3	7.0
歯根長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
歯全長	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
近遠心径	9.6	11.0	11.4	8.2	8.1	8.1	8.9	9.8	9.4	8.6	8.2	8.2	7.9	11.2	11.0	9.1
頬舌径	12.8	12.4	12.4	10.2	9.8	8.4	※	※	※	※	8.3	10.0	10.2	12.3	12.5	12.3
咬耗度	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Y2−1号	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
若年　R																L
男											C		P_2	M_1	M_2	M_3
歯冠長											11.4		7.5	7.2	7.0	8.0
歯根長											※		※	※	※	※
歯全長											※		※	※	※	※
近遠心径											7.4		8.3	12.3	12.2	12.9
頬舌径											7.8		9.0	11.0	11.4	11.2
咬耗度											1		1	1	1	1
歯冠長				7.7	7.8				12.5	11.0	12.8	7.2	7.2	5.9	7.0	
歯根長				※	※				※	※	※	※	※	※	※	
歯全長				※	※				※	※	※	※	※	※	※	
近遠心径				7.0	7.7				8.4	7.2	7.9	7.2	7.8	10.6	10.1	
頬舌径				9.7	9.5				7.0	6.4	7.9	9.6	9.8	11.6	11.0	
咬耗度				2	1				1	1	2	1	1	2	1	
Y2−2号				P^2	P^1				I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	
壮年　R																L
女		M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2		I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	
歯冠長		6.0	7.0	8.3	8.6	11.0	9.3		9.4	9.4	※	5.9	8.4	※	5.8	
歯根長		※	※	※	※	※	※		※	※	※	※	※	※	※	
歯全長		※	※	※	※	※	※		※	※	※	※	※	※	※	
近遠心径		10.8	11.6	7.5	7.8	6.7	6.3		5.5	6.3	6.8	7.2	7.9	11.5	11.4	
頬舌径		10.0	10.4	8.0	7.6	※	※		5.2	※	※	8.4	7.9	10.8	10.6	
咬耗度		1	2	1	1	1	1		1	1	1	1	1	2	1	
歯冠長			5.8													
歯根長			※													
歯全長			※													
近遠心径			11.5													
頬舌径			12.3													
咬耗度			2													
Y2−5号			M^1													
壮年　R																L
歯冠長																
歯根長																
歯全長																
近遠心径																
頬舌径																
咬耗度																

＿：歯槽部残存　／：歯槽破損　※：計測不能　＄：齲蝕

図91　加美遺跡Ｙ２号墳丘墓の歯の計測値

表12　形態距離の主成分係数ベクトル（男女別の各集団）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
寄与率（%）	76.2	7.1	5.0
累積寄与率（%）	76.2	83.3	88.2
I^1の近遠心径	0.02	−0.14	0.08
I^2の近遠心径	0.05	−0.28	0.20
UCの近遠心径	−0.09	−0.06	0.40
P^1の近遠心径	−0.30	0.21	0.11
P^2の近遠心径	−0.33	0.25	−0.12
M^1の近遠心径	−0.11	−0.31	0.24
M^2の近遠心径	−0.17	−0.03	0.29
I_1の近遠心径	−0.14	−0.19	−0.06
I_2の近遠心径	−0.08	0.03	0.08
LCの近遠心径	0.02	0.15	0.39
P_1の近遠心径	−0.21	0.03	−0.22
P_2の近遠心径	−0.23	0.04	−0.32
M_1の近遠心径	0.14	−0.32	−0.05
M_2の近遠心径	0.21	0.21	−0.19
P^1の頬舌径	−0.02	−0.07	−0.04
P^2の頬舌径	−0.06	0.14	−0.16
M^1の頬舌径	0.46	0.05	−0.02
M^2の頬舌径	0.33	0.55	0.23
P_1の頬舌径	−0.04	0.05	−0.23
P_2の頬舌径	−0.07	−0.20	−0.27
M_1の頬舌径	0.45	−0.30	−0.14
M_2の頬舌径	0.18	0.17	−0.20

表13　形態距離の主成分係数ベクトル（男女平均の各集団）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
寄与率（%）	83.6	7.9	4.0
累積寄与率（%）	83.6	91.5	95.5
I^1の近遠心径	0.03	0.10	−0.16
I^2の近遠心径	0.07	0.50	0.15
UCの近遠心径	−0.10	0.18	0.39
P^1の近遠心径	−0.32	−0.05	0.39
P^2の近遠心径	−0.33	−0.29	−0.09
M^1の近遠心径	−0.10	0.14	−0.05
M^2の近遠心径	−0.17	0.11	0.21
I_1の近遠心径	−0.15	0.06	−0.21
I_2の近遠心径	−0.08	−0.01	0.13
LCの近遠心径	−0.01	−0.03	0.34
P_1の近遠心径	−0.18	−0.11	−0.19
P_2の近遠心径	−0.21	−0.09	−0.07
M_1の近遠心径	0.14	0.26	−0.12
M_2の近遠心径	0.22	−0.28	0.03
P^1の頬舌径	−0.02	0.11	−0.07
P^2の頬舌径	−0.06	−0.16	−0.25
M^1の頬舌径	0.48	−0.11	−0.05
M^2の頬舌径	0.30	−0.48	0.30
P_1の頬舌径	−0.03	−0.09	−0.30
P_2の頬舌径	−0.07	0.16	−0.30
M_1の頬舌径	0.44	0.26	−0.01
M_2の頬舌径	0.15	−0.17	−0.06

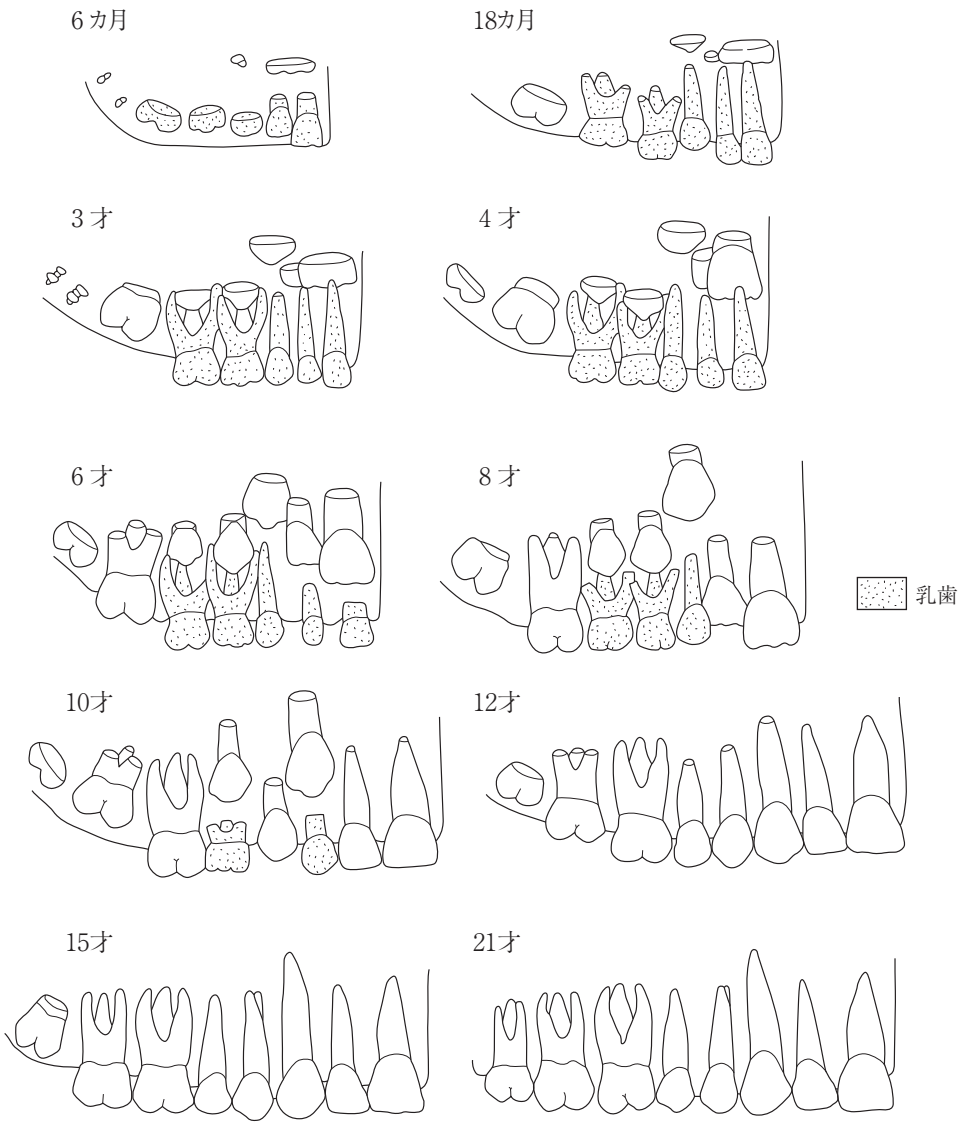


図92　乳歯と永久歯の萌出状態（[Schour, I & M, Massler 1941]）

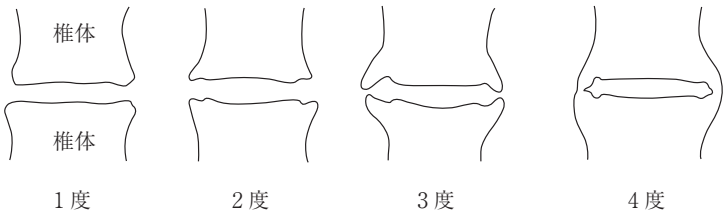
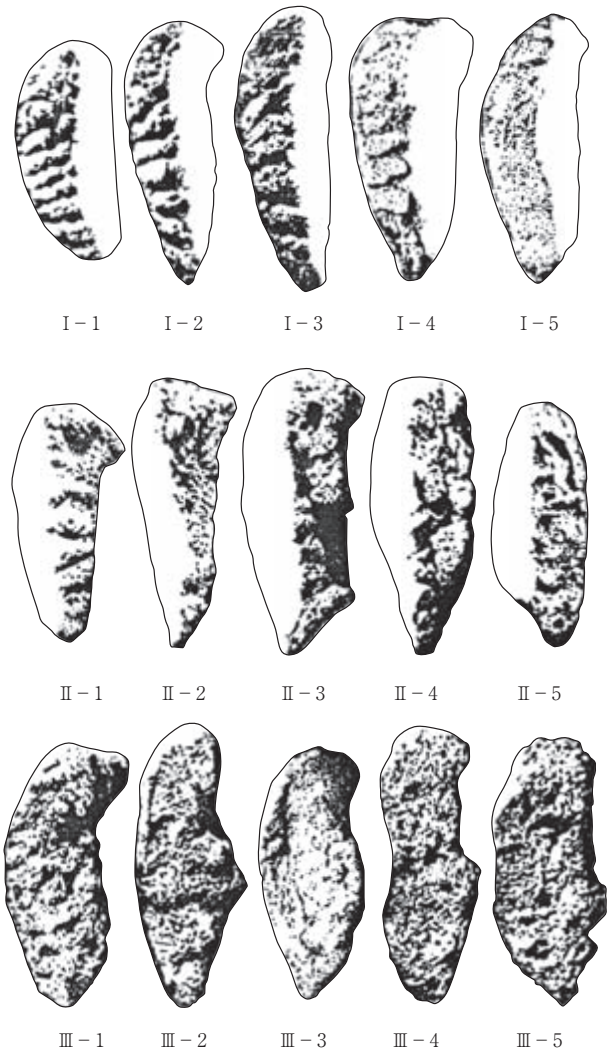


図93　椎体前縁の縁嘴の発達程度（[Nathan, H 1962]）



※ Ⅰは背側部分、Ⅱは腹側部分、Ⅲは周辺部の変化を示す。
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの組み合わせで年齢を推定する。

図94　恥骨結合面の年齢的変化（[Mckern, T. W & T. D. Stewart 1957]）

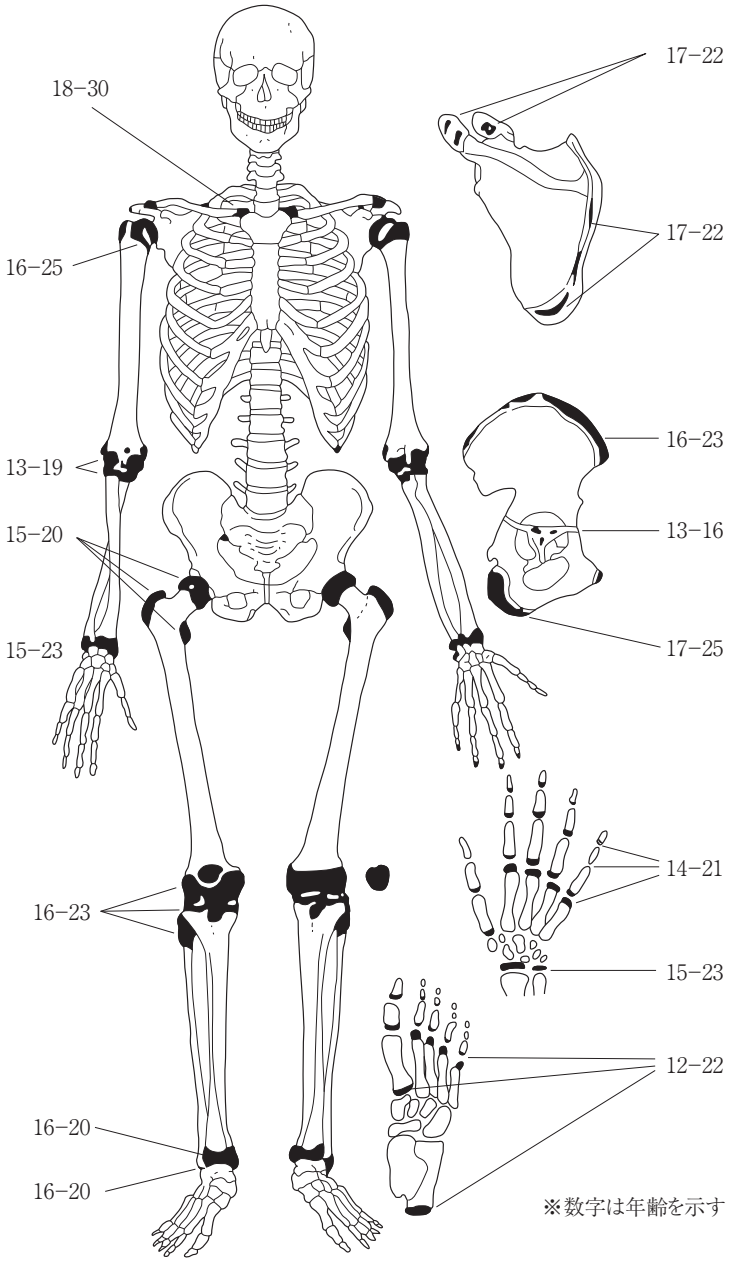


図95　骨格各部の化骨時期（[D. R Brothwell 1963]）

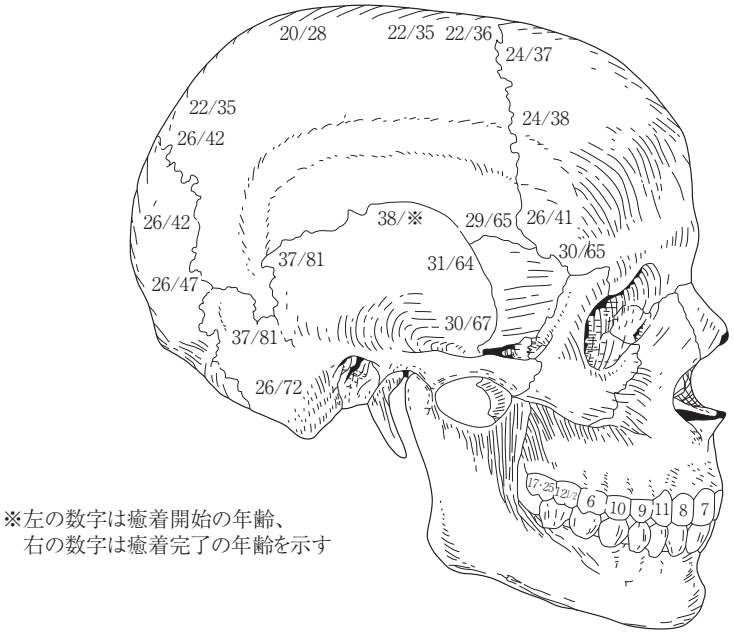


図96　頭骨縫合の癒着年齢（[Ashley Montagu, M. F 1960]）

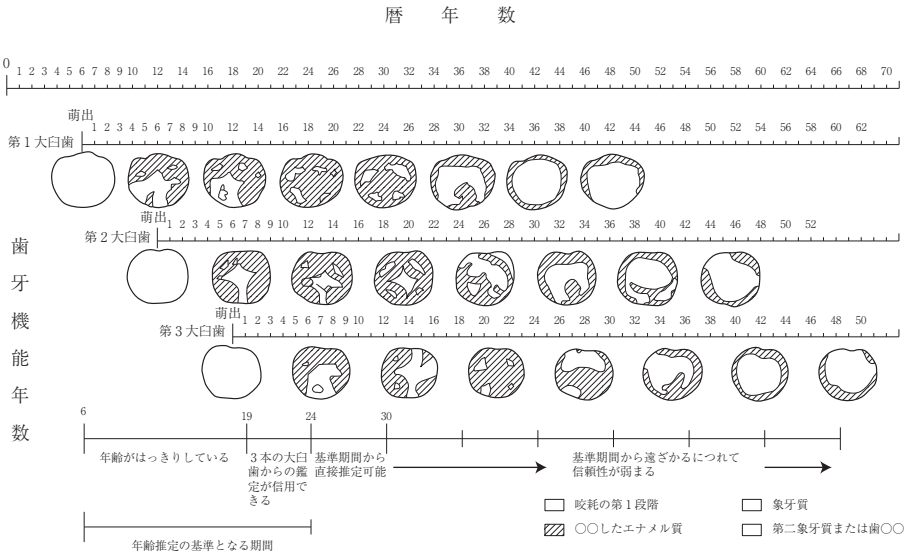


図97　大臼歯の歯牙機能年数と暦年齢（[D. R Brothwell 1963]）

第Ⅴ章　総括

Ｙ１号墳丘墓の発見は、ＫＭ84－１次調査の東区で下層遺構の確認をしたおり、現代の攪乱壙の壁に偶然露出した組合式木棺と人骨が発見されたことに端を発している。同様に**Ｙ２号墳丘墓**についても庄内式期の井戸の底から露呈した土器棺が墳丘墓の存在を意識させ、トレンチを入れる運びとなった。

本報告は**Ｙ１・２号墳丘墓**の発掘調査を終えてから、30年が経過したこともあって、一部資料の所在が不明になるなどのアクシデントが生じたことは否めない。それでも発掘調査の経過および調査で得られた基本的なデータについては収録しえたと思っている。以下に本報告の総括として**Ｙ１号墳丘墓**の調査成果を列記しておきたい。

１．**Ｙ１号墳丘墓**の周溝を含む全長は南北約42m、東西約34mで、墳丘の最大規模は南北25m、東西15m、墳丘の高さは2.0～2.5m、周溝の最深部からの高さは約2.8mである。また、墳丘の盛土量は約463㎥であった。管見による限り弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式中段階：紀元前50年前後)の墳丘墓としては西日本で最大級といえる。

２．主体部の数は23基あり、このうち**５号主体部**の木槨以外の成人の埋葬にはⅠ型式の組合式木棺(コウヤマキ製)が使われていた。子供も組合式木棺であったが、細部は明らかでない。

３．**Ｙ１号墳丘墓**の被葬者の頭位は、成人・子供とも北および東枕であり、紀元前後の楽浪漢墓の被葬者の頭位と同じであった。前漢の葬制の影響を受けているように思われる。

４．**Ｙ１号墳丘墓**の墳丘のほぼ中央に位置する**５号主体部**は、底板以外の蓋板・側板・小口板がそれぞれ２枚で構成された木槨・木棺であった。同様な構造の埋葬施設は、朝鮮半島北部の楽浪郡に派遣された漢人官僚の墓といわれる平安南道大同江面梧野里古墳群第20号墳の木槨などに類似していることから、前漢の格式の低い木槨を参考にしたのではないかと思われる。

５．**Ｙ１号墳丘墓**の**２号主体部**および**14号主体部**の被葬者は女性の可能性が高く、前者はガラス平玉を耳飾りに、右腕に円環型銅釧を着装しており、後者は右腕に円環型銅釧を着装していた。円環型銅釧は弥生時代の貝釧が祖形ではないかという見方もあるが、右腕に着装する行為(右手は左手に比べて神聖な行為でつかう)は中国の儒教につながる習俗である。このようにみると、**２号・14号主体部**の円環型銅釧を着装する行為も楽浪郡から伝わった習俗の１つであった可能性がある。

６．**Ｙ１号墳丘墓**は墳丘の主軸が正南北、木槨、被葬者の頭位、円環型銅釧の右腕への着装習俗、木製容器・武器形木製品の存在など、楽浪漢墓にみられる前漢の葬制に相通じるものがある。

７．**Ｙ１号墳丘墓**の周溝内に投棄された多量の畿内第Ⅳ様式中段階の土器や木製品は、墳丘墓外で行われた歌舞飲食儀礼の実体やその後、墳丘墓での埋葬が完了するまでのようすを今に伝える重要な資料になった。また、周溝から出土した鋤や鍬は墳丘墓の築造やその後の埋葬に伴って使われた道具であり、砥石は木棺を加工、調整した際に使った鉄製工具を砥ぐためのものと考えられた。これらの

工具類および砥石などは、墳丘墓での最後の埋葬が終わると焼却し廃棄したものであろう。このように鋤・鍬が方形周溝墓の周溝から出土する例は、加美遺跡の庄内式～布留式期の方形周溝墓や瓜生堂遺跡その１・２の方形周溝墓、山賀遺跡その２の方形周溝墓ほかがある。

８．**Ｙ１号墳丘墓**の**東周溝**や墳丘上で検出された墓標とみられる薄板は、巨摩・瓜生堂遺跡の弥生時代中期後葉～後期前葉の方形周溝墓や、喜連東遺跡の弥生時代後期前葉の方形周溝墓で確認された埋葬施設上に置かれた標石と同じものとみた。**Ｙ１号墳丘墓**では墳丘頂部を整地した際に墓標の一部は抜き取られて周溝に投棄され、一部は焼かれたものと考えられる。

９．**Ｙ１号墳丘墓**の**２号主体部**では、墓壙内を埋め戻す過程で高杯の杯部を意図的に割った脚部を供え、火を焚いた跡が確認された。このような例はほかの主体部では確認できなかったため、一般的であったとは必ずしもいえないが、埋葬が夜間に行われたことや、埋葬に当たって送り火のような行為があった可能性を示唆している。

10．**Ｙ１号墳丘墓**の中心埋葬は、墳丘墓のほぼ中心を占める**５号主体部**である。被葬者は壮年前半期の男性で頭位は北枕、頭部に多量の赤色顔料(朱)が撒かれていた。被葬者は副葬品や着装品は所持していないが、当時中国でも貴重であった朱を墳丘墓中で最も多く撒かれていた点は墓主にふさわしいといえる。

11．**Ｙ１号墳丘墓**の墓主は被葬者の頭位と主体部の切り合い関係からみて、墳丘の中央部を占める中心埋葬の**５号主体部**(男性)であり、これを含む**３号**(壮年)・**４号**(壮年)・**７号**(壮年)・**９号**(壮年)・**10号**(壮年)**主体部**の北枕の成人被葬者に加えて、**６号**(子供)・**８号**(子供)・**16号**(子供)・**17号**(子供)・**21号**(子供)**主体部**の子供を含む一群(中央群)が、**５号主体部**(首長)の被葬者の近親者や子供であった可能性が高い。なお、中央群から北に離れた位置にある**23号**(男性)・**22号**(子供)**主体部**の北枕の被葬者も、中央群の被葬者と関係の深い被葬者と推定される。そして中央群の北側に位置する**１号**(女性？)・**２号**(女性？)・**14号**(女性)・**19号**(男性)・**20号**(男性)主体部など、東枕の成人および**15号主体部**の子供からなる北群の被葬者は、中央群と血縁関係のある別の家族であった可能性がある。同様に中央群の南側に位置する**12号**(成人)・**13号**(成人)主体部の東枕の成人被葬者も、中央群と血縁関係にある別家族であった可能性がある。以上のような埋葬頭位による被葬者の親族関係については先学の研究成果もあるが、**Ｙ１号墳丘墓**の被葬者の親族関係および出身地には、今後被葬者の歯骨のDNA鑑定が行われば明らかになるものと思われる。

12．**Ｙ１号墳丘墓**の墓主は、加美遺跡の南方にある亀井遺跡の環濠集落を統率した首長の可能性があり、河内低地に分布している小・中の集落の首長とも地縁的な関係が深かったものと思われる。つまり、**Ｙ１号墳丘墓**は、河内の首長層の一人の死を契機に築造されたのであって、墓主は特定個人(首長)までには成長していない有力者であり、周辺の主体部は墓主の家族ならびに近親者を埋葬したものと考えられる。**Ｙ１号墳丘墓**の南に位置する**Ｙ２号墳丘墓**については狭小なトレンチ調査のため、主体部の数および被葬者の頭位、墳丘の形態や規模などについては明らかでないが、畿内第Ⅳ様式新段階に築造された可能性が高いことから、河内低地で地縁的な影響力をもった**Ｙ１号墳丘墓**の墓主と変わらない有力者が引き続き生まれたことを示唆している。

付篇　大阪市立加美小学校分校（現加美東小学校）建設に伴う加美遺跡発掘調査概要

１）はじめに

大阪市平野区加美東５丁目では、1976（昭和51）年の夏に大阪市立加美小学校分校（現加美東小学校）の校舎建設予定地内で７箇所の試掘壙（４ｍ×７ｍ）を設けて予備調査が行われた。その結果、銅鏃１点をはじめ、庄内式～布留式期の土器類が多数出土したほか、土壙や溝などの遺構も検出されたため、本格的な発掘調査が行われることになった。

1976（昭和51）年11月６日～1977（昭和52）年３月31日に元大阪市教育委員会文化振興課（現流通科学大学名誉教授）長山雅一氏および長原遺跡調査会の調査員により、校舎の建設予定地約1,250㎡を対象にした発掘調査が実施された（図98）。

発掘調査が終了後、まもなく大阪市平野区長吉長原にあった旧大阪市文化財協会の長原分室において調査資料ならびに出土遺物の整理作業に着手したが、平野区内の緊急発掘調査が急増したこともあって、報告書の作成は延期された。この間38年が経過し、調査関係者が死亡、また退職したため、報告書は未刊であった。しかし、庄内式期の溝内から出土した鉄剣形銅剣は、河内のみならず畿内地域では希少な資料であることや、庄内式～布留式期に属する土器群および集落遺構は、河内地域の弥生時代末から古墳時代前期にかけての具体的な様相を明らかにする上で注目され、調査資料の公表が待たれていた。そこで、この度の本報告書の作成にあたって、加美小学校分校建設に伴う発掘調査の成果についても付篇として概要を収録することにした。

調査地は大阪市平野区加美東５丁目に所在する現在の加美東小学校の位置に当り、KM84－１次調査地の西方に位置している（図３）。調査区は校舎の位置に当り北区・中央区・南区と南北に並んでいる（図98）。

以下に、基本層序を述べたあと、竪穴建物や井戸、多数の溝群などのおもな遺構・遺物について報告する。なお、各層から出土した遺物の詳細については観察表を添付しているので参照されたい。

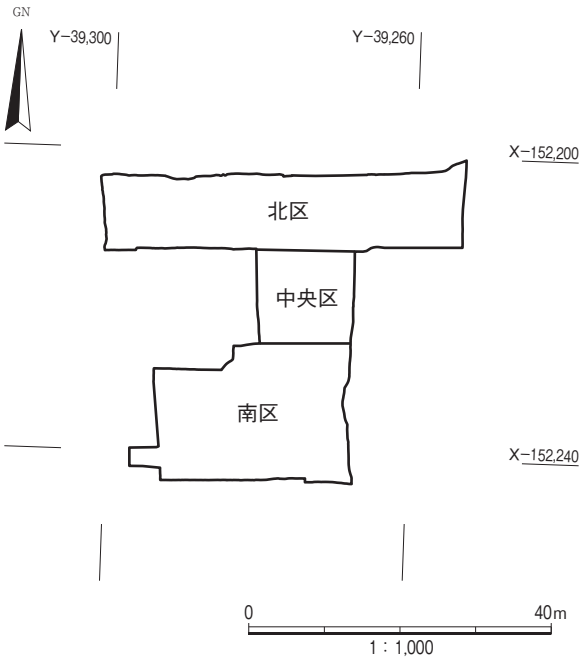


図98　加美小学校分校調査地区割図

２)層序

調査区の基本層序は、第０層の現代整地層および現代の作土層の下層が、第１層～第５層(図99)となり、これらの地層は加美遺跡の標準層序[小倉・趙2001]に対応している。

第１層：暗灰色シルトで、層厚は20cm前後ある。奈良時代の須恵器や土師器の細片を含む作土層である。KM３層に相当する。

第２層：茶灰色シルトで、５世紀後半～６世紀後半代の須恵器を含む。層厚140cmの水成層である。KM4A層に相当する。

第３層：茶褐色シルトからなる作土層で、層厚は20～30cmである。本層は古墳時代中期～後期の遺物を含む。KM5A層に相当する。

第４層：黒色細粒砂(第4a層)と黒色～暗青灰色粘土質シルト、灰褐色粘土質シルト(第4b層)からなる暗色帯で、層厚は40cm前後ある。本層は庄内式～布留式期の土器類を含む。KM6Ai′～6Aⅲ層に対比される。

第５層：緑灰色粘土質シルトからなる水成層で、層厚は30cm以上ある。本層上面の標高はTP+4.8m前後あり、庄内式期の遺構検出面である。KM6B層に対比される。

図99　地層と遺構の関係図

３)遺構と遺物

ⅰ)弥生時代末～古墳時代前期の遺構と遺物

第５層の上面では弥生時代末～古墳時代前期に属する遺構・遺物を検出した。北区からおもな遺構ならびに遺物について略述する(表14)。

SB501　北区の西北部に位置する一辺4.10mの平面形が方形の竪穴建物である(図100)。壁際に幅0.10m前後の周壁溝が巡るようである。床面には南壁の近くに直径、深さともに約0.10mの柱穴がある。屋内には淡茶褐色極細粒砂質シルトが堆積しており、床面から小型鉢および甕が出土した(図102)。

200～204は小型の鉢で、底部の形態は200が不安定な平底、201は平底、202・204は小さな凹み底、203は平底で、中央が浅く凹む。口縁部は短く外上方に立つ201、緩やかに開く203、わずかに内湾する200・202・204がある。器面の調整は外面が200・203はナデ、201・202はハケで、204はヘラミガキ、内面は200がハケ、201・202はナデ、203・204はヘラミガキである。205は口縁部が短く開き、最大径が体部の上半にある甕である。体部の調整は外面が縦方向のハケ、内面は左上りのヘラケズリである。以上の土器は庄内１期に属するものであろう。

SB502　北区の中央部近くに位置する長辺5.20m、短辺4.80mの平面形が方形の竪穴建物である。検出面から床面までの深さは0.14m前後あり、床面の中央部は周辺より幾分高くなっており、西北部に台石224が、東部に砥石223があった。周壁溝は確認されなかったが、床面で平面形が不整形な掘形を含む径0.35～0.40mの柱穴４箇所を検出した(図100・101、図版49)。各柱の掘形の深さは床面から

約0.25mあり、柱痕跡は直径0.15m前後あった。掘形の埋土は黒色シルト質細粒砂で、柱痕跡は黒褐色細粒砂質シルトであった。屋内には炭化物が混じる黒色細粒砂が堆積しており、壺や甕の破片が出土した。

206は二重口縁の甕で、口縁部の外端面に５条の櫛描平行沈線文が巡る。体部内面の調整は逆時計回りのヘラケズリである。才の町Ⅱ式[岡山県教育委員会1977]に属する吉備系の土器である。207は壺の頸部片で、下端外面に山形の櫛描波状文が巡る。内外面の調整は縦および横方向のヘラミガキで

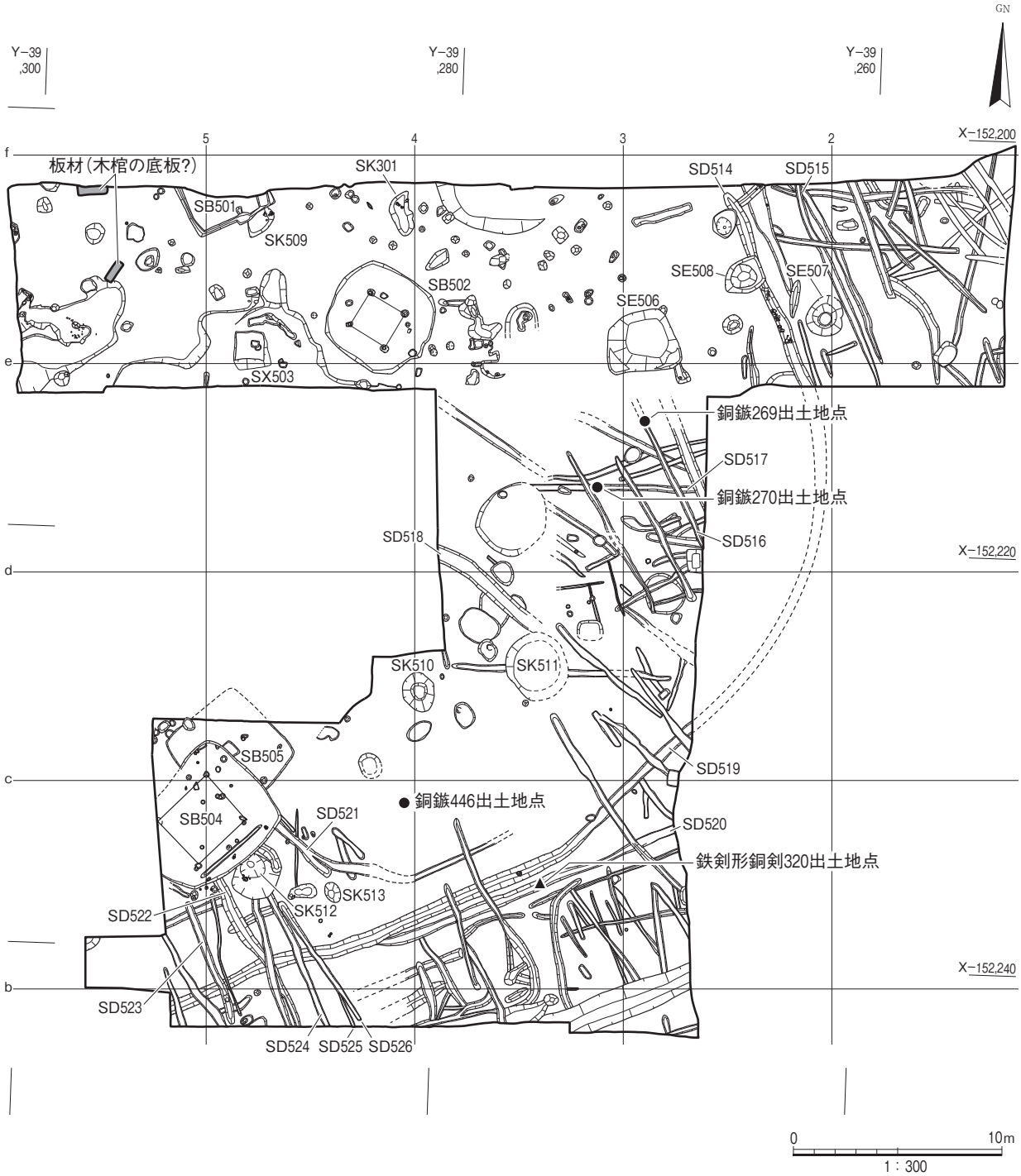


図100　加美小学校分校調査地遺構配置図

ある。208は口縁部が外上方に直線的に開く甕である。口縁部をヨコナデ調整するが内面には左上りのハケメが残る。体部の調整は外面が右上がりのタタキのあと、左上りのハケで、内面は逆時計回りのヘラケズリである。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器(註１)である。以上の土器は庄内１期に属するものであろう。

223は長さ21.6㎝、幅12.7㎝、高さ8.8㎝、小口面の一端を欠損した極細粒砂岩製の砥石で、表裏面および側面に研磨痕がある。224は長さ42.6㎝、幅32.4㎝、高さ12.6㎝の表裏面が扁平な台石で、重量は24㎏である。表裏面とも中央部に顕著な磨り痕が見られるほか、側面にも複数の磨り痕がある。実測図で表面とした側には長さ13.0㎝、幅7.5㎝のやや扁平な楕円形の範囲内に辰砂を磨った痕がある。石材は粗粒砂岩である。

SX503　北区の西部、SB502の西側に位置する不整形な落込みである(図100)。遺構の東部は浅く掘り込まれているが、西部は西側に向って段状に深くなる用途不明の遺構である。埋土は黒色シルト質細粒砂で、甕や壺の破片が出土した(図102)。

209は体部の下半以下を欠損した小型の甕である。器体の調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、体部は内外面とも縦方向のナデである。210は口縁端部および体部の中程以下を欠損した甕である。体部の調整は外面が右上がりのタタキののち、左上りのハケ、内面は時計回りのヘラケズリである。胎土中に角閃石・雲母を含む河内の土器である。211は壺の底部で、裏面中央が浅く凹む。外面をヘラミガキ、内面をナデで調整している。212は最大径が体部の中程にある甕で、丸味をもつ口縁部は一旦緩やかに外反したのち、端部を上方に肥厚している。体部の外面は右上がりのタタキで整形し、内面は逆時計回りにヘラケズリ調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。以上の土器は庄内２期に属するものである。

SB504　南区の西部に位置する短辺5.50m、長辺6.0mの平面形が方形の竪穴建物である(図100、図版48)。検出面から床面までの深さは約0.30mで、SB505を掘り込んでいる。周壁溝は確認されなかったが、南壁の近くに柱筋に平行する幅および深さともに0.1mの断面U字形の浅い溝を確認した。床面上で直径0.15m、深さ0.20m前後の４箇所の柱穴を検出した。屋内には黒色シルト質細粒砂が堆積しており、壺の体部片や鉢・有段口縁鉢・高杯・製塩土器の脚台・管状土錘などが出土した(図102)。

213は鉢で、口縁部は体部からわずかに内湾しながら立つ。体部の外面をハケで調整する。214は有段口縁鉢で、底部の大半を欠損している。口縁部は体部から一旦水平に開いたのち、外上方に二段に開く。器体の内外面の調整は、横方向の細かいヘラミガキである。215は杯部を欠損した高杯の脚部である。器体の調整は外面が左上りの細かいハケのあと、横方向のヘラミガキを上半は密に、下半は疎らに施しており、内面は柱状部がユビナデ、裾部は横方向の細かいハケである。

216は体部がコップ状の製塩土器の脚台である。内外面をユビオサエおよびユビナデで整えている。二次焼成を受けており、にぶい黄橙色を呈する。

217～219は、壺の体部片で、217は粗い櫛描直線文と波状文、218は櫛描刺突文と波状文、219は２帯の櫛描波状文を上から下へ施している。220は長さ4.5㎝、孔径が0.5㎝、重さ31.6gの管状土錘で、胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土錘である。以上の遺物のうち、213～216・220は布留１期に

属するものであろう。

SB505　南区の西北端に位置する長辺5.00m、短辺4.50m以上で、平面形が方形の竪穴建物である。遺構の南西部をSB504に掘り込まれており、東北部は調査範囲外である。検出面から床面までの深さは0.81mで、床面の中央には一辺0.20～0.40mの長方形の浅い穴が、東南および西北部には直径0.15～0.20m、深さ0.10m前後の柱穴とみられる小穴があった(図100、図版48)。屋内には黒褐色シルト質細粒砂が堆積しており、甕・管状土錘が出土した(図102)。

221は甕で、口縁部は器壁の薄い頸部から短く外反している。口縁部の内外面をヨコナデ調整するが、内面には横方向のハケメが残る。頸部の外面をユビオサエで整える。222は長さ3.9㎝、孔径0.5㎝、重さ46.9gの管状土錘で、器体外面をユビナデで調整する。以上の土器、土製品は庄内２～３期に属するものであろう。

SE506　北区の東寄りに位置する長径3.50m、短径2.90m、深さが検出面から2.90mの井戸である

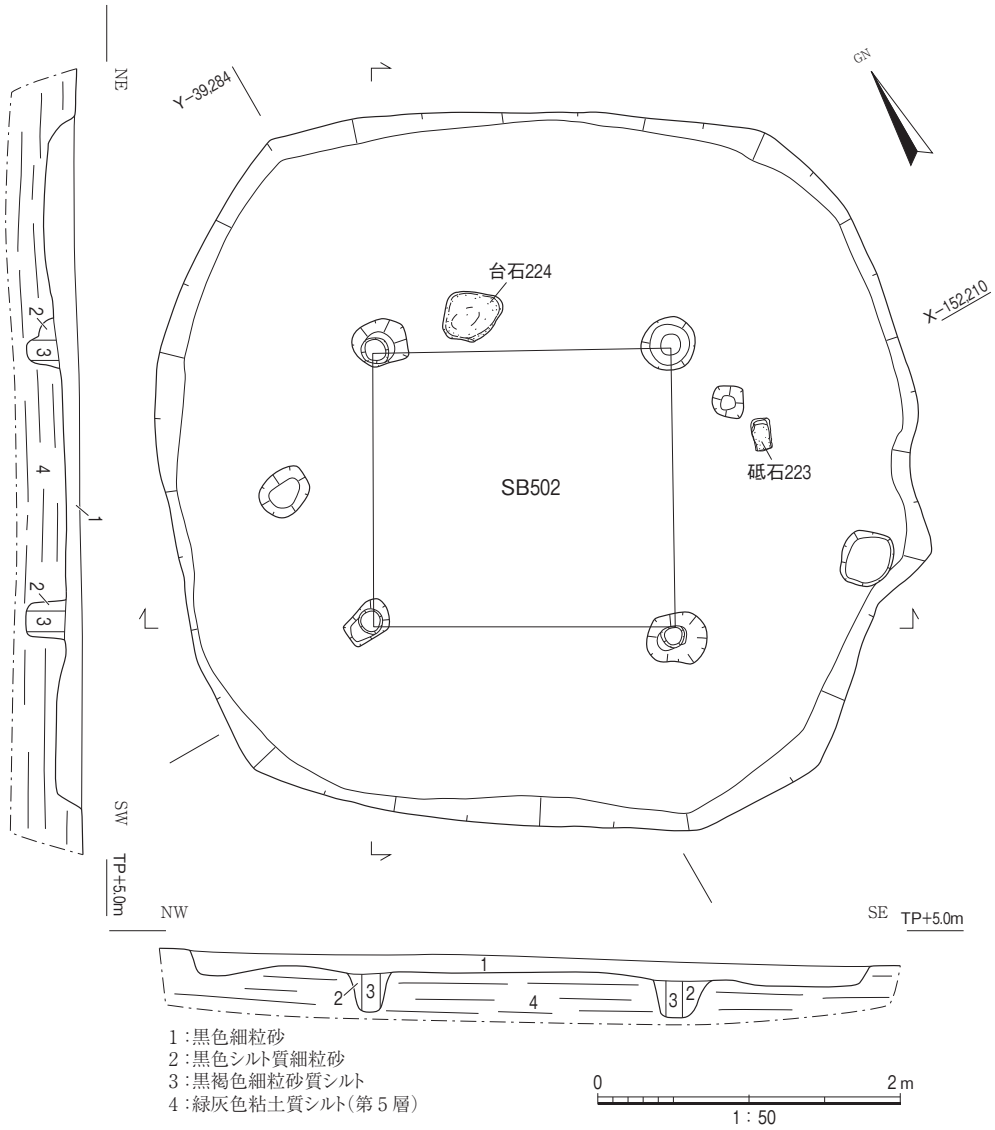


図101　SB502平面・断面図

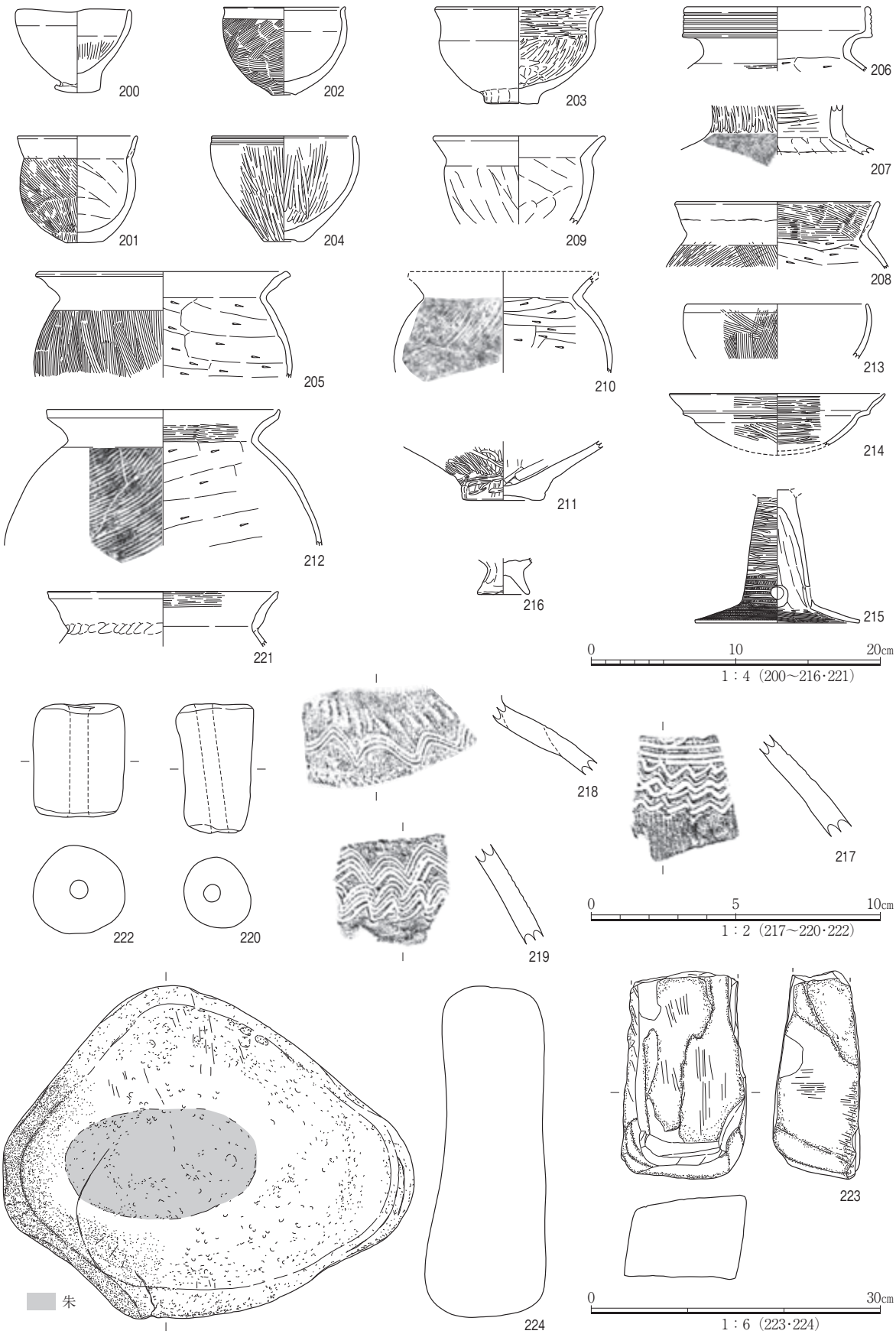


図102　SB501・502・504・505、SX503出土遺物実測図

SB501：200～205、SB502：206～208・223・224、SX503：209～212、SB504：213～220、SB505：221・222

(図100、図版49)。井戸内には黒色粘土質シルトや黒色シルト質細粒砂が互層になって堆積しており、壺・甕・鉢や砥石とみられる石製品が出土した(図103)。

225は広口壺で、体部以下を欠損している。口縁部は直立する筒状の短い頸部から緩やかに開いたのち、粘土紐を足して上下に肥厚する。口縁部の外端面には2条の凹線文が巡る。頸部の外面は縦方向のハケで調整する。煤が付着することから、煮沸に使用したものであろう。226は広口壺で、口縁部は一旦緩やかに開いたのち、粘土紐を足して上下に拡張する。口縁部の外端面には太い櫛描波状文(コンパス文)を施す。頸部内面の調整は横方向のヘラミガキである。

227は甕で、短く外反した口縁部の端部を上方に肥厚する。体部の外面を右上がりのタタキ(6本/1㎝)で整形し、同内面は時計回りのヘラケズリで調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。228は体部が球形に近い甕である。口縁部は短く外反し、端部を上方に肥厚する。体部の外面を右上がりのタタキ(6本/1㎝)で整形したあと、左上りのハケで調整する。内面は、底部の底をユビオサエで整えたのち、ここから頸部にかけて縦から右上がりのヘラケズリを施すが、体部の上端近くにはユビオサエを加える。胎土は227と変わらない、河内の土器である。229は尾部が尖ることや頸部と思われる部分が管状を呈することから鳥形土製品とした。器体の内外面をユビナデ調整する。色調は灰白色を呈し、胎土中に長石・石英・雲母・チャート粒を含むことから、河内地域外から搬入された可能性が高い。230は底部を欠損した鉢である。口縁部はわずかに開きながら伸びる体部から立つ。体部の外面を右上がりの粗いタタキのあと、同方向のナデで調整し、内面は左上りのハケで調整する。

231は素材の4方向を打ち欠き、その上端に抉りを入れて、下端にも紐をかけるための調整を加え

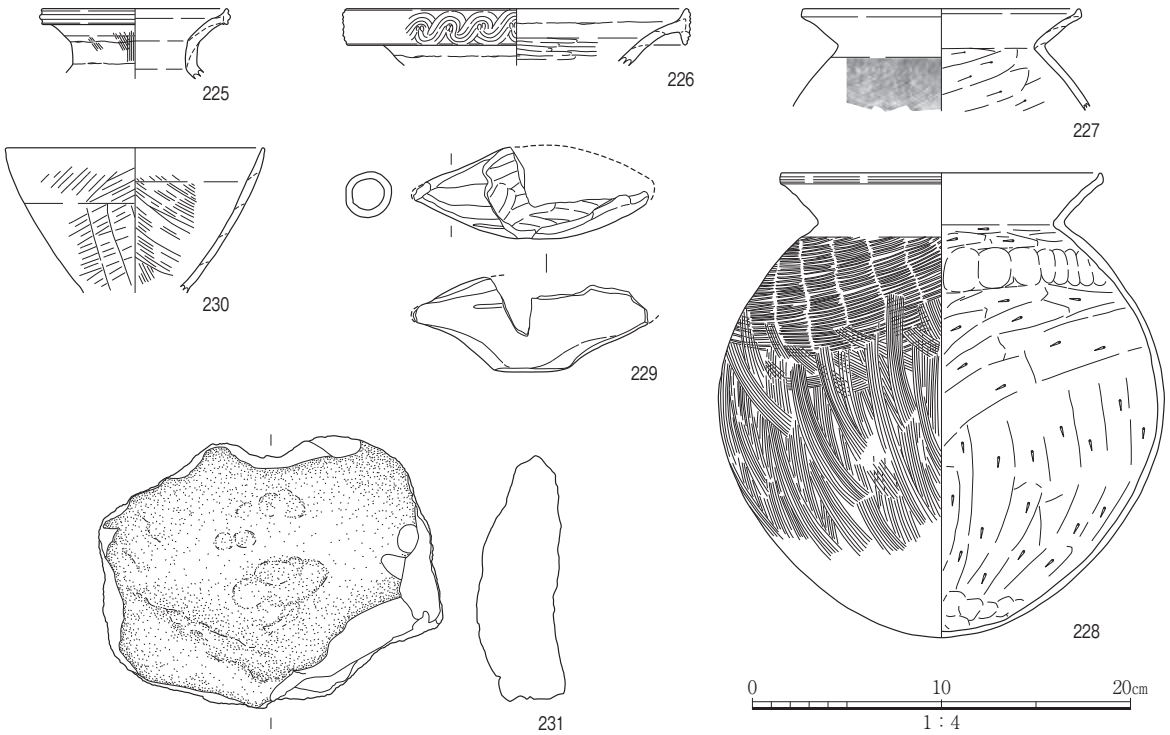


図103　SE506出土遺物実測図

た碇石とみられるものである。石材は細粒～中粒質砂岩である。以上のうち、土器は庄内３期に属するものであろう。

SE507　北区の東部、SE506の東側６ｍに位置する直径2.00m、深さ1.29ｍの井戸である(図100)。井戸内には黒色粘土質シルトや黒色細粒砂質シルトが堆積しており、土器片およびオナモミが出土した。

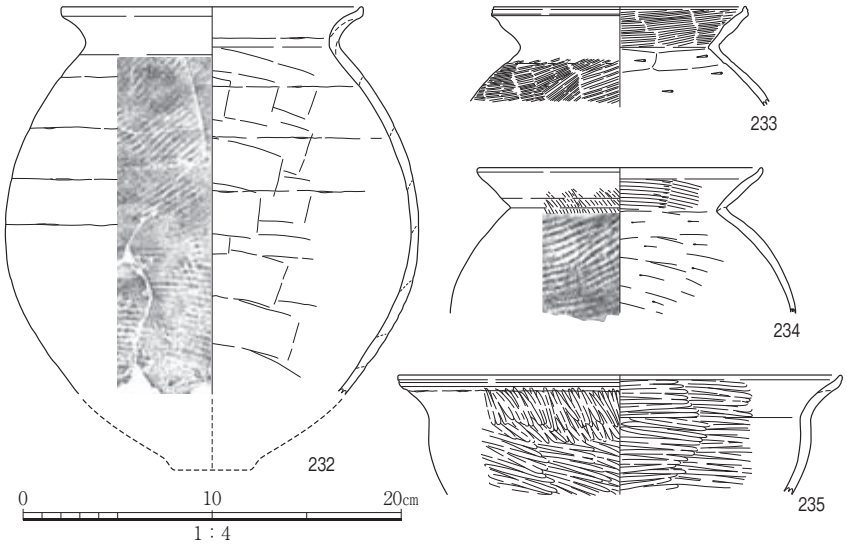


図104　SE508出土遺物実測図

SE508　北区の中央東寄りに位置する径1.90m、深さ1.74mの井戸である(図100・図版49)。埋土は黒色粘土質シルト～極細粒砂質シルトで、甕・鉢などが出土した(図104)。

232は甕で、体部の下半以下を欠損している。口縁部は緩やかに外反し、体部外面の上半を右上がりのタタキ、下半を左上がりのタタキで整形したあと、中程に水平方向のタタキを加える。内面の調整は左上がりのナデである。口縁端部を上方に肥厚し、最大径が丸味のある体部の中程にあること、タタキも４本/１cmでやや細いことなどから庄内式甕のプロトタイプであろう。233・234は庄内式土器甕で、口縁端部を上方に肥厚しており、内面には横方向のハケメが残る。ともに体部の内面を頸部までヘラケズリ調整する。タタキの幅は４本/１cmで、胎土中に角閃石・雲母粒を多く含む河内の土器である。

235は大型の鉢で、底部を欠損している。緩やかに開く口縁部の上端を肥厚し、外端面に１条の沈線が巡る。器体の調整は外面が左上がりのヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキである。以上の土器は庄内２期に属するものであろう。

SK509　北区の西北部に位置する長辺1.60m、短辺0.90m以上、深さ0.21mの土壙である(図100)。埋土は炭化物が混る黒褐色極細粒砂質シルトで、土器片が少量出土した(図105)。

236はヘラ描きの弧帯文・撥形文に酷似した文様のある壺の体部片である。本資料の文様は岡山県倉敷市の上東遺跡(弥生時代後期)、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡の弧帯文(弥生時代後期後半)［大阪府立弥生文化博物館2013］などがある。庄内１～２期に属するものであろう。

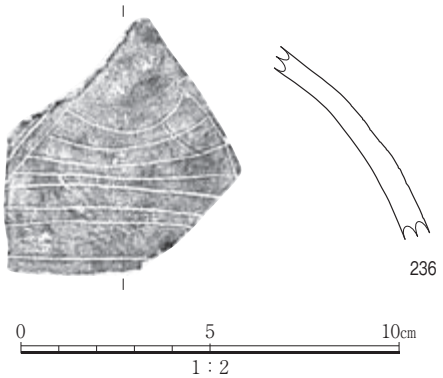


図105　SK509出土遺物実測図

SK510　南区のほぼ中央部に位置する直径1.90m、深さ0.69mの円形の土壙である(図100)。埋土は黒色極細粒砂質

シルトで、土器片が出土した(図106)。

237は直口壺で、体部の中程以下を欠損する。口頸部は丸い体部から外上方に直線的に開く。調整は口頸部および体部の外面は縦方向のハケで、口頸部の内面は横方向のハケ、体部の内面をユビオサエで整える。238は甕で、頸部から直線的に外反した口縁部の上端をわずかに内に肥厚する。体部の外面を右上がりのタタキ(8本/1㎝)で整形し、内面は時計回りにヘラケズリ調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を多く含む河内の土器である。239は甕で、口縁部は頸部からわずかに内湾しながら開く。口縁端部を内に肥厚する。体部の外面を縦方向のハケで、同内面を時計回りにヘラケズリ調整する。淡黄橙色を呈し、胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。240は甕で、口縁部は球形に近い体部から頸部を経て直線的に開く。口縁端部を上方に肥厚する。口縁部の内外面には左上がりのハケメが残る。体部の調整は外面が左上がりのハケで、内面は左上がりのハケのあと、横方向の粗いヘラケズリである。灰白色を呈し、胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。

241は高杯の杯部で、体部は直線的に外上方に直線的に開く。器体の調整は外面が横方向の細いヘ

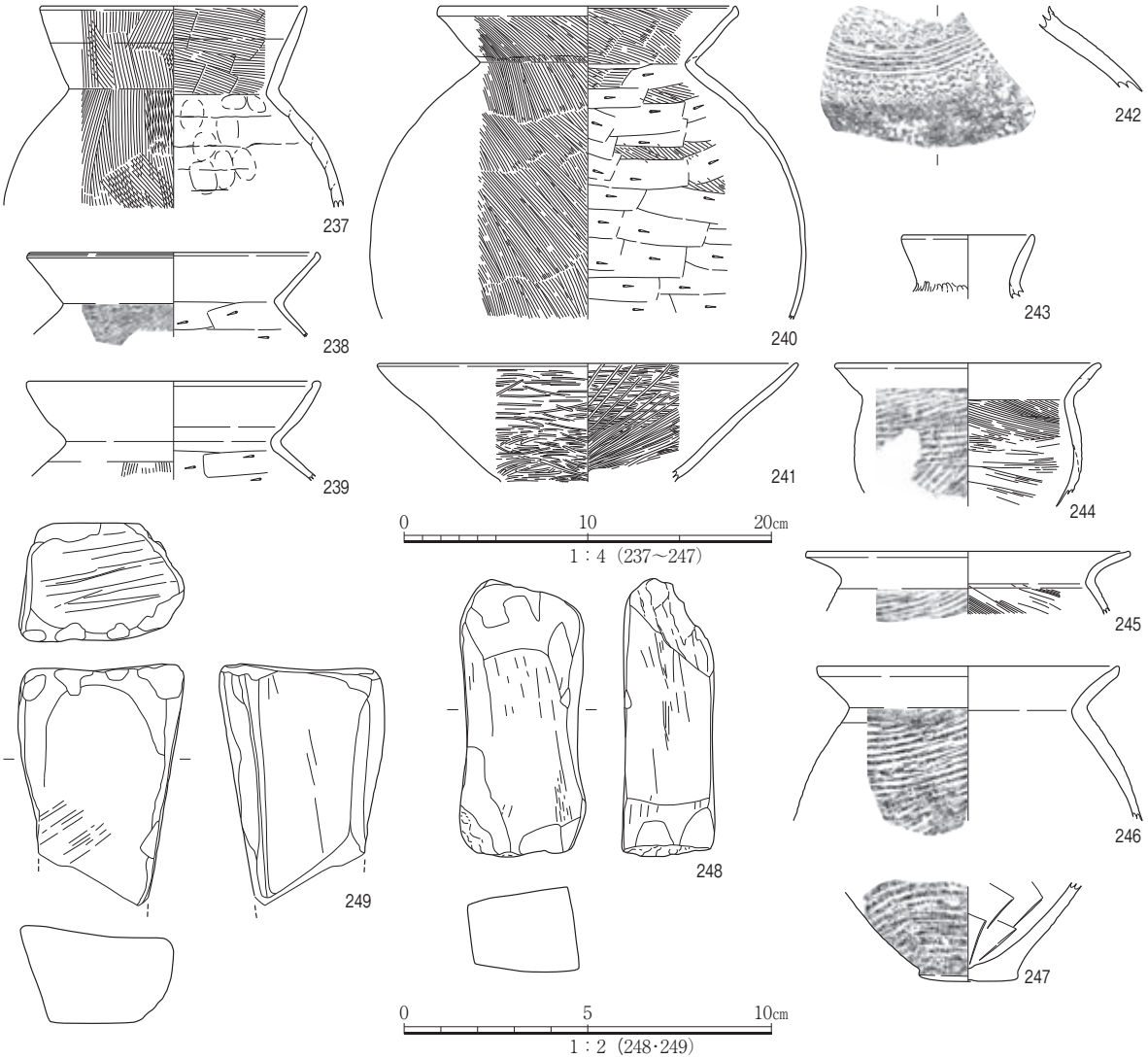


図106　SK510・511出土遺物実測図
SK510：237～241、SK511：242～249

ラミガキで、内面は外面と同様なヘラミガキのあと、縦方向のヘラミガキを暗文状に施す。

以上の土器のうち、237は布留２期、238は庄内３～４期、239は布留２期、240は庄内４期、241は庄内４期/布留１期に属するものであろう。したがって、SK510は古墳時代前期に属する遺構と考えられる。

SK511　中央区から南区にかけて位置する径3.10m、深さ0.20mの浅い土壙であるが、遺構の東半分を攪乱されており、詳細は明らかでない(図100)。埋土は黒色極細粒砂質シルトで、土器片および砥石が出土した(図106)。

242は壺の体部片で、外面に同じ原体を使って櫛描波状文→直線文→波状文を施す。波状文は間隔が狭く低い。243は小型の直口壺の口頸部で、内外面をヨコナデ調整する。頸部の下端以下は縦方向のヘラミガキで調整する。244は甕で、口縁部は球形に近い体部から外上方に直線的に開き、端部を丸くおさめる。体部の外面を上から下に向って右上がり、横方向、右上がりのタタキで整形する。体部内面の調整は左上がりのハケである。灰白色を呈し、胎土中に長石・チャート・シャモット粒を含む。245は器壁がやや薄い甕である。口縁部は外上方に緩やかに外反しており、端部を丸くおさめる。体部の外面は右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形し、同内面の調整は左上がりのハケである。246は甕で、口縁部は外上方に開き、端部を上方にわずかに肥厚する。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、同内面の調整は左上がりのナデである。247は甕の底部で、外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、同内面の調整は左上がりの板状工具によるナデである。

248・249は極細粒砂岩製の砥石で、前者は一端が自然面で、後者は一端を欠損している。ともに各面に使用痕が見られるが、249は表面とした側が浅く凹んでいる。以上の遺物のうち、土器は庄内１期に属するものであろう。

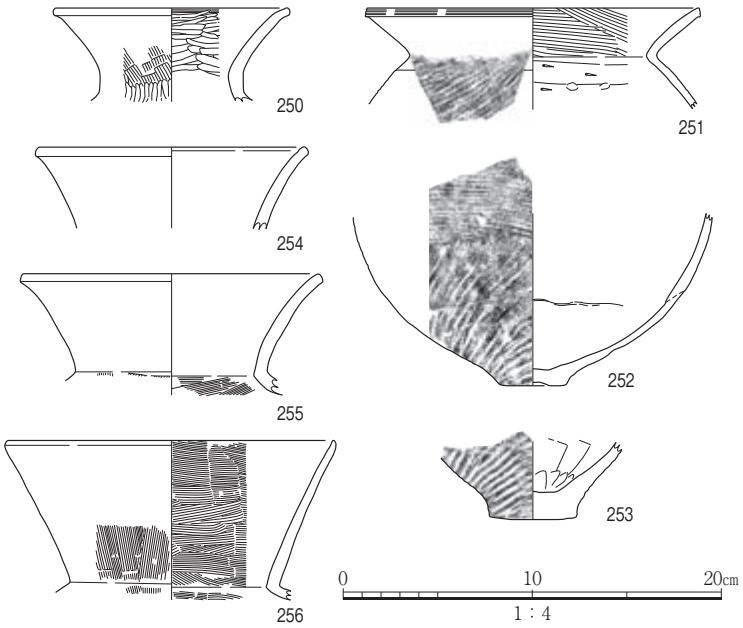


図107　SK512・513出土遺物実測図
SK512：250～253、SK513：254～256

SK512　南区の西部に位置する長径2.60m、短径2.10m、深さ0.29mの２段に彫り込まれた浅い土壙である(図100)。土壙はSB504に西部を掘り込まれており、埋土は黒褐色極細粒砂質シルトで、土器片が少量出土した(図107)。

250は直口壺で、口縁部はわずかに内傾して立つ頸部から大きく開く。調整は器体の外面が左上がりのハケののち、縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキである。251は甕で、口縁部は頸部から「く」の字状に開く。口縁部の内面には左上がりのハケメが残る。

体部の外面は右上がりのタタキ（５本／１㎝）整形のあと、左上がりのハケで調整する。内面は逆時計回りのヘラケズリ調整である。252は甕で、器体の中程以上を欠損している。丸味のある体部外面の上半を横方向のタタキ（５本／１㎝）のあと、右上がりのタタキ（３本／１㎝）で整形する。体部の大きさの割に小さい底部の裏面中央は浅く凹む。体部内面の調整はナデである。253は甕の底部である。外面を右上がりのタタキ（３本／１㎝）で整形する。内面はユビオサエおよびナデ調整である。底部の裏面に葉脈痕がある。以上の土器は庄内１～２期に属するものであろう。

SK513　南区のSK512の東側に位置する径1.00m前後、深さ0.30mの平面形が不整形な土壙で、本土壙とSK512の間にも形が類似した土壙がある（図100）。埋土は黒色極細粒砂質シルトで、土器片が少量出土した（図107）。

254～256は口頸部が外上方に、254・255はやや緩やかに、256は直線的に開いた直口壺で、いずれも体部を欠損している。調整は254・255の内外面がヨコナデで、256の外面は縦ハケ、内面は横方向の断続的なハケである。布留１期の256以外は庄内１～２期に属するものであるが、布留式土器を含むことから、SK513の時期は古墳時代前期と思われる。

SD514　北区の東部から南区の西南部に向って弧状に掘り込まれた幅0.70m、深さ0.34mの断面U字形の溝で、南区に位置するSD519と同一溝の可能性が高い（図100）。埋土は上下に分かれる水成層であり、上層が黒色粘土質シルト、下層は黒色極細粒砂質シルトである。ともに土器が出土した（図108）。

257は甕で、口縁部は緩やかに外反する。球形に近い体部に小さな底部が付く。体部から底部にかけての外面の整形は、上半が右および水平方向のタタキ（５本／１㎝）ののち、右上がりのタタキ（４本／１㎝）で、口縁部の内外面をヨコナデ調整する。内面の調整は左上がりのナデである。258は体部の下半以下を欠損した甕である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反し、体部の外面を左上がりのタタキ（４本／１㎝）ののち、上半部を同方向のハケで調整する。内面は縦から横方向のヘラケズリで調整する。胎土に角閃石・雲母・長石・石英粒を含む河内の土器である。259は体部の中程以上を欠損した甕で、底部の近くを穿孔する。器体の外面を横方向のタタキ（３本／１㎝）ののち、右上がりのタタキ（３本／１㎝）で整形する。内面は右上がりの板状工具によるナデ調整である。260は完形の甕で、口縁部は外上方に短く開き、端部を上におさめる。球形に近い体部に裏面が浅く凹む小さな底部が付く。器体外面を底部は右上がりのタタキ（６本／１㎝）で、体部は左上がりのタタキ（６本／１㎝）で整形（３分割）し、内面の調整は右上がりから左上がりの板状工具によるナデである。261は底部を欠損した甕で、口縁部は球形に近い体部から外上方に短く開き、端部を丸くおさめる。体部の外面を横方向から右上がりのタタキ（２本／１㎝）で頸部から底部に向って整形し、底部を接合したあと、右上がりのタタキ（３本／１㎝）を加える。体部の内面の調整は上半がユビオサエで、下半は板状工具による横方向のナデである。胎土に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。262は体部の下半以下を欠損した甕である。口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。丸味をおびる体部の外面は右上がりのタタキ（２本／１㎝）ののち、横および左上がりのタタキで頸部から底部に向って整形する。体部の内面は下半が縦方向のナデ、上半はユビオサエで調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を多く含

む河内の土器である。263は体部の下半以下を欠損した甕である。口縁部は丸い頸部から「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめる。丸味をおびる体部の外面を横方向のタタキ整形ののち、左上がりから縦方向のハケで調整する。体部の内面の調整は左上がりのヘラケズリである。264は底部を欠損した甕である。口縁部は鋭角な頸部から「く」の字状に外反し、端部を上に肥厚する。口縁部の外端面にはにぶい沈線が巡る。やや長手の体部の外面の調整は左上がりのハケで、内面の調整は逆時計回りのヘラケズリである。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。265は体部の中程以上を欠損した甕である。丸味をおびるやや長手の体部の外面はタタキのあと、右上がりのハケで調整し、内面は右上がりから左上がりのヘラケズリで調整する。小さな底部の裏面にタタキ(4本/1㎝)を加えて平坦に整えている。浅黄色を呈する播磨地域の土器とみられるものである。

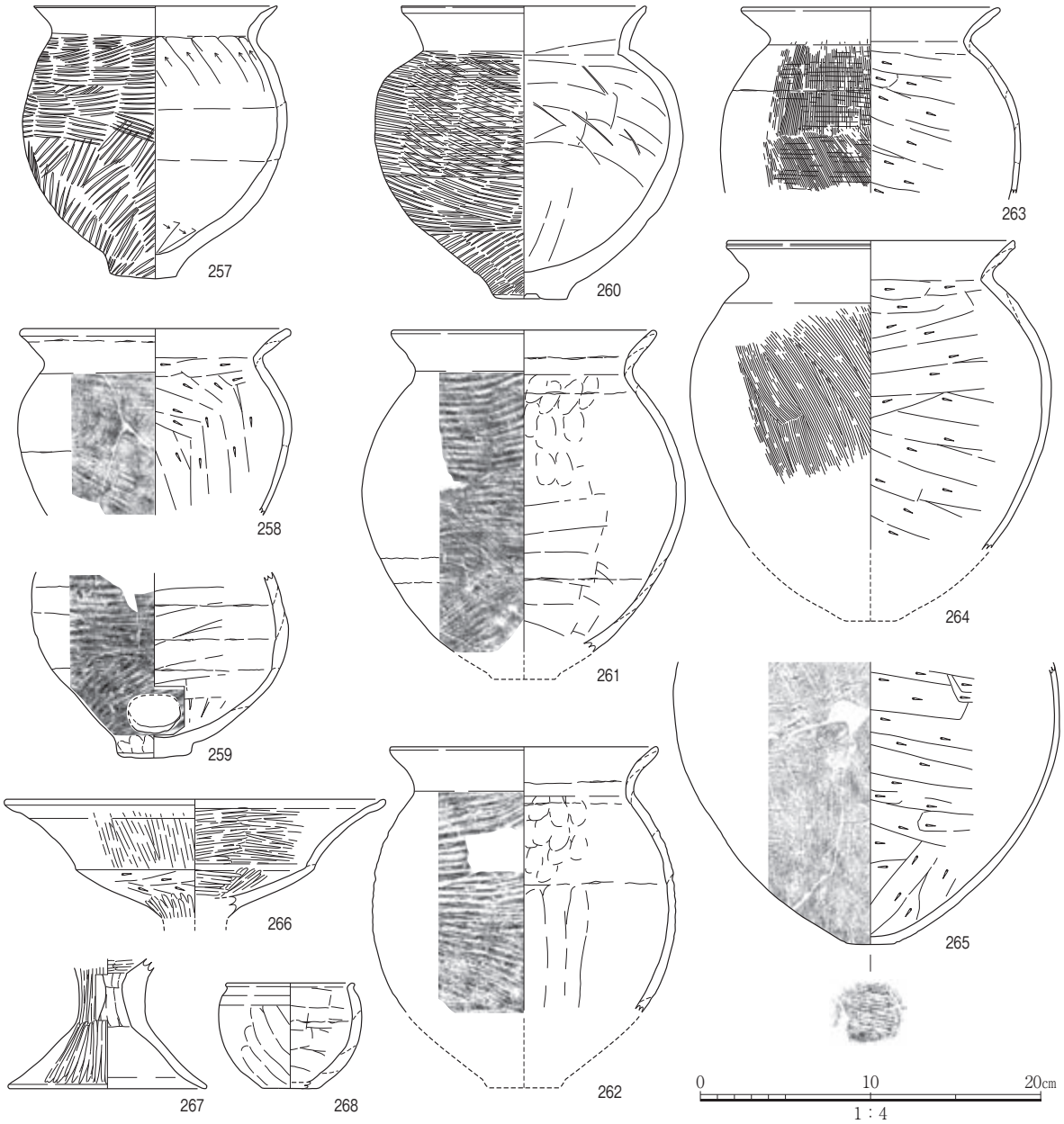


図108　SD514出土遺物実測図

266は脚部を欠損した高杯である。口縁部は深い体部から緩やかに開き、口縁端部を丸くおさめる。杯部の内外面の調整は、一部外面が縦方向のハケおよび横方向のヘラケズリ以外は、横あるいは縦方向のヘラミガキである。267は杯部を欠損した器台である。脚裾部は短い柱状部から「ハ」の字状に開いており、柱状部および裾部の外面を縦方向のヘラミガキで調整する。わずかに残る杯部の内面はヘラミガキ、柱状部の内面はユビナデ、裾部はヨコナデで調整する。杯部中央の孔は径約1.5㎝である。268は底部の中央を欠損した小型の鉢である。球形に近い体部から内傾する頸部を経てわずかに開く短い口縁部にいたる。器体の調整は口頸部がヨコナデ、体部の内外面は縦および横方向のナデである。以上の土器のうち、甕は外面に煤が付着したものが多い。庄内１期に属するものである。

SD515　北区の東部に位置する幅0.40m、深さ0.11mの断面U字形の南東から北西方向の溝である(図100)。溝内には黒色シルト質粘土が堆積しており、土器片が少量出土した(図112)。

341は完形の小型の鉢で、口縁部は丸味をおびる体部から外上方に短く開く。体部の外面は右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形したあと、ナデで調整する。内面の調整は横方向のナデである。庄内１期に属するものである。

SD516　中央区の東部に位置する北西方向の幅0.30m、深さ0.17mの断面U字形の溝である(図100)。溝内には黒色シルト質粘土や極細粒砂質シルトが堆積しており、溝の北端近くから銅鏃が１点出土した(図109)。本溝の西側には方位、規模ともに酷似した浅い溝があるほか、調査区の西南部および東北部にもSD516に酷似した多数の浅い溝が分布している。溝内には黒色シルト質粘土が堆積しており、銅鏃が出土したSD516以外はいずれも土器片が出土したのみである。溝の機能については、耕作溝および排水溝などが考えられたが調査の過程では確定しえなかった。

269は長さ4.0㎝、鏃身幅1.2㎝、鏃身厚0.35㎝、茎部径0.4㎝の柳葉形有茎銅鏃で、基部の片方を欠損している。鏃身は断面菱形を呈し、表裏面に鎬があるが片方は鈍角である。重さ3.8ｇである。形態から見て庄内式期の早い段階に属するものであろう。

SD517　中央区の北部に位置する幅0.30m、深さ0.16mの東西方向の溝で、SD516と同じ方向の溝に切られている(図100)。断面U字形の溝内には黒色シルト質粘土が堆積しており、土器片が少量と銅鏃が１点出土した(図109)。

270は長さ3.8㎝、鏃身幅1.0㎝、鏃身厚0.4㎝、茎部径0.45㎝の細身の柳葉形有茎銅鏃である。尖端が使用によるものか若干丸味をおびており、身の中央には背を鋳出している。重さ3.8ｇである。形態から見て庄内式期の早い段階に属するものであろう。

SD518　中央区の西部に位置する幅0.80m、深さ0.27mの断面U字形の南東から北西方向の溝である(図100)。溝内には黒色粘土～粘土質シルトが堆積しており、土器が出土した(図110)。

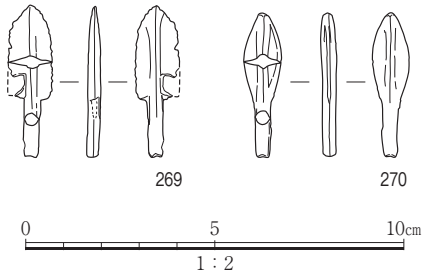


図109　SD516・517出土銅鏃実測図
SD516：269、SD517：270

271～278は体部の中程あるいは下半以下を欠損した甕である。271の口縁部は鋭角な頸部から「く」の字形に外反しており、端部を上におさめ、外端面には１条のにぶい沈線が巡

る。体部の外面は水平にタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面は時計回りのヘラケズリで調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を多く含む河内の土器である。272の口縁部は頸部から緩やかに外反する。体部外面を右上がりのタタキ(２本/１㎝)で整形し、内面は左上がりの板状工具によるナデで調整する。273・274の口縁部は球形に近い体部から頸部を経て外上方に開き、端部を丸くおさめる。ともに体部の外面を水平にタタキ(４本/１㎝)で整形したあと、縦方向のハケで調整しており、内面も縦から横方向のヘラケズリで調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。275の口縁部は短く立つ頸部から水平に開き、外端面にはにぶい沈線が２条巡る。底部から体部の外面にかけて右上がりおよび水平にタタキ(３本/１㎝)で整形したあと、縦方向のハケで調整する。内面は縦から横方向のヘラケズリで調整し、底部の器壁の厚さは体部の半分以下と薄い。276・277は球形に近い体部から口縁部が緩やかに開き、端部を前者はわずかに肥厚し、後者は丸くおさめる。体部の外面は右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのナデである。276は胎土に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。278の口縁部は丸味のある頸部から「く」の字状に開き、端部を上に肥厚し、外端面には沈線が１条巡る。口縁部はヨコナデ調整しているが、内面にはハケメが残る。丸味をおびる体部の外面を左上がりから右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形したのち、左上がりのハケで調整し、内面は縦および左右のヘラケズリで調整する。底部の器壁厚は体部上端の約半分しかなく薄い。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。279・280・284・285は口縁部が鋭角な頸部から外反する庄内式甕で、胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。これらは口縁端部を上に肥厚しており、280の外端面にはにぶい沈線が１条巡る。体部の外面を左上がりのハケで調整した285以外は右上がりのタタキ(６本/１㎝)で整形する。体部内面の調整は縦方向のヘラケズリである284以外は横方向にヘラケズリする。281～283は球形の体部から鋭角な頸部を経て口縁部が外反する甕である。口縁端部が丸い281以外は、上に肥厚しており、外端面は凹む。体部の調整は外面が縦方向のヘラミガキ状のナデである283以外は、縦方向のハケで、内面の調整は縦から横方向のヘラケズリである。

286は高杯の杯部で、器体の内外面の調整は縦および横方向のヘラミガキである。287も杯部を欠損した高杯である。脚裾部の上端近くの３方向に円形スカシ孔を穿つ。杯部の内面を縦方向のヘラミガキで調整する。288は脚裾部を欠損した小型の器台である。杯部は内外面ともヨコナデ、脚部は内外面とも縦方向のハケで調整する。289は完形の高杯で、脚裾部の上端近くの３方向に円形スカシ孔を穿つ。器体の外面および杯部の内面を縦方向のヘラミガキで調整する。

290～294は小型の鉢で、完形の293の底部は平底である。器体の調整は290の外面および294の内外面はヘラミガキで、293の内面は左上がりのハケである。292は完形の台付鉢で、脚部は「ハ」の字状に大きく開く。鉢の外面はユビオサエ、内面はハケおよびユビオサエで調整する。

以上の土器のうち、甕271･272･275･278、高杯287･289、台付鉢292、鉢291･293などは庄内１期に、甕276・277・284、鉢290・294は庄内２期、甕273・274・279～283は庄内３期、甕285、器台288は庄内４期に属するものであろう。

SD519　南区の西南部に位置する幅0.80m、深さ0.45m、SD514の南延長部の可能性の高い弧状の溝である(図100)。溝内の埋土は水成層の黒色シルト質粘土で、土器が出土した(図111)。

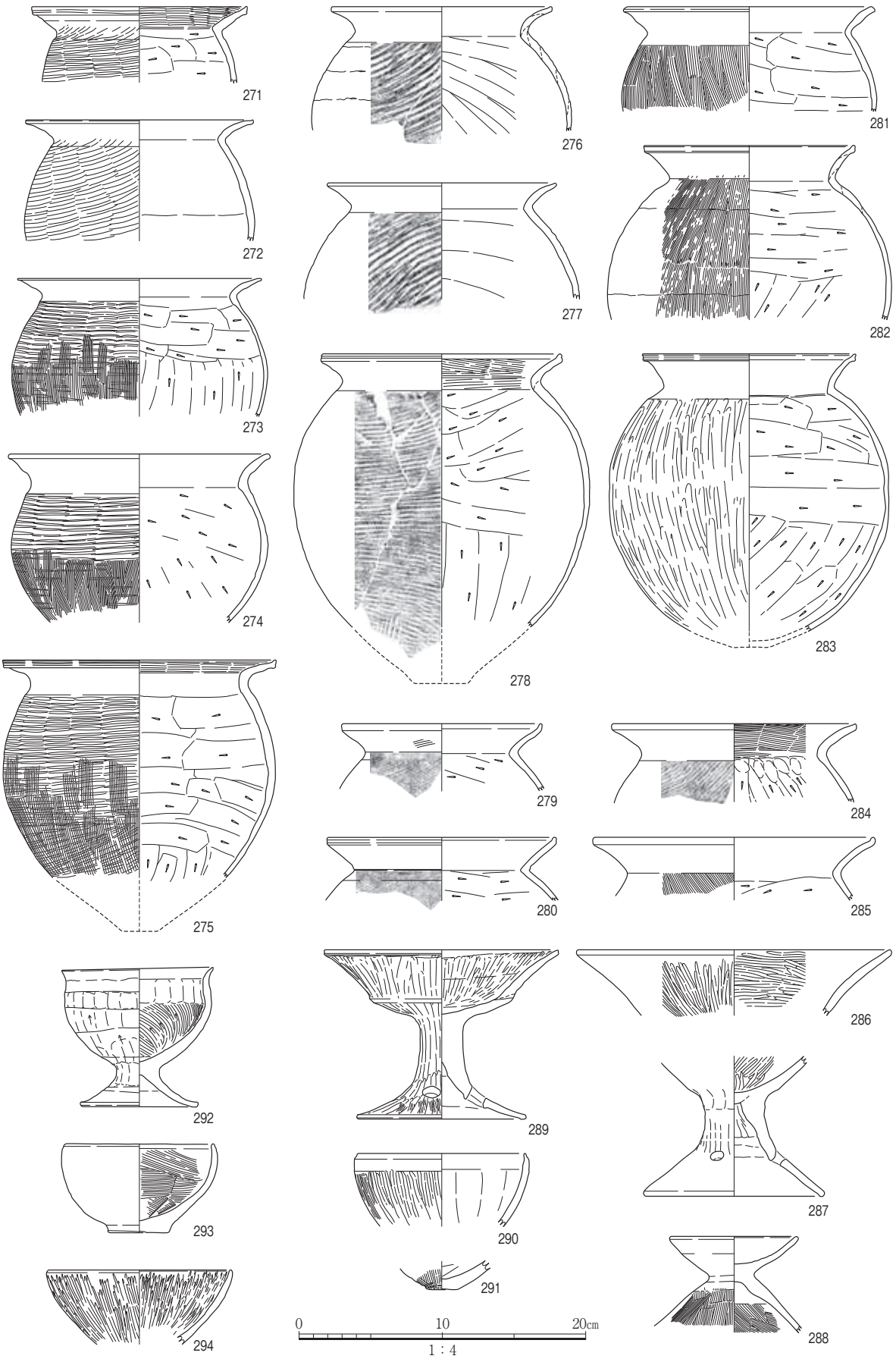


図110　SD518出土遺物実測図

295は二重口縁壺で、口縁部の下端にキザミメを施す。器面の調整は外面が縦から横方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキである。

296～313は甕で、296～298の口縁部は頸部から緩やかに外反しており、296・298の体部は球形に近い。いずれも体部の外面を左あるいは右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形する。体部内面の調整は296が左上がりのヘラケズリで、297・298は左上がりのナデである。299は完形に復元しえた甕で、口縁部は頸部から緩やかに外反する。球形に近い体部の外面を下から上に右上がりから水平方向のタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は横方向のナデである。300は完形の小型の甕で、口縁部は外上方に短く開く。体部の外面を下半が右上がりのタタキ(３本/１㎝)、上半を左上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形したあと、ユビオサエで調整する。体部の内面の調整は横方向のナデである。底部裏面の中央が凹む。301は緩やかに外反する甕の口縁部である。頸部の内面を横方向にヘラケズリで調整する。302は体部に張りのある甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。体部の外面は右上がりのタタキ(２本/１㎝)で整形し、内面は横方向のナデである。303･304は最大径が体部の中程にある甕で、口縁部は前者が大きく開き、後者は緩やかに開く。後者は口縁端部をわずかに上に肥厚している。体部の外面を前者は右上がりのタタキ(２本/１㎝)、後者は右上がりのタタキ(３本/１㎝)を重ねて整形する。体部内面の調整は303が横方向のナデ、304は縦方向のナデである。305は完形の甕で、口縁部は「く」の字状に開き、外端面に１条の沈線が巡る。球形に近い体部の外面を下から上に４分割の右上がりのタタキ(２～３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのナデである。306は口縁部が緩やかに開き、端部を上に肥厚した甕である。体部の外面は左上がりのタタキ(３本/１㎝)のあと、右上がりのタタキ(３本/１㎝)を重ねて整形し、内面の調整は左上がりのナデである。307は肩の張った体部から口縁部が外上方に開く甕である。口縁端部は丸い。体部の外面は右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左から右上がりのナデである。308は口径の割に体部が張りのない甕である。口縁部は大きく外反し、外端面にキザミメを加えている。体部の外面は横方向のタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのハケである。309は張りのある体部から口縁部が緩やかに外反する甕で、口縁端部をわずかに下に肥厚する。体部の外面は右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのハケである。310は口縁部が緩やかに開き、最大径が体部の中程にある甕である。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形したのち、底部にナデ調整を加える。体部内面の調整は左上がりのナデで、上端にユビオサエを加える。311～313は甕の底部で、いずれも外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形する。以上の甕の器体の外面には煤が付着していたほか、一部の内面には焦げが見られた。

314～316は高杯の杯部である。いずれも口縁部は大きく開き、内外面を縦ならびに横方向のヘラミガキで調整する。317は完形の小型の鉢で、口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、体部の外面はユビオサエで整える。底部の裏面は浅く凹む。318は吉備系の低脚高杯の杯部で、口縁部に強いヨコナデを加えて段を形成する。319は口縁部および器体の形態から、蛸壺とみられる土器で、口縁端部を丸くおさめる。器体の内外面の調整は横方向のナデである。

以上の土器は庄内１期に属するものであろうが、296・299・306・307については庄内２期に属す

図111　SD519出土遺物実測図

るものかもしれない。

SD520　南区の東南部に位置する幅0.60m、深さ0.22mの南西から北東方向の断面U字形の溝である(図100)。溝内には黒色シルト質粘土が堆積しており、中程から鉄剣形銅剣が１口出土したほか、溝内の各所から土器片が出土した(図112)。なお、鉄剣形銅剣320は溝内の比較的浅い位置から身がほぼ水平になった状態で出土した(図113、図版50)。

320は長さ17.1㎝、身幅2.95㎝、厚さ0.6㎝で、茎の幅1.75㎝、同長さ2.50㎝の鉄剣形銅剣である。身の表裏面には鎬が通る。剣身と柄を結束する紐孔を剣身基部に２孔、茎の下端近くに１孔表裏面から穿つ。茎の片面には幅約１㎜の磨った溝が、もう片面側にも著しい研磨痕が見られる。切先は両面とも研ぎ出されており、研磨痕がある。本剣の色調は青緑色を呈しているが、出土した直後は赤銅色を呈していた。刃部には刃毀れとみられる小さな欠損がある以外には変形などはない。鉄剣形銅剣の時期は共伴した土器からみて、庄内１期頃と考えられる(註２)。

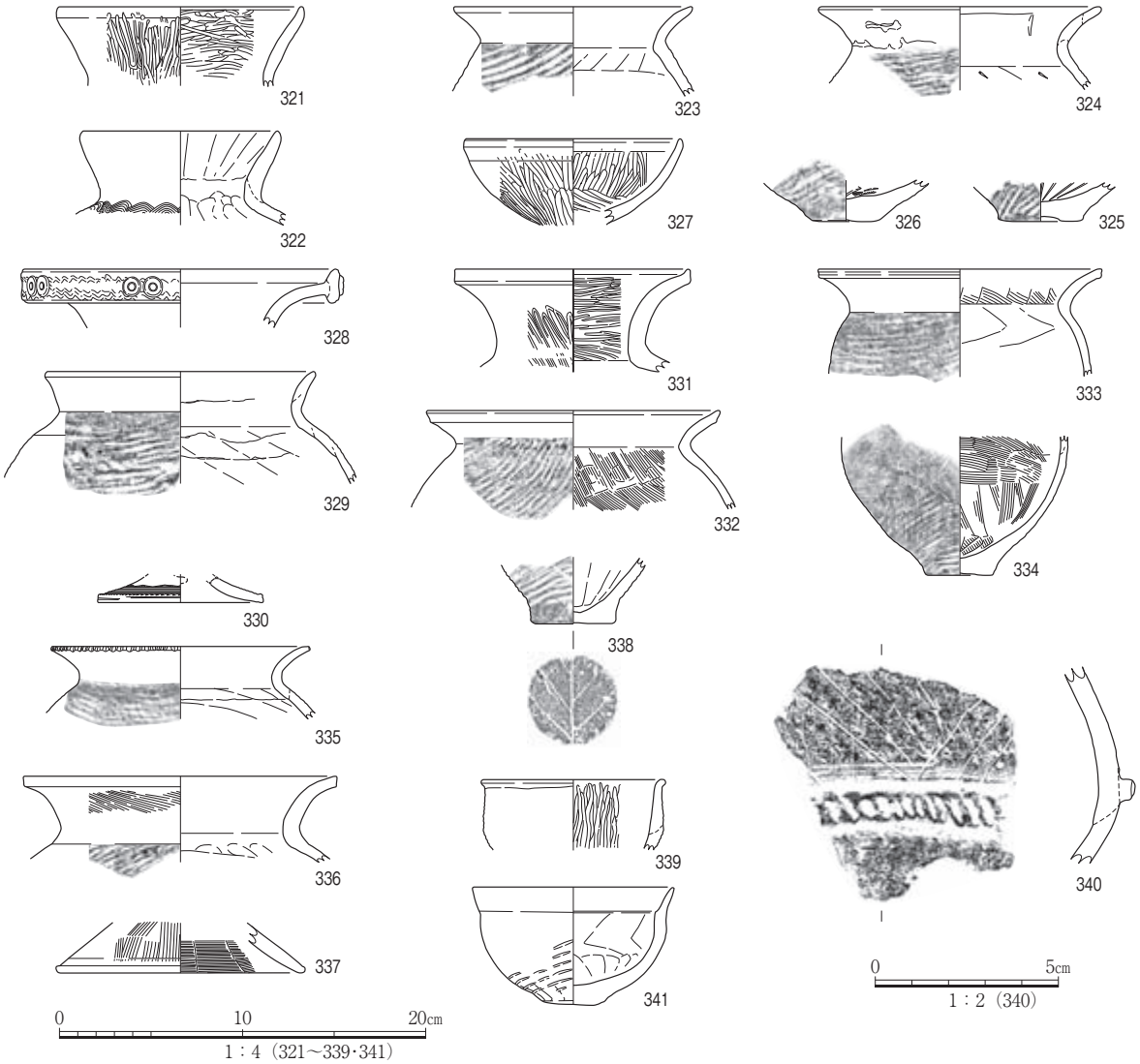


図112　SD515・520・522～526出土遺物実測図

SD515：341、SD520：321～327、SD522：328、SD523：329・330、SD524：331・332、SD525：333・334、SD526：335～340

321～327はSD520から出土した土器である(図112)。321・322は口頸部が筒状の直口壺である。前者は内外面を縦および横方向のヘラミガキで調整し、後者は体部外面の上端近くに櫛描波状文が巡る。323は小型の甕で、口縁部は外上方に開く。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整はユビオサエおよびナデである。324も口縁部が緩やかに開く甕で、体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのヘラケズリである。325・326は甕の底部で、前者の裏面中央は浅く凹む。ともに外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面にはクモの巣状のハケメが残る。327は底部を欠損した小型の椀状の鉢である。器体の内外面を縦方向のヘラミガキで調整する。以上の土器は庄内１期の範疇に含まれるものであろう。

SD521　南区の西部に位置する幅0.50m、深さ0.10mの弧状の浅い溝で、西端をSB504に掘り込まれている(図100)。溝内には黒色シルト質粘土が堆積しており、土器が比較的多く出土した(図114)。

342・343は、筒状の短い頸部から口縁部が大きく開く広口壺である。344も広口壺で、垂下した口縁部の上端にキザミメを施す。345は二重口縁壺で、頸部の外面をハケ調整する。346は中央裏面が浅く凹む壺の底部である。外面を横から縦方向のヘラミガキで調整する。347は壺の体部片で、外面に櫛描波状文と竹管文を施こす。348は二重口縁壺の口縁部下端の破片で、外面に竹管文を加えた円形浮文を貼り付ける。349・350は高杯の杯部で、口縁部は349がわずかに湾曲しながら、350は外上方に直線的に開く。ともに外面を縦方向のヘラミガキで調整する。351は口縁部を水平に屈曲した阿波地域の甕である。体部外面の調整は縦方向のハケで、内面は頸部が横方向のハケ、体部は縦方向のナデである。352は球形の体部から丸味のある頸部を経て口縁部が外上方に短く開く甕である。体部の調整は外面が左上がりのハケで、内面は横方向のハケののち、板状工具によるナデである。外面に煤が付着する。353～365は甕で、364・365は外面を右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形した体部である。353は球形に近い体部から口縁部が緩やかに開く。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は板状工具によるナデである。354は完形に復元しえた甕で、口縁部は一旦外反したあと上端が短く開き、端部を丸くおさめている。最大径は体部の中程にあり、底部は裏面中央が浅く凹む平底で器壁が薄い。体部の外面を下から上に向って右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は横方向の板状工具によるナデである。355も完形の甕で、球形の体部から口縁部は短く開き、端部を丸くおさめる。体部の外面は左上がりから右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのハケである。底部裏面の中央が浅く凹む。356は緩やかに開く口縁部の端部を上に肥厚した甕である。体部の外面は右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりの板状工具によるナデであ

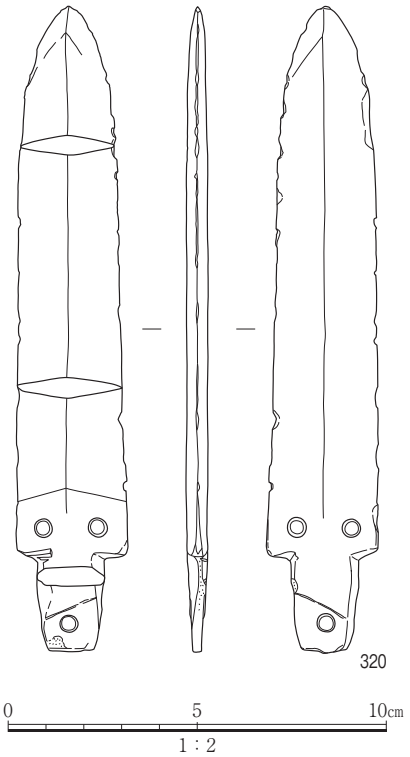


図113　SD520出土鉄剣形銅剣実測図

る。357は口縁部が外上方に開く甕で、球形に近い体部の外面を横方向のタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は横方向の粗いハケである。358は鋭角な頸部を経て口縁部が大きく開く甕である。張りのある体部外面を右上がりのタタキ(２～３本/１㎝)で整形し、内面の調整は横方向のハケメ状のナデである。359は体部に張りのある甕で、口縁部は丸味のある頸部を経て一旦開いたのち、水平に折り曲げる。体部の外面を右上がりのタタキ(２本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりの板状工具によるナデである。360は小型の甕で、口縁部は体部から外上方に短く開く。体部の外面を左上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整はナデである。361は完形の甕で、口縁部は球形に近い体部から緩やかに開き、端部の外面に１条のにぶい沈線が巡る。体部の外面を右上がりのタタキ(２本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのナデである。底部の裏面は浅く凹み、内面には焦げがある。362は甕で、口縁部は張りのある体部から一旦直立したあと、端部の近くで開く。口縁端部の外面には２条のにぶい沈線が巡る。体部の外面を左上がりのタタキ(２～３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのナデおよび頸部の近くがユビオサエである。363は甕で、口縁部は張りのある体部から緩やかに外反する。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は右上がりのナデである。以上の土器は庄内１期に属するものであろう。

SD522　南区の南西部に位置する幅0.70m、深さ0.27mの溝で、溝の北西端をSB504に掘り込まれている(図100)。溝内には黒色シルト質粘土が堆積しており、少量の土器片が出土した(図112)。本溝もSD519を切る周辺の溝と同様に耕作に伴う溝か、湿気抜きの排水溝かと議論されたが結論には至らなかった。

328は口縁部を上下に拡張した広口壺で、口縁部の外端面には櫛描波状文のあと、竹管文を加えた２個一対の円形浮文を貼り付ける。庄内１～２期に属するものであろう。

SD523　南区の西部に位置する幅0.30m、深さ0.26mの溝で、SD519を掘り込んでいる(図100)。溝内には黒色シルトが堆積しており、土器片が少量出土した(図112)。

329は張りのある体部から口縁部が外上方に立つ甕である。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのナデである。330は外面には山形貝殻文と多条沈線が巡る東海地方の高杯の脚裾部である。裾部の上端にも貝殻腹縁によるキザミメを施す。以上の土器は庄内２期に属するものであろう。

SD524　南区の西部に位置する幅0.40m、深さ0.12mの浅い溝で、SD519を掘り込んでいる(図100)。溝内には黒色シルトが堆積しており、少量の土器片が出土した(図112)。

331は筒状の頸部から口縁部が緩やかに開く広口壺で、口縁端部を上に肥厚する。口頸部の外面を縦方向、内面を横方向のヘラミガキで調整する。332は張りのある体部から口縁部が大きく開く甕で、口縁端部を上に肥厚する。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は細かいハケのあと、ユビオサエである。以上の土器は庄内１期に属するものであろう。

SD525　南区の西南部に位置する幅0.20m、深さ0.12mの断面U字形の浅い溝である。本溝は遺構の北端をSD526に掘り込まれている(図100)。溝内には黒色粘土質シルトが堆積しており、少量の土器片が出土した(図112)。

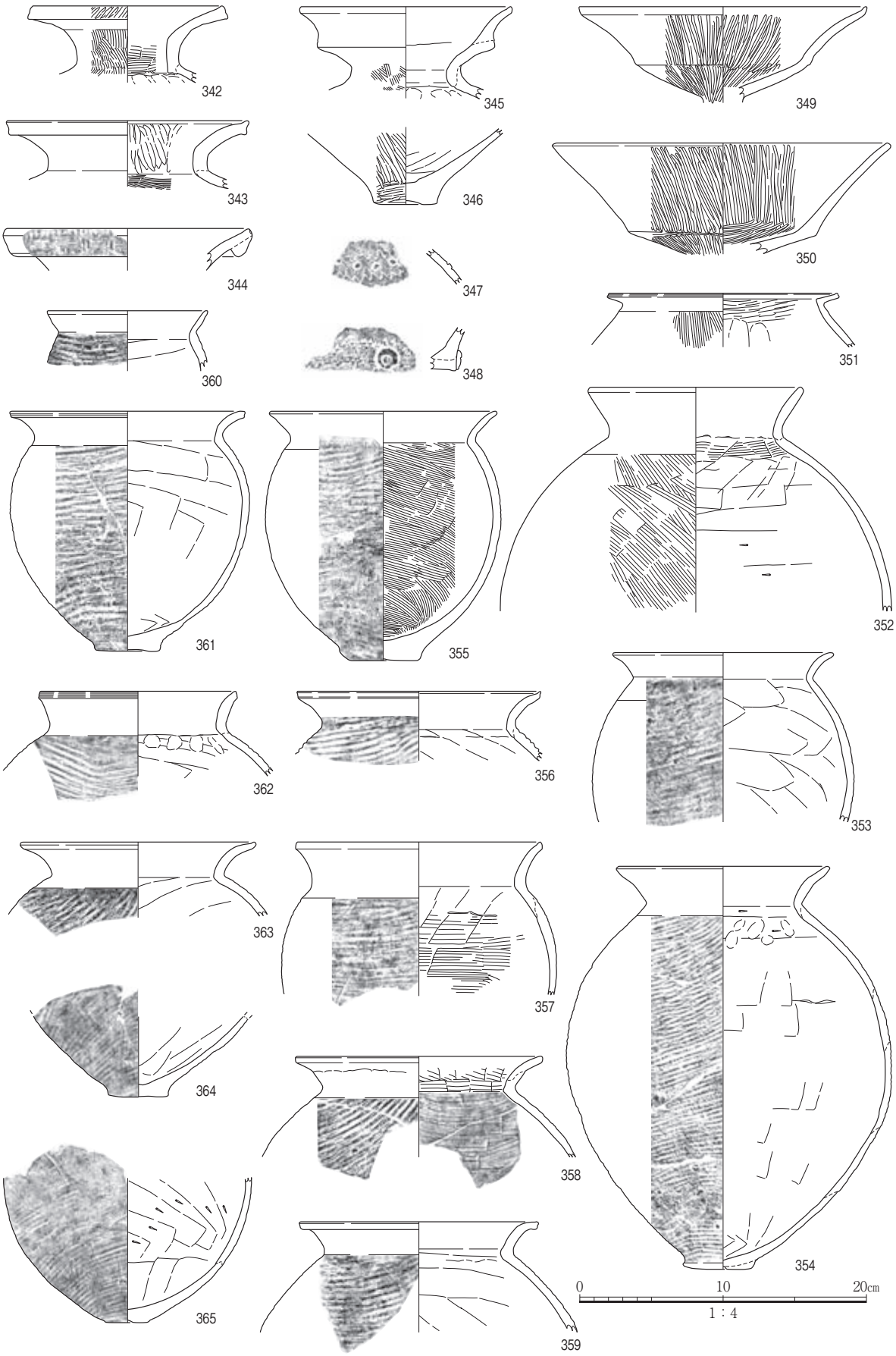


図114　SD521出土遺物実測図

333は口縁部が大きく開く甕で、口縁端部の外面にはにぶい１条の沈線が巡る。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形したのち、左上がりのハケで調整する。体部内面の調整はナデで、口縁部の内面には横方向のハケメが残る。334は体部の中程以上を欠損した甕である。底部の外面を右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形したあと、体部に向ってナデ調整を加える。底部の内面はクモの巣状のハケのあと、縦方向から左上がりのハケで調整する。器体の外面には煤が付着しており、内面にも焦げが見られる。以上の土器は庄内１期に属するものである。

SD526　南区の西南部に位置する幅0.30m、深さ0.15mの断面がU字形の浅い溝で、SD519を掘り込むほか、SD524とは溝の北西で接している(図100)。溝内には黒色粘土質シルトが堆積しており、少量の土器が出土した(図112)

335は張りのある体部から口縁部が緩やかに外反した甕で、口縁部の外端面にキザミメを施す。体部の外面を水平にタタキ(４本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのナデである。336も体部から口縁部が緩やかに外反した甕で、口縁部をヨコナデ調整しているが、外面にハケメが残る。体部の外面を右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形し、内面の調整はユビオサエおよび横方向のナデである。337は高杯の脚裾部で、内外面を縦あるいは横方向のハケで調整する。338は甕の底部で、裏面には木葉の圧痕がある。外面を右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形し、内面は縦方向のナデ調整である。339は底部を欠損した小型の鉢である。わずかに外反する口縁部の端部を丸くおさめる。体部の内面を縦方向のヘラミガキで調整する。340は手焙形土器の一部とみられるもので、キザミメを入れた突帯の上方にはヘラ描きによる細い複合鋸歯文がある。内面には煤が付着する。以上の土器は庄内１期に属するものである。

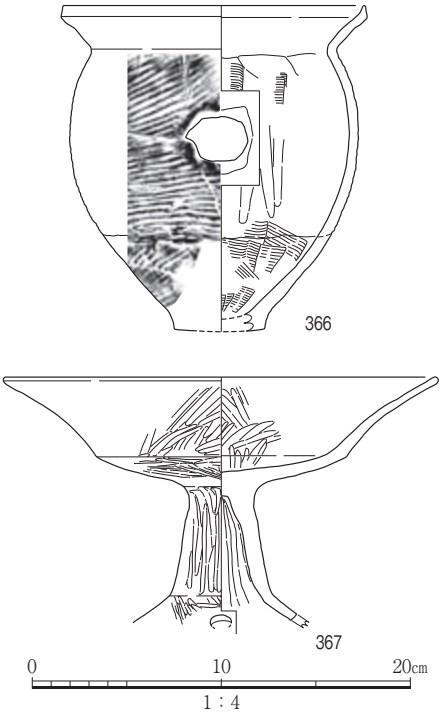


図115　北区土器溜り出土遺物実測図

北区土器溜り　土器片が小範囲内に集中したもので、甕および高杯をそれぞれ１個体ずつに復元しえたので報告する(図115)。

366は完形に復元された甕である。口径の割に器体が高く、体部の中程には焼成後の穿孔がある。口縁部は「く」の字状に外反し、端部を上に肥厚する。底部から三分割して器体を成形しており、底部の外面は右上がりのタタキ(４本/１㎝)で、体部は水平および右上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形する。器体の内面の調整は底部が左上がりのハケ、体部は横方向のハケのあと、縦方向のナデである。367は脚裾部を欠損した高杯である。杯体部から大きく開く口縁部の端部は丸い。杯部の内外面および脚部の外面の調整は縦あるいは横方向のヘラミガキである。脚裾部の上端近くに４方向のスカシ孔を穿つ。以上の土器は366が庄内１期に、367は庄内２期に属するものであろう。

ⅱ)古墳時代中期の遺構と遺物

SK301　北区の西北部に位置する平面形が不整形な長辺2.32m、短辺1.30m、深さ0.16mの浅い土壙である(図100)。埋土は黒色粘土で、須恵器・土師器が出土した(図116)。

368・369は須恵器杯蓋で、ともに口縁部と天井部の境界の陵線は明瞭である。天井部のヘラケズリの範囲は368が約1/3で、369はほぼ全体に及ぶ。口縁端部はともに内傾してわずかに凹む。

370は土師器の広口壺で、口縁部は直立する頸部から短く開き、底部は丸底である。体部の調整は外面が縦方向のハケで、内面は頸部の近くまで右上がりのヘラケズリである。口頸部をヨコナデ調整するが、頸部の内面には横方向のハケメが残る。371・372はともに土師器長胴甕で、器体の調整は口頸部の内外面がヨコナデで、体部は外面がナデ、内面は371が横方向のヘラケズリ、372は右から左上がりのヘラケズリである。373は大型の土師器甑とみられるもので、口縁部は体部から外上方にわずかに開いて立つ。器体の調整は外面が縦方向のハケ、内面は横方向のハケのあとナデを加えるが口縁部の内面にはハケメが残る。以上の土器のうち、須恵器はTK23型式に属するもので、土師器を含めて５世紀第４四半期頃のものであろう。

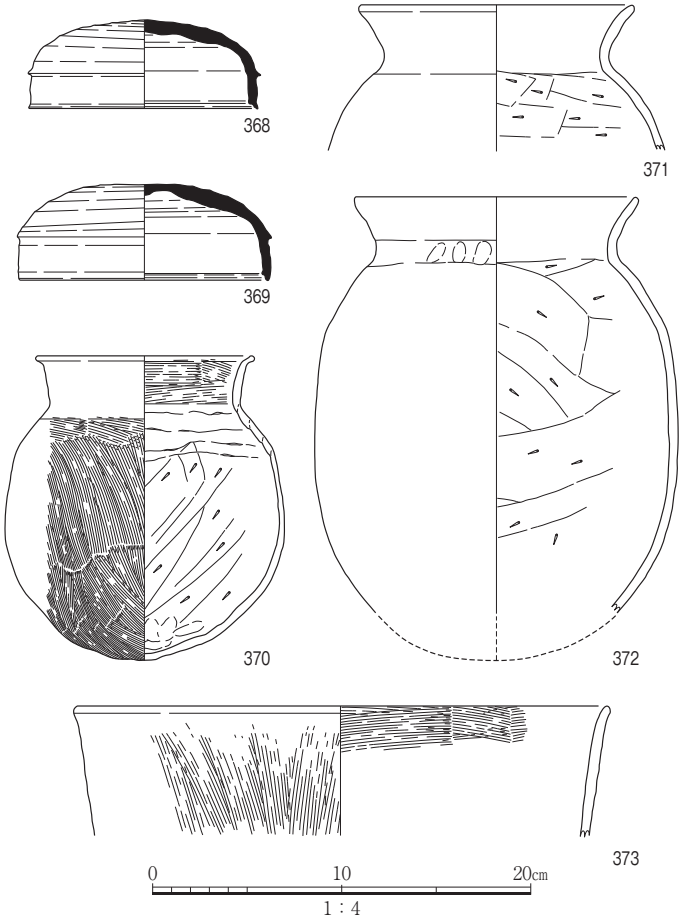


図116　SK301出土遺物実測図

４)各層出土の遺物

第２層から順を追って各層出土の遺物を記述する。なお、個々の遺物の法量など詳細については文末の遺物観察表を参照されたい。

ⅰ)第２層(茶灰色シルト層)出土遺物

本層出土の資料は５点を図化した(図117)。

374は底部が丸味のある須恵器杯身である。立ち上りはわずかに内傾し、口縁端部は内側に段をなす。体部の1/3弱をヘラケズリ調整する。375も須恵器杯身で、立ち上りは内傾し、口縁端部を丸くおさめる。底部をヘラケズリ

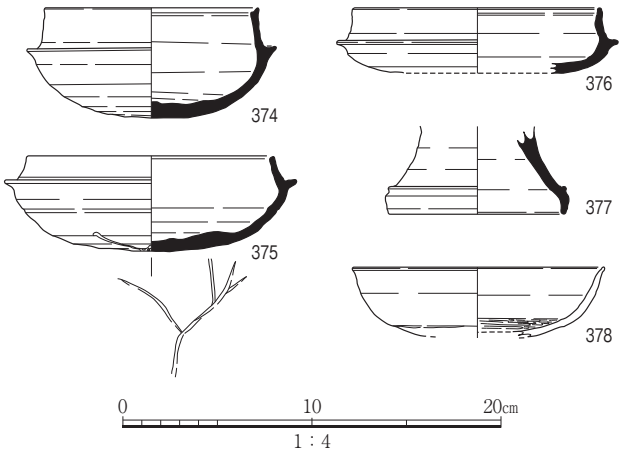


図117　第２層(茶灰色シルト層)出土遺物実測図

調整しており、裏面にはヘラ記号がある。376は器体がやや扁平な須恵器杯身の破片である。立ち上りは一旦内傾したあと立ち、口縁端部は内側ににぶい段をなす。底部をヘラケズリ調整する。377は須恵器高杯の脚部で、脚端部は内湾し、端部は丸い。378は丸味のある体部から口縁部がわずかに内湾しながら開く土師器杯である。口縁端部は内傾し薄い。内底面の調整は横方向のヘラミガキである。以上の土器のうち、374・377はTK23型式、375・376はTK10型式、378は６世紀後半代に属するものであろう。

ⅱ)第３層(茶褐色粘土質シルト層)出土遺物

本層出土の資料は31点を図化した(図118)。

379は完形の直口壺で、口縁部は頸部から直線的に開く。最大径が下半にある体部の調整は内外面とも横および左上がりのナデである。380･381も直口壺で､380は細身で口頸部が長く､381はやや短い。器面の調整は外面が380は縦から横方向のヘラミガキ、381はヨコナデであり、内面は380が横方向の密なヘラミガキ、381は横方向のハケである。381の体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は同方向のナデである。

382は最大径が体部の上半にある甕で、口縁部は頸部から水平に開く。口縁端部の外面が凹線状を呈する。体部の調整は外面が縦方向のハケで、内面はユビオサエである。阿波の土器であろう。383は最大径が体部の中程にある甕で、口縁部は頸部から直線的に大きく開く。体部の調整は外面が縦方向のハケのあと、櫛描文状に横方向のハケを施している。内面の調整は縦から横方向のヘラケズリである。384～397は口縁部が「く」の字形に外反した庄内式甕である。いずれも口縁端部を上に肥厚しているが、395・397は丸味をおびる。384・386～388の口縁端部の外面にはにぶい沈線か凹線が巡る。体部の外面を384～394・396・397はタタキ(６～８本/１㎝)で整形し、384・389はそのあとハケで調整している。395は体部の外面を水平方向にタタキ(５本/１㎝)で整形する。これらの甕の体部内面の調整は横方向および左から右上がりのヘラケズリである。

398は椀形高杯で、脚部を欠損している。杯部の外面をヘラミガキで調整する。399も椀形高杯で、杯部の大半を欠損している。裾部の上端近くに４方向の円形スカシ孔を穿つ。400は高杯の杯部で、口縁部の調整は外面がハケのあとヨコナデ、内面はヨコナデである。

401は甕か鉢の大きく開く脚台である。器面の調整は外面が縦方向のハケ、内面は横方向のハケである。わずかに残る底部の内面もハケで調整している。

402は受部が二段に開いた小型の器台で、脚部の大半を欠損している。受部の内面を横方向にヘラミガキ調整する。403は小型器台の受部で内外面の調整は磨滅しており明らかでない。404は受部を欠損した器台の脚部である。器面の調整は外面が横方向のヘラミガキのあと、上端近くを縦のヘラミガキを重ねており、内面は左上がりのハケのあと、ユビオサエで整える。脚部の中程に３方向の円形スカシ孔を穿つ。

405は完形の小型の鉢で、口縁部はわずかに内湾しながら開き、底部は丸い。器体の調整は外面が底部から体部の上半近くまで縦方向のヘラケズリで、内面は底部をヘラケズリののち、横方向にナデる。406は中央が薄い平底の底部から体部が直線的に開く甕か鉢とみられるものである。外面を左上

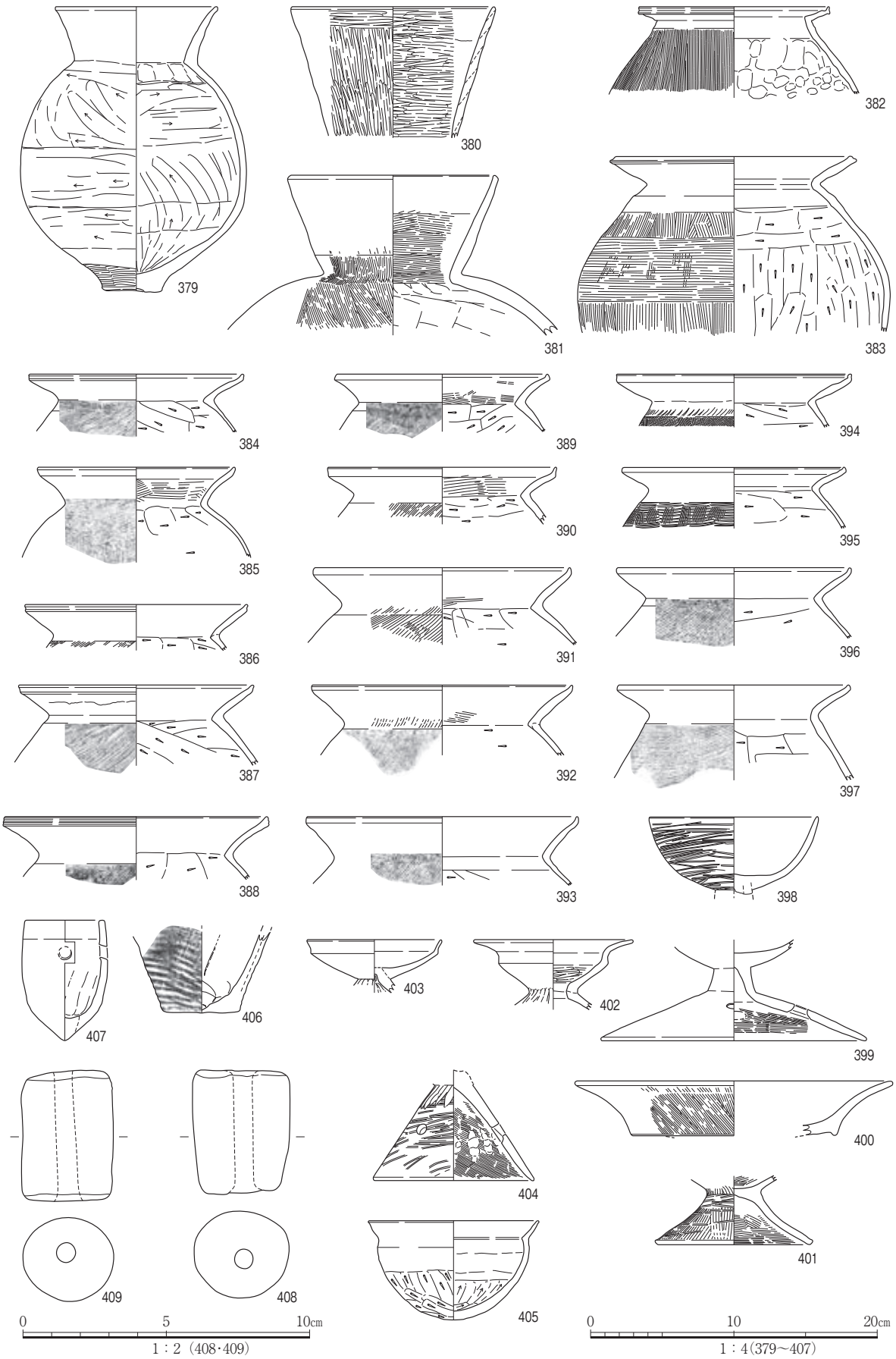


図118　第３層(茶褐色粘土質シルト層)出土遺物実測図

がりのタタキ(３本/１㎝)で整形する。内面は板状工具による左上がりのナデである。

407は完形の蛸壺で、尖底である。口縁部より少し下がった位置に紐孔を外面から内に向って斜めに穿つ。口縁部をヨコナデ調整し、体部は内外面とも横方向のナデである。

408・409は完形の管状土錘で、中央の紐孔の径はともに0.7㎝である。重さは前者が53.6ｇ、後者は51.0ｇである。以上の遺物のうち、布留１期の383、庄内４期の395～399・403・404以外は庄内２～３期に属するものであろう。

ⅲ)第4a層(黒色細粒砂層)出土遺物

本層出土の資料は40点を図化した(図119・120)。

410はくびれた頸部から口縁部が大きく開く広口壺である。口縁部の外端面に竹管文、口縁部の内面に櫛描波状文・直線文・波状文を、頸部にキザミメを施す。口頸部の調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキである。411は緩やかに開いた口縁部の端部を上下に肥厚した広口壺である。口縁部の外端面に２条の沈線を入れたあと、竹管文を加えた２個一対の円形浮文を貼り付け、頸部には列点文が巡る。口頸部の内面の調整は横方向のヘラミガキである。412は水平に開く口縁部を上下に肥厚した広口壺である。口縁部の外端面に縦長のキザミメを入れたあと、竹管文を加えた円形浮文を一見正三角形のように貼り付け、内面には櫛描波状文が巡る。器面の調整は内外面とも縦方向のヘラミガキである。413・414は二重口縁壺で、前者は口縁端部および外端面の下端に竹管文が巡り、後者は外端面に縦方向のヘラミガキを施したあと、竹管文を加える。415は口縁部の大半を欠損した二重口縁壺である。外面に赤色顔料(ベンガラ)を塗布しており、吉備の土器であろう。416は広口壺の体部の上半から口縁部にかけての破片である。体部の外面に櫛描波状文・刺突文・竹管文を施す。器体の内面の調整は横方向のヘラミガキおよびユビオサエののち、ナデである。417は大きく開く口縁部を上下に肥厚した広口壺である。口縁部の外端面に２条のにぶい凹線が巡る。器体の調整は外面が左上がりのハケで、内面は左から右上がりのハケである。418は緩やかに開く口縁部を上下に肥厚して、キザミメを入れた広口壺である。頸部の調整は外面が縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキである。419は二重口縁壺で、口縁端部にキザミメが巡る。調整は頸部の外面が左上がりのハケ、内面はヨコナデである。口縁部の内面は縦方向の疎らなハケのあと、横方向のヘラミガキで調整する。420も二重口縁壺である。口縁部の内外面の調整はヨコナデであるが、内面は横方向のヘラミガキを加えており、頸部の外面は縦方向のハケで調整する。421は口頸部が外上方に直線的に開く直口壺で、口縁部の外端面にはにぶい２条の沈線が巡る。体部の外面はタタキ(４本/１㎝)整形のあと、ユビナデ調整し、内面はユビオサエおよびナデである。422は完形の小型の直口壺で、調整は体部の外面が縦方向のヘラミガキで、内面は下半がユビオサエ、上半は横方向のナデである。423は口縁部を欠損した小型の直口壺である。頸部の外面には左上がりのハケメが残る。体部の調整は内外面ともユビオサエである。424は完形の直口壺で、口縁部の外面には２条のにぶい凹線が巡る。体部の調整は外面がタタキ(３本/１㎝)で整形したあとナデ、内面はナデである。425は完形の直口壺で、口頸部は球形の体部から外上方に直線的に開く。

426は中央が中凹みのつまみから裾が直線的に開く甕の蓋である。器体の調整は外面がユビオサエ、

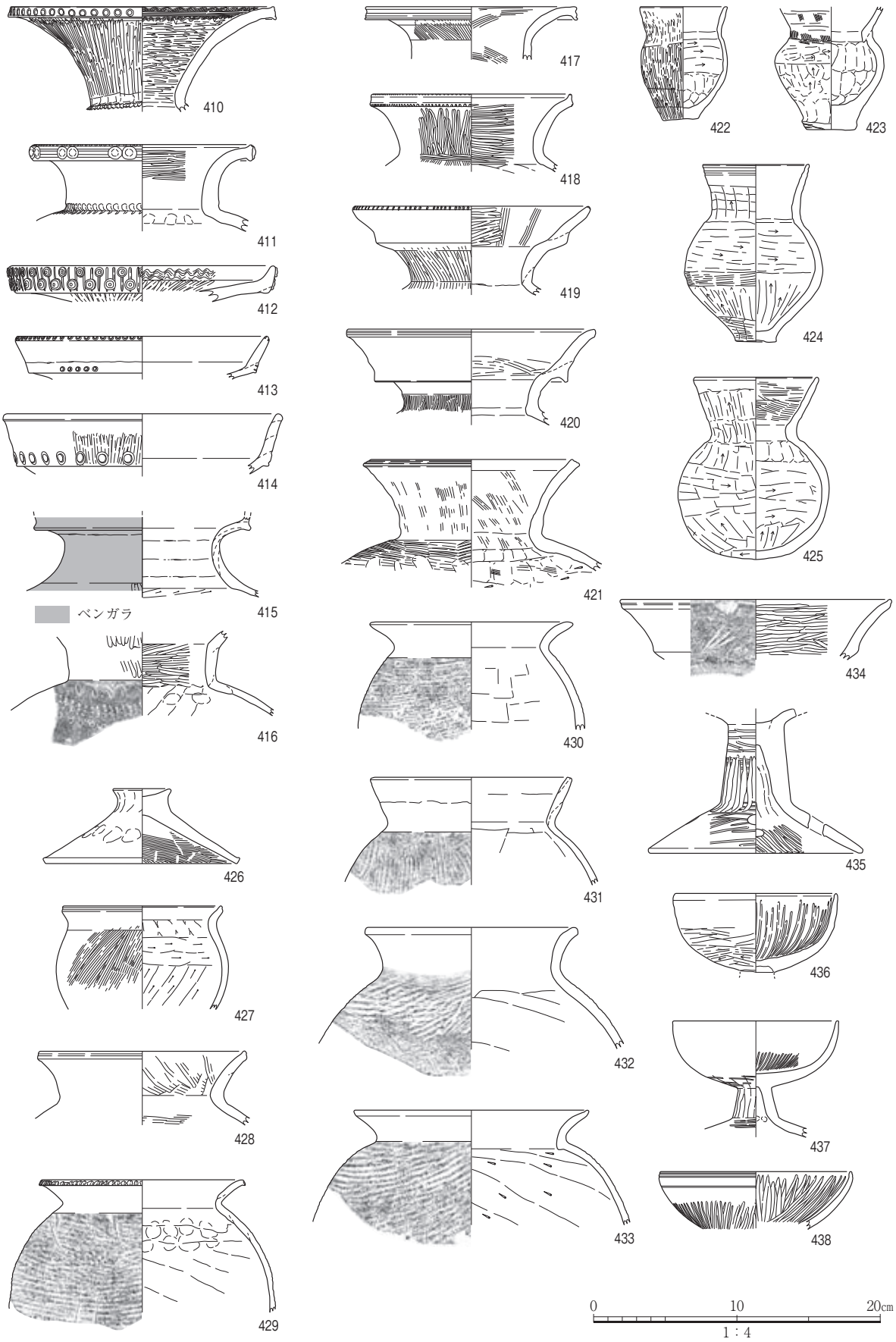


図119　第4a層（黒色細粒砂層）出土遺物実測図（1）

内面は左上がりのハケである。427は球形の体部から口縁部が短く開く甕である。体部の調整は外面が右上がりのハケ、内面は右上がりから横方向のヘラケズリである。428は口縁部が「く」の字状に外反した甕で、口縁端部の外面には１条の沈線が巡る。429～433は球形に近い体部から口縁部が直線的に開く431以外は緩やかに開いた甕である。体部の外面を429は右から左上がりのタタキ(３本/１㎝)で、430・432・433は右上がりのタタキ(３～４本/１㎝)で整形し、431は縦方向の粗いハケを施す。内面の調整は429・432が左上がりのナデ、430・431が横方向のナデ、433は時計回りのヘラケズリである。

434は高杯の杯部で、口縁端部は上に肥厚し、外端面にはにぶい沈線が巡る。435は高杯の脚部である。外面の調整は柱状部が疎らな細かい横方向から縦方向のヘラミガキで、内面は裾部が左上がりのヘラミガキである。436は椀形高杯の杯部で、調整は外面がナデ、内面は縦方向の疎らなヘラミガキである。437も椀形高杯で、脚裾部の大半を欠損している。調整は杯部内面が縦方向のヘラミガキで、杯部外面の下半から脚部は縦および横方向のヘラミガキである。438も椀形高杯の杯部で、口縁部の外面に沈線が３条巡り、調整は外面の下半および内面は縦方向のヘラミガキである。439は脚部を欠損した小型の器台で、受部は外上方に直線的に大きく開く。器面の調整は外面が横方向の密なヘラミガキで、内面は縦方向の密なヘラミガキである。440は受部を欠損した小型の器台で、脚部は直線的に大きく開く。器面の調整は外面が粗いナデ、内面は横方向のハケである。脚部の３方向に円形スカシ孔を穿つ。

441は底部の中央を欠損した有段口縁鉢で、口縁部の内外面をヨコナデ調整し、体部は外面が横方向のヘラケズリで、内面は粗い横方向のヘラミガキである。442は、張りのある体部から口縁部が外反した鉢で、底部を欠損している。器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面は左から横方向のハケで、内面はナデである。口縁部の内面にはハケメが残る。443は大型の鉢で、口縁部は体部から緩やかに開く。器体の調整は内外面とも横方向の粗いヘラミガキである。442・443ともに器体の外面に煤が付着している。

444は管状土錘で約半分欠損しており、中央の紐孔は径0.55㎝である。445はほぼ原形を留めた管状土錘である。中央の紐孔は径0.6㎝で、重さは32.1ｇである。

446は長さ3.7㎝、鏃身幅1.0㎝、厚さ0.4㎝、茎部は鋳上がり悪く幅が0.25～0.4㎝の柳葉形有茎銅鏃である。鏃身は断面菱形を呈し、両面に鎬があるが片方は鈍角である。重さ4.0ｇである。形態からみて庄内式期の早い段階に属するものであろう。SD517から出土した柳葉形有茎銅鏃270に類似している。

447は細粒砂岩の円礫を利用した敲石で、両端に敲打痕がある。448は細粒黒雲母花崗岩製の砥石である。各面に研磨痕や敲打痕があるほか、二次的な火を受けている。449は一端が欠けた細粒砂岩製の砥石で、各面に研磨痕があるほか、二次的な火を受けている。

以上の土器のうち、時期がやや新しい436～441以外は庄内１期に属するものであろう。

ⅳ)第4b層(黒色粘土質シルト層)出土遺物

本層出土の資料は46点を図化した(図121・122)。

450は小型の二重口縁壺である。口縁部は球形の体部から短い筒状の頸部を経て一旦開いたのち、

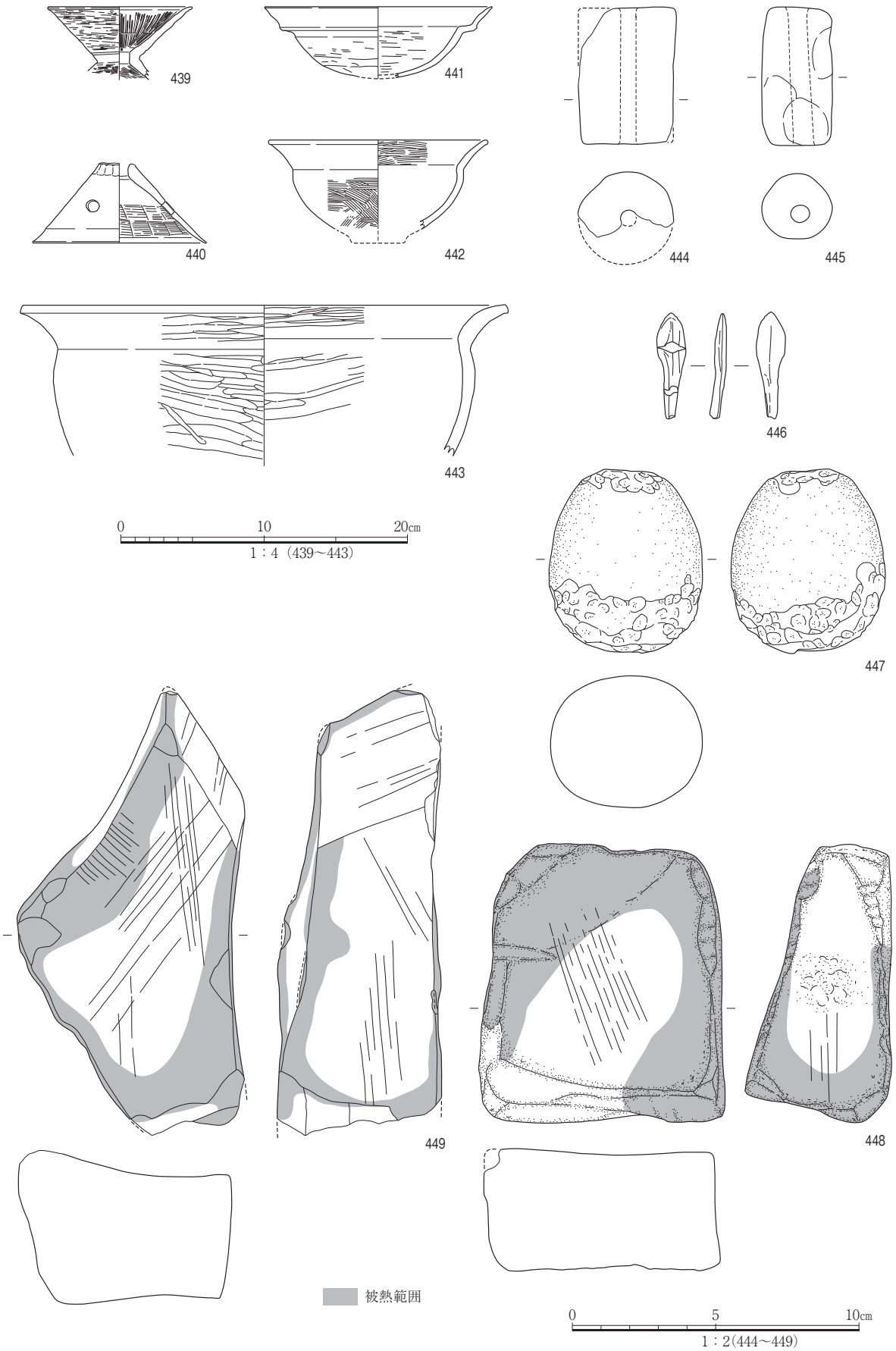


図120　第4a層(黒色細粒砂層)出土遺物実測図(２)

外上方に開く。口縁部の外端面には櫛描波状文のあと竹管文を加えた円形浮文を貼り付け、同内面にも櫛描波状文を施す。451は壺の底部で、裏面中央が浅く凹む。内面にはクモの巣状のハケメが残る。452も壺の底部で内外面ともハケで調整し、底部裏面が浅く凹む。453・454は直口壺で、口頸部は前者が緩やかに外反し、後者は直線的に開く。453の頸部外面には刺突文が巡る。455は二重口縁壺で、器体の内外面の調整はヘラミガキである。456は直口壺で、口頸部は外上方に直線的に開く。457・458は二重口縁壺で、外端面に前者は５条の沈線、後者は３条の幅の広い凹線が巡る。457は胎土中にを含む。458は器面に赤色顔料(ベンガラ)を塗布しており、457ともに阿波の土器であろう。459は口縁部が水平に開く広口壺で、外端面には１条のにぶい凹線が巡る。器体の内外面をヨコナデ調整しているが、内面にはハケメが残る。

460は口縁部が緩やかに外反した甕で、口縁端部は外上方に伸びる。頸部の内面にはハケメが残る。461・462は「く」の字状に外反した口縁部を上に肥厚した庄内式甕である。ともに頸部は鋭角で体部は球形に近く、外面を右上がりのタタキ(６本/１㎝)で整形したのち、左上がりのハケで調整し、内面は前者が逆時計回りのヘラケズリで、後者は左から右上がりのヘラケズリで調整する。胎土中に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。463は口縁部が二段に開く甕である。体部の内面を時計回りにヘラケズリ調整する。胎土中に雲母･長石を含む吉備の土器であろう。464は口縁部が二段に開く甕で、体部の内面を逆時計回りにヘラケズリ調整する。山陰の土器であろう。465も口縁部が二段に開く甕で、球形に近い体部の調整は外面が左および右上がりのハケで、内面は時計回りのヘラケズリである。

466は大型の鉢で、口縁部は一旦短く開いたのち、わずかに開いて立ち、内外面をヨコナデ調整する。張りのある体部の調整は外面が縦方向のハケで、内面は時計回りのヘラケズリである。器体の外面に煤が付着した、煮炊きに使われたものである。467は口縁部が短く開いた甕である。球形に近い体部の外面をタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は左上がりのハケおよびナデである。468は球形の体部から口縁部が「く」の字状に外反し、端部を上に肥厚した庄内式甕である。頸部は丸く、体部の外面を右上がりのタタキ(５本/１㎝)で整形したのち、体部の下半を縦方向のハケで調整する。体部の内面は左から右上がりのヘラケズリで調整する。469は台付甕の脚台で、外面を左上がりのハケで、内面も同方向のナデで調整する。外面に煤が付着している。470は口縁部が緩やかに外反する甕である。張りのある体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形したあと、左上がりのハケで調整する。体部の内面の調整は横方向のヘラケズリおよびナデである。471は口縁部が鋭角な頸部から直線的に開く甕で、口縁端部は丸い。口頸部をヨコナデ調整するが、内面には横方向のハケメが残る。球形に近い体部の外面を縦方向のハケで調整し、内面の調整は逆時計回りのヘラケズリである。472は鋭角な頸部から口縁部が「く」の字状に外反し、端部が内傾する甕である。張りのある体部の調整は外面が左上がりのハケで、内面は左上がりのヘラケズリである。

473・474は器体の外面に撥形文とみられる線刻のある壺の体部片である。

475は高杯の杯部で、口縁部は外上方に大きく開く。器体の調整は外面が横方向のヘラミガキで、内面には縦方向の暗文状のヘラミガキを施すが、口縁部に横方向のハケメが残る。476は口頸部を欠損した器台とみられるもので、器体の外面および脚裾部の内面の調整は縦方向のヘラミガキである。

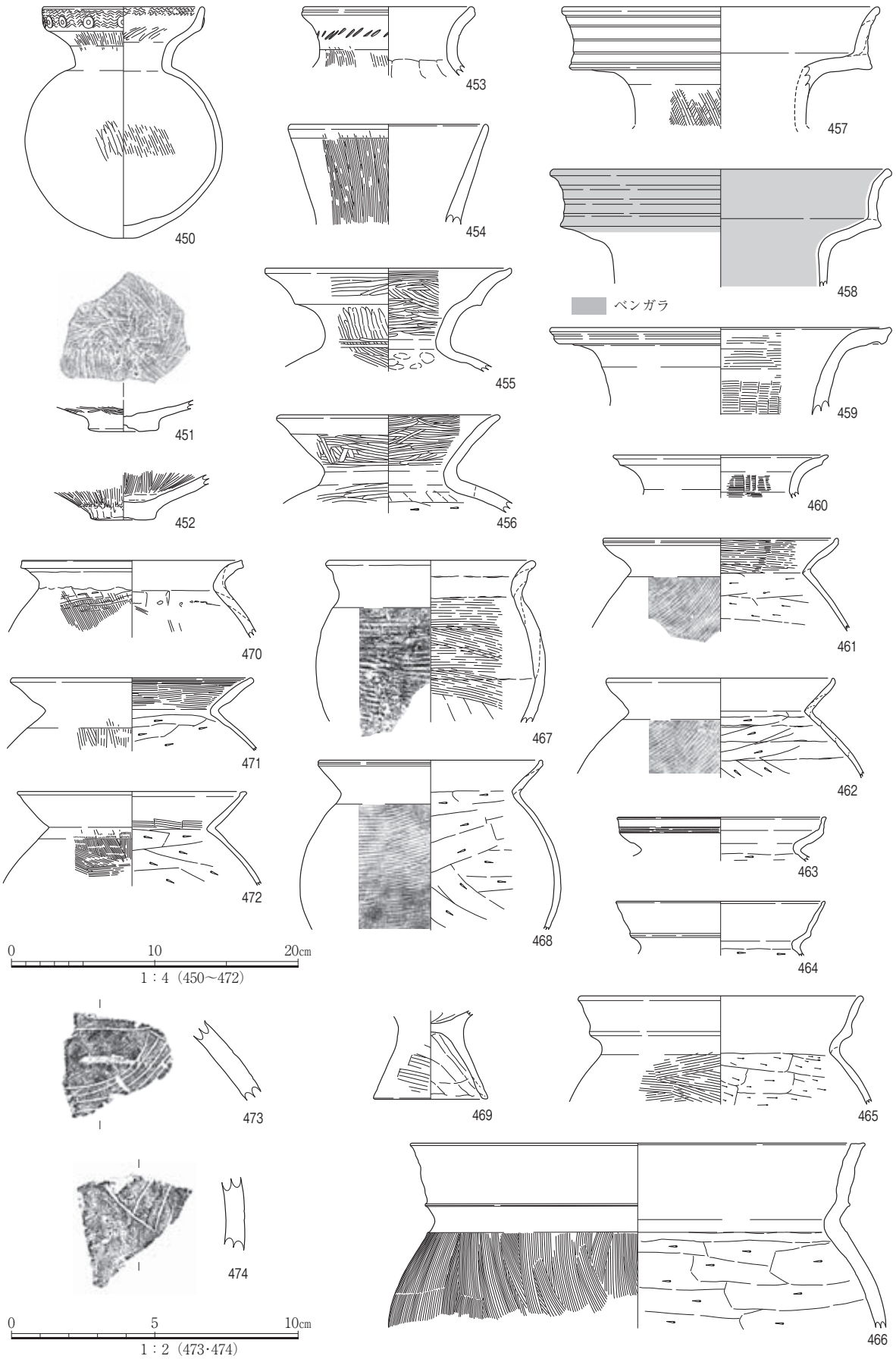


図121　第4b層（黒色粘土質シルト層）出土遺物実測図（1）

受部の内面はヨコナデ調整で、内底面の中央に孔を穿つ。上方に肥厚した脚裾部の外端面に１条のにぶい沈線が巡る。477は受部を欠損した小型の鼓形器台で、調整は器体外面がヨコナデ、脚部の内面は横方向のヘラケズリである。山陰の土器であろう。478は器台の脚部で､裾部は直線的に大きく開く。脚部の上端近くに４方向の円形スカシ孔を穿つ。調整は、外面は磨滅しており不明、内面は左上がりのハケである。

479は小さな尖り底の中央を穿孔した鉢で、体部の中程以上を欠損している。器体の調整は外面が縦方向のナデ、内面は左上がりのナデである。480は口縁部が二段に開いた有段口縁鉢で、底部の中央を欠損している。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部は外面がヘラケズリのあと、横方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキである。底部の外面にハケメが残る。481も底部を欠損した有段口縁鉢で、器面が磨滅しているが、体部の調整は内外面とも横方向のヘラミガキであろう。482～485は小型の鉢で、485の底部には孔を穿つ。器面の調整は外面が482は左上がりのハケ、483は左上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形のあと、縦方向のヘラケズリ、484は縦方向のヘラケズリで、485は右上がりのタタキ(２本/１㎝)で整形する。内面の調整は左上がりのハケを施す482、ヘラミガキの484以外は縦か横方向のナデである。

486・487は手焙形土器で、ともに覆いを欠損している。486の体部の上端および中程近くにはキザミメを入れた突帯が巡る。486の器体の外面調整は左上がりのハケのあと、同方向および横方向のヘラミガキで、487は左上がりのハケののち、３条のにぶい凹線を施す。488は張りのある体部から口縁部が外上方に開く鉢で、器面の調整は外面が左上がりから横方向のヘラミガキで、内面は板状工具による縦方向のナデのあと、上半に横方向のヘラミガキを施す。489は、口縁部がわずかに内傾して立つ蛸壺とみられるものである。口縁部の内外面をヨコナデ調整し、端部は丸い。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形し、内面の調整は横方向のナデである。

490～493は管状土錘である。490・491は完形で、重さは前者が50.1ｇ、後者は42.6ｇある。492・493は体部を欠損している。いずれもほぼ中心に径0.5㎝前後の紐孔がある。493は大型の管状土錘で、紐孔は径0.4㎝と0.9㎝の２孔見られるが、後者は穿ち直しの孔であろう。494は軽石製の浮とみられるもので、紐をかけた痕跡であろう３条の沈線がある。495は長方形の凝灰岩製の砥石で、各面ともに研磨痕が見られる。

以上が第4b層黒色粘土質シルト層から出土した遺物である。このうち、471・472・475・480・481・488は布留１～２期、461～464・468が庄内３～４期で、これら以外の土器は庄内１～２期に属するものであろう。

ｖ)第4b層(灰褐色～暗青灰色粘土質シルト層)出土遺物

本層出土の資料は21点を図化した(図123)。

496は広口壺で、口縁部は直線的に開く頸部から短く開き、口縁端部は丸い。器体の調整は口縁部がヨコナデ、頸部の外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキである。体部の内面は左上がりのハケである。497は口縁部を上下に垂下した広口壺で､口縁部の外端面には下半に櫛描直線文、上半に刺突文を施したあと、竹管文を加えた円形浮文を貼り付ける。口頸部の内面の調整は、縦方向

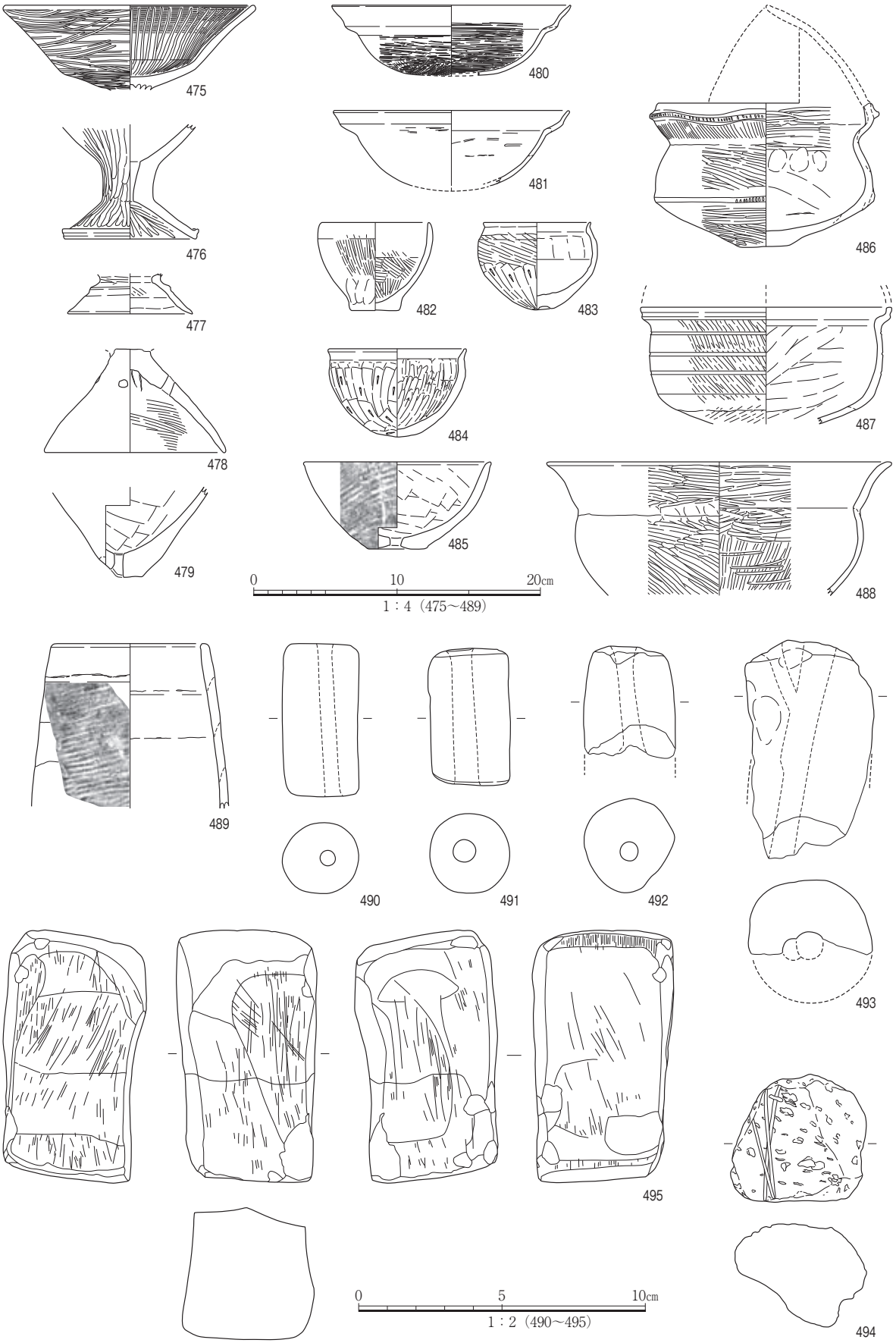


図122　第4b層（黒色粘土質シルト層）出土遺物実測図（２）

の疎らなヘラミガキである。498は大型の袋状口縁部を有する壺の体部の上端から頸部にかけての破片である。頸部の屈曲部の外面には斜格子状のキザミを入れた突帯が巡る。499は大型の袋状口縁部を有する壺である。口縁部が内傾する接合部の外面には端面が浅く凹む突帯が巡る。頸部からやや下がった位置にも断面台形の突帯があり、頸部と突帯間を竹管文および交差する斜格子文、刺突文を施したのち、刺突文と一部重なる位置にキザミメを加えた突帯を貼り付けている。器体の調整は口縁部がヨコナデ、頸部の外面は縦方向のハケのあと、横方向のヘラミガキを疎らに施し、内面は縦方向のヘラミガキおよび粗い横方向のハケのあとナデる。498・499は西部瀬戸内の土器であろう。500は丸味をもつ頸部から口縁部が２段に開く壺である。器体の調整は口頸部の内外面がヨコナデで、体部の内面は右上がりのヘラケズリである。

501は口縁部が丸味のある頸部から短く開く甕で、外面は左上がりのハケ、内面はナデである。502も口縁部が２段に開く甕で、口縁部の内外面をヨコナデ、体部の内面を左上がりのヘラケズリで調整する。503は口縁部が二段に開く大型の鉢である。器体の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面は縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリである。500・502・503は山陰の土器であろう。

504は丸味のある体部から口縁部が外上方に開き、底部が尖りぎみの庄内式甕である。器体の調整は口縁部から体部の上端がヨコナデ、体部は外面が左上がりのタタキ(４本/１㎝)で整形したあと、右から左上がりのハケで、内面は右上がりのヘラケズリである。胎土に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。505・506も口縁部が「く」の字状に外反した庄内式甕で、口縁端部を上に肥厚する。ともに体部の外面を右上がりのタタキ(５本/１㎝)で整形しており、内面の調整は前者が時計回り、後者は逆時計回りのヘラケズリである。胎土に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。507は球形に近い体部から口縁部が外上方に短く開く甕である。体部の外面を右上がりのタタキ(３本/１㎝)で整形しており、内面の調整は左上がりの板状工具によるナデである。508は口縁部が「く」の字状に外反する庄内式甕で、口縁端部を上に肥厚している。体部の外面を右上がりのタタキ(６本/１㎝)で整形したのち、左上がりの粗いハケで調整しており、内面の調整は逆時計回りのヘラケズリである。胎土に角閃石・雲母粒を含む河内の土器である。509も口縁部が「く」の字状に外反する庄内式甕で、口縁端部を上方に肥厚しており､端面には２条の沈線が巡る。胎土に角閃石･雲母粒を含む河内の土器である。

510は完形の鉢で、器体の中心からややずれた位置に小さな平底の底部が付く。口縁部は球形に近い体部から外上方に開いており、内外面をヨコナデしたあと、内面を横方向のヘラミガキで調整する。体部の調整は外面が縦方向の二段のヘラミガキ、内面は断続的な横方向のヘラミガキである。

511は手焙形土器の覆いの破片で、背面に複合鋸歯文とみられる線刻がある。覆いの前面側の端面にはヘラによる４条の沈線がある。512は撥形文が線刻された壺の体部片である。513は高杯の脚部である。細身の柱状部から大きく開く裾部には４方向の円形スカシ孔を穿つ。器面の調整は外面が縦方向のヘラミガキで、内面はナデである。514は小型のコップ形の蛸壺で、底部を欠損している。口縁部をヨコナデ調整している。

515は管状土錘である。中央に径1.0㎝の紐孔がある。重さは78.2ｇである。516は軽石で、表面とした側に８本の線刻がある。

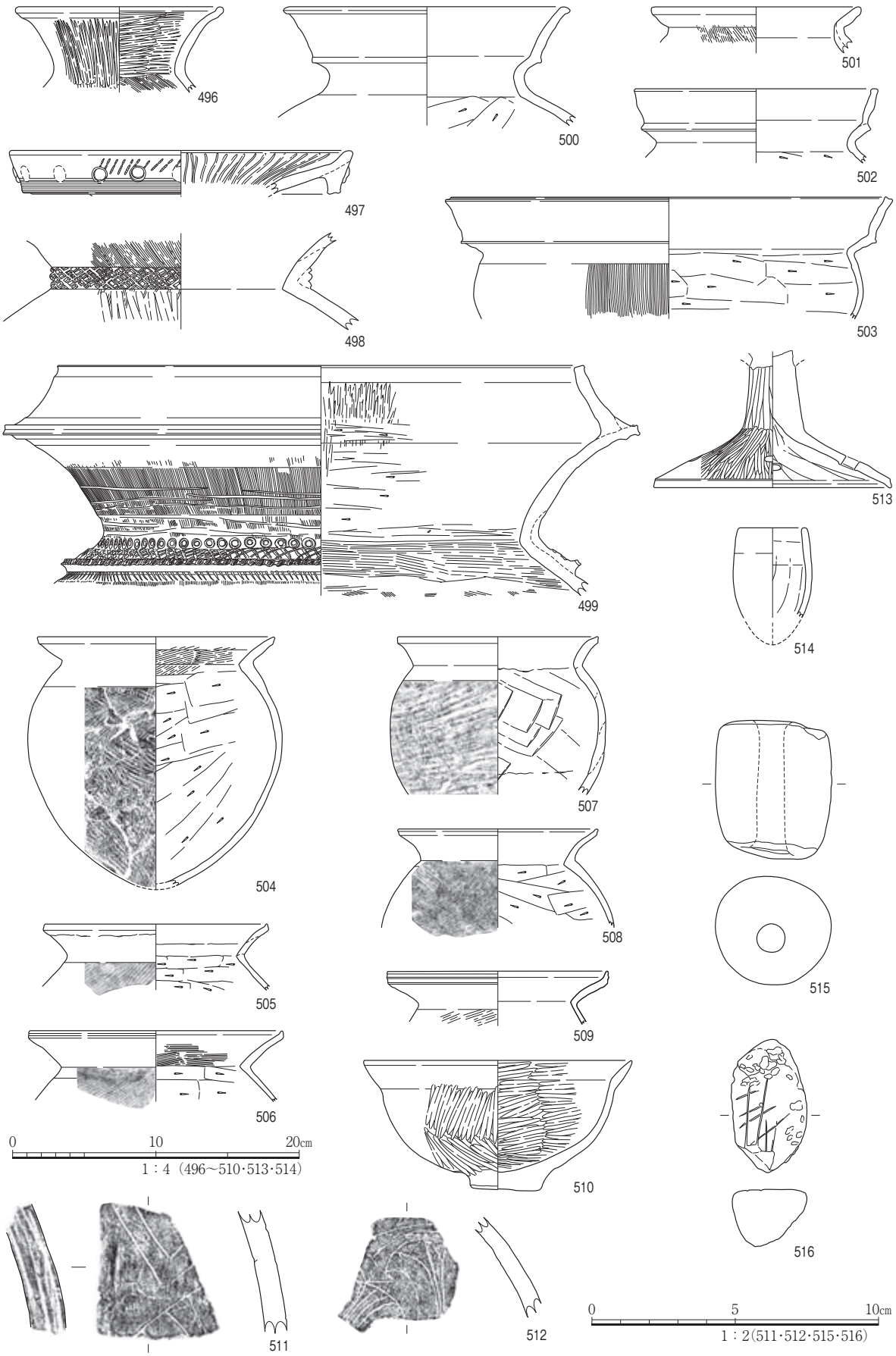


図123　第4b層(灰褐色～暗青灰色粘土質シルト層)出土遺物実測図

以上の土器のうち、やや時期が新しい500・502・503以外は庄内２期に属するものであろう。

vi)小結

これまでに述べたように第３～4a・b層では弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器類・鉄剣形銅剣・銅鏃・台石・砥石などさまざまな遺物が出土した。これらは調査地が加美遺跡の範囲内でも中心地に近い場所に位置することを示唆している。土器類は庄内１期、次いで庄内２～３期に属するものが多い傾向が窺われた。しかし、少量とはいえ、第３～4b層の各層で布留１～２期に属する土器片が確認されたが、これは調査地および周辺が弥生時代末から古墳時代の初めにかけて居住区であったことを示唆している。また、鉄剣形銅剣や銅鏃は庄内式期の早い時期に属する可能性が高いことが出土状況から明らかになった。特にSD520から出土した鉄剣形銅剣320は長さや剣身の幅、厚さからみて実用品であることはまちがいないものと考えられる。鉄剣形銅剣は銅鏃を含めて、角閃石や雲母粒を多量に含む生駒西麓産胎土が使われた河内型庄内甕が登場する前夜(庄内１期)の河内低地や、加美遺跡がどのような社会状況であったかを推考する上で大きな示唆を与えてくれる考古資料となった。それは、『魏志倭人伝』に記載されている邪馬台国の女王卑弥呼が共立されて倭国内が政治的に安定する以前の西日本で起こった倭国大乱が、加美遺跡や河内低地にも及んでいたことを物語るものといえよう。

５)まとめ

加美小学校分校予定地の調査では既述したように弥生時代末を中心にした時期(庄内１期)の竪穴建物や井戸・土壙をはじめ、多くの溝を検出した。そしてこれらに伴って土器類を中心に金属製品や石製品など、当時の集落の生活状況や社会的な環境を究明するための基礎的な資料を収集しえた。中でも表14に示したように庄内１～２期の遺構については、東方に位置するKM84－１次調査地の集落の性格を推考する上で重要な資料といえる。加美小学校分校予定地での調査成果については、続刊が予定されている弥生時代末から古墳時代前期初頭の調査報告書で総合的な検討を加えてまとめたい。

註)

(１)本報告で河内の土器としたものは、胎土中に１～２㎜大の角閃石・雲母粒を多量に含むいわゆる生駒西麓産の胎土による土器と称されるもので、観察表では角閃石・雲母以外にも長石や石英・シャモット粒なども記載しているが、本文中では特徴的な角閃石・雲母粒のみを取り上げて河内の土器とした。

(２) SD520出土の鉄剣形銅剣については愛媛大学ミュージアムの吉田広氏に関係資料の提供ならびに数々のご教示を得た。吉田氏の研究によれば加美遺跡SD520出土の鉄剣形銅剣は岡山県百間川原尾島遺跡、鳥取県長瀬高浜遺跡、広島県神辺町国成遺跡、大阪府萱振遺跡から出土した弥生時代末から古墳時代初めに降る例である鉄剣形銅剣に類似しており、これらは関部双孔であることが特徴という。加美遺跡の関部双孔は高い位置にあって吹き流しなどの装飾用と異なり関部の低い位置にあることから着柄用の目釘孔とみられている[吉田広2012]。吉田氏に記して感謝の意を表したい。

表14　加美小学校分校調査地遺構一覧表

遺構名	地区名	層位名	規模(m)				主要埋土	時期
			長辺(長径)	短辺(短径)	直径	深さ		
SB501	北区	第５層	4.10	2.80以上	－	0.27	淡茶褐色極細粒砂質シルト	庄内１期
SB502	北区	第５層	5.20	4.80	－	0.14	黒色細粒砂	庄内１期
SX503	北区	第５層	3.70以上	5.50	－	0.20	黒色シルト質細粒砂	庄内２期
SB504	南区	第５層	6.00	5.50	－	0.30	黒色シルト質細粒砂	布留１期
SB505	南区	第５層	5.00	4.50以上	－	0.81	黒褐色シルト質細粒砂	庄内２～３期
SE506	北区	第５層	3.50	2.90	－	2.90	黒色粘土質シルト～シルト質細粒砂	庄内３期
SE507	北区	第５層	－	－	2.00	1.29	黒色粘土質シルト～細粒砂質シルト	庄内～布留式期
SE508	北区	第５層	1.90	1.60	－	1.74	黒色粘土質シルト～極細粒砂質シルト	庄内２期
SK509	北区	第５層	1.60	0.90以上	－	0.21	黒褐色極細粒砂質シルト	庄内１～２期
SK510	南区	第５層	－	－	1.90	0.69	黒色極細粒砂質シルト	古墳時代前期
SK511	中央区･南区	第５層	－	－	3.10	0.20	黒色極細粒砂質シルト	庄内１期
SK512	南区	第５層	2.60	2.10	－	0.29	黒褐色極細粒砂質シルト	庄内２期
SK513	南区	第５層	－	－	1.00	0.30	黒色極細粒砂質シルト	古墳時代前期
SD514	北区	第５層	－	幅0.70	－	0.34	上層：黒色粘土質シルト 下層：黒色極細粒砂質シルト	庄内１期
SD515	北区	第５層	－	幅0.40	－	0.11	黒色シルト質粘土	庄内１期
SD516	中央区	第５層	－	幅0.30	－	0.17	黒色シルト質粘土・極細粒砂質シルト	庄内式期
SD517	中央区	第５層	－	幅0.30	－	0.16	黒色シルト質粘土	庄内式期
SD518	中央区	第５層	－	幅0.80	－	0.27	黒色粘土～粘土質シルト	庄内１～４期
SD519	南区	第５層	－	幅0.80	－	0.45	黒色シルト質粘土	庄内１～２期
SD520	南区	第５層	－	幅0.60	－	0.22	黒色シルト質粘土	庄内１～２期
SD521	南区	第５層	－	幅0.50	－	0.10	黒色シルト質粘土	庄内１期
SD522	南区	第５層	－	幅0.70	－	0.27	黒色シルト質粘土	庄内１～２期
SD523	南区	第５層	－	幅0.30	－	0.26	黒色シルト	庄内２期
SD524	南区	第５層	－	幅0.40	－	0.12	黒色シルト	庄内１期
SD525	南区	第５層	－	幅0.20	－	0.12	黒色粘土質シルト	庄内１期
SD526	南区	第５層	－	幅0.30	－	0.15	黒色粘土質シルト	庄内１期
SK301	北区	第３層	2.32	1.30	－	0.16	黒色粘土	古墳時代中期

表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（１）

調査次数	掲載番号	器種	器形	層位名	遺構名	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	重量（g）	色調	胎土	焼成
加美小分校	200	弥生土器	小型鉢	－	SB501	7.8	5.7	3.1	－	にぶい橙色	シャモット･石英･チャート･長石	良好
加美小分校	201	弥生土器	小型鉢	－	SB501	8.2	7.4	2.7	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート	良好
加美小分校	202	弥生土器	小型鉢	－	SB501	8.4	6.0	1.7		淡茶褐色（やや白っぽい）	長石	良
加美小分校	203	弥生土器	小型鉢	－	SB501	11.5	6.8	3.6		淡茶褐色（灰色 白っぽい）	石英･雲母･長石	良好
加美小分校	204	弥生土器	小型鉢	－	SB501	9.8	7.3	2.7	－	灰白色～灰色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	205	弥生土器	甕	－	SB501	17.0	(7.3)	－		淡茶褐色	石英･長石	良好
加美小分校	206	弥生土器	二重口縁甕	－	SB502	12.7	(4.5)	－	－	灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	207	弥生土器	壺	－	SB502	－	(3.4)	－	－		角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	208	弥生土器	甕	－	SB502	13.9	(4.7)	－	－	灰白色～灰黄色	角閃石･雲母･長石･シャモット	良好
加美小分校	209	弥生土器	甕	－	SX503	11.7	(6.1)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	210	弥生土器	甕	－	SX503	11.0	(6.7)	－	－	黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英･	良好
加美小分校	211	弥生土器	壺	－	SX503	－	(4.1)	5.6	－	灰黄色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	212	弥生土器	甕	－	SX503	16.0	(9.6)	－	－	灰黄色～黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	213	古式土師器	鉢	－	SB504	12.4	(3.8)	－	－	橙色	長石･石英･シャモット･雲母	良好
加美小分校	214	古式土師器	有段口縁鉢	－	SB504	14.8	3.7	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	215	古式土師器	高杯	－	SB504	－	(9.2)	11.4	－	にぶい黄橙色	長石	良好
加美小分校	216	古式土師器	製塩土器	－	SB504	－	(2.5)	3.5	－	にぶい黄橙色～黄灰色	長石･シャモット･雲母	良好
加美小分校	217	弥生土器	壺	－	SB504	長(4.5)	幅(3.7)	厚0.8	－	淡黄色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	218	弥生土器	壺	－	SB504	－	(2.8)	－	－	にぶい橙色～灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	219	弥生土器	壺	－	SB504	長(3.8)	幅(4.1)	厚0.7	－	にぶい黄橙色～黄灰色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	220	土製品	管状土錘	－	SB504	長4.5	幅2.7	厚2.4	31.6	灰黄色	角閃石･雲母･長石･シャモット	良好
加美小分校	221	弥生土器	甕	－	SB505	15.8	(3.8)	－	－	灰白色	長石･石英	良好
加美小分校	222	土製品	管状土錘	－	SB505	長3.9	幅3.2	厚3.1	46.9	灰黄色	長石･石英･チャート･シャモット	良好
加美小分校	223	石製品	砥石	－	SB502	長(21.6)	幅12.7	高(8.8)	3.8kg	－	石材：極細粒砂岩	－
加美小分校	224	石製品	台石	－	SB502	長42.6	幅32.4	高12.6	24kg	－	石材：粗粒砂岩	－
加美小分校	225	弥生土器	広口壺	－	SE506	9.7	(3.7)	－	－	にぶい橙色～灰白色	長石･石英	良好
加美小分校	226	弥生土器	広口壺	－	SE506	18.0	(3.0)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	227	弥生土器	甕	－	SE506	14.5	(5.4)	－	－	黄灰色～灰白色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	228	弥生土器	甕	－	SE506	16.8	24.7	－		茶褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	229	土製品	鳥形土製品	－	SE506	最大長(12.5)	最大高(5.0)	最大幅(4.9)	－	灰白色～明褐灰色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	230	弥生土器	鉢	－	SE506	13.6	(7.7)	－	－	橙色～灰白色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット･チャート	良好
加美小分校	231	石製品	砥石	－	SE506	長14.4	幅18.2	厚4.1	1.6kg	－	細粒～中粒質砂岩	－
加美小分校	232	弥生土器	甕	－	SE508	15.8	(20.5)	－	－	暗灰色～黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	233	弥生土器	甕	－	SE508	13.2	(5.3)	－		暗茶褐色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	234	弥生土器	甕	－	SE508	14.9	(7.7)	－	－	暗灰色～黒褐色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	235	弥生土器	鉢	－	SE508	23.3	(6.3)	－	－	灰白色～にぶい黄橙色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	236	弥生土器	壺	－	SK509	－	(5.1)	－	－	灰黄色～褐灰色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	237	古式土師器	直口壺	－	SK510	14.4	(11.0)	－	－	浅黄色～灰黄色	角閃石･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	238	弥生土器	甕	－	SK510	15.6	(4.6)	－	－	にぶい黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	239	古式土師器	甕	－	SK510	15.7	(5.4)	－	－	淡黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	240	古式土師器	甕	－	SK510	16.1	(17.1)	－	－	灰白色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	241	古式土師器	高杯	－	SK510	22.7	(6.5)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	242	弥生土器	壺	－	SK511	－	(4.6)	－	－	橙色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	243	弥生土器	直口壺	－	SK511	7.0	(3.5)	－	－	にぶい橙色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	244	弥生土器	甕	－	SK511	14.2	(7.8)	－	－	灰白色	長石･石英･チャート･シャモット	良好
加美小分校	245	弥生土器	甕	－	SK511	17.5	(3.4)	－	－	灰白色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	246	弥生土器	甕	－	SK511	16.3	(8.4)	－	－	橙色	長石･石英･雲母･シャモット	やや良
加美小分校	247	弥生土器	甕	－	SK511	－	(5.2)	5.4	－	灰黄褐色～にぶい橙色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	248	石製品	砥石	－	SK511	長7.55	幅3.6	厚2.5	93.7	－	石材：泥岩	－
加美小分校	249	石製品	砥石	－	SK511	長(6.6)	幅(4.5)	(3.25)	105.9	－	石材：泥岩	－
加美小分校	250	弥生土器	直口壺	－	SK512	12.2	(4.9)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	251	弥生土器	甕	－	SK512	17.4	(5.3)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	252	弥生土器	甕	－	SK512	－	(9.1)	3.6	－	灰黄色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	253	弥生土器	甕	－	SK512	－	(4.1)	4.6	－	にぶい黄橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	254	弥生土器	直口壺	－	SK513	14.0	(4.3)	－	－	浅黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	255	弥生土器	直口壺	－	SK513	15.6	(6.4)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･シャモット	良好
加美小分校	256	古式土師器	直口壺	－	SK513	17.2	(8.4)	－	－	浅黄色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート	良好
加美小分校	257	弥生土器	甕	－	SD514	14.2	16.0	3.9	－	褐色～明褐色	石英･長石	良好
加美小分校	258	弥生土器	甕	－	SD514	15.4	(11.0)	－	－	灰色～灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好

表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（２）

調査次数	掲載番号	器種	器形	層位名	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成
加美小分校	259	弥生土器	甕	－	SD514	－	(10.9)	3.9	－	灰オリーブ色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	260	弥生土器	甕	－	SD514	14.3	17.2	4.1		茶褐色	石英･長石･雲母	良好
加美小分校	261	弥生土器	甕	－	SD514	15.3	(18.9)	－	－	にぶい黄橙色～灰白色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	262	弥生土器	甕	－	SD514	15.5	(15.6)	－	－	暗灰黄色～にぶい黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	263	弥生土器	甕	－	SD514	15.0	(11.3)	－	－	にぶい黄橙色～褐灰色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	264	弥生土器	甕	－	SD514	16.7	(18.2)	－	－	浅黄色～灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート･シャモット	良好
加美小分校	265	弥生土器	甕	－	SD514	－	(16.6)	2.9	－	浅黄色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	266	弥生土器	高杯	－	SD514	22.2	(7.0)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･シャモット	良好
加美小分校	267	弥生土器	器台	－	SD514	－	(7.7)	－	－	灰白色～暗灰色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	268	弥生土器	小型鉢	－	SD514	7.4	6.2	3.3	－	にぶい橙色～橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	269	銅製品	柳葉形有茎銅鏃	－	SD516	長4.0	幅1.2	厚0.35	3.8	－	－	－
加美小分校	270	銅製品	柳葉形有茎銅鏃	－	SD517	長3.8	幅1.0	厚0.4	3.8	－	－	－
加美小分校	271	弥生土器	甕	－	SD518	15.0	(5.3)	－	－	淡茶褐色	角閃石･長石･雲母	良好
加美小分校	272	弥生土器	甕	－	SD518	15.8	(8.5)	－	－	淡茶褐色(灰色っぽい)	長石･雲母	良好
加美小分校	273	弥生土器	甕	－	SD518	17.0	(9.7)	－	－	茶褐色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	274	弥生土器	甕	－	SD518	18.0	(11.8)	－	－	茶褐色(赤味がかる)	長石･雲母･シャモット･角閃石	良好
加美小分校	275	弥生土器	甕	－	SD518	19.0	(15.3)	－	－	淡茶褐色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	276	弥生土器	甕	－	SD518	15.2	(8.6)	－	－	灰白色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	277	弥生土器	甕	－	SD518	15.8	(8.1)	－	－	浅黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	278	弥生土器	甕	－	SD518	16.5	(19.1)	－	－	灰黄色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	279	弥生土器	甕	－	SD518	13.8	(4.7)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･	良好
加美小分校	280	弥生土器	甕	－	SD518	15.8	(4.4)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	281	弥生土器	甕	－	SD518	17.0	(7.3)	－	－	淡茶褐色	石英･長石･雲母	良好
加美小分校	282	弥生土器	甕	－	SD518	14.6	(12.2)	－	－	灰白色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	283	弥生土器	甕	－	SD518	14.7	(19.4)	－	－	淡茶褐色	長石･石英	良好
加美小分校	284	弥生土器	甕	－	SD518	16.9	(5.5)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	285	古式土師器	甕	－	SD518	19.4	(4.4)	－	－	黒褐色～オリーブ褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	286	弥生土器	高杯	－	SD518	21.7	(4.6)	－	－	黄灰色～灰黄色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	287	弥生土器	高杯	－	SD518	－	(9.8)	12.5	－	灰黄色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	288	古式土師器	小型器台	－	SD518	8.8	(6.7)	－	－	灰黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	289	弥生土器	高杯	－	SD518	16.3	11.9	11.8	－	淡茶褐色	赤色粒･石英･長石	良好
加美小分校	290	弥生土器	鉢	－	SD518	11.6	(5.1)	－	－	灰白色	赤色砂粒･長石･石英	良好
加美小分校	291	弥生土器	鉢	－	SD518	－	(2.0)	2.0	－	灰黄褐色	長石･石英	良好
加美小分校	292	弥生土器	台付鉢	－	SD518	10.5	9.7	8.0	－	淡茶褐色(赤っぽい)	長石･石英	良好
加美小分校	293	弥生土器	小型鉢	－	SD518	10.3	6.2	4.1	－	浅黄橙色	長石･シャモット･チャート･雲母	良好
加美小分校	294	弥生土器	小型鉢	－	SD518	12.8	(5.2)	－	－	茶褐色	雲母･長石	良好
加美小分校	295	弥生土器	二重口縁壺	－	SD519	16.4	(6.8)	－	－	にぶい黄橙色	長石･チャート	良好
加美小分校	296	弥生土器	甕	－	SD519	12.4	(4.2)	－	－	灰黄褐色～灰色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	297	弥生土器	甕	－	SD519	13.8	(6.0)	－	－	にぶい黄橙色～浅黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	298	弥生土器	甕	－	SD519	13.7	(5.3)	－	－	灰黄色～灰黄色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	299	弥生土器	甕	－	SD519	14.8	13.4	4.0	－	灰黄色	角閃石･長石･チャート	良好
加美小分校	300	弥生土器	小型甕	－	SD519	9.2	8.4	3.5	－	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート･シャモット	良好
加美小分校	301	弥生土器	甕	－	SD519	18.0	(5.0)	－	－	にぶい黄橙色	長石･チャート	良好
加美小分校	302	弥生土器	甕	－	SD519	16.1	(6.3)	－	－	淡黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	303	弥生土器	甕	－	SD519	16.8	(7.7)	－	－	黒褐色～にぶい橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	304	弥生土器	甕	－	SD519	16.2	(11.6)	－	－	灰黄色～にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母･シャモット	良好
加美小分校	305	弥生土器	甕	－	SD519	14.2	19.8	4.0	－	にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	306	弥生土器	甕	－	SD519	19.2	(6.0)	－	－	灰黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	307	弥生土器	甕	－	SD519	14.0	(7.0)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	308	弥生土器	甕	－	SD519	13.9	(9.3)	－	－	灰黄色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	309	弥生土器	甕	－	SD519	16.8	(6.2)	－	－	にぶい橙色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	310	弥生土器	甕	－	SD519	13.8	(16.0)	－	－	灰白色～にぶい橙色	長石･石英	良好
加美小分校	311	弥生土器	甕	－	SD519	－	(5.2)	4.0	－	灰黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	312	弥生土器	甕	－	SD519	－	(3.7)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	313	弥生土器	甕	－	SD519	－	(3.0)	4.2	－	にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	314	弥生土器	高杯	－	SD519	18.7	(5.0)	－	－	にぶい黄橙色～浅黄橙色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	315	弥生土器	高杯	－	SD519	22.2	(6.8)	－	－	灰黄褐色～にぶい黄橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	316	弥生土器	有稜高杯	－	SD519	23.8	(6.3)	－	－	浅黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好

表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（３）

調査次数	掲載番号	器種	器形	層位名	遺構名	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	重量（g）	色調	胎土	焼成
加美小分校	317	弥生土器	小型鉢	－	SD519	10.8	5.3	3.8	－	灰黄色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	318	弥生土器	低脚高杯	－	SD519	10.4	(3.8)	－	－	にぶい黄橙色	長石･シャモット	良好
加美小分校	319	弥生土器	鮹壺	－	SD519	11.0	(5.3)	－	－	にぶい橙色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	320	銅製品	鉄剣形銅剣	－	SD520	長17.1	幅2.95	厚0.6	－	青緑色	－	－
加美小分校	321	弥生土器	直口壺	－	SD520	13.2	(4.3)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	322	弥生土器	直口壺	－	SD520	10.6	(5.2)	－	－	灰黄色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	323	弥生土器	甕	－	SD520	12.9	(4.9)	－	－	灰黄褐色～にぶい黄褐色	角閃石･長石･石英	良好
加美小分校	324	弥生土器	甕	－	SD520	15.0	(4.5)	－	－	灰黄色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	325	弥生土器	甕	－	SD520	－	(2.1)	4.6	－	灰黄色～褐灰色	長石･石英･シャモット･雲母	良好
加美小分校	326	弥生土器	甕	－	SD520	－	(2.8)	3.7	－	明褐灰色～灰白色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	327	弥生土器	椀形鉢	－	SD520	11.7	(4.7)	－	－	にぶい黄橙色～にぶい橙色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	328	弥生土器	広口壺	－	SD522	17.0	(3.2)	－	－	にぶい黄色～にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	329	弥生土器	甕	－	SD523	－	(14.6)	6.1	－	浅黄橙色～にぶい黄橙色	長石･石英	良好
加美小分校	330	弥生土器	高杯	－	SD523	－	(1.5)	9.0	－	橙色～にぶい橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	331	弥生土器	広口壺	－	SD524	12.7	(5.6)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	332	弥生土器	甕	－	SD524	15.9	(5.4)	－	－	にぶい黄橙色～灰黄褐色	長石･石英･雲母･チャート･シャモット	良好
加美小分校	333	弥生土器	甕	－	SD525	15.5	(5.9)	－	－	にぶい橙色～灰黄褐色	長石	良好
加美小分校	334	弥生土器	甕	－	SD525	－	(7.6)	3.7	－	にぶい橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	335	弥生土器	甕	－	SD526	14.0	(4.0)	－	－	灰黄色	長石･雲母	良好
加美小分校	336	弥生土器	甕	－	SD526	17.0	(4.7)	－	－	にぶい黄色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	337	弥生土器	高杯	－	SD526	－	(2.8)	12.8	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	338	弥生土器	甕	－	SD526	－	(3.6)	4.7	－	黄灰色～灰黄色	長石･雲母	良好
加美小分校	339	弥生土器	小型鉢	－	SD526	10.0	(3.9)	－	－	黄灰色～暗灰色	長石･チャート	良好
加美小分校	340	弥生土器	手焙形土器	－	SD526	－	(5.4)	－	－	にぶい褐色～灰黄色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	341	弥生土器	小型鉢	－	SD515	10.9	6.5	－	－	にぶい橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	342	弥生土器	広口壺	－	SD521	13.2	(6.4)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	343	弥生土器	広口壺	－	SD521	16.8	(4.7)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	344	弥生土器	広口壺	－	SD521	16.9	(2.9)	－	－	にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母･シャモット	良好
加美小分校	345	弥生土器	二重口縁壺	－	SD521	14.6	(6.4)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	346	弥生土器	壺	－	SD521	－	(5.4)	4.5	－	にぶい黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	347	弥生土器	壺	－	SD521	－	(2.4)	－	－	橙色～灰白色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	348	弥生土器	二重口縁壺	－	SD521	－	(3.1)	－	－	灰白色	長石･雲母	良好
加美小分校	349	弥生土器	高杯	－	SD521	20.0	(6.7)	－	－	にぶい黄橙色～灰黄褐色	長石･雲母･チャート･シャモット	良好
加美小分校	350	弥生土器	高杯	－	SD521	23.1	(7.7)	－	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	351	弥生土器	甕	－	SD521	15.9	(3.7)	－	－	にぶい黄色	角閃石･長石	良好
加美小分校	352	弥生土器	甕	－	SD521	14.4	(15.6)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母･シャモット	良好
加美小分校	353	弥生土器	甕	－	SD521	15.2	(11.8)	－	－	にぶい黄橙色	長石･シャモット	良好
加美小分校	354	弥生土器	甕	－	SD521	14.6	(28.1)	4.8	－	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･シャモット･雲母	良好
加美小分校	355	弥生土器	甕	－	SD521	15.7	17.4	4.8	－	灰白色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	356	弥生土器	甕	－	SD521	16.9	(4.8)	－	－	にぶい橙色～灰白色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	357	弥生土器	甕	－	SD521	16.9	(10.7)	－	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･雲母･シャモット	良好
加美小分校	358	弥生土器	甕	－	SD521	17.0	(7.0)	－	－	灰黄色～灰色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	359	弥生土器	甕	－	SD521	16.6	(7.7)	－	－	にぶい橙色～灰白色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	360	弥生土器	甕	－	SD521	11.1	(4.2)	－	－	にぶい橙色～褐灰色	長石･雲母	良好
加美小分校	361	弥生土器	甕	－	SD521	16.4	16.8	4.5	－	浅黄色～にぶい黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	362	弥生土器	甕	－	SD521	13.6	(5.9)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	363	弥生土器	甕	－	SD521	16.3	(5.2)	－	－	にぶい黄橙色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	364	弥生土器	甕	－	SD521	－	(5.6)	4.2	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･シャモット･雲母	良好
加美小分校	365	弥生土器	甕	－	SD521	－	(10.1)	3.0	－	灰黄色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	366	弥生土器	甕	－	土器溜	15.9	17.2	4.8	－	暗灰色～灰色	長石･雲母	良好
加美小分校	367	弥生土器	高杯	－	土器溜	22.7	(13.3)	－	－	浅黄橙色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	368	須恵器	杯蓋	－	SK301	12.0	4.8	－	－	灰色（天上部セピア）	長石	良好
加美小分校	369	須恵器	杯蓋	－	SK301	13.0	5.1	－	－	灰褐色（やや白っぽい）	長石･石英	良
加美小分校	370	土師器	広口壺	－	SK301	11.3	16.1	－	－	灰黄色	長石･石英	良好
加美小分校	371	土師器	長胴甕	－	SK301	14.3	(7.7)	－	－	黄灰色～灰白色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	372	土師器	長胴甕	－	SK301	14.8	(22.0)	－	－	にぶい黄橙色～黒褐色	角閃石･長石･石英･チャート	良好
加美小分校	373	土師器	甑	－	SK301	28.4	(6.9)	－	－	灰黄色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	374	須恵器	杯身	第２層	－	11.2	5.8	－		暗灰色	長石･石英	良好
加美小分校	375	須恵器	杯身	第２層	－	13.0	5.1	－		淡灰色	石英･長石	良
加美小分校	376	須恵器	杯身	第２層	－	13.0	(3.5)	－	－	灰色（やや白っぽい）	長石	良好

表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（４）

調査次数	掲載番号	器種	器形	層位名	遺構名	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	重量（g）	色調	胎土	焼成
加美小分校	377	須恵器	高杯	第2層	－	－	(4.6)	9.2	－	暗灰色（青っぽい）	長石	良好
加美小分校	378	土師器	杯	第2層	－	13.3	(3.7)	－		淡茶褐色（赤っぽい）	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	379	弥生土器	直口壺	第3層	－	11.2	19.9	3.8	－	灰褐色（部分部赤褐色）	石英･長石	良好
加美小分校	380	弥生土器	直口壺	第3層	－	14.1	(9.2)	－	－	灰白色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	381	弥生土器	直口壺	第3層	－	14.2	(11.2)	－	－	灰白色～にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート	良好
加美小分校	382	弥生土器	甕	第3層	－	13.2	(6.1)	－		茶褐色	長石･雲母	良好
加美小分校	383	弥生土器	甕	第3層	－	16.4	(12.2)	－		淡茶褐色（赤っぽい）	長石･石英･微砂	良好
加美小分校	384	弥生土器	甕	第3層	－	14.8	(4.1)	－	－	黒色～黄褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	385	弥生土器	甕	第3層	－	13.7	(6.3)	－	－	暗灰黄色	角閃石･長石･石英	良好
加美小分校	386	弥生土器	甕	第3層	－	15.4	(3.2)	－	－	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	387	弥生土器	甕	第3層	－	16.3	(5.6)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	388	弥生土器	甕	第3層	－	18.2	(4.4)	－	－	灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	389	弥生土器	甕	第3層	－	14.7	(4.0)	－	－	黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	390	弥生土器	甕	第3層	－	15.9	(4.0)	－	－	黒褐色～黄灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	391	弥生土器	甕	第3層	－	17.8	(5.4)	－	－	灰黄色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	392	弥生土器	甕	第3層	－	18.1	(4.9)	－	－	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	393	弥生土器	甕	第3層	－	18.8	(4.8)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	394	弥生土器	甕	第3層	－	16.3	(3.7)	－	－	茶褐色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	395	古式土師器	甕	第3層	－	15.3	(4.2)	－	－	茶褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	396	古式土師器	甕	第3層	－	16.2	(4.9)	－	－	灰黄褐色～にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	397	古式土師器	甕	第3層	－	14.7	(6.7)	－	－	灰オリーブ色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	398	古式土師器	椀形高杯	第3層	－	11.7	(5.4)	－	－	にぶい黄橙色～にぶい橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	399	古式土師器	椀形高杯	第3層	－	－	(7.1)	18.4	－	浅黄橙色	長石･雲母･シャモット	良好
加美小分校	400	弥生土器	高杯	第3層	－	21.8	(3.8)	－	－	灰黄褐色～にぶい橙色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	401	古式土師器	脚台	第3層	－	－	(4.8)	10.6	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	402	弥生土器	小型器台	第3層	－	10.9	(4.8)	－	－	灰白色	長石･石英･シャモット･雲母･チャート	良好
加美小分校	403	古式土師器	小型器台	第3層	－	9.3	(3.7)	－	－	にぶい橙色～灰黄色	角閃石･雲母･長石･シャモット	良好
加美小分校	404	古式土師器	器台脚部	第3層	－	－	(7.8)	11.1	－	灰黄色～にぶい橙色	長石･シャモット･雲母	良好
加美小分校	405	古式土師器	小型鉢	第3層	－	11.8	(6.9)	－	－	茶褐色（灰色味をおびる）	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	406	弥生土器	甕か	第3層	－	－	(5.7)	5.4	－	橙色	長石･石英･シャモット･チャート	良好
加美小分校	407	弥生土器	蛸壺	第3層	－	5.3	8.4	－	－	にぶい橙色	長石･石英･雲母･シャモット	やや良
加美小分校	408	土製品	管状土錘	第3層	－	長4.3	幅3.4	厚3.1	53.6	灰黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	409	土製品	管状土錘	第3層	－	長4.6	幅3.2	厚2.9	51.0	灰白色	長石･石英･シャモット･チャート	良好
加美小分校	410	弥生土器	広口壺	第4a層	－	18.3	(7.3)	－	－	淡茶褐色	雲母･長石･石英	良好
加美小分校	411	弥生土器	広口壺	第4a層	－	15.0	(6.0)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	412	弥生土器	広口壺	第4a層	－	18.1	(2.5)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	413	弥生土器	二重口縁壺	第4a層	－	17.4	(3.0)	－	－	浅黄橙色～灰色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	414	弥生土器	二重口縁壺	第4a層	－	18.9	(4.2)	－	－	橙色～にぶい橙色	長石･石英･雲母･シャモット･流紋岩	良好
加美小分校	415	弥生土器	二重口縁壺	第4a層	－	－	(5.6)	－	－	橙色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	416	弥生土器	広口壺	第4a層	－	－	(5.9)	－	－	にぶい橙色	長石･雲母･シャモット	良好
加美小分校	417	弥生土器	広口壺	第4a層	－	14.6	(3.7)	－	－	にぶい橙色～橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	418	弥生土器	広口壺	第4a層	－	13.7	(5.4)	－	－	灰黄色	長石･雲母	良好
加美小分校	419	弥生土器	二重口縁壺	第4a層	－	16.3	(6.2)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	420	弥生土器	二重口縁壺	第4a層	－	17.0	(6.7)	－		茶褐色	雲母･石英･長石	良好
加美小分校	421	弥生土器	直口壺	第4a層	－	14.0	(7.7)	－		淡茶灰色（白っぽい）	雲母･長石･石英	良好
加美小分校	422	弥生土器	直口壺	第4a層	－	6.0	8.0	2.5	－	茶褐色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	423	弥生土器	直口壺	第4a層	－	－	(8.5)	3.3	－	赤褐色（茶色味をおびる）	石英･長石	良好
加美小分校	424	弥生土器	直口壺	第4a層	－	7.3	12.4	2.9	－	淡茶褐色	長石	良好
加美小分校	425	弥生土器	直口壺	第4a層	－	8.5	12.7	－	－	淡茶褐色	石英･長石	良好
加美小分校	426	弥生土器	蓋	第4a層	－	－	5.2	13.3	－	にぶい黄橙色～にぶい橙色	長石･石英･チャート･雲母･シャモット	良好
加美小分校	427	弥生土器	小型甕	第4a層	－	10.9	(7.2)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	428	弥生土器	甕	第4a層	－	14.3	(5.2)	－	－	灰黄色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	429	弥生土器	甕	第4a層	－	14.0	(9.3)	－	－	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	430	弥生土器	甕	第4a層	－	13.4	(7.5)	－	－	浅黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	431	弥生土器	甕	第4a層	－	13.4	(7.5)	－	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	432	弥生土器	甕	第4a層	－	14.6	(8.5)	－	－	灰白色～にぶい黄橙色	長石･石英･チャート･雲母	良好

表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（５）

調査次数	掲載番号	器種	器形	層位名	遺構名	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	重量（g）	色調	胎土	焼成
加美小分校	433	弥生土器	甕	第4a層	－	16.2	(8.0)	－	－	にぶい橙色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	434	弥生土器	高杯	第4a層	－	18.8	(4.2)	－	－	橙色～にぶい橙色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	435	弥生土器	高杯	第4a層	－	－	(10.1)	14.9	－	にぶい橙色～灰白色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	436	弥生土器	椀形高杯	第4a層		11.2	(5.5)	－	－	赤褐色（茶色味をおびる）	長石	良好
加美小分校	437	弥生土器	椀形高杯	第4a層	－	11.4	(8.1)	－	－	にぶい橙色～橙色	長石･石英･シャモット･雲母	良好
加美小分校	438	弥生土器	椀形高杯	第4a層	－	13.4	(4.0)	－	－	にぶい黄橙色～橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	439	弥生土器	小型器台	第4a層	－	9.9	(5.1)	－	－	淡黄褐色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	440	弥生土器	小型器台	第4a層	－	－	(5.6)	12.0	－	淡茶褐色（赤っぽい）	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	441	弥生土器	有段口縁鉢	第4a層	－	15.8	(5.0)	－		赤褐色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	442	弥生土器	鉢	第4a層	－	15.2	(6.2)	－	－	にぶい橙色～にぶい黄橙色	長石･雲母	良好
加美小分校	443	弥生土器	鉢	第4a層	－	33.6	(10.4)	－	－	黒色～にぶい黄橙色	角閃石･長石･石英･チャート	良好
加美小分校	444	土製品	管状土錘	第4a層	－	長4.7	径3.3	孔径0.55	－	灰黄色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	445	土製品	管状土錘	第4a層	－	長4.9	幅2.5	厚2.2	32.1	にぶい黄橙色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	446	銅製品	柳葉形有茎銅鏃	第4a層	－	長3.7	幅1.0	厚0.4	4.0	－	－	－
加美小分校	447	石製品	敲石	第4a層	－	長6.45	幅5.35	厚4.6	228.0	－	石材：細粒砂岩	－
加美小分校	448	石製品	砥石	第4a層	－	長9.2	幅8.6	厚5.1	631.7	－	石材：細粒黒雲母花崗岩	－
加美小分校	449	石製品	砥石	第4a層	－	長（15.5）	幅（7.9）	厚（5.7）	715.7	－	石材：細粒砂岩	－
加美小分校	450	弥生土器	二重口縁壺	第4b層	－	11.1	16.1	1.8	－	にぶい黄橙色	長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	451	弥生土器	壺	第4b層	－	－	(2.2)	4.9	－	にぶい黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	452	弥生土器	壺	第4b層	－	－	(3.2)	4.5		淡黄茶色	長石	良好
加美小分校	453	弥生土器	直口壺	第4b層	－	11.6	(4.8)	－	－	灰白色～橙色	長石･雲母･チャート	良好
加美小分校	454	弥生土器	直口壺	第4b層	－	13.6	(7.0)	－	－	にぶい橙色	長石･石英･雲母･黒雲母･チャート	良好
加美小分校	455	弥生土器	二重口縁壺	第4b層	－	17.0	(7.2)	－	－	にぶい橙色～にぶい橙色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	456	弥生土器	直口壺	第4b層	－	15.2	(6.8)	－	－	灰白色～灰色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	457	弥生土器	二重口縁壺	第4b層	－	21.9	(8.2)	－	－	灰黄色～橙色	長石･石英･雲母･シャモット･結晶片岩	良好
加美小分校	458	弥生土器	二重口縁壺	第4b層	－	23.4	(8.2)	－	－	にぶい橙色～にぶい黄褐色	長石･雲母	良好
加美小分校	459	弥生土器	広口壺	第4b層	－	23.6	(6.5)	－		茶褐色	雲母･長石･石英	良好
加美小分校	460	弥生土器	甕	第4b層	－	14.8	(3.0)	－	－	浅黄橙色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	461	弥生土器･古式土師器	甕	第4b層	－	16.2	(6.5)	－	－	灰白色	角閃石･長石･雲母	良好
加美小分校	462	弥生土器･古式土師器	甕	第4b層	－	15.7	(7.0)	－	－	灰黄色～灰色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	463	弥生土器･古式土師器	甕	第4b層	－	14.4	(3.0)	－	－	淡茶褐色	雲母･長石	良好
加美小分校	464	弥生土器･古式土師器	二重口縁甕	第4b層	－	14.5	3.8	－	－	淡黄褐色	石英･長石	良
加美小分校	465	弥生土器	二重口縁甕	第4b層	－	19.3	(7.6)	－	－	橙色～にぶい橙色	長石･石英･シャモット･雲母	良好
加美小分校	466	弥生土器	鉢	第4b層	－	31.6	(12.9)	－	－	淡茶褐色（赤味をおびる）	石英･長石･雲母	良好
加美小分校	467	弥生土器	甕	第4b層	－	14.1	(11.3)	－	－	暗灰色～灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	468	弥生土器･古式土師器	甕	第4b層	－	15.5	(11.8)	－	－	灰黄褐色～にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	469	弥生土器	台付甕	第4b層	－	－	(6.2)	7.8	－	にぶい黄橙色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	470	弥生土器	甕	第4b層	－	15.2	(5.4)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット	良好
加美小分校	471	古式土師器	甕	第4b層	－	16.7	(5.1)	－	－	暗灰黄色	長石･チャート･雲母	良好
加美小分校	472	古式土師器	甕	第4b層	－	15.7	(6.6)	－	－	黄灰色～灰白色	長石･石英･シャモット･雲母	良好
加美小分校	473	弥生土器	壺	第4b層	－	－	(2.8)	－	－	暗灰色～暗灰黄色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	474	弥生土器	壺	第4b層	－	－	(3.7)	－	－	灰色～灰黄色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	475	古式土師器	高杯	第4b層	－	17.4	(5.9)	－	－	淡黄色～橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	476	弥生土器	器台	第4b層	－	－	(8.0)	9.2	－	灰白色	長石･石英･シャモット･雲母･チャート	良好
加美小分校	477	弥生土器	小型鼓形器台	第4b層	－	－	(3.0)	8.6		淡茶灰色（赤っぽい）やや白い	石英･長石･雲母	良好
加美小分校	478	弥生土器	小型器台	第4b層	－	－	(7.2)	12.5	－	にぶい橙色	角閃石･雲母･長石･シャモット	良好
加美小分校	479	弥生土器	有孔鉢	第4b層	－	－	(6.3)	1.7	－	灰白色～にぶい黄橙色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	480	古式土師器	有段口縁鉢	第4b層	－	16.6	(4.9)	－	－	にぶい褐色～にぶい橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	481	古式土師器	有段口縁鉢	第4b層	－	16.5	(5.3)	－	－	橙色	長石･石英･シャモット･チャート	やや良
加美小分校	482	弥生土器	小型鉢	第4b層	－	7.5	6.2	3.3	－	浅黄橙色～淡橙色	長石･チャート･雲母･石英	良好
加美小分校	483	弥生土器	小型鉢	第4b層	－	7.4	6.1	－	－	淡赤褐色（やや茶色っぽい）	石英･長石･雲母	良好
加美小分校	484	弥生土器	小型鉢	第4b層	－	9.6	6.2	－	－	淡茶褐色	雲母･長石	良好
加美小分校	485	弥生土器	小型鉢	第4b層	－	12.9	6.1	4.2	－	灰白色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	486	弥生土器	手焙形土器	第4b層	－	14.8	10.1	3.5	－	灰黄色	長石･雲母･チャート･シャモット	良好
加美小分校	487	弥生土器	手焙形土器	第4b層	－	17.4	(8.2)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母･チャート･シャモット	良好
加美小分校	488	古式土師器	鉢	第4b層	－	24.0	(9.3)	－	－	にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート	良好

表15　加美小学校分校調査地遺物観察表（６）

調査次数	掲載番号	器種	器形	層位名	遺構名	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	重量（g）	色調	胎土	焼成
加美小分校	489	弥生土器	蛸壺	第4b層	－	10.0	(11.5)	－	－	にぶい橙色～赤橙色	長石･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	490	土製品	管状土錘	第4b層	－	長5.4	幅2.7	厚2.5	50.1	灰白色	長石･石英･シャモット･チャート	良好
加美小分校	491	土製品	管状土錘	第4b層	－	長4.8	幅2.9	厚2.8	42.6	灰黄色	長石･石英･チャート･雲母･シャモット	良好
加美小分校	492	土製品	管状土錘	第4b層	－	長(3.9)	幅3.2	厚3.3	(36.6)	灰白色	長石･石英･チャート	良好
加美小分校	493	土製品	管状土錘	第4b層	－	長(7.7)	幅4.5	厚(2.6)	(64.1)	黄灰色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	494	石製品	浮	第4b層	－	長4.5	幅3.6	高4.8	11.8	－	軽石	－
加美小分校	495	石製品	砥石	第4b層	－	長8.8	幅4.9	厚5.0	364.7	－	石材：凝灰岩	－
加美小分校	496	弥生土器	広口壺	第4b層	－	14.1	(6.0)	－	－	灰色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	497	弥生土器	広口壺	第4b層	－	23.6	(3.1)	－	－	灰黄褐色	角閃石･長石･石英･シャモット･チャート	良好
加美小分校	498	弥生土器	袋状口縁壺	第4b層	－	－	(6.7)	－	－	にぶい橙色～灰白色	角閃石･雲母･長石･石英･花崗岩	良好
加美小分校	499	弥生土器	袋状口縁壺	第4b層	－	36.8	(15.9)	－	－	赤褐色	角閃石･雲母･石英･長石	良好
加美小分校	500	古式土師器	二重口縁壺	第4b層	－	19.2	(8.3)	－	－	浅黄色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート･シャモット	やや良
加美小分校	501	弥生土器	甕	第4b層	－	14.2	(3.2)	－	－	灰白色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	502	古式土師器	二重口縁甕	第4b層	－	16.8	(5.2)	－	－	浅黄橙色	長石･石英･雲母	良好
加美小分校	503	古式土師器	二重口縁鉢	第4b層	－	30.4	(8.6)	－		茶褐色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	504	弥生土器	甕	第4b層	－	16.5	17.4	－	－	橙色～にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英･チャート･シャモット	良好
加美小分校	505	弥生土器	甕	第4b層	－	15.4	(4.6)	－	－	灰色	角閃石･雲母･長石	良好
加美小分校	506	弥生土器	甕	第4b層	－	17.6	(5.0)	－	－	黒色～にぶい黄橙色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	507	弥生土器	甕	第4b層	－	13.9	(11.0)	－	－	黒色～灰黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	508	弥生土器	甕	第4b層	－	13.8	(6.9)	－	－	灰黄色	角閃石･雲母･長石･石英	良好
加美小分校	509	弥生土器	甕	第4b層	－	15.3	(3.7)	－	－	橙色～淡赤橙色	角閃石･雲母･長石･石英･シャモット･チャート	良好
加美小分校	510	弥生土器	鉢	第4b層	－	18.7	(9.0)	4.8	－	浅黄橙色～橙色	長石･石英･雲母･シャモット･チャート	良好
加美小分校	511	弥生土器	手焙形土器	第4b層	－	－	(4.3)	－	－	灰黄色	長石･石英･チャート･雲母	良好
加美小分校	512	弥生土器	壺	第4b層	－	－	(3.5)	－	－	暗灰色～灰黄褐色	長石･石英･雲母･シャモット	良好
加美小分校	513	弥生土器	高杯	第4b層	－	－	(9.6)	16.5	－	にぶい黄橙色	長石･石英･雲母･チャート･シャモット	良好
加美小分校	514	弥生土器	蛸壺	第4b層	－	4.6	(6.3)	－	－	橙色	長石･石英･シャモット･雲母	良好
加美小分校	515	土製品	管状土錘	第4b層	－	長4.8	幅4.1	厚3.8	78.2	灰黄色	長石･石英･雲母･チャート	良好
加美小分校	516	石製品	用途不明品	第4b層	－	長4.7	幅2.6	厚2.0	4.7	－	軽石	－

引　用・参　考　文　献

秋山浩三2006、『シリーズ「遺跡を学ぶ」023　弥生実年代と都市論のゆくえ・池上曽根遺跡』　新泉社、pp.48－65

尼崎市教育委員会1982、『田能遺跡発掘調査報告書』

安藤広道2003、「弥生・古墳時代の各種青銅器」:『考古資料大観』第６巻　小学館、pp.291－306

池田次郎1982、「瓜生堂･巨摩廃寺遺跡方形周溝墓出土の人骨について」:大阪府教育委員会･大阪文化財センター編『巨摩・瓜生堂』、pp.309－315

乾哲也･摂河泉地域史研究会1999、『よみがえる弥生の都市と神殿　池上曽根遺跡～巨大建築の構造と分析』　批評社、pp.87－124、296－297

井上洋一1989、「銅釧」:『季刊考古学』第27号　雄山閣出版、pp.56－59

岩永省三1997、『弥生時代の装身具』日本の美術№370　至文堂

瓜生堂遺跡調査会1972、『瓜生堂遺跡』資料編

1973、『瓜生堂遺跡』Ⅱ

1981、『瓜生堂遺跡』Ⅲ

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1983、「加美遺跡（KM81－１次）発掘調査概報」:『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.76－82

1984a、『加美遺跡現地説明会資料』その１

1984b、『加美遺跡現地説明会資料』その２

1985、『加美遺跡現地説明会資料』その３

2002、「市営東喜連住宅建設工事に伴う喜連東遺跡Ｂ地点発掘調査（KR00－２）」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.105－119

大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、『平野遺跡群試掘調査報告書』

大阪市史編纂所・大阪市史料調査会2004、『新修大阪市史 史料編』第１巻考古資料編　大阪市

大阪市文化財協会1999、「加美遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1997年度－』、pp.27－48

2001、「加美遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』、pp.９－26

2003a、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅰ

2003b、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅱ

2005、『長原遺跡発掘調査報告』XⅡ

2009、『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』

大阪府教育委員会1998、『雁屋遺跡発掘調査概要』Ⅲ

大阪府教育委員会・東大阪市文化財協会1995、『鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18～20次調査概要報告』

大阪府文化財センター2007、『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書』Ⅶ

2008、『池島・福万寺遺跡』５

大阪府文化財調査研究センター1996、『河内平野遺跡群の動態』Ⅲ

大阪府立弥生文化博物館1993、『平成５年秋季特別展－弥生人の見た楽浪文化－』

2013、『平成25年 大阪府立弥生文化博物館秋季特別展 吉備と邪馬台国－霊威の継承－』
大阪文化財研究所2011a、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅲ
2011b、『平野馬場遺跡発掘調査報告』
2012a、『加美正覚寺遺跡発掘調査報告』、pp.１－32
2012b、『都島区内代町一丁目における建設工事に伴う榎並城跡伝承地発掘調査（EN11－１）報告書』
2014、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅳ
大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
1982、『巨摩・瓜生堂』
1983、『亀井』
1986a、『亀井(その2)』
1986b、『亀井北（その３）』
1986c、『城山（その１）』
1987a、『久宝寺南（その１）』
1987b、『久宝寺南（その２）』
1987c、『久宝寺南（その３）』
1987d、『久宝寺北（その１～３）』
大野章1957、「佐賀県三津遺跡出土弥生式時代人歯牙の人類学的研究」：『人類学研究』４（１－４）、pp.423－462
岡山県教育委員会1977、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16
大庭重信2001、「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」:大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会　研究紀要』第４号、pp.27－38
2004、「長原遺跡の四角い墓と丸い墓」：大阪市文化財協会編『葦火』109号、pp.２－３
2007、「長原遺跡弥生時代中期の葬祭場の復元－NG95－36次調査から－」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会　研究紀要』第６号、pp.63－78
大庭重信・寺井誠1997、「加美遺跡の方形周溝墓」：大阪市文化財協会編『葦火』67号、pp.５－７
岡村秀典1999、：『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー66　吉川弘文館
奥井哲秀2012、「第２章 弥生時代の茨木市域」：茨木市史編さん委員会編『新修茨木市史』第１巻通史Ⅰ　茨木市、pp.246－339
小倉徹也・趙哲済2001、「大阪市加美遺跡の基本層序」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第４号、pp.17－26
小田富士夫1984、「弥生時代円環型銅釧考」：『古文化談叢』13号　九州古文化研究会、pp.113－132
吉備登・寺門之隆1992、『花岡山古墳群：出土人骨の分析調査報告書』　大垣市教育委員会
小山正忠・竹原秀雄1970、『新版　標準土色帖』　日本色研事業株式会社
木下尚子1982a、「貝輪と銅釧」：『末盧国』　六興出版、pp.424－445
1982b、「弥生時代における南海産貝製腕輪の生成と展開」：『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』上巻、pp.413－443
黒田慶一2001、「加美遺跡でまた絵馬発見！」：大阪市文化財協会編『葦火』90号、p.6
建設省国土地理院1965、『土地条件調査報告書（大阪平野）』

黄暁芬2000、『中国古代葬制の伝統と変革』　勉誠出版
小木曽力1982、「ヒトの咀嚼器における性的二型の形態学的研究」：『愛院大歯誌』20（３）、pp.１－39
後藤直1991、「吉武樋渡遺跡」：小田富士雄・韓柄三編『日韓交渉の考古学』弥生時代篇　㈱六興出版、pp.313－314
小場恒吉・榧本亀次郎1935、『楽浪王光墓』　朝鮮古跡研究会
小林行雄1973、「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ｎ地点の土器」：『弥生式土器集成』資料編、pp.11－12
小林行雄・杉原荘介1969、『弥生式土器集成』本編１
　　1973、『弥生式土器集成』資料編
佐賀県教育委員会1994、『吉野ヶ里』
讃井善治1960、「山口県土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人歯牙の人類学的研究」：『人類学研究』７（３－４）、pp.862－884
茂和敏2004、「安徳台」：文化庁編『発掘された日本列島2004』　朝日新聞社、pp.20－21
四條畷市教育委員会1987、『雁屋遺跡』
　　1994、『雁屋遺跡発掘調査概要』
白数真也1999、「大風呂南」：文化庁編『発掘された日本列島’99』　朝日新聞社、pp.34－35
島根県教育委員会1988、『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区２）』
　　1991、『埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（布田遺跡）』
第40回山陰考古学研究集会資料集事務局2012、『第40回山陰考古学研究集会資料集 山陰の弥生時代木製品』
高倉洋彰1991、「日本の大陸系青銅器」：『日韓交渉の考古学』弥生時代篇　六興出版、pp.141－146
高槻市立埋蔵文化財調査センター1996、『古曽部・芝谷遺跡－高地性集落遺跡の調査－』高槻市文化財調査報告書第20冊
高久健二1995、『楽浪古墳文化研究』　学研文化社
田代克己1987、「６.方形周溝墓」：金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第８巻 祭りと墓と装い　雄山閣出版、pp.127－131
田中清美1986a、「加美遺跡発掘調査の成果」：古代を考える会編『古代を考える43　加美遺跡の検討』、pp.21－46
　　1986b、「近畿弥生社会の墳墓」：塩屋勝利編『特設展図録「早良王墓とその時代－墳墓が語る激動の弥生社会－」』福岡市立歴史資料館図録 第十一集　福岡市立歴史資料館、pp.122－128
　　1988、「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」：『考古学論集』第２集　考古学を学ぶ会、pp.35－50
　　1989、「５世紀における摂津・河内の開発と渡来人」：『ヒストリア』第125号　大阪歴史学会、pp.１－25
　　1994、「河内地域における弥生時代の木棺の型式と階層」：『文化財論集』　文化財論集刊行会、pp.505－514
　　1997、「弥生時代の木槨と系譜」：堅田直先生古希記念論文集刊行会編『堅田直先生古希記念論文集』、pp.109－127
　　2005、「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」：大橋信弥・花田勝広編『ヤマト王権と渡来人』日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム２　サンライズ出版、pp.65－89
　　2011、「出土土器の編年的位置づけ」：大阪文化財研究所編『平野馬場遺跡発掘調査報告』、pp.75－78
田中清美・櫻井久之1987、「大阪府加美遺跡Ｙ１号墳丘墓出土の銅釧」：『考古学雑誌』第73巻４号　日本考古学会、pp.96－104
田辺昭三1981、『須恵器大成』　角川書店
田原本町教育委員会2004、『唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録』

中国社会科学院考古研究所1984、『江陵雨台山楚墓』　湖北省荊州地区博物館
趙哲済1999、「大阪市加美遺跡、弥生時代中期Ｙ１号墳丘墓の築造過程について」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会 研究紀要』第２号、pp.269－288
朝鮮総督府1919、「平城付近における楽浪時代の墳墓」：『古跡調査特別報告』
1925a、「楽浪郡時代ノ遺跡」：『古跡調査特別報告』第四冊
1925b、「慶尚南北道忠清南道古跡調査報告」：『大正十一年度古跡調査特別報告』第一冊
1981、「楽浪郡時代の遺跡（本文編）」：『朝鮮考古資料集成』11　古蹟調査特別報告第４冊　出版科学総合研究所
寺井誠2007、「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」：九州古文化研究会編『古文化談叢』第56集、pp.85－108
寺沢薫・森岡秀人1989、『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社
1990、『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社
寺門之隆・嶋田武男・多賀谷昭・石井みき子
1978、難波宮址顕彰会編『森の宮遺跡第３・４次発掘調査報告書』、pp.166－170
土肥直美・田中良之・船越公威
1986、「歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用」：『人類誌』94（２）、pp.147－162
都出日呂志1991、「〔２〕西日本の墳丘墓」：小田富士雄・韓柄三編『日韓交渉の考古学』弥生時代篇　㈱六興出版、pp.214－219
栃原博1957、「日本人の歯牙の咬耗に関する研究」：『熊本医学会雑誌』31（４）、pp.607－656
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館2012、『三国志の時代－２・３世紀の東アジア』
奈良国立文化財研究所1993、『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第36冊
東大阪市遺跡保護調査会1981、『鬼虎川の銅鐸鋳型－第７次発掘調査報告１－』
東大阪市文化財協会1982、『鬼虎川の金属器関係遺物－第９次発掘調査報告２－』
1986、『久宝寺遺跡発掘調査報告』
福岡市教育委員会1983、『比恵遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集
1986、『吉武高木』
福永伸哉1985、「弥生時代の木棺墓と社会」：『考古学研究』第32巻第１号　考古学研究会、pp.81－106
1987、「５.木棺墓」：金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第８巻 祭りと墓と装い　雄山閣出版、pp.117－126
藤田恒太郎1949、「歯の計測基準について」：『人類誌』61（１）、pp.27－32
藤原知1982、尼崎市教育委員会編『田能遺跡発掘調査報告書』、pp.553－555
文化庁文化財部記念物課編2010、「第１節 遺跡における土層の認識」：『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』、pp.94－115
穂波町教育委員会1976、『スダレ遺跡』
埋蔵文化財研究所1982、『第11回埋蔵文化財研究会 西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』
前田豊邦2004、「平野寺前遺跡」：大阪市史編纂所・大阪市史料調査会編『新修大阪市史 史料編』第１巻考古資料編　大阪市、p.119
松本洋明・川村慎也1996、「平等坊・岩室遺跡出土の銅釧」：『みずほ』第19号　大和弥生文化の会、pp.32－38

光谷拓実1996、「古墳の年代を年輪から計る」:『考古学と実年代』第40回埋蔵文化財研究集会 第１分冊発表要旨集 埋蔵文化財研究会、pp.89－100

2000、「年輪年代法の最新情報－弥生時代～飛鳥時代－」:『埋蔵文化財ニュース』99　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

2001、『日本の美術』№421　至文堂

森田克行1986、「高槻市内出土の弥生時代の青銅器」:『弥生時代の青銅器とその共伴関係』第Ⅲ分冊近畿以東編　埋蔵文化財研究会、pp.135－136

山田博之1977、「ヒトの歯・歯列弓および口蓋の大きさの因子分析」:『愛院大歯誌』15(３)、pp.39－59

吉井秀夫2010、『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』諸文明の起源13

吉田広2012、「小倉城二ノ丸家老屋敷跡出土の銅剣」:『小倉城二ノ丸家老屋敷跡』２　北九州市教育委員会、PP197－216

楽浪漢墓刊行会1974・1975、『楽浪漢墓』大正十三年度発掘調査報告全２冊

廖健源1984、「福建系中国人の歯の大きさに関する研究」:『愛院大歯誌』22(１)、pp.111－140

渡邊昌宏1998、「近畿発見の腕飾類とその変遷」:『卑弥呼の宝石箱』　大阪府立弥生文化博物館、pp.86－89

Ashley Montagu, M. F 1960、A Handbook of Anthropometry.

BRACE , C. L., M NAGAI 1982、Japanese Tooth Size：Past and Present. Am J. Phys. Anthrop., 59、pp.399－411

Brothwell, D. R., Carbonell, V. M. and Goose, D. H. 、Congenital abscence of teeth in human populations. edited by Brothwell, D. R. in Dental Anthropology. Pergamon Press, New York. 1963

HANIHARA, K 1974、Factors Controlling Crown Size of the Deciduous Dentition. J. Anthrop. Soc. Nippon, 82(2)、pp.128－134

1976、Statistical and comparative studies of the Australian aboriginal dentition. The University Museum, The University of the Tokyo, Bulletin Number 11、pp.１－57

1977、Distances between Australian Aborigines and Certain Population Based on Dental Measurements. J. Hum. Evol., 6、pp.403－418

Mckern, T. W and T. D. Stewart 1957、Skeletal age changes in young American males. analysed from the standpoint of age identification

MIZOGUCHI, Y 1977、Genetic Variability of Permanent Tooth Crawns. J. Anthrop. Soc. Nippon,85(4)、pp.301－309

Nathan, H 1962、Osteophytes of the vertebral Column. J. Bone Joint Surg. 44、pp.243－268

POTTER, R. H., W. E. NANCE, P. L. YU and W. B. DAVIS, 1976、A twin study of dental dimension. Am. J. Phys. Anthrop., 44、397－412

SCHOUR, I and M. Massler 1941、The develop-ment of the human dentition. J. A. D. A., 28、p.1186

TOWNSEND, G. C. and T. BROWN, 1978、Inheritance of tooth size in Australian Aboriginals. Am. J. Phys. Anthrop., 48、305－314

YAMADA, H., N. OHNO and T. SAKAI 1979、A Research on Multivariate Biological Affinity of Tooth Crowns. J. Anthrop. Soc. Nippon, 87(4)、pp.457－472

YAMADA, H., T. KOGISO and J. Y. LIAO 1986、Correlation Matrices for the Mesiodistal and Buccolingual Crown Diameters of the Japanese and Chinese Permanent Teeth. J. Anthrop. Soc. Nippon, 94(4)、pp.473－479

索　引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名･遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

T　TK10型式 …… 178
　TK23型式 …… 177,178
あ　アルカリ珪酸ガラス … 64
い　鋳型 …… 61,64
　碇石 …… 161,162
　和泉砂岩 …… 61
　Ⅰ型木槨 …… 121
　一木平鋤 …… 54
　井戸 …… 5,7,117,153,155,159,161,162,190
う　浮 …… 186
　薄板 …… 8,19,25,53,54,61,62,154
え　円環型銅釧 …… 13,63,66,82,122,125,126,127,129,134,153
　円形杭列状遺構 …… 95
お　凹線 …… 29,31,36,38,42,44,46,50,52,85,99,102,111,116,161,178,180,184,186
　大型鉢 …… 25,29,44,115,116
　オナモミ …… 162
か　貝釧 …… 125,126,127,153
　刀形木製品 …… 54
　歌舞飲食 …… 115,153
　甕A類 …… 25,29,31,32,34,44,46,69,75,98,115
　甕B類 …… 25,34,44,98,99,115
　甕C類 …… 25,34,46,52,115
　甕D類 …… 25,31,32,34,115
　甕E類 …… 25,52,115
　ガラス小玉 …… 64
　ガラス平玉 …… 13,66,124,129,153
　ガラス勾玉 …… 63,64
　韓式系土器 …… 4
　管状土錘 …… 158,159,180,182,186,188
き　擬凹線 …… 36
　魏志倭人伝 …… 115,190
　畿内第Ⅲ様式 …… 111,116,120
　畿内第Ⅳ様式古段階 … 2,116
　畿内第Ⅳ様式新段階 … 99,102,116,117,154
　畿内第Ⅳ様式中段階 … 77,86,88,116,117,119,121,122,153
　吉備系(吉備) …… 157,170,18,184
　供献土器(供献) …… 10,19,23,66,75,88,114
　供膳具 …… 115
　金属器 …… 61,127
く　杭・矢板列 …… 12,89
　組合せ平鋤 …… 54
　刳抜式木棺 …… 120
け　結晶片岩 …… 2,184
こ　極細粒砂岩 …… 158,164
　甑 …… 177
　弧帯文 …… 162
　ゴホウラ系銅釧 …… 125,126
　コンパス文 …… 161
さ　祭祀具 …… 4,53,54,58
　細粒黒雲母花崗岩 …… 182
　細粒砂岩 …… 182
し　滋賀里Ⅲ式土器 …… 1
　四脚容器 …… 53,58,60
　庄内1期 …… 156,158,164,167,168,170,172,173,174,176,182,190
　庄内2期 …… 158,162,168,170,174,176,190
　庄内3期 …… 162,168
　庄内4期 …… 164,168,180
　庄内式甕 …… 162,168,178,184,188
　辰砂 …… 158
せ　製塩土器 …… 158
　赤彩 …… 18

赤色顔料(朱) ····· 66,69,71,73,74,75,77,80,82,83,85,86,88,102,103,105,122,129,131,132,133,135,137,154
赤色顔料(ベンガラ) ··· 180,184
千枚岩製 ····· 23
そ 葬送儀礼 ····· 2,66,111,114,115,123
双頭渦文 ····· 60
粗粒砂岩 ····· 158
た 台石 ····· 156,158,190
台付鉢 ····· 25,34,40,42,46,48,100,102,114,115,116,168
蛸壺 ····· 170,180,186,188
多条沈線 ····· 174
敲石 ····· 182
竪穴建物 ····· 5,155,156,158,159,190
単葬木槨墓 ····· 121,122
ち 柱穴 ····· 117,156,158,159
長胴甕 ····· 177
直口壺 ····· 18,163,164,165,173,178,180,184
つ 杯身 ····· 177,178
鼓形器台 ····· 186
て 手焙形土器 ····· 176,186,188
鉄剣形銅剣 ····· 5,155,172,190
鉄鑿 ····· 10,23,24
と 砥石 ····· 8,61,153,154,156,158,164,182,186,190
同穴合葬木槨墓 ····· 121
土器棺 ····· 2,7,9,12,75,96,100,102,153
凸基有茎式打製石鏃 ··· 23
鳥形土製品 ····· 161
泥除 ····· 54
な 鉛バリウムガラス ····· 66
に Ⅱ型木槨 ····· 121
二重口縁壺 ····· 170,173,180,182,184
の 農具 ····· 53,54
は 撥形文 ····· 162,184,188
ひ 直柄横鍬 ····· 54
卑弥呼 ····· 190
瓢箪形 ····· 98
広口壺A類 ····· 25,29,32,34,36,48,50,52,98,99,102,115,116
広口壺B類 ····· 25,29,31,32,34,36,38,52,115
広口壺C類 ····· 25,34,36,38,46,115
ふ 複合鋸歯文 ····· 176,188
船橋OⅡ式····· 15
布留1期 ····· 158,164,165,180
布留2期 ····· 164
へ 塀穴合葬木槨墓 ····· 121,122
ヘラ記号 ····· 29,178
扁平片刃石斧 ····· 61
ほ 墓標 ····· 19,23,53,60,61,62,83,154
ま 磨製石庖丁 ····· 2,10,23,24,61
み 水差し ····· 10,19,25,32,34,42,66,114,115,116
む 無文土器 ····· 122
も 木槨 ····· 11,13,71,72,83,118,119,120,121,122,123,153
モクズガニ ····· 29
や 矢板 ····· 12,89,94
柳葉形有茎銅鏃 ····· 167,182
山形貝殻文 ····· 174
槍形木製品 ····· 58
ゆ 有段口縁鉢 ····· 158,182,186
よ 横軸轆轤 ····· 58
り 緑色片岩 ····· 61
わ 倭王権 ····· 4
倭国大乱 ····· 190
椀形高杯 ····· 178,182

〈地名・遺跡名など〉

あ　阿波地域（阿波）……173,178,184
　安徳台遺跡……126
い　池上・曽根遺跡……117
　池島・福万寺遺跡……120
　和泉……1,61,111,115
う　宇木汲田遺跡……126
　瓜生堂遺跡……62,114,118,119,120,139,154
え　榎並城跡伝承地遺跡…122
お　王光墓……118
　近江……111
　大風呂南墳墓群……125
か　要池遺跡……125
　亀井遺跡……1,3,4,24,120,122,125,154
　萱振遺跡……190
　唐古・鍵遺跡……111,125,162
　雁屋遺跡……58,120
　河内……1,3,4,5,6,25,29,31,32,34,36,38,40,42,44,46,48,50,52,62,69,71,77,88,98,102,111,114,115,116,117,118,120,122,123,126,127,154,155,158,161,162,163,165,166,168,184,188,190
　河内湖……3,4,6,122,126,127
　神辺町国成遺跡……190
き　紀伊……2,111
　鬼虎川遺跡……125,126,127,128
　久宝寺遺跡……1,2,3,4,5
　喜連東遺跡……62,154
　喜連東遺跡B地点……62
く　鞍作廃寺……1
こ　巨摩遺跡……125
　巨摩・瓜生堂遺跡……62,114,120,154
さ　桜馬場遺跡……126
　山陰……4,122,184,186,188
し　芝生遺跡……125
　拾六町ツイジ遺跡……128
　上東遺跡……162
　城山遺跡……3,114,119,120
す　スダレ遺跡……121
せ　西部瀬戸内……188
　摂津……1,111,115
た　田能遺跡……125,126,139
　丹後……111
　丹波……111
ち　長楽寺跡……1
と　土井ヶ浜遺跡……120
　東海地方……127,174
　塔の首遺跡……126
な　長瀬高浜遺跡……190
　中原遺跡……126
　長原遺跡……5,125,155
に　西ノ辻遺跡N地点……111,114
は　花岡山古墳……139,140,141
ひ　比恵遺跡……121
　百間川原尾島遺跡……190
　平等坊・岩室遺跡……125
　平野馬場遺跡……4
ふ　布田遺跡……95
　船橋遺跡……15
み　美園……1
　三津－永田遺跡……120
も　森の宮遺跡……139
や　山賀遺跡……154
　邪馬台国……190
　大和……1,3,4,5,111,115,142
ゆ　夢野遺跡……126
よ　吉武高木遺跡……125
　吉野ケ里遺跡……122
ら　楽浪漢墓……118,121,122,123,153
　楽浪郡……117,118,121,122,127,153
わ　若江北……1

The Archaeological Report
of
the Kami Site in Osaka, Japan
Volume V

A Report of an Excavation
Prior to the Construction of
Small factory housing complex in Osaka City

Appendix
Summery report of the excavation of Kami site preceding the construction of a branch school of Kami primary school (present Kami-higashi primary school)

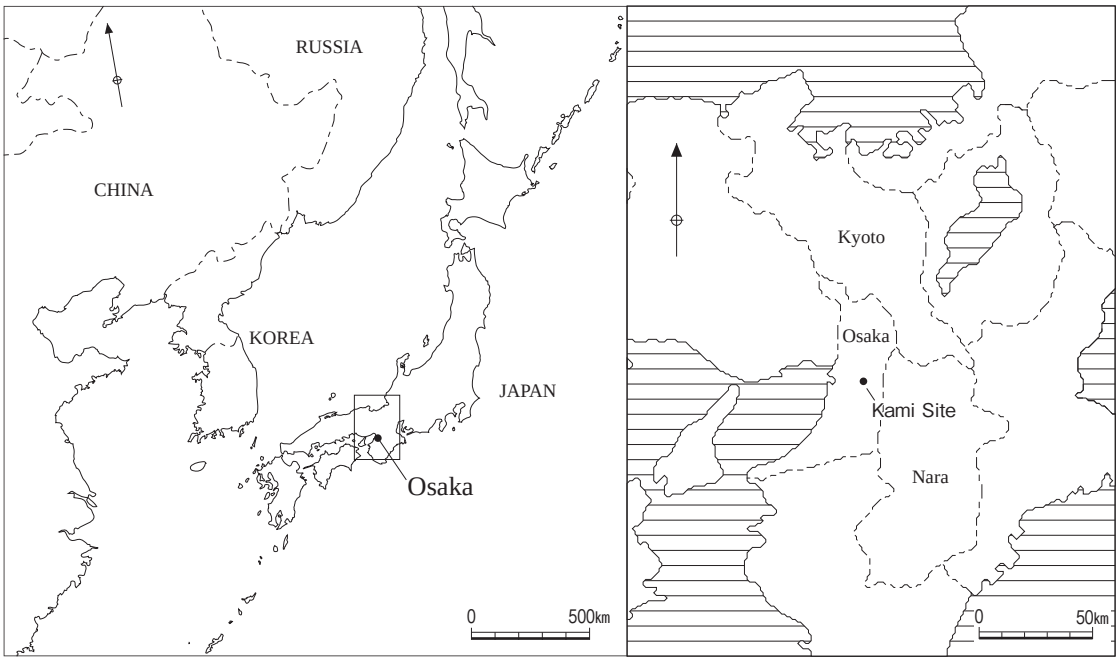
January 2015

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SA: Palisade or Fence
SB: Building
SD: Ditch
SE: Well
SK: Pit
SX: Other feartures



CONTENTS

Foreword
Explanatory notes

Chapter Ⅰ Historical, geographical circumstance and the previous investigations of Kami site 1
1 Location, and historical and geographical circumstance of Kami site 1
2 Previous investigations 5

Chapter Ⅱ Beginning and the sequence of this investigation 7
1) Reason of beginning of this investigation 7
2) Outline of this investigation 7

Chapter Ⅲ Research results 15
1 Stratigraphy 15
1) Stratigraphy 15
2) Relics acquired from the 6th stratum 18
2 Mound of the Tumulus Y1, and bank and ditch surrounding it 19
1) Mound and relics acquired from it 19
2) Bank 24
3) Ditch and relics acquired from it 24
3 Burials of the Tumulus Y1 and relics acquired from them 63
4 Spiles in the east part of the ditch of the Tumulus Y1 89
5 Mound and relics of the Tumulus Y2 96
6 Burials of the Tumulus Y2 100

Chapter Ⅳ Considerations on the tumulus Y1 and the Tumulus Y2 111
1 Chronological position and assemblage of the pottery 111
2 Consideration on the mound and the burials of the Tumulus Y1 118
3 About a bronze bracelet acquired from the Tumulus Y1 124
1) The excavated state and morphology 124
2) Significance of the finding 125
4 Human-bone specimens acquired from the Tumulus Y1 and the Tumulus Y2 129
1) The specimens from the Tumulus Y1 129
2) The specimens from the Tumulus Y2 136
5 Geographical, chronological character of the Human-bone specimens from the tumuli 139
1) The data and the method 139
2) The results 140
3) Consideration 141

Chapter V Conclusion 153

Appendix
Summery report of the excavation of Kami site preceding the construction of a branch school of Kami primary school (present Kami-higashi primary school) 155
1) Introduction 155
2) Stratigraphy 156
3) Features and artifacts 156
4) Artifacts of each stratum 177
5) Conclusion 190

Reference and Bibliography 199

Index

English contents

Reference card

報　告　書　抄　録

ふりがな	かみいせきはっくつちょうさほうこく５
書名	加美遺跡発掘調査報告Ⅴ
編著者名	田中清美・櫻井久之・吉備登・多賀谷昭・坂川幸祐
編集機関	公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所
所在地	〒540－0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　TEL.06－6943－6833
発行年月日	西暦　2015年１月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
加美（かみ）遺跡 Y1・Y2号 墳丘墓	大阪市（おおさかし）平野区（ひらのく） 加美東（かみひがし）６丁目	27126	－	34° 37′ 36″	135° 34′ 30″	19841002 ～ 19850329	約10,000 ㎡	埋蔵文化財包蔵地の内容の確認調査
加美（かみ）遺跡 加美小学校分校	大阪市（おおさかし）平野区（ひらのく） 加美東（かみひがし）５丁目	27126	－	34° 37′ 37″	135° 34′ 18″	19761106 ～ 19770331	約1,250㎡	公共施設の建設に伴う埋蔵文化財の調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
加美（かみ）遺跡 Y1・Y2号 墳丘墓	墓地	弥生時代中期 後葉	墳丘墓	弥生土器・石器・木器・鉄器・青銅器・ガラス玉・組合式木棺・木槨
加美（かみ）遺跡 加美小学校分校	集落跡	弥生時代末～ 古墳時代初頭	竪穴建物・井戸・土壙・溝	弥生土器・古式土師器・石器・青銅器
		古墳時代中期	土壙・溝	須恵器・土師器